河内長野市遺跡調査報告XXVⅢ

天野山金剛寺遺跡

（その２）

２００１年３月

河内長野市教育委員会
河内長野市遺跡調査会

河内長野遺跡調査報告書ＸＸⅧ

天野山金剛寺遺跡（その２）

正誤表

頁	行	誤	正
序文	17	頂ました	頂きました
例言	3～4	KGT91―2	KGT91－1
8	24	〔SC1〕(第7図、図版1・48)	〔SC1〕(第7図、図版2・48)
70	3	〔SK10〕(第84図、図版25)	〔SK10〕(第84図)
136	11	地滑りを被っているが多いが、	地滑りを被っているのが多いが、
143	4	軒平瓦(1036・1039)	軒平瓦(1036～1039)

序　　文

大阪府の南東部に位置する河内長野市は、豊かな自然に恵まれ、高野街道に代表される和歌山や奈良へ向かう街道の要衝として発展してきた街です。このため、市内には数多くの文化財が残されています。

この様な河内長野市も、大阪市内への通勤圏に位置しているため、住宅都市として発達してきました。この住宅開発がもたらした文化財や自然に対する影響は大きなものがあります。特に、地下に眠る埋蔵文化財は、開発と直接的に結び付く大きな問題です。

遺跡に託されている河内長野の先人達のメッセージである文化遺産を保護・保存し、現在の、更には未来の市民へと伝えていくことは、現代に生きる私達の責務であります。河内長野市においては、重要な課題である開発と文化財保護との調和のため、開発に先立ち埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その把握に努めています。

本書は発掘調査の成果を収録しています。皆様が先人達の残したメッセージの一部でもある文化財に対するご理解を深めて頂くと共に、文化財の保護・保存・研究するための資料として活用して頂ければ幸いです。

これらの発掘調査に協力して頂ました施主の方々の埋蔵文化財への深いご理解に、末尾ながら謝意を表すものです。

平成13年３月

河内長野市教育委員会

教育長 福　田　弘　行

例　　言

1．本報告書は、平成３年度及び同９～11年度に河内長野市から委託を受けて、河内長野市教育委員会及び河内長野市遺跡調査会が実施した天野山金剛寺遺跡（ＫＧＴ91－２・97－２・97－３・98－１・99－１）の発掘調査報告書である。調査にかかる費用は、平成３年度が河内長野市、同９～11年度は国・大阪府・河内長野市・宗教法人天野山金剛寺が負担した。

2．発掘調査は、河内長野市教育委員会教育部社会教育課主幹兼文化財保護係長尾谷雅彦・同係鳥羽正剛を担当者として実施し、内業作業は、河内長野市立ふれあい考古館館長中西和子の指導の下に行った。

3．本書の執筆は鳥羽が行い、編集は杉本祐子が補佐した。文責は鳥羽が負うものである。

4．発掘調査及び内業整理については、下記の方々の参加・協力を得た。（敬称略）

阿部園子・有松陽子・内田伸子・大塚美幸・大西京子・川嶋伸子・喜多順子・久保八重子・小浜加奈子・斎田菜穂子・鈴木奈保美・杉本清美(現、大阪府教育委員会)・高橋知佐子・田川富子・辻宏子・中里信明・中野雅美・中村嘉彦・中村幸子・林和宏・藤井美佐子・枡本裕子・松尾和代・牟田口京子・村上貴美子・安間克己・山田真紀

5．発掘調査については、下記の方々の指導、協力を得た。記して感謝する。（敬称略・順不同）

上田霊城・堀智範・永島龍弘・堀智真・木下密運・添田隆昭・中西隆英・中村浩道・田子真海・上林孝仁・桑原弘海・桑原法俊・橋本真人・大森照龍・大森龍全・甲田宥吽・佐藤正伸・石堂法瑞・細原一義・井上真英・大塚知明・西川隆貴・岩鶴敏治・小林義孝・尾上実・本多元就・阪田宗彦・狭川真一・永井久美男・西山昌孝・佐藤亜聖・林野全孝・藤田徹也・藤原哲・撫養健至・山口誠治・森村健一・嶋谷和彦・後藤建一

株式会社アート・株式会社島田組・写測エンジニアリング株式会社・株式会社パスコ・株式会社夏原技研

6．写真撮影は、遺構については鳥羽・中西、遺物については中西が行った。

7．本調査の記録は、スライドフィルム・剥ぎ取り土層断面標本などでも保管しており、広く一般の方々に活用されることを望むものである。

凡　　例

1．本報告書に記載されている標高は、ＴＰを基準としている。

2．土色は「新版標準土色帖」1990年度版による。

3．平面測量基準は国家座標第Ⅵ系による５ｍメッシュを基準に実施したものである。

4．図中の北は座標北である。

5．本書の遺構名は下記の略記号を用いた。なお、土釜埋納遺構（土公供（どこうく）作法遺構）については、従来、性格不明のためＳＸ（平成11年以前調査）を使用してきたが、本書よりＳＯを略記号とする。

ＳＢ…掘立柱建物	ＳＣ…炉	ＳＤ…溝・暗渠	ＳＥ…井戸
ＳＦ…道路	ＳＫ…土坑	ＳＬ…甕埋納遺構	ＳＮ…桶埋納遺構
ＳＯ…土釜埋納遺構（土公供作法遺構）		ＳＰ…遺物出土ピット	ＳＴ…墓
ＳＵ…集石・石敷遺構		ＳＷ…石垣・石組・石列	
ＳＸ…落ち込み・不明		ＮＲ…自然流路	ＮＶ…谷状地形

6．遺構実測図の縮尺は１/10・１/20・１/30・１/40・１/50・１/60・１/80・１/100・１/120・１/300である。

7．遺物実測図の縮尺は土器１/４・漆器１/４・石器２/３・金属製品１/３・銅銭原寸を基準としているが、遺物の状況により変えている。

8．遺物名は土師質土器を土師質、瓦質土器を瓦質、須恵質土器を須恵質と略称し、器種名を付した。器種名については、本調査会の標記によるものとする。

9．遺物の断面は土師器・土師質土器・漆器・石製品が白抜き、須恵器・瓦器・瓦質土器・須恵質土器・陶磁器が黒塗り、瓦・木製品・鉄製品が斜線である。

10．本文中の型式分類は瓦器埦が尾上実氏の和泉型瓦器椀の編年、瓦質皿が尾谷の天野山金剛寺編年、青磁が森田勉氏の編年、土釜埋納遺構（土公供作法遺構）の出土形態の分類は、『土公供作法次第』による土釜埋納遺構出土品分類[註1]に基づくものである。

11．遺物番号と写真図版の番号は一致する。

12．細片のため図化できなかった遺物は、器種名・遺物番号を省略し記していない。

13．本文中の「旧境内」は『金剛寺境内図』に含まれる寺域を指し、「境内」は現在の寺域、「伽藍」は主要伽藍を指すものとする。

註１『河内長野市遺跡調査報告ＸＸＩＸ　天野山金剛寺遺跡　緊急地域雇用促進事業に伴う天野山金剛寺出土品整理事業報告書』　2000年12月　河内長野市教育委員会・河内長野市遺跡調査会

目　　次

序文
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
図版目次
第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査地の概要 …… 1
第２章　KGT91－１ …… 5
　第１節　調査に至る経過 …… 5
　第２節　調査の結果 …… 6
　　１　遺構と遺物 …… 6
　　２　まとめ …… 22
第３章　KGT97－２ …… 27
　第１節　調査に至る経過 …… 27
　第２節　調査の結果 …… 28
　　１　遺構と遺物 …… 28
　　２　まとめ …… 35
第４章　KGT97－３ …… 39
　第１節　調査に至る経過 …… 39
　第２節　調査の結果 …… 40
　　１　遺構と遺物 …… 40
　　２　まとめ …… 53
第５章　KGT98－１ …… 57
　第１節　調査に至る経過 …… 57
　第２節　調査の結果 …… 61
　　１　遺構と遺物 …… 61
　　２　まとめ …… 126
　第３節　考古地磁気年代推定 …… 129
　　１　考古地磁気年代推定の基礎 …… 129
　　２　試料の採取と測定 …… 130

3　残留磁気測定結果 …… 132
4　推定年代 …… 135
5　引用文献 …… 136
第６章　KGT99－１ …… 137
第１節　調査に至る経過 …… 137
第２節　調査の結果 …… 138
1　遺構と遺物 …… 138
2　まとめ …… 150
第７章　まとめ …… 153
第１節　焼土層 …… 153
第２節　宗教 …… 153
1　密教法具 …… 153
2　地鎮め …… 154
3　埋葬 …… 154
第３節　『金剛寺境内図』と「検出遺構」 …… 155

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　河内長野市遺跡分布図（１/40000） …… 2
第３図　天野山金剛寺遺跡調査地位置図（１/4000） …… 4

ＫＧＴ９１－１

第４図　調査区位置図（１/1000） …… 5
第５図　遺構配置図（１/80） …… 6
第６図　調査区土層断面実測図（１/60） …… 7
第７図　ＳＣ１遺構実測図（１/30）及び出土遺物実測図 …… 8
第８図　ＳＣ２遺構実測図（１/30） …… 9
第９図　ＳＣ２出土遺物実測図 …… 10
第10図　ＳＤ１・２遺構実測図（１/30） …… 11
第11図　ＳＤ１出土遺物実測図 …… 11
第12図　ＳＤ２出土遺物実測図 …… 12
第13図　ＳＤ２▲地点出土遺物実測図 …… 13
第14図　ＳＤ３遺構実測図（１/40） …… 14
第15図　ＳＤ３出土遺物実測図 …… 14

第16図　ＳＫ１出土遺物実測図 …… 15
第17図　ＳＫ４遺構実測図（１/30） …… 15
第18図　ＳＫ５・６出土遺物実測図 …… 16
第19図　ＳＫ７出土遺物実測図 …… 16
第20図　ＳＫ９遺構実測図（１/20）及び出土遺物実測図 …… 17
第21図　ＳK10出土遺物実測図 …… 17
第22図　ＳK11出土遺物実測図 …… 18
第23図　ＳＯ１遺構実測図（１/20） …… 18
第24図　ＳＯ１出土遺物実測図 …… 19
第25図　ＳＰ２出土遺物実測図 …… 20
第26図　ＳＰ３出土遺物実測図 …… 20
第27図　ＳＷ２出土遺物実測図 …… 21
第28図　第１整地層出土遺物実測図 …… 21
第29図　焼土層出土遺物実測図 …… 22
第30図　第２整地層出土遺物実測図 …… 22
第31図　包含層出土遺物実測図（１） …… 23
第32図　包含層出土遺物実測図（２） …… 24

ＫＧＴ９７－２

第33図　調査区位置図（１/1500） …… 27
第34図　遺構配置図（１/80） …… 28
第35図　調査区土層断面実測図（１/60） …… 29
第36図　ＳＢ１(第１次) 遺構実測図（１/60） …… 30
第37図　ＳＢ１(第２次) 遺構実測図（１/60） …… 30
第38図　ＳＢ１出土遺物実測図 …… 31
第39図　ＳＢ２遺構実測図（１/60） …… 31
第40図　ＳＤ２出土遺物実測図 …… 32
第41図　ＳＫ２・３出土遺物実測図 …… 32
第42図　ＳＬ１遺構実測図（１/30）及び出土遺物実測図 …… 33
第43図　ＳＵ１遺構実測図（１/20） …… 34
第44図　ＳＵ１出土遺物実測図 …… 34
第45図　ＳＷ１出土遺物実測図 …… 34
第46図　ＳＸ１出土遺物実測図 …… 35
第47図　包含層・側溝出土遺物実測図（１） …… 36
第48図　包含層・側溝出土遺物実測図（２） …… 37

ＫＧＴ９７－３

第49図　調査区位置図（１/2500）…… 39
第50図　天野山金剛寺寺院墓所の現況と調査区の関連図（１/300）…… 40
第51図　遺構配置図及び調査区土層断面実測図（１/60）…… 41～42
第52図　ＳＴ１遺構実測図（１/20）…… 43
第53図　ＳＴ１出土遺物実測図 …… 43
第54図　ＳＴ２遺構実測図（１/30）…… 45
第55図　ＳＴ２出土遺物実測図 …… 46
第56図　ＳＴ３遺構実測図（１/20）…… 47
第57図　ＳＴ３出土遺物実測図 …… 47
第58図　ＳＷ１出土遺物実測図 …… 48
第59図　ＳＤ１・２出土遺物実測図 …… 49
第60図　ＳＫ１出土遺物実測図 …… 50
第61図　ＳＫ２・３遺構実測図（１/20）…… 51
第62図　ＳＫ２・３出土遺物実測図 …… 51
第63図　ＳＫ４出土遺物実測図 …… 52
第64図　ＳＮ１遺構実測図（１/20）…… 52
第65図　ＳＮ１出土遺物実測図 …… 52
第66図　包含層出土遺物実測図 …… 54

ＫＧＴ９８－１

第67図　調査区位置図（１/2000）…… 57
第68図　第１～３調査区第１遺構検出面遺構配置図（１/120）…… 58
第69図　第１・３調査区土層断面実測図（１/60）…… 59～60
第70図　ＳＤ１出土遺物実測図 …… 61
第71図　ＳＥ１遺構実測図（１/30）…… 62
第72図　ＳＥ１出土遺物実測図 …… 63
第73図　ＳＫ３・６・９出土遺物実測図 …… 64
第74図　ＳＰ３・４出土遺物実測図 …… 65
第75図　ＳＵ１遺構実測図（１/60）…… 66
第76図　ＳＵ１出土遺物実測図 …… 66
第77図　ＳＵ２遺構実測図（１/60）…… 67
第78図　ＳＵ２出土遺物実測図 …… 67
第79図　ＮＶ１出土遺物実測図 …… 67
第80図　第１調査区第１遺構検出面包含層出土遺物実測図 …… 68

第81図　第２調査区第１遺構面検出包含層出土遺物実測図 …… 69
第82図　第３調査区第１遺構面検出包含層出土遺物実測図 …… 69
第83図　第１調査区表採遺物実測図 …… 69
第84図　ＳＫ10出土遺物実測図 …… 70
第85図　第１～３調査区第２遺構検出面遺構配置図（１/120） …… 71
第86図　ＳＯ１遺構実測図（１/10） …… 72
第87図　ＳＯ１出土遺物実測図（１） …… 73
第88図　ＳＯ１出土遺物実測図（２） …… 74
第89図　ＳＰ６周辺遺物出土状況実測図（１/20） …… 75
第90図　ＳＰ６出土遺物実測図 …… 76
第91図　第１調査区第２遺構検出面包含層(上層整地層)出土遺物実測図 …… 78
第92図　第１～３調査区第３遺構検出面遺構配置図（１/120） …… 79
第93図　ＳＢ１(部分) 検出状況実測図（１/40） …… 80
第94図　ＳＢ１(部分) 壁材検出状況実測図（１/20） …… 80
第95図　ＳＤ４(部分) 検出状況実測図（１/50） …… 81
第96図　ＳＰ８出土遺物実測図 …… 81
第97図　第１調査区第３遺構検出面包含層（焼土層）出土遺物実測図（１） …… 82
第98図　第１調査区第３遺構検出面包含層（焼土層）出土遺物実測図（２） …… 83
第99図　第２調査区第３遺構検出面包含層出土遺物実測図 …… 83
第100図　第１～３調査区第４遺構検出面遺構配置図（１/120） …… 84
第101図　ＳＢ１遺構実測図（１/80） …… 85
第102図　ＳＢ１出土遺物実測図 …… 86
第103図　ＳＤ４遺構実測図（１/50） …… 87～88
第104図　ＳＤ４出土遺物実測図（１） …… 89
第105図　ＳＤ４出土遺物実測図（２） …… 90
第106図　ＳＥ１遺構実測図（１/30） …… 91
第107図　ＳＦ１遺構実測図（１/40） …… 92
第108図　ＳＫ12・13出土遺物実測図 …… 92
第109図　ＳＫ14出土遺物実測図 …… 93
第110図　ＳＫ15～17出土遺物実測図 …… 93
第111図　ＳＫ18・19・21・22出土遺物実測図 …… 94
第112図　ＳＫ23・24出土遺物実測図 …… 95
第113図　ＳＬ１遺構実測図（１/30） …… 96
第114図　ＳＬ１出土遺物実測図 …… 96
第115図　ＳＰ９・13～16・18出土遺物実測図 …… 97

第116図　ＳＰ20・21出土遺物実測図……99
第117図　第１調査区第４遺構検出面包含層（炭化物層）出土遺物実測図　……100
第118図　第２調査区第４遺構検出面包含層出土遺物実測図……100
第119図　第１～３調査区第５遺構検出面遺構配置図（１/120）　……102
第120図　ＳＤ６遺構実測図（１/50）及び出土遺物実測図……103～104
第121図　ＳＤ７遺構実測図（１/40）……105
第122図　ＳＤ７出土遺物実測図……106
第123図　ＳＤ８出土遺物実測図……107
第124図　ＳＫ27出土遺物実測図……107
第125図　ＳＫ28出土遺物実測図……108
第126図　ＳＫ29遺構実測図（１/30）……108
第127図　ＳＫ29出土遺物実測図（１）……109
第128図　ＳＫ29出土遺物実測図（２）……110
第129図　ＳＫ30出土遺物実測図……110
第130図　ＳＫ31遺構実測図（１/30）……110
第131図　ＳＫ31出土遺物実測図……111
第132図　ＳＫ32出土遺物実測図……112
第133図　ＳＫ33出土遺物実測図（１）……112
第134図　ＳＫ33出土遺物実測図（２）……113
第135図　ＳＫ34出土遺物実測図……113
第136図　ＳＫ35出土遺物実測図……114
第137図　ＳＫ38・39出土遺物実測図……114
第138図　ＳＫ41・42出土遺物実測図……115
第139図　ＳＯ２遺構実測図（１/10）……115
第140図　ＳＯ２出土遺物実測図……116
第141図　ＳＰ26出土遺物実測図……118
第142図　ＳＰ27出土遺物実測図……118
第143図　ＳＷ３出土遺物実測図……118
第144図　ＮＶ２北側出土遺物実測図（１）　……120
第145図　ＮＶ２北側出土遺物実測図（２）　……121
第146図　ＮＶ２南側出土遺物実測図（１）　……122
第147図　ＮＶ２南側出土遺物実測図（２）　……123
第148図　第１調査区第５遺構検出面包含層出土遺物実測図……124
第149図　第１調査区第５遺構検出面包含層（下層整地層）出土遺物実測図　……125
第150図　第２調査区第５遺構検出面包含層出土遺物実測図……126

第151図　第１調査区最下位出土遺物層（土層断面第89・91層）出土遺物実測図…… 127
第152図　消磁前（ＮＲＭ）と消磁後の残留磁化方向の等面積投影図 …… 133
第153図　各遺構のパイロットサンプルＡ－５、Ａ－12の直交ベクトル図 …… 134
第154図　西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線と測定結果 …… 135

ＫＧＴ９９－１

第155図　調査区位置図（１/2000）…… 137
第156図　Ａ～Ｋ地点土層断面模式図（１/60）…… 138
第157図　第１調査区遺構配置図（１/100）…… 139～140
第158図　第１調査区土層断面実測図（１/80）…… 141
第159図　ＳＢ１遺構実測図（１/40）…… 141
第160図　ＳＢ２遺構実測図（１/40）…… 142
第161図　ＳＤ１出土遺物実測図 …… 142
第162図　ＳＷ１遺構実測図（１/40）…… 142
第163図　第１調査区包含層出土遺物実測図 …… 144
第164図　第２調査区遺構配置図（１/100） …… 145
第165図　第２調査区土層断面模式図（１/40）…… 145
第166図　ＳＢ３遺構実測図（１/40）…… 146
第167図　第２調査区包含層出土遺物実測図 …… 146
第168図　第３調査区遺構配置図（１/100）及びＳＤ２・ＳＸ４遺構実測図（１/40）… 147～148
第169図　第３調査区土層断面模式図（１/40）…… 149
第170図　第３調査区包含層出土遺物実測図 …… 150
第171図　『金剛寺境内図』 …… 156
第172図　『河内名所図会』（金剛寺）（１） …… 157
第173図　『河内名所図会』（金剛寺）（２） …… 157

表　目　次

第１表　河内長野市遺跡地名表 …… 3
第２表　ＳＯ１出土輸入銭一覧表 …… 75
第３表　熱残留磁気測定結果 …… 133
第４表　考古地磁気測定結果（平均磁化方向）…… 134

図　　版

ＫＧＴ９１－１

図版１　遺構　調査区全景（南から）、ＳＷ１（西から）
図版２　遺構　ＳＣ１（南から）、ＳＣ１・２（西から）
図版３　遺構　ＳＣ２遺物出土状況（東から）、ＳＣ３（東から）
図版４　遺構　ＳＤ２（西から）、（東から）
図版５　遺構　ＳＤ３（西から）、（北から）
図版６　遺構　ＳＫ４遺物出土状況（西から）、ＳＯ１（西から）
図版７　遺構　ＳＯ１遺物出土状況（東から）、ＳＯ１石除去後（東から）
図版８　遺構　ＳＷ２（南から）、（南から）

ＫＧＴ９７－２

図版９　遺構　調査区全景（西から）、（南から）
図版10　遺構　ＳＢ１（西から）、ＳＢ２（西から）
図版11　遺構　ＳＢ１（第２次）検出状況（西から）、ＳＢ１（第１次）検出状況（西から）
図版12　遺構　ＳＢ１西側基壇（北から）、ＳＢ１東側基壇（南から）
図版13　遺構　ＳＬ１遺物出土状況（東から）、ＳＵ１（西から）

ＫＧＴ９７－３

図版14　遺構　調査区上層遺構検出面全景（南から）、（北から）
図版15　遺構　調査区下層遺構検出面南側（東から）、ＳＴ１（西から）
図版16　遺構　ＳＴ２（東から）、ＳＴ２丸桶内遺物出土状況（西から）
図版17　遺構　ＳＴ２丸桶内遺物除去後（西から）、ＳＴ２龕出土状況（東から）
図版18　遺構　ＳＴ３（北から）、ＳＮ１（北から）

ＫＧＴ９８－１

図版19　遺構　第１調査区第１遺構検出面全景（北から）、（南から）
図版20　遺構　ＳＤ３・ＳＷ１（北から）、（東から）
図版21　遺構　ＳＥ１（北から）、ＳＵ１（西から）
図版22　遺構　ＳＵ２（北から）、（南から）
図版23　遺構　第１調査区第２遺構検出面全景（北から）、（南から）
図版24　遺構　ＳＯ１（西から）、ＳＯ１蓋石除去後（北から）、
　　ＳＯ１銅銭出土状況（北から）
図版25　遺構　ＳＯ１土釜抜き取り後（西から）、ＳＰ６周辺遺物出土状況（東から）

図版26　遺構　第１調査区第３遺構検出面全景（北から）、（南から）
図版27　遺構　ＳＢ１壁材検出状況（東から）、（北から）
図版28　遺構　第１調査区第４遺構検出面全景（北から）、（南から）
図版29　遺構　第２調査区第４遺構検出面全景（北から）、（南から）、
第３調査区第４遺構検出面全景（西から）
図版30　遺構　ＳＤ４西側桝部（南から）、ＳＤ４東側桝部（東から）
図版31　遺構　ＳＬ１遺物出土状況（東から）、ＳＵ３（南から）
図版32　遺構　第１調査区第５遺構検出面全景（北から）、（南から）
図版33　遺構　ＳＤ６・７（北から）、ＳＤ６遺物出土状況（南から）
図版34　遺構　ＳＤ６木材出土状況（南から）、ＳＤ６杭出土状況（北から）
図版35　遺構　ＳＤ９（東から）、ＳＫ29遺物出土状況（西から）
図版36　遺構　ＳＫ31（南から）、ＳＯ２遺物出土状況（北から）
図版37　遺構　調査区土層断面剥ぎ取り作業風景
図版38　遺構　外業実測作業風景、現地説明会風景

ＫＧＴ９９－１

図版39　遺構　第１調査区上層遺構検出面東側（南から）、（東から）
図版40　遺構　第１調査区上層遺構検出面東側（東から）、（東から）
図版41　遺構　第１調査区上層遺構検出面東側（北から）、
第１調査区上層遺構検出面北側（西から）
図版42　遺構　ＳＢ１（西から）、ＳＷ１（東から）
図版43　遺構　第１調査区下層遺構検出面北側（西から）、
第１調査区下層遺構検出面東側（北から）、（南から）、（南から）
図版44　遺構　第２調査区東側（東から）、第２調査区西側（西から）、ＳＢ３（西から）
図版45　遺構　第３－Ａ調査区全景（北から）、第３－Ｂ調査区全景（西から）
図版46　遺構　第３－Ｃ調査区南側（東から）、第３－Ｃ調査区中央（北から）、
第３－Ｃ調査区北側（東から）
図版47　遺構　ＳＤ３（南から）、ＳＸ４（南から）

ＫＧＴ９１－１

図版48　遺物　ＳＣ１（１）、ＳＣ２（３～５）、ＳＤ１（６～８）、ＳＤ２（12・13・15・23）
図版49　遺物　ＳＤ２（19・20・22・26・27・30～33・35・40～45）
図版50　遺物　ＳＤ２（36～38）、ＳＤ３（60）、ＳＫ１（66・67）、ＳＫ５（68）、ＳＫ７
（70・71）、ＳＫ９（72・73・75・77）
図版51　遺物　ＳＫ９（79～81）、ＳＫ11（83・85）、ＳＯ１（86～117）、ＳＷ２（122～126）

図版52　遺物　ＳＰ３(119～121)、第１整地層（127～130)、焼土層（133～137・139～141)、第２整地層（144～146)、包含層（163・164・166・168～171)

ＫＧＴ９７－２

図版53　遺物　ＳＤ２（176)、ＳＵ１（181)、包含層・側溝（188・190・194・195・199・202・205・213・217・221～223・225・226)

ＫＧＴ９７－３

図版54　遺物　ＳＴ１（238・241・242)、ＳＴ２（243・244)、ＳＴ３（249)

図版55　遺物　ＳＷ１（254・257～259・261・263)、包含層（287・288・291・292)

ＫＧＴ９８－１

図版56　遺物　ＳＤ１（299)、ＳＥ１（301～309)、ＳＫ３（316)、ＳＫ６（315)、ＳＫ９（312～314)、ＳＵ１（319～322)、ＳＵ２（324)

図版57　遺物　ＮＶ１（326)、第１調査区第１遺構検出面包含層（330～332・339・342～346・348)、第２調査区第１遺構検出面包含層（354～356)

図版58　遺物　第１調査区表採（360・361)、ＳＯ１（363～409)

図版59　遺物　ＳＯ１（363～382)

図版60　遺物　ＳＯ１（383～402)

図版61　遺物　ＳＯ１（403～453)

図版62　遺物　ＳＰ６（454・459・460・466・468・471～478・482・483・485)

図版63　遺物　第１調査区第２遺構検出面包含層（上層整地層）（487～490・496・498・499・503・505～511)

図版64　遺物　第１調査区第３遺構検出面包含層（焼土層）（515・516・519・523・526・527・529・530・532～534・536・537・539～541・545・546)

図版65　遺物　第２調査区第３遺構検出面包含層（549)、ＳＢ１（555)、ＳＤ４（556～563・565～569)

図版66　遺物　ＳＤ４（570・572・574・578～585・587・591・592)

図版67　遺物　ＳＫ12（598)、ＳＫ14（604・606)、ＳＫ17（615・616)、ＳＫ18（618・627)、ＳＫ19（619)

図版68　遺物　ＳＬ１（632)、ＳＰ９（637)、ＳＰ13（639)、ＳＰ14（634・640)、ＳＰ15（635)、ＳＰ16（638)、ＳＰ18（636)、ＳＰ21（643～647)、第１調査区第４遺構検出面包含層（炭化物層）（648)

図版69　遺物　第１調査区第４遺構検出面包含層（炭化物層）（650)、第２調査区第４遺構検出面包含層（665)、ＳＤ６（667・668・673・674)、ＳＤ７（675・

680・686・688～693)

図版70　遺物　ＳＤ７（694・695)、ＳＫ27（698・699・701～706)、ＳＫ28（707)、ＳＫ29（708・715・717)

図版71　遺物　ＳＫ29（722～724・726・727)、ＳＫ31（729～733・735～737)

図版72　遺物　ＳＫ31（738・739・742・743・747・749～752)、ＳＫ33（766・768・769)

図版73　遺物　ＳＫ33（770・773・775・777・782～784・786)、ＳＫ35（788・789・792・793・797・806・809)、ＳＫ38（816)、ＳＫ39（810)

図版74　遺物　ＳＯ２（822～853)

図版75　遺物　ＳＯ２（837～853)

図版76　遺物　ＳＰ26（855)、ＳＰ27（857～861)、ＳＷ３（862～864)、ＮＶ２北側（865～873・879・880)

図版77　遺物　ＮＶ２北側(881～883・885・886・890・898・902・903・905・907・910)、ＮＶ２南側（914・915・917・920)

図版78　遺物　ＮＶ２南側（923・925～928・932・934～938)

図版79　遺物　ＮＶ２南側（941～943・947)、第１調査区第５遺構検出面包含層（951・953・957・967～969・971)

図版80　遺物　第１調査区第５遺構検出面包含層（954・955・960・962)、第１調査区第５遺構検出面包含層（下層整地層）（973・979・981～983・985～987・989・991)

図版81　遺物　第２調査区第５遺構検出面包含層（992)、第１調査区最下位出土遺物層（土層断面第89・91層）（993・995・996・998・999・1001・1002・1006・1010・1014)

図版82　遺物　第１調査区最下位出土遺物層（土層断面第89・91層）（994・1004・1012・1013・1015)

ＫＧＴ９９－１

図版83　遺物　ＳＤ１（1017)、第１調査区包含層（1026・1029)、第３調査区包含層（1053～1057)

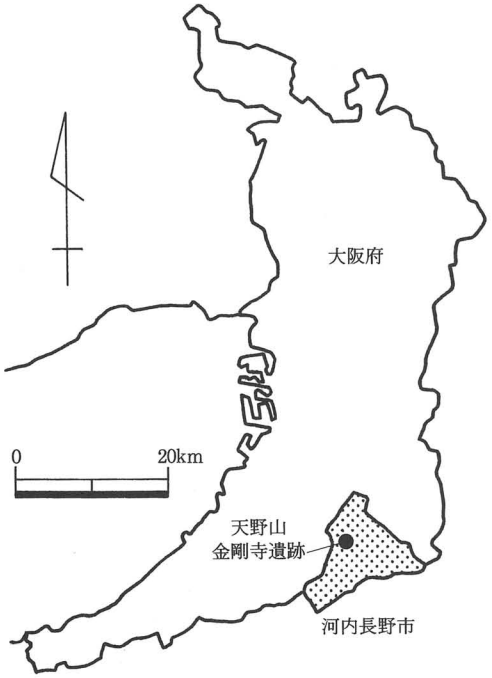
第１章　はじめに

第１節　調査地の概要

本書は、天野山金剛寺遺跡において実施した発掘調査報告書である。

当該遺跡は和泉市との市境に近い、大阪府河内長野市天野町に位置し、標高は約180mを測る。

遺跡は和泉葛城山脈より北方に派生する丘陵部を源とする、天野川（西除川）によって形成された開析谷に、国指定史跡「金剛寺境内」を中心として、南北800mにわたって広がっている。境内には古代より和泉方面に向かう天野街道が通り、交通の要衝に位置していた。現在も国道170号が境内を北から南東にかけて通っており、この東側には天野山金剛寺の山号の由来である天野山が位置している。天野川は狭隘な小谷を直線的に北西方向に流れるが、ある地点では東寄りに屈曲したり、弧を描いてまた元の直線的な河道に戻るところなどもあり、その河道の屈曲は、天野山金剛寺所蔵の『金剛寺境内図』（製作年代不明）（第171図）にも描かれている。水位や治水事業などで多少の移動はあるにしても過去においての河道は、現況と大差ないものと思われる。



第１図　遺跡位置図

調査はＫＧＴ91－１、97－２・３、98－１、99－１の５次にわたって実施した。ＫＧＴ97－３を除く他の調査地は、天野山の西側で、現況の天野川の両岸沿いに位置する。また、現存はしていないが、検出遺構の一部には、境内図に描写された位置・内容ともに合致するものもあった。しかし、いずれの調査区も天野山金剛寺の旧境内にあたり、調査箇所は主要伽藍、子院、墓地などに位置する。

当該遺跡は寺院遺跡であるため、その営為の一端を垣間見ることができる密教法具や地鎮めのための修法跡等も、数多く検出されている。

なお、本報告に掲載する各調査の詳細は、各章ごとに述べているので、そちらをご参照いただきたい。

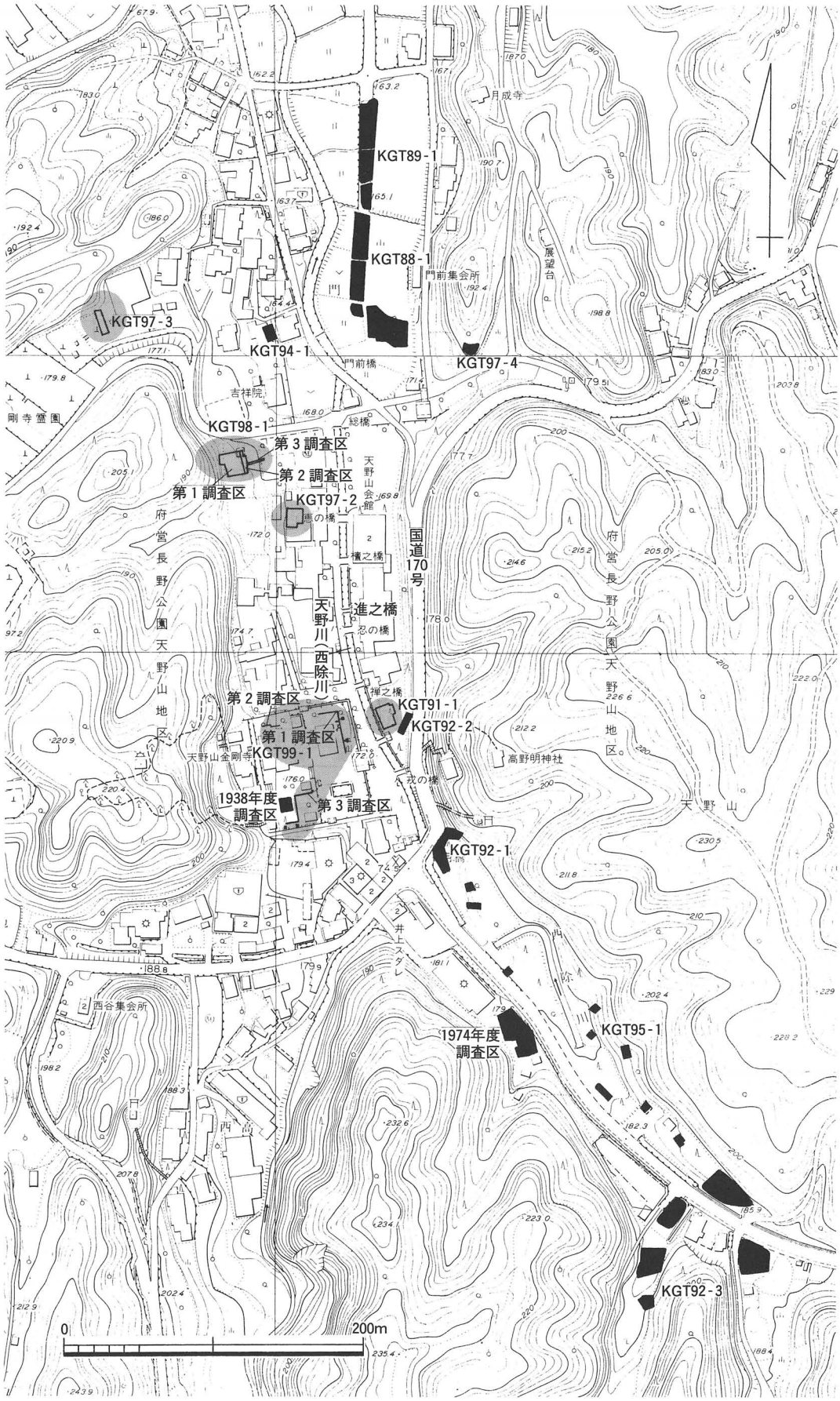
第２図　河内長野市遺跡分布図（１/40000）

番号	文化財名称	種類	時代
1	長野神社遺跡	社寺	室町以降
2	河合寺遺跡	社寺	平安以降
3	観心寺遺跡	社寺	平安以降
4	大師山古墳	古墳	古墳（前期）
5	大師山南古墳	古墳？	古墳（後期）
6	大師山遺跡	集落・生産	弥生（後期）・平安
7	興禅寺遺跡	社寺	中世以降
8	烏帽子形八幡神社遺跡	社寺	室町以降
9	塚穴古墳	古墳・墳墓	古墳（後期）・近世
10	長池窯跡群	生産	平安～近世
11	小山田1号古墓	墳墓	奈良
12	小山田2号古墓	墳墓	奈良
13	延命寺遺跡	社寺	平安以降
14	天野山金剛寺遺跡	社寺・墳墓	平安以降
15	日野観音寺遺跡	社寺・生産	平安～中世
16	地蔵寺遺跡	社寺	中世以降
(17)	岩湧寺遺跡	社寺	平安以降
18	五ノ木古墳	古墳	古墳（後期）
19	高向遺跡	集落	旧石器～中世
20	烏帽子形城跡	城館・生産	中世～近世
21	喜多町遺跡	集落	縄文・古墳～中世
22	烏帽子形古墳	古墳	古墳（後期）
23	末広窯跡	生産	中世
24	塩谷遺跡	散布地	縄文～近世
25	流谷八幡神社	社寺	平安以降
26	蟹井淵南遺跡	散布地	中世
27	蟹井淵北遺跡	散布地	中世
28	天見駅北方遺跡	散布地	中世
29	千早口駅南遺跡	社寺	中世
30	岩瀬薬師寺遺跡	社寺	中世以降
31	清水遺跡	散布地	中世
32	伝「仲哀廟」古墳	古墳？	
(33)	堂村地蔵堂跡	社寺	近世
(34)	滝畑埋墓	墳墓	近世
(35)	中村阿弥陀堂跡	社寺	近世
(36)	東の村観音堂跡	社寺	近世
(37)	西の村観音堂跡	社寺	近世
38	清水阿弥陀堂跡	社寺	近世
39	滝尻弥勒堂跡	社寺	近世
(40)	宮の下内墓	墳墓	古墳
41	宮山古墳	古墳	古墳
42	宮山遺跡	集落	縄文・奈良
43	西代藩陣屋跡	散布地・城跡	飛鳥～奈良・江戸
44	上原町墓地	墳墓	近世
45	惣持寺跡	散布地・社寺	縄文・奈良・鎌倉
46	栗山遺跡	祭祀	中世～近世
47	寺ケ池遺跡	散布地	縄文
48	上原遺跡	散布地	旧石器～近世
49	住吉神社遺跡	社寺	近世以降
50	高向神社遺跡	社寺	中世以降
51	青が原神社遺跡	社寺	中世以降
52	膳所藩代官所跡	城館	江戸
53	双子塚古墳跡	古墳	古墳
54	菱子尻遺跡	散布地・社寺	縄文～近世
55	河合寺城跡	城館	中世
56	三日市遺跡	集落・古墳他	旧石器～近世
57	日の谷城跡	城館	中世
58	高木遺跡	散布地	縄文
59	汐の山城跡	城館	中世
60	峰山城跡	城館	中世
61	稲荷山城跡	城館	中世
62	国見城跡	城館	中世
63	旗蔵城跡	城館	中世
64	権現城跡	城館	中世
(65)	天神社遺跡	社寺	中世以降
(66)	葛城第15経塚	経塚	平安以降
67	加賀田神社遺跡	社寺	中世以降
68	庚申堂遺跡	社寺	近世以降
69	石仏城跡	城館	中世
70	佐近城跡	城館	中世
71	旗尾城跡	城館	中世
72	葛城第16経塚	経塚	平安以降

番号	文化財名称	種類	時代
(73)	葛城第18経塚	経塚	平安以降
(74)	葛城第19経塚	経塚	平安以降
(75)	笹尾塞	城館	中世
(76)	大沢塞	城館	中世
(77)	三国山経塚	経塚	平安以降
(78)	光滝寺遺跡	社寺	中世以降
(79)	猿子城跡	城館	中世
80	蟹井淵神社遺跡	社寺	中世以降
(81)	川上神社遺跡	社寺	中世以降
82	千代田神社遺跡	社寺	中世以降
83	向野遺跡	集落・生産	縄文・平安～近世
84	古野町遺跡	散布地	中世
85	上原北遺跡	集落	中世
86	大日寺遺跡	社寺・古墳・墳墓	弥生～中世
87	高向南遺跡	散布地	鎌倉
88	小塩遺跡	集落	縄文～奈良
89	加塩遺跡	集落	古墳（後期）
90	尾崎遺跡	集落	古墳～中世
91	ジョウノマエ遺跡	城館？	中世
92	仁王山城跡	城館	中世
93	タコラ城跡	城館	中世
94	岩立城跡	城館	中世
95	上原近世瓦窯	生産	近世
96	市町東遺跡	散布地	弥生・中世
97	上田町窯跡	生産	近世
98	尾崎北遺跡	集落	古墳～中世
99	西之山町遺跡	散布地	中世
100	野間里遺跡	集落	平安
101	鳴尾遺跡	散布地	中世
102	上田町遺跡	散布地	古墳・中世
103	上原中遺跡	散布地	古墳・中世
104	小野塚遺跡	墳墓	中世
(105)	葛城第17経塚	経塚	平安以降
106	薬師堂跡	社寺	中世以降
107	野作遺跡	生産	中世
108	寺元遺跡	集落・社寺	奈良・中世
(109)	鳩原遺跡	散布地	中世
110	法師塚古墳跡	古墳	古墳
111	山上講山古墳跡	古墳	古墳
112	西浦遺跡	集落	古墳・中世・近世
113	地福寺跡	社寺	近世
114	宮の下遺跡	集落	平安～中世
115	栄町遺跡	散布地	弥生・古墳・中世
116	錦町遺跡	散布地	中世
(117)	太井遺跡	散布地	縄文・中世
118	錦町北遺跡	集落	弥生・中世・近世
119	市町西遺跡	集落	縄文・中世
120	栄町南遺跡	集落	中世
121	栄町東遺跡	散布地	弥生・中世
122	楠町東遺跡	散布地	弥生
123	汐の宮町南遺跡	散布地	弥生・奈良
124	汐の宮町遺跡	散布地	中世
125	神ガ丘近世墓	墳墓	近世
126	増福寺	社寺	中世以降
127	三昧城遺跡	墳墓・城跡	中世・近世
128	松林寺遺跡	社寺	近世以降
129	昭栄町遺跡	散布地	中世
*130	東高野街道	街道	平安以降
*131	西高野街道	街道	平安以降
*132	高野街道	街道	平安以降
133	上原東遺跡	散布地	弥生・中世・近世
134	地蔵寺東方遺跡	墳墓	鎌倉
135	本多町北遺跡	散布地	中世
136	下里町遺跡	散布地	古墳・中世
137	あかしあ台遺跡	散布地	近世
138	岩瀬北遺跡	集落	中世
139	岩瀬近世墓地	墳墓	近世
140	昭栄町東遺跡	散布地・池跡	縄文・中世・近世
141	三日市北遺跡	集落	弥生～中世
142	三日市宿跡	宿駅に伴う街並	中世～近世
143	上田町宿跡	宿駅に伴う街並	中世～近世
144	滝尻遺跡	散布地	縄文・古代・中世

（　）は地図範囲外　＊は街道につき地図上にプロットせず

第1表　河内長野市遺跡地名表

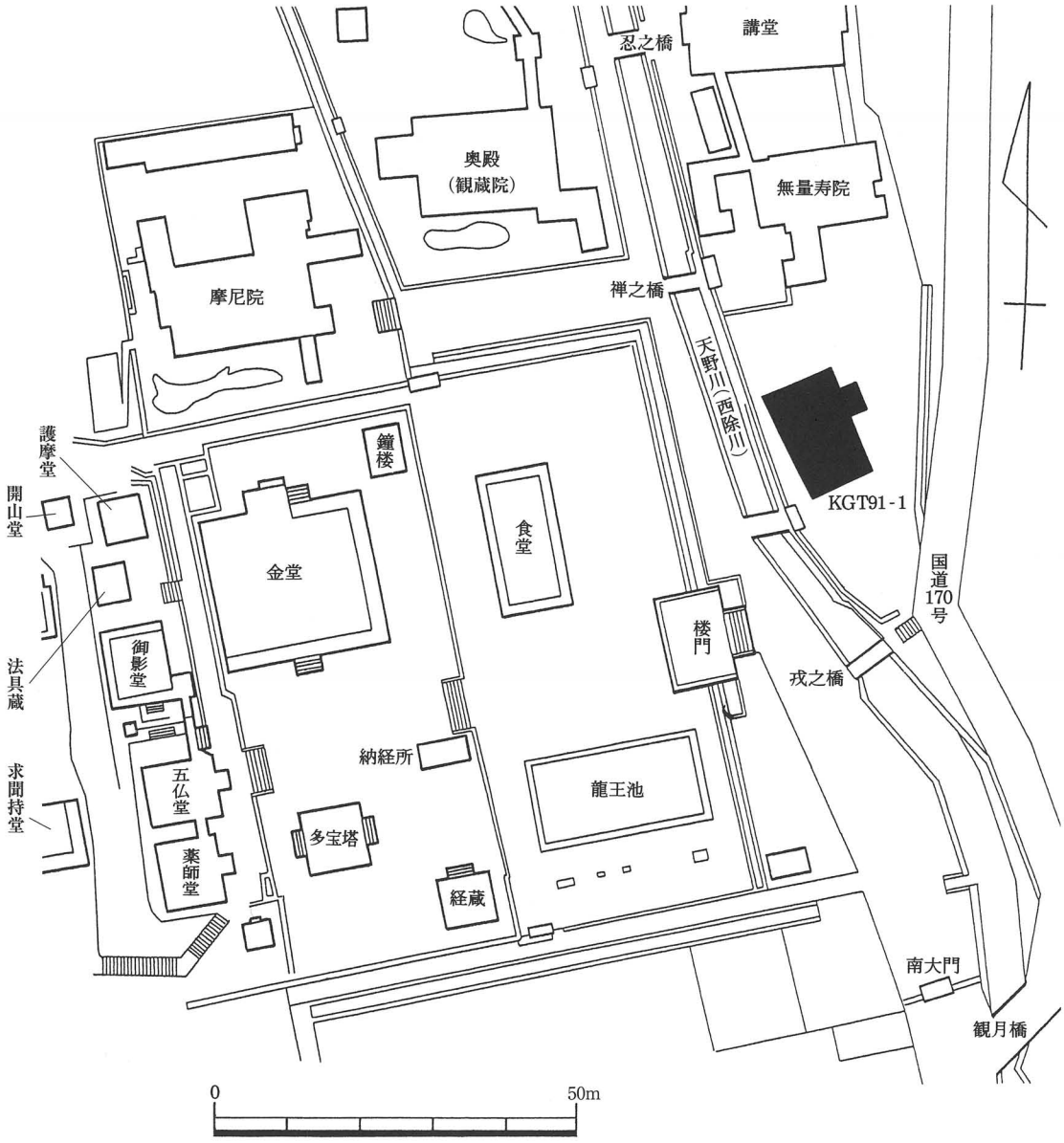


第3図　天野山金剛寺遺跡調査地位置図（1/4000）

第2章　ＫＧＴ９１－１

第１節　調査に至る経過

本次調査はテクルート整備事業に伴う便所建設工事に伴い実施した。原因者は河内長野市（担当：環境経済部商工観光課）であり、調査は平成３年９月24日から平成３年11月19日にかけて行った。調査地は天野山金剛寺の境内を、南から北へ流れる、金剛岩湧山系を水源とする天野川（西除川）の右岸に位置し、伽藍の楼門の北東側約30ｍに所在する。調査面積は約145㎡である。

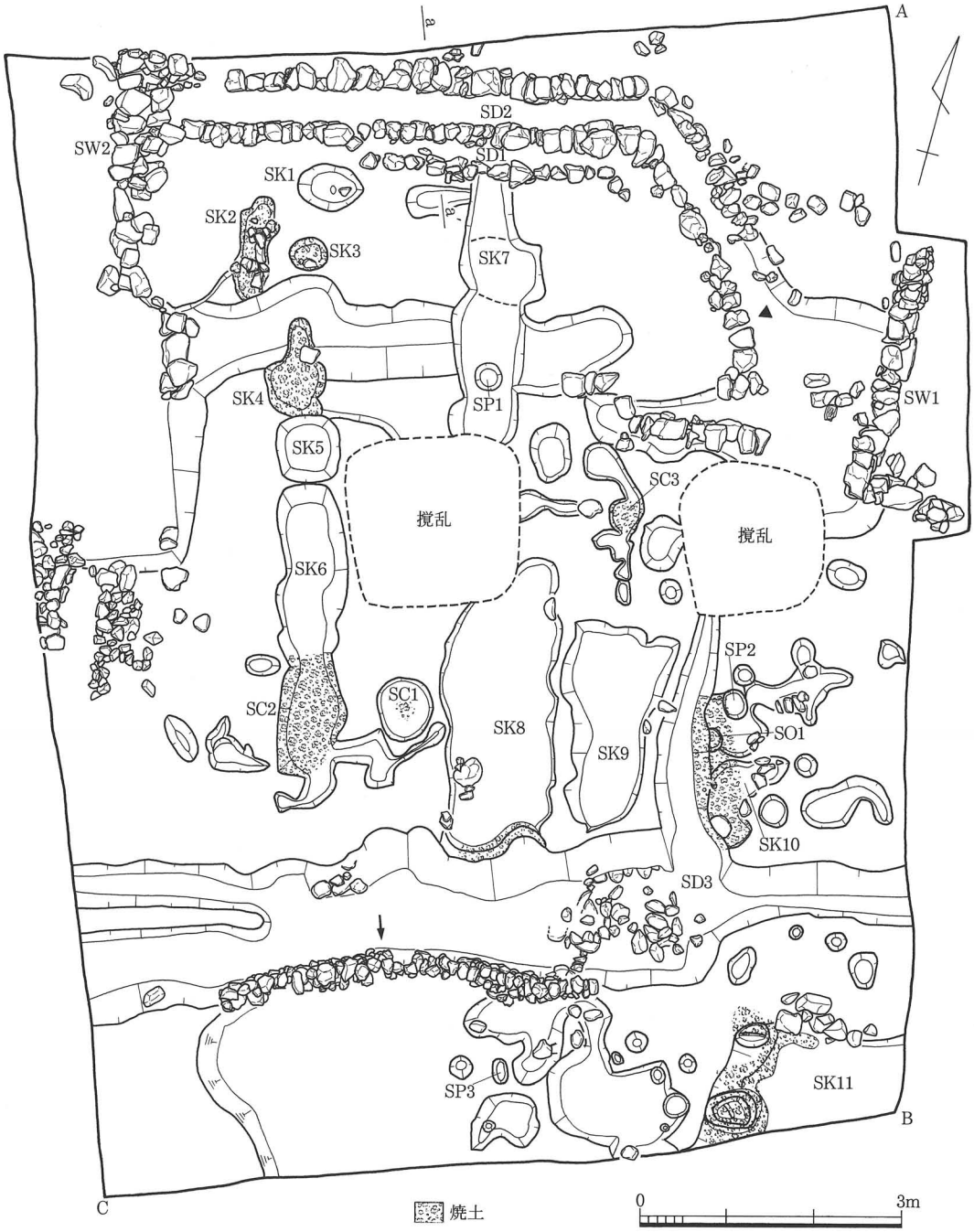


第４図　調査区位置図（１/1000）

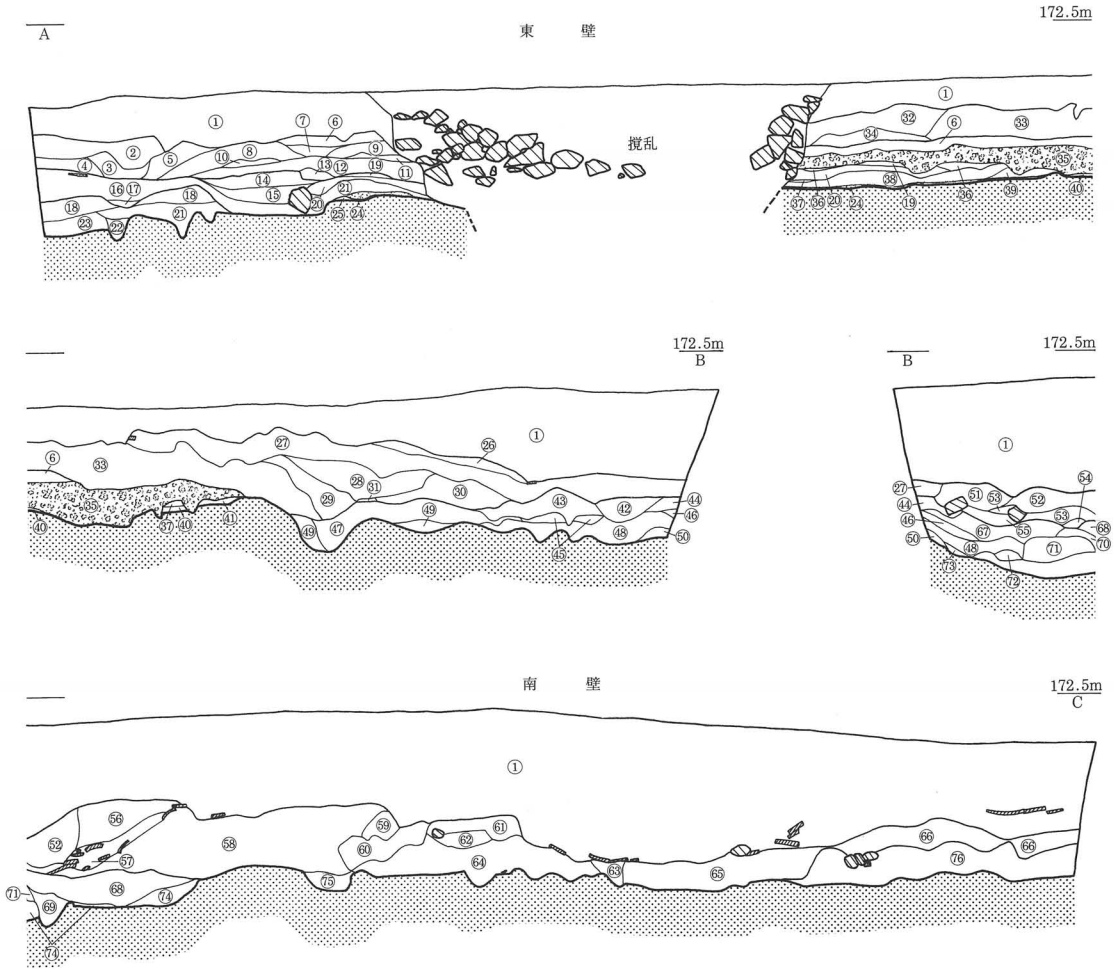
第２節　調査の結果

１　遺構と遺物

遺構検出面は合計３面、第１遺構検出面では石列、第２遺構検出面では炉、第３遺構検出面では炉、溝、土坑、土釜埋納遺構（土公供作法遺構）、ピット、石列を検出した。第１遺構検出面が①2.5Y4/3オリーブ褐色細砂層上、第２遺構検出面が⑥10YR7/6明黄褐色粗砂混じり細砂（第１整地層）層上、第３遺構検出面が㊱10YR6/4にぶい橙色細砂混じり粘



第５図　遺構配置図（１/80）



① 2.5Y 4/3 オリーブ褐色細砂(表土)
② 10YR 5/4 にぶい黄褐色粘土混じり粗砂
③ 10YR 5/3 にぶい黄褐色粗砂混じり粘土
④ 5Y 7/2 灰白色粘土
⑤ 2.5Y 6/2 灰黄色礫混じり細砂
⑥ 10YR 7/6 明黄褐色粗砂混じり細砂
⑦ 10YR 6/4 にぶい黄橙色細砂
⑧ 10YR 5/3 にぶい黄褐色粗砂混じり粘土
⑨ 10YR 6/3 にぶい黄橙色細砂
⑩ 10YR 6/4 にぶい黄橙色粗砂混じり細砂
⑪ 10YR 7/6 明黄褐色粗砂
⑫ 2.5Y 8/6 黄色細砂
⑬ 10YR 2/3 黒褐色細砂混じり粘土
⑭ 2.5Y 5/3 黄褐色粗砂混じり粘土
⑮ 7.5YR 5/8 明褐色粗砂
⑯ 10YR 6/2 灰黄褐色粘土混じり粗砂
⑰ 10YR 6/3 にぶい黄橙粘土混じり粗砂
⑱ 5Y 6/2 灰オリーブ色粘土混じり粗砂
⑲ 10YR 2/3 黒褐色細砂混じり粘土
⑳ 10YR 6/3 にぶい黄橙色粗砂混じり細砂
㉑ 2.5Y 5/2 暗灰黄色細砂混じり粘土
㉒ 5YR 6/1 褐灰色礫混じり粗砂
㉓ 5YR 7/1 明褐灰色礫混じり細砂
㉔ 10YR 3/3 暗褐色細砂(焼土層)
㉕ 7.5YR 5/6 明褐色粗砂混じり細砂
㉖ 10YR 6/6 明黄褐色礫混じり粗砂
㉗ 10YR 5/4 にぶい黄褐色細砂混じり粘土
㉘ 10YR 5/4 にぶい黄褐色細砂粘土混じり微細砂
㉙ 10YR 4/4 褐色粘土
㉚ 10YR 4/4 褐色礫混じり粘土
㉛ 10YR 5/2 灰黄褐色細砂混じり粘土
㉜ 10YR 5/4 にぶい黄褐色細砂混じり粘土
㉝ 10YR 4/3 にぶい黄褐色細砂混じり粘土
㉞ 10YR 4/3 にぶい黄褐色細砂混じりシルト
㉟ 7.5YR 3/2 黒褐色細砂混じり粘土(焼土層)
㊱ 10YR 6/4 にぶい橙色細砂混じり粘土(第2整地層)
㊲ 5YR 3/3 暗赤褐色混じり細砂
㊳ 10YR 4/2 灰黄褐色粗砂混じり細砂
㊴ 10YR 7/3 にぶい黄橙色粗砂混じり細砂
㊵ 10YR 4/4 褐色細砂混じり粘土
㊶ 10YR 6/6 明黄褐色粘土
㊷ 2.5Y 4/4 オリーブ褐色粘土
㊸ 2.5Y 4/3 オリーブ褐色微細砂混じり粘土
㊹ 2.5Y 5/4 黄褐色粘土
㊺ 10YR 6/3 にぶい黄橙色粘土混じり細砂
㊻ 2.5Y 5/3 黄褐色粘土
㊼ 10YR 3/4 暗褐色細砂混じり粘土
㊽ 10YR 3/2 黒褐色粘土
㊾ 10YR 5/3 にぶい黄褐色細砂粗砂混じり粘土
㊿ 10YR 5/6 黄褐色粘土混じり粗砂
(51) 10YR 4/4 褐色粘土
(52) 10YR 7/8 黄橙色細砂混じり粘土
(53) 10YR 3/2 黒褐色粘土
(54) 10YR 2/3 黒褐色粗砂細砂混じり粘土
(55) 10YR 4/4 褐色粘土
(56) 10YR 4/3 にぶい黄褐色小礫混じり粘土
(57) 2.5Y 7/4 にぶい黄橙色粘土混じり粗砂
(58) 10YR 5/4 にぶい黄褐色粘土混じり微細砂
(59) 10YR 4/3 にぶい黄褐色細砂混じり粘土
(60) 10YR 6/4 にぶい黄橙色小礫混じり粘土
(61) 2.5Y 4/3 オリーブ褐色細砂混じり粘土
(62) 10YR 5/3 にぶい黄褐色礫混じり粘土
(63) 2.5Y 4/3 オリーブ褐色細砂混じり粘土
(64) 10YR 3/4 暗褐色細砂混じり粘土
(65) 10YR 4/4 褐色細砂混じり粘土
(66) 2.5Y 4/3 オリーブ褐色細砂混じり粘土
(67) 10YR 4/3 にぶい黄褐色細砂混じり粘土
(68) 2.5Y 5/4 黄褐色細砂混じり粘土
(69) 10YR 6/4 にぶい黄橙色粗砂混じり細砂
(70) 10YR 3/2 黒褐色粘土
(71) 10YR 4/4 褐色粗砂粘土混じり細砂
(72) 10YR 4/4 褐色粗砂粗砂混じり粘土
(73) 10YR 5/4 にぶい黄褐色細砂
(74) 10YR 2/2 黒褐色細砂混じり粘土
(75) 10YR 4/3 にぶい黄褐色細砂混じり粘土
(76) 10YR 4/3 にぶい黄褐色細砂混じり粘土

0　3m

第6図　調査区土層断面実測図（1/60）

土(第２整地層)層上である。また、これらの土層が検出されていない箇所では、層序から判断してこれらに相当すると考えられるほぼ同水準の層上で遺構の検出を行った。

基本層序は、現地表面から①2.5Y4/3オリーブ褐色細砂（層厚0.2～1.2m、表土)、㉝10YR4/3にぶい黄褐色細砂混じり粘土（同0.2～0.4m)、⑥10YR7/6明黄褐色粗砂混じり細砂(同0.1m、第１整地層)、㉟7.5YR3/2黒褐色細砂混じり粘土（同0.1～0.3m、焼土層)、㊱10YR6/4にぶい橙色細砂混じり粘土（同0.05m、第２整地層)、⑳10YR6/3にぶい黄橙色粗砂混じり細砂（同0.05m)、㊳10YR4/2灰黄褐色粗砂混じり細砂（同0.05～0.1m)、㉔10YR3/3暗褐色細砂（同0.01～0.03m、焼土層）の順である。

なお、調査進行上、一括して平面図の記録保存を行ったことをここにのべておく。(第５・６図)

第１遺構検出面

(1)石列（図版１）

［ＳＷ１］

ＳＷ１は調査区の北東部に位置する。表土上で検出されたことから、近年まで機能していたことが考えられる。平面形は遺構の北側と東側が調査区外に及ぶため、詳細は不明である。検出した規模は、南北長3.08m、東西長1.45m、深さ0.95mを測る。主軸方向はＮ－１°－Ｗである。遺構の用途は調査地が調査期間中終始、かなりの量の地下水を湧出していたことや、立地条件・規模から判断して貯水施設であると考えられる。また遺構は全て、破砕した瓦により埋められていた。

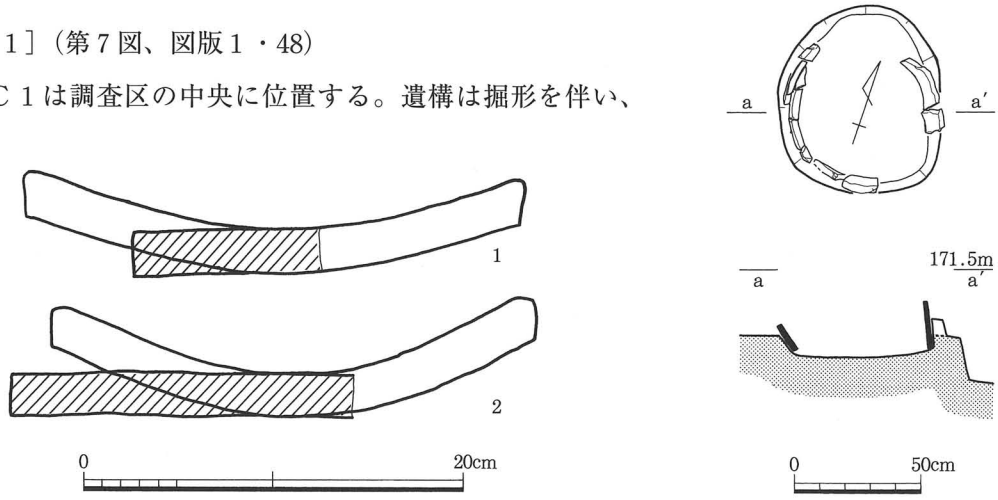
遺物は軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

第２遺構検出面

(1)炉

［ＳＣ１］(第７図、図版１・48)

ＳＣ１は調査区の中央に位置する。遺構は掘形を伴い、



第７図　ＳＣ１遺構実測図（1/30）及び出土遺物実測図

平面形は楕円形を呈する。遺構内部には数枚の平瓦がほぼ円形に立てられており、南側に開口部分がある。瓦の外側は黄褐色シルトで固定しているのが観察された。周囲を巡る平瓦の内側の埋土からは、多量の灰が検出されたことから炉と判断した。規模は長径0.74m、短径0.66m、深さ0.1mを測る。主軸方向はN－12°－Wである。

遺物は炉の部材である平瓦（１・２）が出土した。

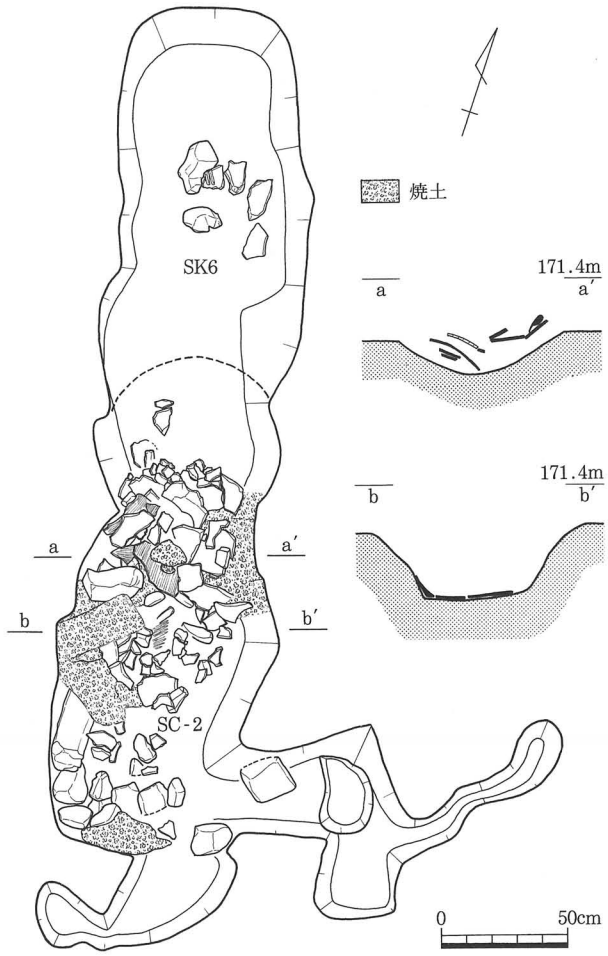
第３遺構検出面

(1)炉

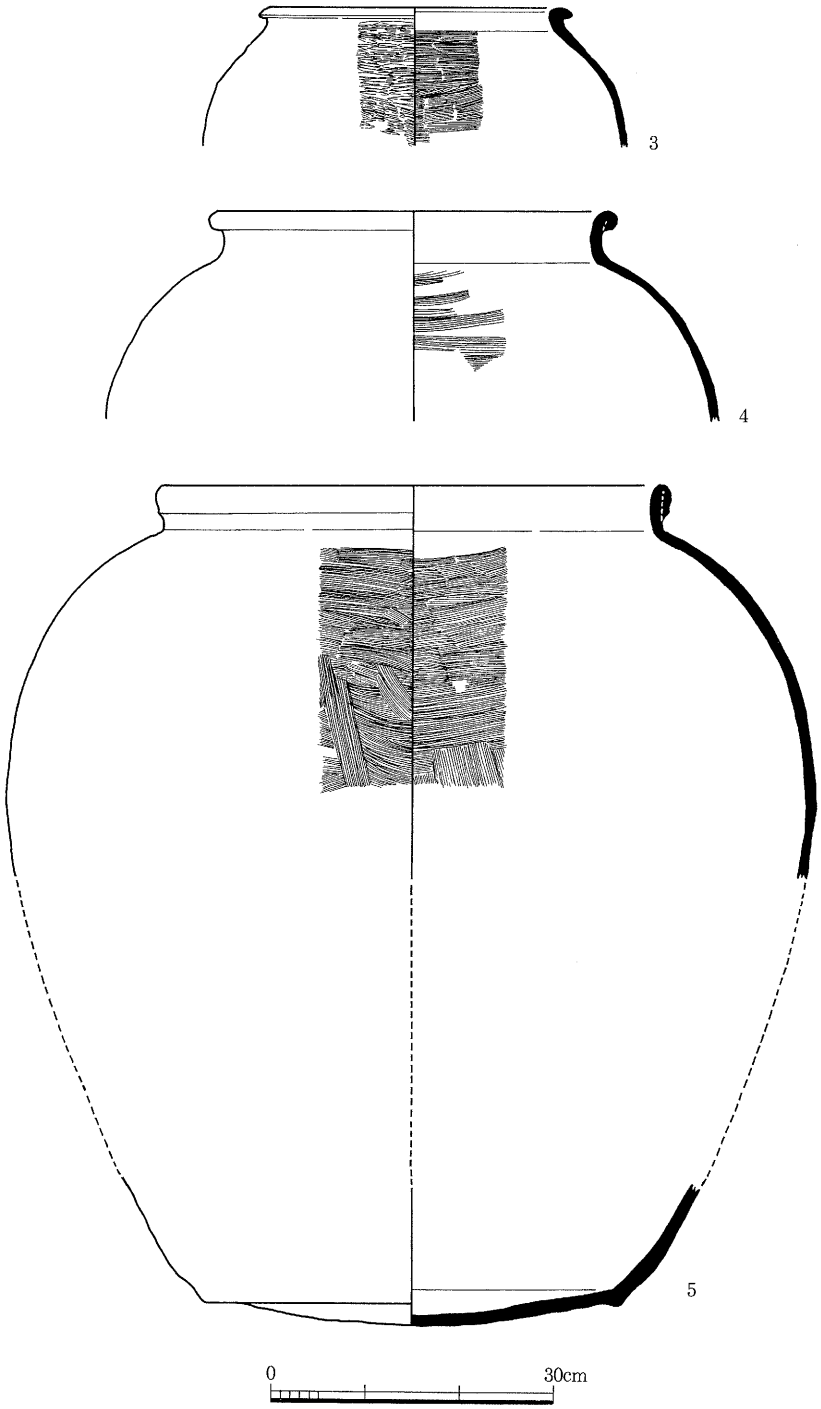
［ＳＣ２］（第８・９図、図版２・３・48）

ＳＣ２は調査区の中央部、ＳＣ１の西側に位置する。遺構の掘形の平面形は不定形を呈する。規模は南北長1.98m、東西長0.89m、深さ0.27mを測る。主軸方向はN－15°－Wである。遺構の埋土には、灰と竈などの壁材とみられる赤変した焼土塊が多量に含まれていた。

遺物は鉄釘と瓦質甕（３）、備前甕（４・５）が、投棄されたと考えられる状況で出土した。



第８図　ＳＣ２遺構実測図（1/30）



第９図　ＳＣ２出土遺物実測図

［ＳＣ３］（図版３）

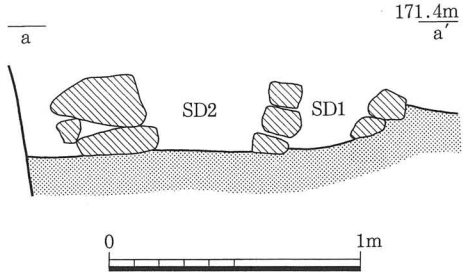
ＳＣ３は調査区の中央部に位置する。遺構は掘形を伴い、平面形は楕円形を呈するが、南側に若干の張り出し部分がある。規模は長径0.41m、短径0.34m、深さ0.05mを測る。主軸方向はＮ－３°－Ｅである。遺構内には竈などの壁材とみられる焼土塊が出土し、また周囲の土が加熱により赤変した酸化焔焼成の痕跡が観察されたことから炉跡と考えられる。

遺物は瓦器椀が出土したが、細片のため図化できなかった。

(2)溝

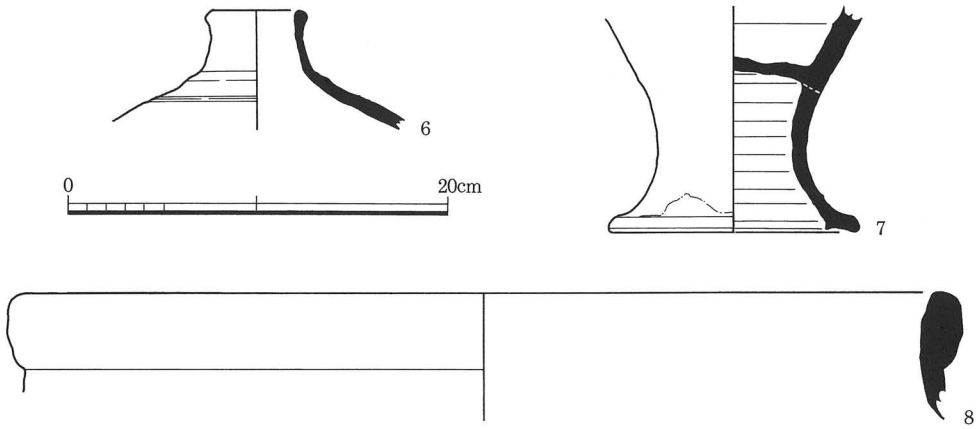
［ＳＤ１］（第10・11図、図版48）

ＳＤ１は調査区の北側に位置し、東西方向に軸方向を持ち、後述するＳＤ２の石列と平行する北側に面を持つ石列で、暗渠を伴う溝である。検出した規模は東西長3.16ｍを測る。主軸方向はＮ－67°－Ｅである。遺構配置から考えると構築当初、ＳＤ２の位置する付近に対となる北側の南側に面を持つ石列が存在したか、もしくはＳＤ２の北側の南側に面を持つ石列が一対となっていたか、またはＳＤ２の南側石列の構築によってその機能が廃絶した可能性もあるが、詳細は不明である。石列は最大31cm×28cm×10cmの河原石を１列に並べ、２段積みにしている。遺構の用途としては構造上、排水溝であることが考えられる。



第10図　ＳＤ１・２遺構実測図（1/30）

遺物は土師質皿、瓦質擂鉢・甕、黒釉陶器花瓶（６・７）、備前甕（８）、平瓦が出土した。

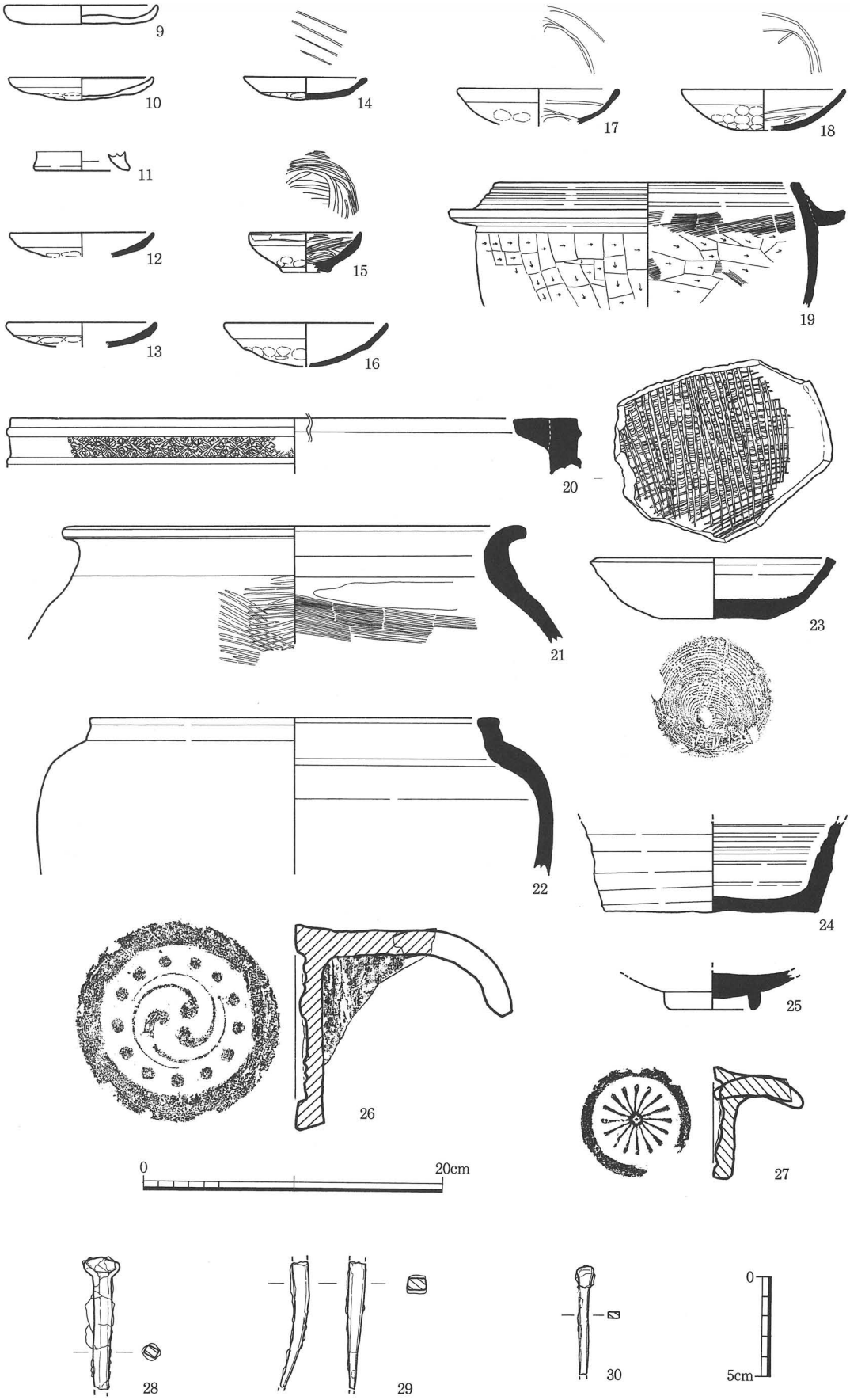


第11図　ＳＤ１出土遺物実測図

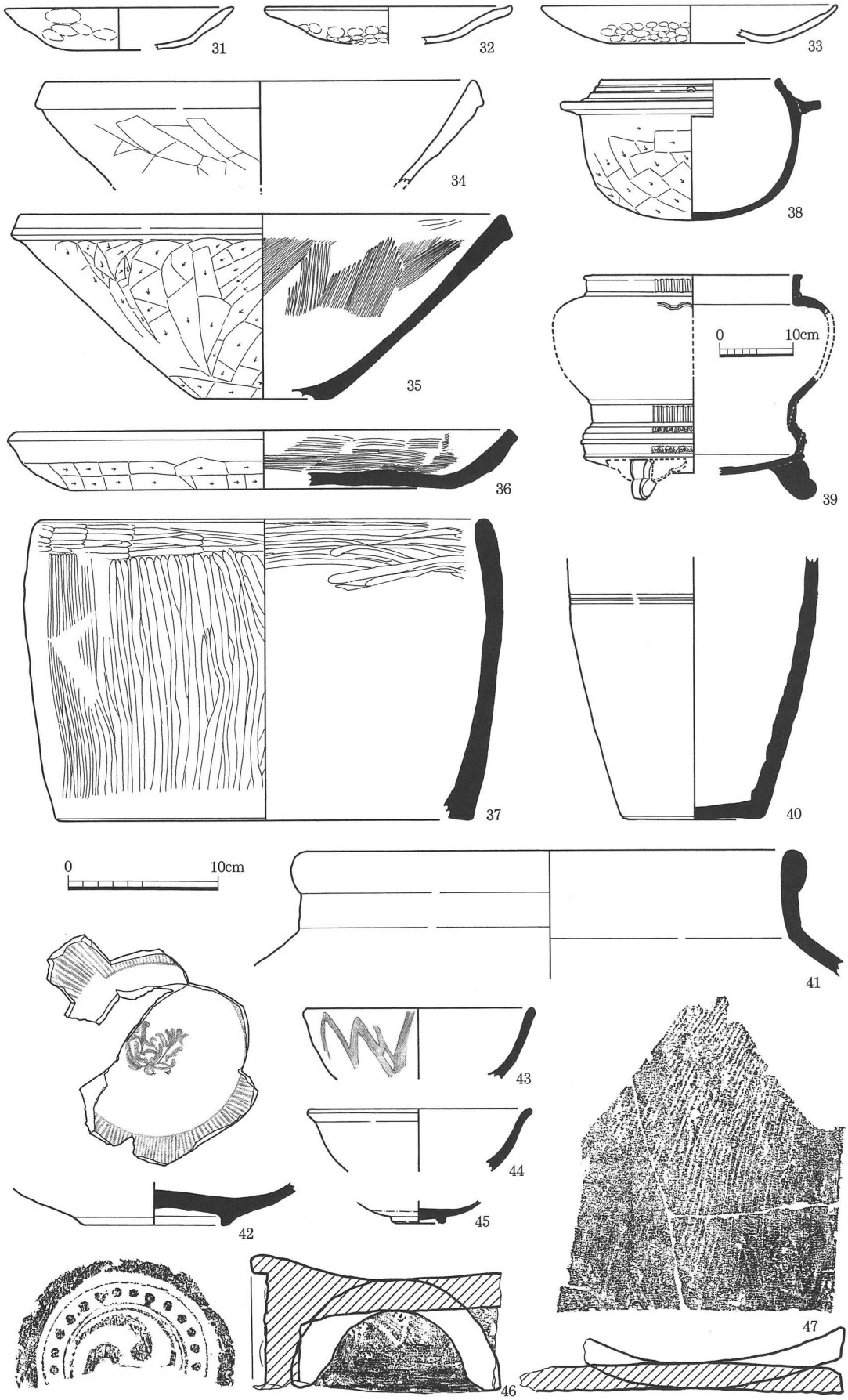
［ＳＤ２］（第10・12・13図、図版４・48～50）

ＳＤ２は調査区の北側に位置し、主体となる部分はＳＤ１の石列と平行する東西方向に軸方向を持つが、東部分は南東方向に主軸方向が変わり、南側石列の南端には東西方向の南側に面を持つ石列が付属する。遺構の西側はＳＷ２に切られ、東側はＳＷ１や撹乱を受けているため、詳細は不明であるが、用途はＳＤ１と同様、排水溝と考えられる。検出した規模は長さ11.7ｍ、石列の内法0.35ｍ、深さ0.3ｍを測る。主軸方向はＮ－67°－Ｅである。石列は最大45cm×31cm×22cmの河原石を１列に並べ、３段積みにしている。

遺物は土師質皿（９・10・31～33）・埦（11）・練鉢（34）、瓦器皿（12～14）・小埦（15）・埦（16～18）、瓦質土釜（19・38）・擂鉢（35）・甕（21）・盤（36）・火鉢（37）・風炉（20・39）、須恵質甕（22）、瀬戸美濃系おろし皿（23）、陶器埦（45）、黒釉陶器壺（40）、備前壺（24）・甕（41）、青磁皿（42）・碗（25・43・44）、軒丸瓦（26・46）・垂木先瓦（27）・丸瓦・平瓦（47）、鉄釘（28～30）が出土した。特に、この内の土師質皿（31～33）・錬鉢



第12図　ＳＤ２出土遺物実測図

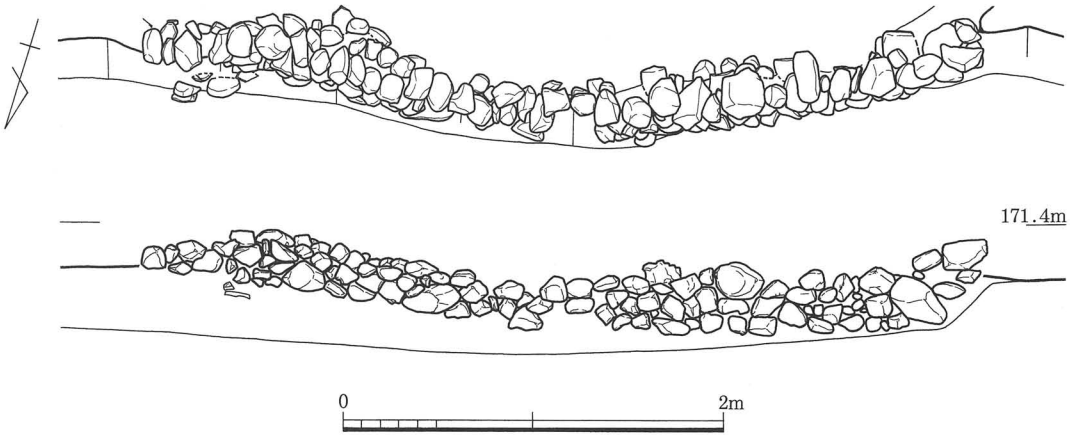


第13図　ＳＤ２▲地点出土遺物実測図

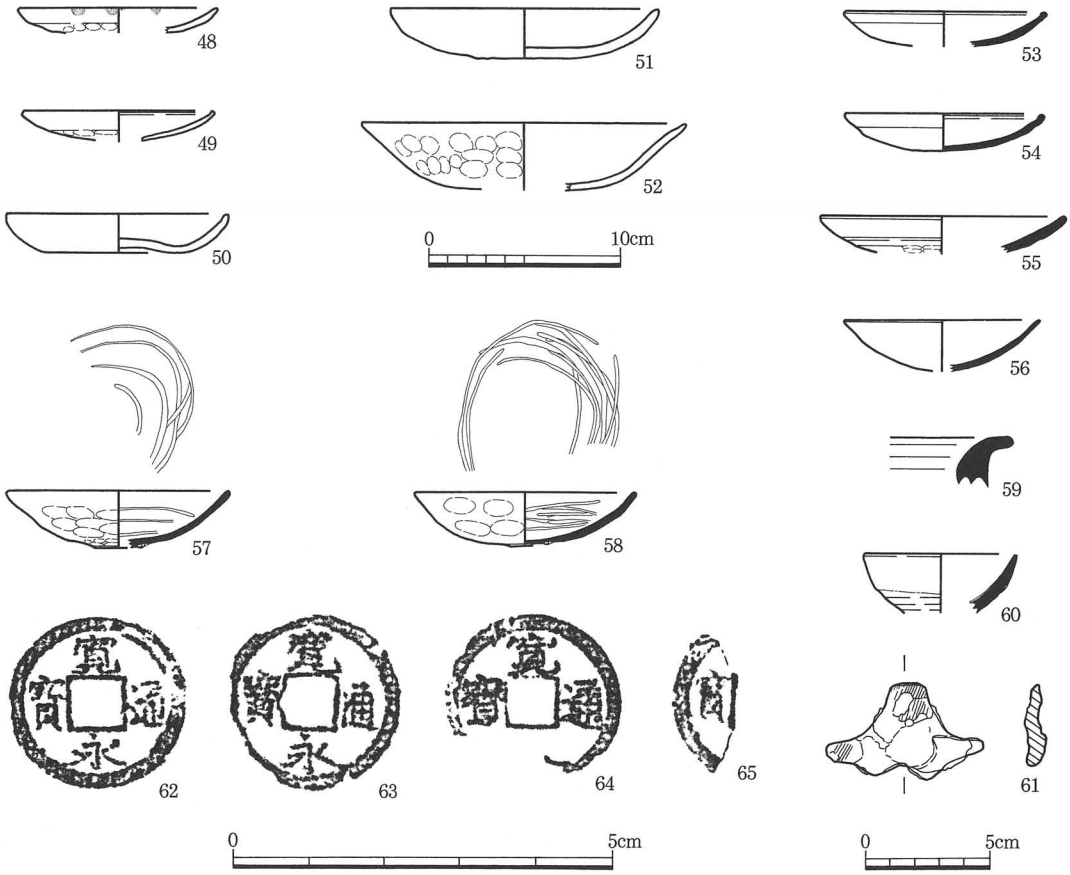
(34)、瓦質土釜（38）・擂鉢（35）・盤（36）・火鉢（37）・風炉（39）、陶器埦（45）、黒釉陶器壺（40）、備前甕（41）、青磁皿（42）・碗（43・44）、軒丸瓦（46）・平瓦（47）は、遺構の東側▲地点において、同時期に投棄されたとみられる状況で出土した一括資料である。

［ＳＤ３］（第14・15図、図版５・50）

ＳＤ３は調査区の南側に位置し、東西方向の主軸を持つ。遺構は東側の一部に北側へ派生する溝が付属し、西端も調査区外に及ぶため、詳細は不明であるが、用途はＳＤ１・２と同様、排水溝と考えられる。また遺構南側の中央部には河原石を１列に並べた石垣が付属し、東端は調査区の東側で実施した、ＫＧＴ92－２の調査で検出されたＳＤ２に連続す



第14図　ＳＤ３遺構実測図（1/40）



第15図　ＳＤ３出土遺物実測図

ることが、規模や主軸方向等から判明している。検出した規模は長さ9.7m、幅1.83m、深さ0.6m、石垣の長さ4.42m、高さ0.3mを測る。主軸方向はN－69°－Eである。

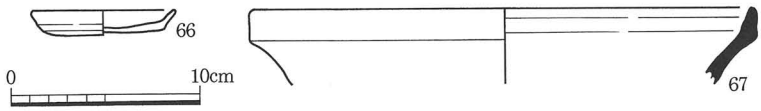
遺物は土師質灯明皿（48）・皿（49～52）、瓦器皿（53・54）・椀（55～58）、瓦質擂鉢・甕（59）、鉄釉陶器椀（60）、平瓦、不明鉄製品（61）、寛永通宝（初鋳1636年、62～65）が出土した。

また寛永通宝が、石垣の基部から出土したことから、近世に改修されたと考えられる。

(3)土坑

［ＳＫ１］（第16図、図版50）

ＳＫ１は調査区の北側、ＳＤ２の南側0.2mに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径0.75m、短径0.54m、深さ0.15mを測る。主軸方向はN－80°－Eである。埋土は10YR4/3にぶい黄褐色細砂混じり粘土（炭化物・土器片を多量に含む）であった。



第16図　ＳＫ１出土遺物実測図

遺物は土師質皿（66）、須恵質錬鉢（67）が出土した。

［ＳＫ２］

ＳＫ２は調査区の北側、ＳＫ１の南西0.3mに位置する。平面形は不定形を呈し、内部は加熱により赤変している。規模は長軸1.24m、短軸0.44m、深さ0.1mを測る。主軸方向はN－４°－Wである。埋土は10YR6/6明黄褐色細砂混じり粘土（炭化物・土器片・焼土塊を多量に含む）であった。

遺物は瓦質鉢が投棄されたと窺える状態で出土したが、細片のため図化できなかった。

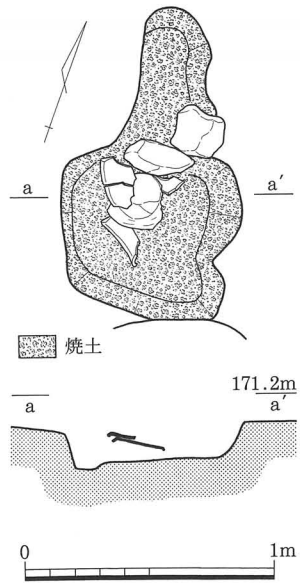
［ＳＫ３］

ＳＫ３は調査区の北側、ＳＫ２の東側0.2mに位置する。平面形は円形を呈し、内部は加熱により赤変している。規模は径0.4m、深さ0.12mを測る。埋土は10YR6/6明黄褐色細砂混じり粘土（炭化物・土器片を多量に含む）であった。

遺物は瓦器椀、瓦質甕が出土したが、細片のため図化できなかった。

［ＳＫ４］（第17図・図版６）

ＳＫ４は調査区の北側、ＳＫ３の南側0.5mに位置する。平面形は不定形を呈し、内部は加熱により赤変している。規模は長軸1.25m、短軸0.73m、深さ0.15mを測る。主軸方向はN－17°－Wである。埋土は10YR6/6明黄褐色細砂混じり粘土（炭化物・土器片を多量に含む）であった。

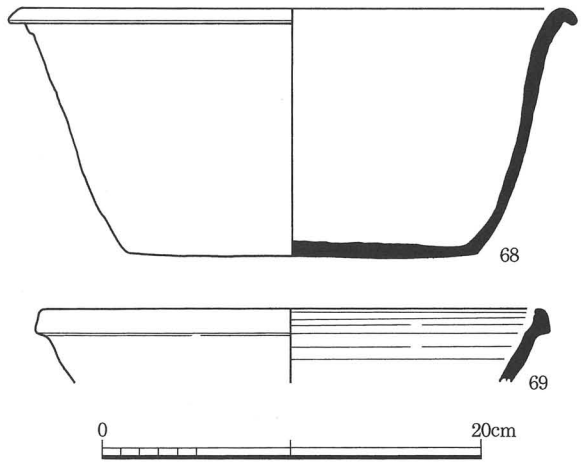


第17図　ＳＫ４
遺構実測図（1/30）

遺物は土師質皿、瓦質甕が出土したが、細片のため図化できなかった。

［ＳＫ５］（第18図、図版50）

ＳＫ５は調査区の北側、ＳＫ４の南側を一部切って位置する。平面形は隅丸方形を呈する。規模は長辺0.78m、短辺0.74m、深さ0.24mを測る。主軸方向はＮ－21°－Ｗである。埋土は10YR5/4にぶい黄褐色粗砂混じり細砂（炭化物・土器片を多量に含む）であった。



第18図　ＳＫ５・６出土遺物実測図

遺物は瓦器埦、瓦質甕・鉢（68）が出土した。

［ＳＫ６］（第18図）

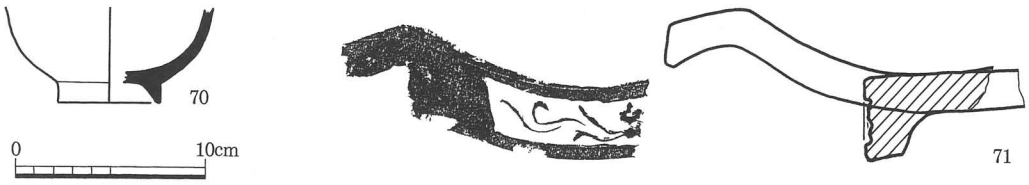
ＳＫ６は調査区の中央部、ＳＣ２に南側を一部切られ位置する。平面形は不定形を呈する。検出した規模は長軸3.72m、短軸2.03m、深さ0.18mを測る。主軸方向はＮ－18°－Ｗである。埋土は10YR5/4にぶい黄褐色粗砂混じり細砂（炭化物・土器片を多量に含む）であった。

遺物は土師質皿、瓦質甕、陶器甕、備前鉢（69）・甕が出土した。

［ＳＫ７］（第19図、図版50）

ＳＫ７は調査区の北側中央部に位置する。平面形は遺構の北側がＳＤ１に切られ、南側を撹乱に切られているが、不定形を呈することがわかる。検出した規模は長軸3.06m、短軸0.97m、深さ0.16mを測る。主軸方向はＮ－15°－Ｗである。埋土は10YR3/4暗褐色粗砂混じり細砂（炭化物・土器片を多量に含む）であった。

遺物は瀬戸美濃埦（70）、軒丸瓦・軒平瓦（71）・丸瓦・平瓦が出土した。



第19図　ＳＫ７出土遺物実測図

［ＳＫ８］

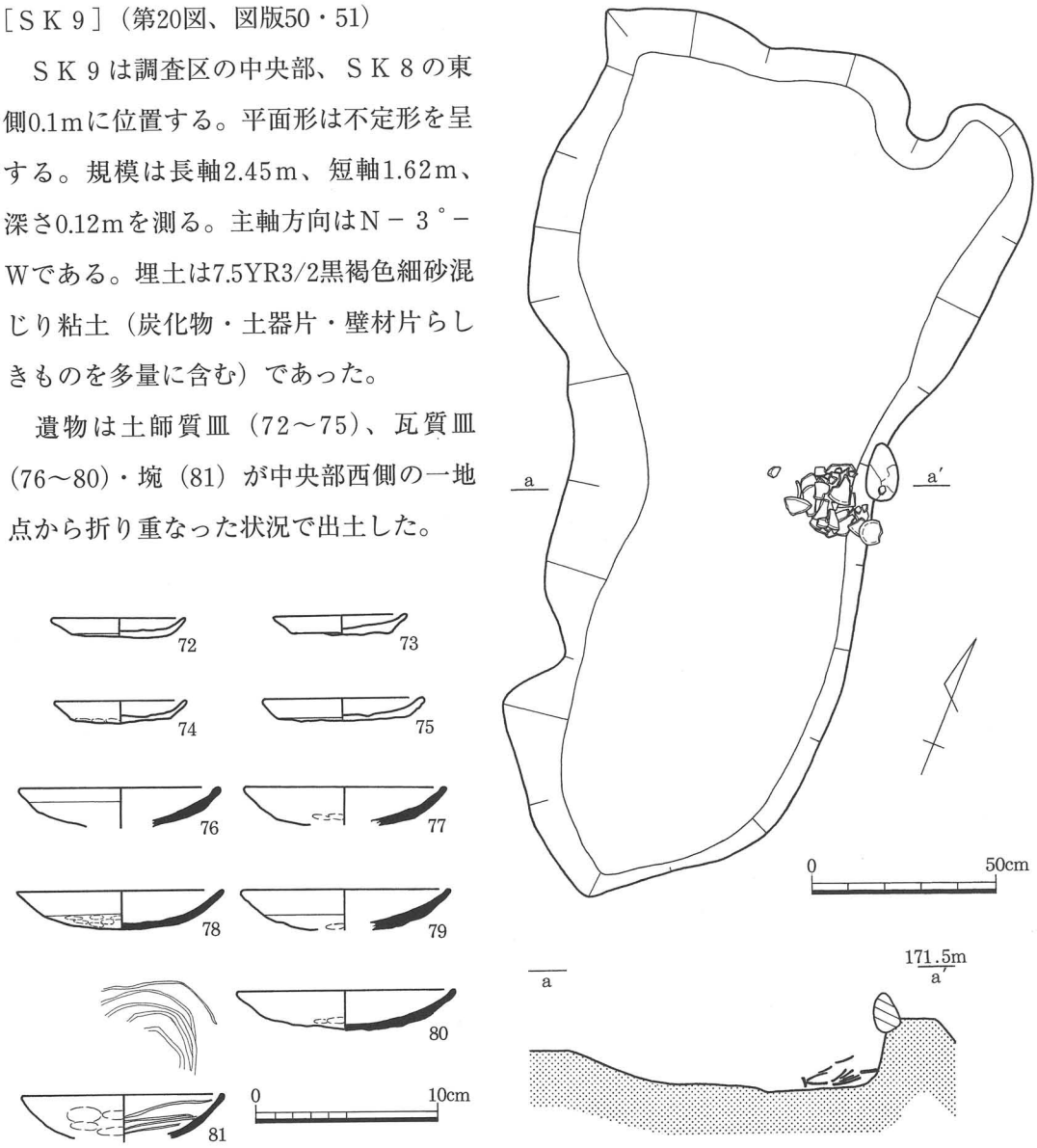
ＳＫ８は調査区の中央部、ＳＣ１の東側0.1mに位置する。平面形は遺構の南側がＳＤ３に切られているが、不定形を呈することがわかる。検出した規模は長軸3.54m、短軸1.42m、深さ0.17mを測る。主軸方向はＮ－２°－Ｗである。埋土は7.5YR3/2黒褐色細砂混じり粘土（炭化物・土器片・壁片らしきものを多量に含む）であった。

遺物は土師質皿、瓦器埦、瓦質甕、鉄滓が出土したが、細片のため図化できなかった。

［ＳＫ９］（第20図、図版50・51）

ＳＫ９は調査区の中央部、ＳＫ８の東側0.1ｍに位置する。平面形は不定形を呈する。規模は長軸2.45ｍ、短軸1.62ｍ、深さ0.12ｍを測る。主軸方向はＮ－３°－Ｗである。埋土は7.5YR3/2黒褐色細砂混じり粘土（炭化物・土器片・壁材片らしきものを多量に含む）であった。

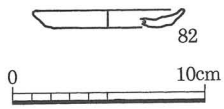
遺物は土師質皿（72～75）、瓦質皿（76～80）・椀（81）が中央部西側の一地点から折り重なった状況で出土した。



第20図　ＳＫ９遺構実測図（１/20）及び出土遺物実測図

［ＳK10］（第21図）

ＳK10は調査区の南側東部に位置する。平面形は不定形を呈し、内部西側は加熱により赤変している。検出した規模は長軸0.92ｍ、短軸0.52ｍ、深さ0.1ｍを測る。主軸方向はＮ－46°－Ｅである。埋土は10YR3/4暗褐色細砂混じり粘土（炭化物・土器片を多量に含む）であった。

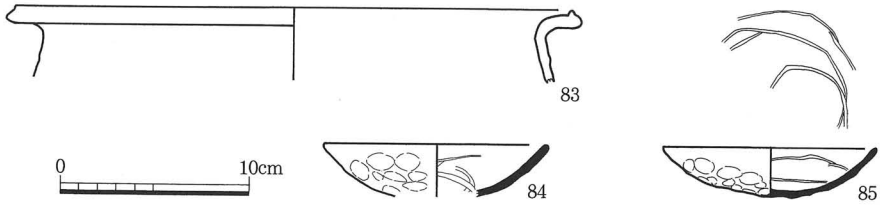


第21図　ＳK10 出土遺物実測図

遺物は土師質皿（82）、瓦器椀が出土した。

［ＳK11］（第22図、図版51）

ＳK11は調査区の南東角に位置する。平面形は遺構の東側と南側が調査区外に及ぶため、詳細は不明である。検出した規模は長軸2.15ｍ、短軸1.26ｍ、深さ0.35ｍを測る。遺構の北側には不規則な石列が伴い、遺構内部の西側からは加熱により赤変した建造物の壁材と



第22図　ＳＫ11出土遺物実測図

みられる塊が出土した。石列の石は最大40cm×22cm×15cmを測る。

遺物は土師質皿・紀伊型の土釜（83）、瓦器椀（84・85）が出土した。

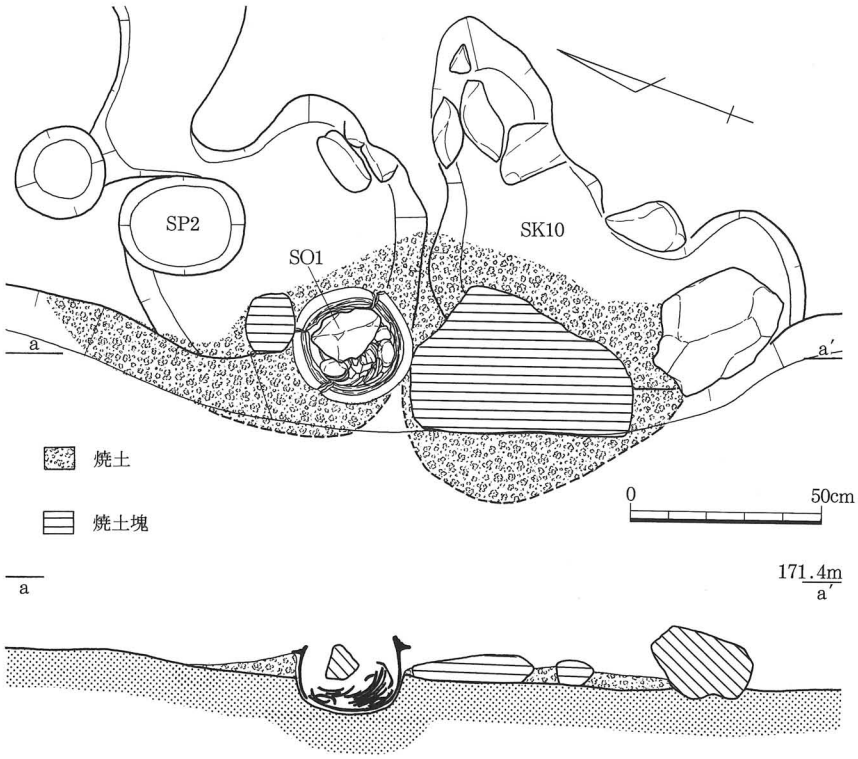
(4)土釜埋納遺構（土公供作法遺構）

［ＳＯ１］（第23・24図、図版６・７・51）

ＳＯ１は調査区の東側中央に位置する。遺構は掘形を伴い、ほぼ土釜の体部に沿った形状で検出された。掘形の平面形は円形を呈する。規模は径0.29ｍ、深さ0.1ｍを測る。遺構内部には瓦質土釜１点、その中に土師質皿34点、瓦質皿12点と最大19cm×13cm×９cmの石１点が納められていた。

遺物は、瓦質土釜（117）の中から土師質皿（86～104）、瓦質皿（105～116）が出土した。

またこのＳＯ１は1360年の兵火により成されたと考えられる焼土層上で検出されているが、この年は閏年であることと、瓦質皿が14世紀後半の尾谷分類２類に相当し、その出土点数が12点であることから、修法は1360年の翌年以降、14世紀後半の閏年以外の時期に行

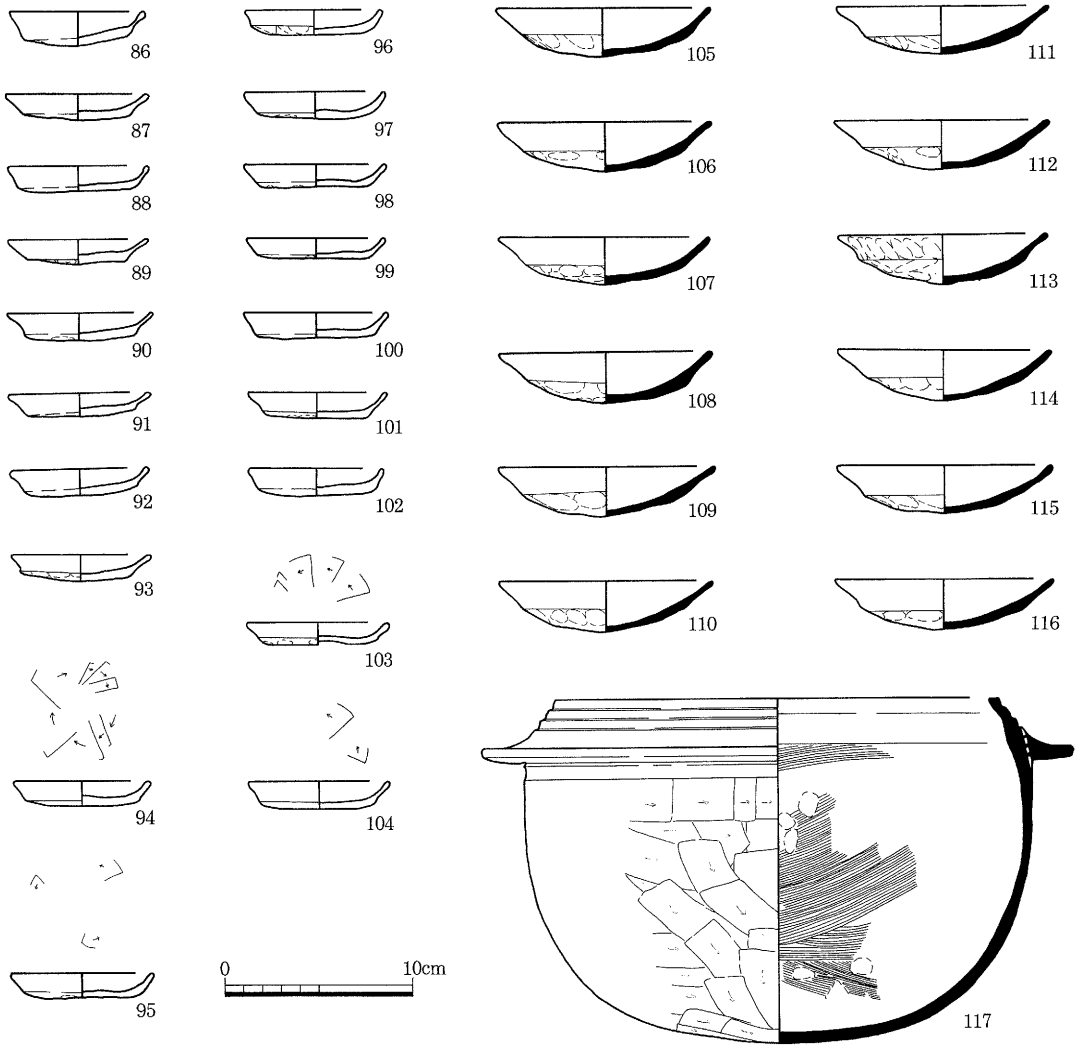


第23図　ＳＯ１遺構実測図（１/20）

われたことが考えられる[註1]。しかし、調査区内に建物が未検出であり、調査面積も狭小のため、周辺遺構との関連、またその修法の対象は不明である。

遺構の性格としては、真言宗の地鎮修法の作法である「地天供作法」、もしくは「土公供作法」に則り、修されたものと考えられる。その出土形態は、土釜の外面に二次焼成痕が認められないことや、共伴する土師質土器や瓦質土器の出土点数から、Ⅱ′類に相当するものと考えられる。更に、修法は瓦質皿の出土点数が12点であることから、修法に用意された幣串は12本、もしくは５本であったと推測される。この幣串は「十二天」、「12ヶ月を一年をとする月数」や、「五帝龍王」、「五智如来」の、依り代であったと思われる[註2]。

1991年度の調査時には、当時としては報告例も少なく、また遺構の性格も解明されていなかったこともあり、この遺構が下層遺構である炉跡と接して検出されたことで、『河内長野市史　第１巻（上）』や現地の発掘調査の案内板などには、炉跡「ＳＣ４」として遺構を命名し、標記して取り扱ってきた。しかし、その後の数々の報告例から、この遺構が炉とは関係が無く、誤認していたことが判明したため、平成12年(2000)から当該遺構を「ＳＯ１」と改名した。



第24図　ＳＯ１出土遺物実測図

(5)ピット

ＳＰ１からＳＰ３は調査年次である1991年度以降、『河内長野市史　第１巻（上)』や現地の発掘調査の案内板などにピット「Ｐ１・２・３」として、それぞれの遺構を命名し、標記して取り扱ってきた。しかし、本調査報告書では他の天野山金剛寺遺跡のピットの標記方法に従い、遺構名を「Ｐ」から「ＳＰ」に変更したが、遺構番号は変更していない。

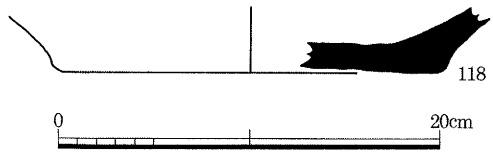
［ＳＰ１］

ＳＰ１は調査区の北側中央部に位置する。平面形は円形を呈する。規模は径0.32m、深さ0.06mを測る。

遺物は土師質皿、瓦器埦、瓦質鉢、陶器甕、平瓦が出土したが、細片のため図化できなかった。

［ＳＰ２］（第25図）

ＳＰ２は調査区の南側東部に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径0.33m、短径0.27m、深さ0.11mを測る。主軸方向はＮ－47°－Ｅである。



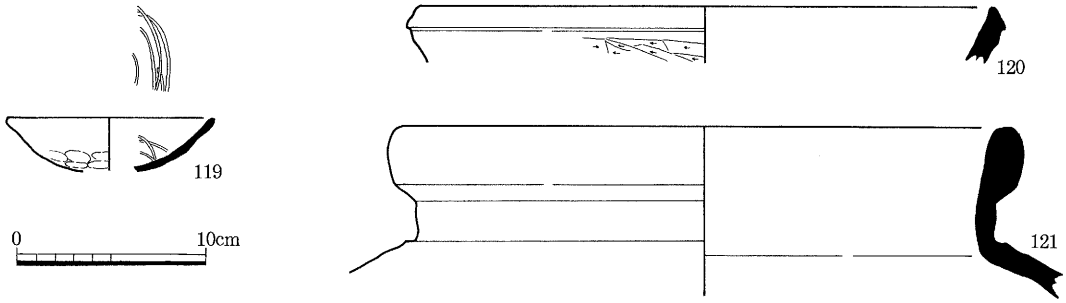
第25図　ＳＰ２出土遺物実測図

遺物は土師質皿、備前甕（118）が出土した。

［ＳＰ３］（第26図、図版52）

ＳＰ３は調査区の南側中央部に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径0.29m、短径0.18m、深さ0.03mを測る。主軸方向はＮ－22°－Ｗである。

遺物は瓦器埦（119）、瓦質錬鉢（120）、備前甕（121）が出土した。

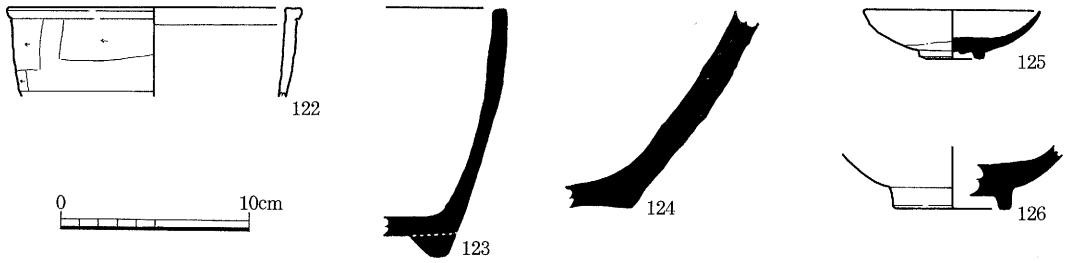


第26図　ＳＰ３出土遺物実測図

(6)石列

［ＳＷ２］（第27図、図版８・51）

ＳＷ２は調査区の北西部に位置する。平面形は遺構の北端・南端が調査区外に及ぶため、詳細は不明である。しかし、西側に面を持つ石列を主体に、その中央部が東側にコ字状に入り込んでいることなどから、この遺構は石垣と入口に相当するものと考えられる。検出した規模は長さ7.57m、築地塀の基礎の高さ0.6m、入口の間口3.1mを測る。主軸方向はＮ－14.5°－Ｗの南北軸を持ち、調査区の西側を流れる天野川(西除川)と平行している。



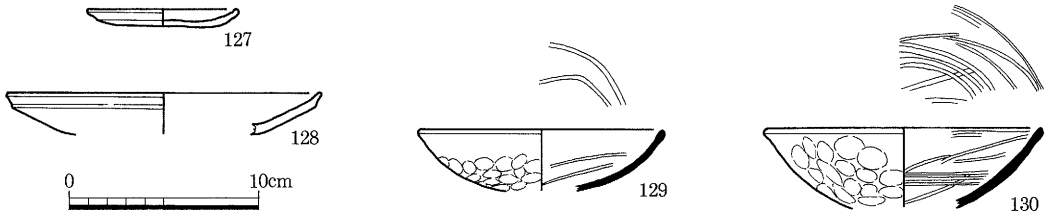
第27図　ＳＷ２出土遺物実測図

調査区周辺の様子を『河内名所図会』（1801年）（第172図）[註3]で参照したところ、当時天野川の東側には、護岸の石垣の東側に人が通れる通路があり、更にその東側に築地塀、また築地塀間にも門が描かれていることなどから、主体となる南北端の石列は築地塀の基礎で、東側にコの字状に入り込む部分は西側に開口部を持つ門跡、更に遺構の底部は通路であったことが考えられる。

遺物は土師質皿・鉢（122）、瓦器埦、瓦質擂鉢・風炉（123）、陶器小皿（125）・埦、備前甕（124）、青磁碗（126）、伊万里碗、丸瓦・平瓦が出土した。

(7)第１整地層（第28図、図版52）

遺物は土師質皿（127・128）、瓦器埦（129・130）が出土した。



第28図　第１整地層出土遺物実測図

(8)焼土層（第29図、図版52）

遺物は土師質皿（131～133）・火鉢（134）、瓦器皿（135・136）・埦（137～139）、鎬蓮弁青磁碗（140）、砥石（141）、垂木先瓦（142）・軒丸瓦（143）が出土した。

第４遺構検出面

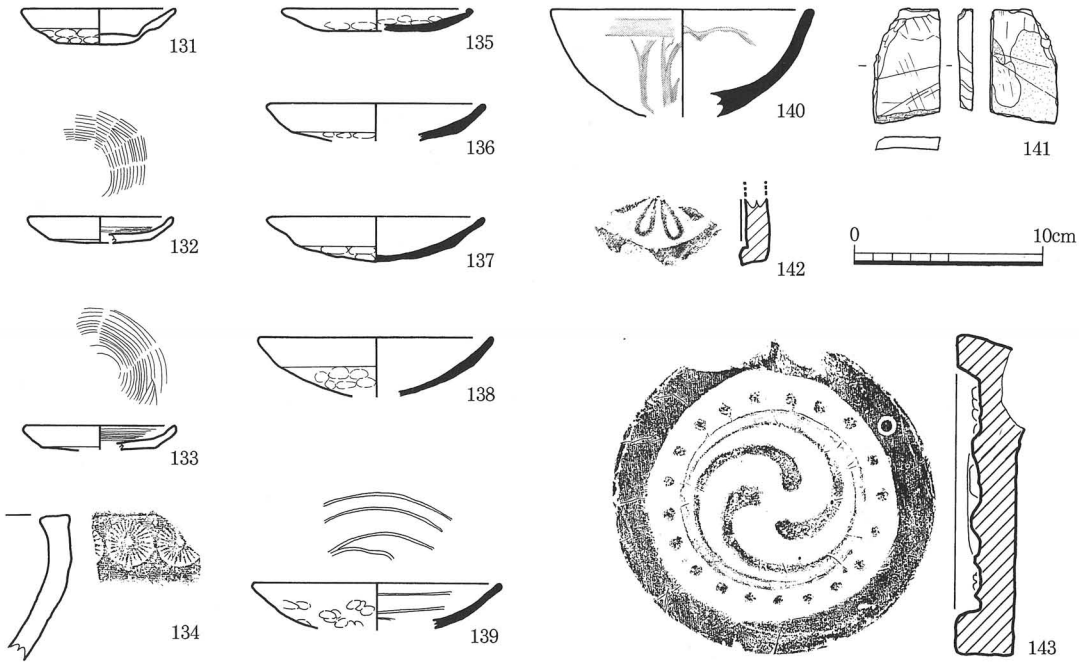
調査区の土層により、調査区全域において存在すると考えられるが、上部施設の掘削深度に至らず、保存上遺構面に影響がないため、発掘調査の対象とはしていない。

(1)第２整地層（第30図、図版52）

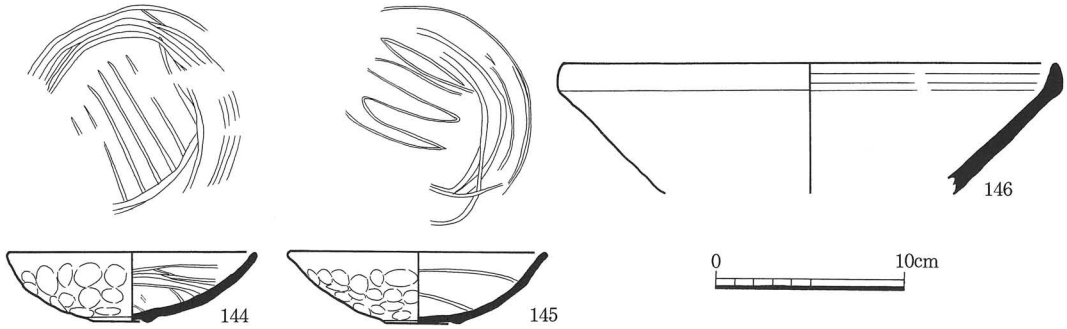
遺物は瓦器埦（144・145）、須恵質錬鉢（146）が出土した。

(2)包含層（第31・32図、図版52）

遺物は土師質皿（147・148）・灯明皿（149）、瓦器埦（150～152）、瓦質土釜・甕



第29図　焼土層出土遺物実測図



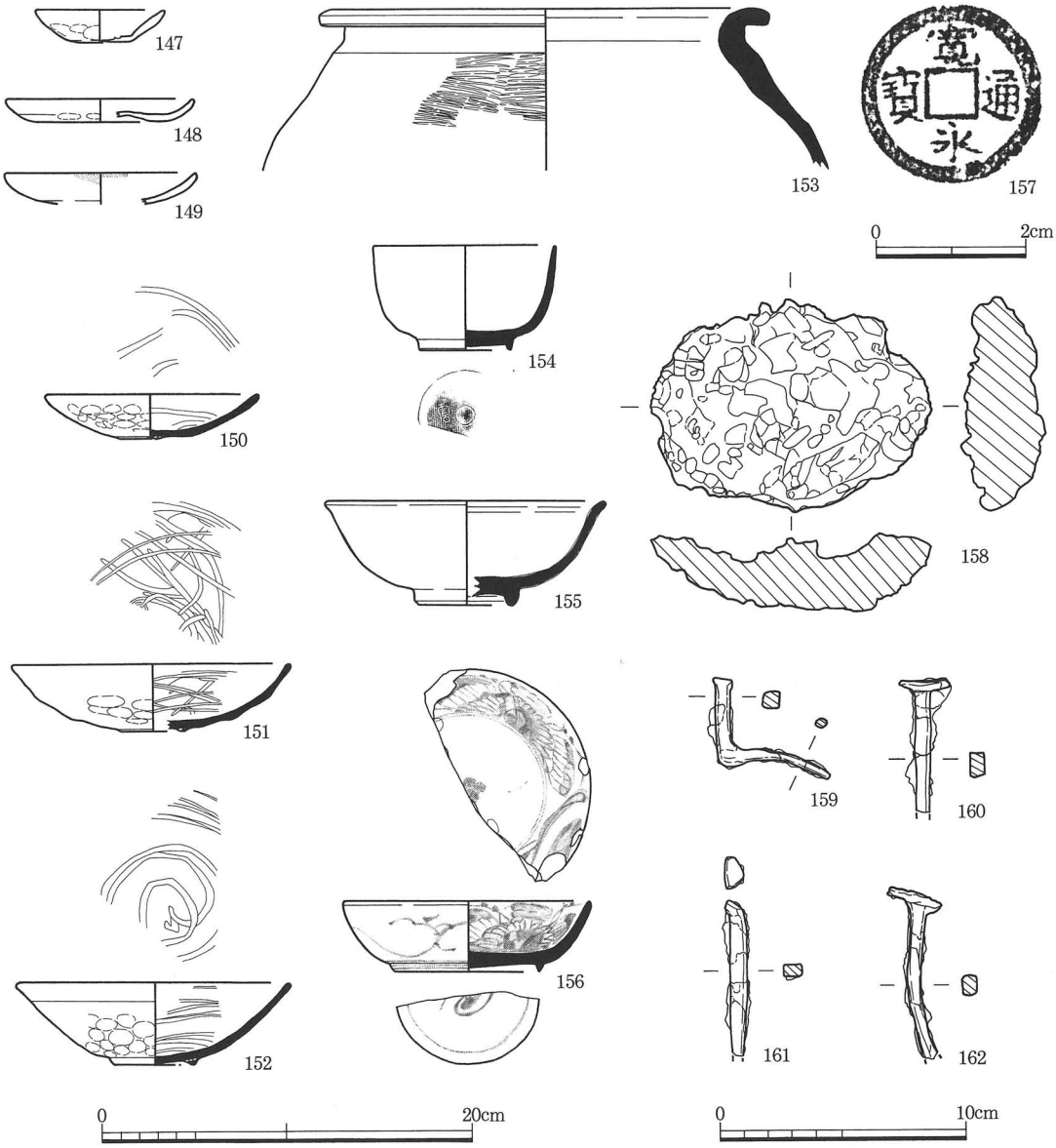
第30図　第２整地層出土遺物実測図

(153)、須恵質練鉢、瀬戸美濃系おろし皿、陶器埦（154)、常滑甕、青磁皿、青磁碗（155)、伊万里皿（156)、肥前系磁器碗、寛永通宝（初鋳1636年、157)、鉄滓（158)、鉄釘（159～162)、垂木先瓦（163)・軒丸瓦（164～167)・軒平瓦（169～171)・丸瓦（172～174)・鳥衾瓦（168）が出土した。

2　まとめ

調査の結果、瓦器埦を中心とする遺物の年代と、ＳＣ２などの炉が並び、土釜・擂鉢・練鉢・炮烙などの調理具や甕などの貯蔵具である生活雑器が、調査面積に比して多く出土し、またこれらの出土遺物の年代も14世紀を中心とすることから、検出した遺構は14世紀の厨房跡であると考えられる。

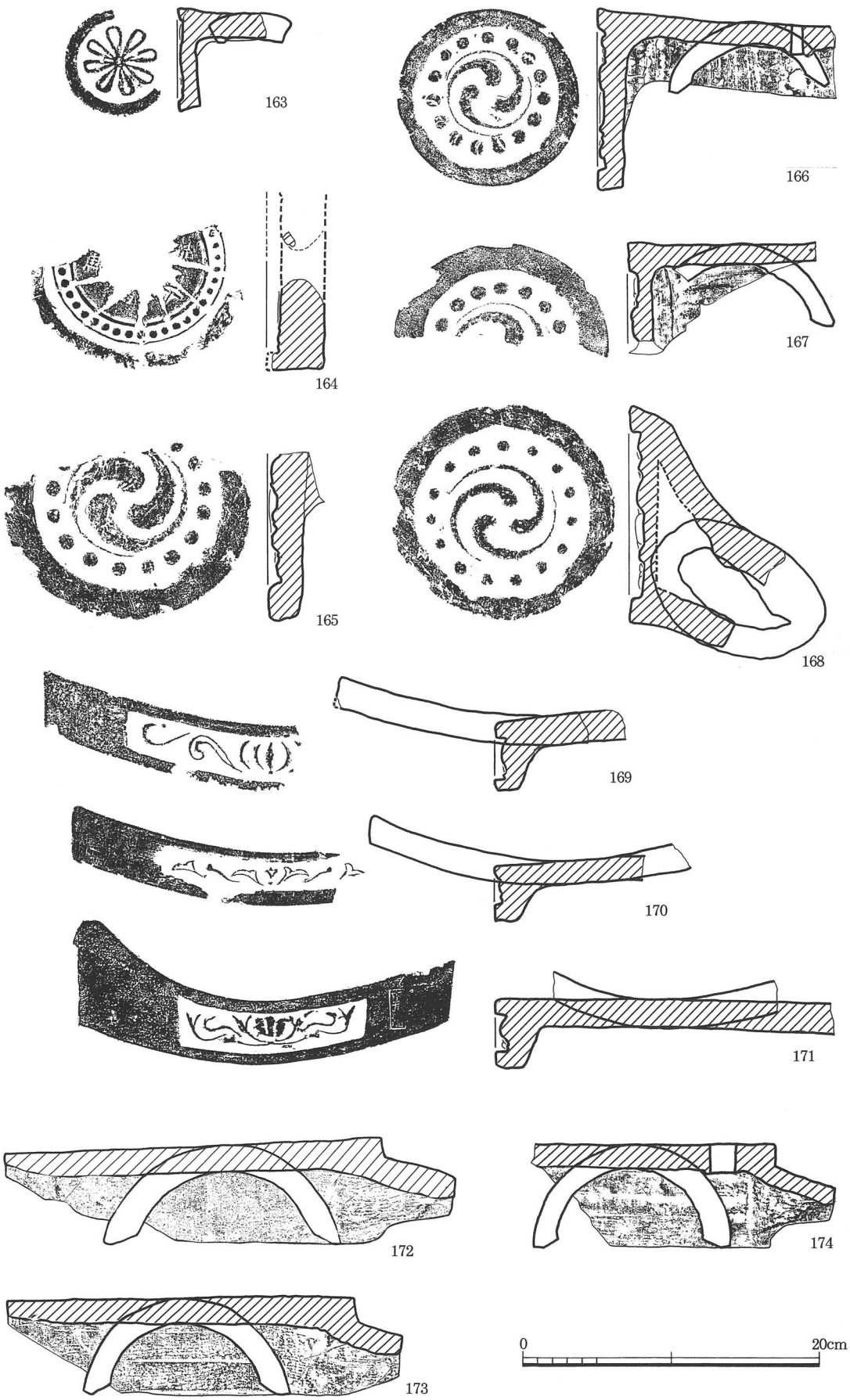
天野山金剛寺が兵火により坊舎などが焼失した時期は、建武４年・延元２年（1337）と延文５年・正平15年（1360）の二時期が文献上知られているが、今回検出した焼土層（㉟7.5YR3/2黒褐色細砂混じり粘土）は、層中に含まれる土器の年代から、14世紀中頃から



第31図　包含層出土遺物実測図（1）

後半のものとみられ、後者の時期の兵火によって形成された層である可能性が高い。したがって、その直下である第3遺構検出面層上（㊱10YR6/4にぶい橙色細砂混じり粘土）で検出した遺構も、その際に焼失し、焼土によって整地され廃絶されたものと考えられる。

調査地は『河内名所図会』（1801年）（第172図）では風呂屋と記されている付近に該当し、西側を流れる天野川の対岸には、中心伽藍の入口である楼門（重要文化財）があり、門を入ったところの北側すぐには食堂（じきどう）がある。食堂は僧侶の食事の場ではあるが、寺院生活に於いては僧侶が食事をとることも修行の1つであるため、堂内では一日二食の食事の度に食事作法を行い、経や真言・偈文（げもん）などを唱えるなど、古来より勤行を行っている。この様なことから食堂も仏堂であって、特に聖域とされる中心伽藍に配置されてはいるが、厨房は設けられていない。しかし、食堂で食される食事を調理する場所が食堂から離れては利便が悪いことなどからも、本次調査地で検出した遺構は、その様な伽藍内の食堂に最



第32図　包含層出土遺物実測図（２）

も近い伽藍外に立地し、各子院から集まった修行僧の食事や、中心伽藍で営まれる法要時の食事を調理するための厨房跡であったものと考えられる。

註１　『河内長野市遺跡調査報告Ⅷ　天野山金剛寺遺跡』　1994年３月　河内長野市遺跡調査会

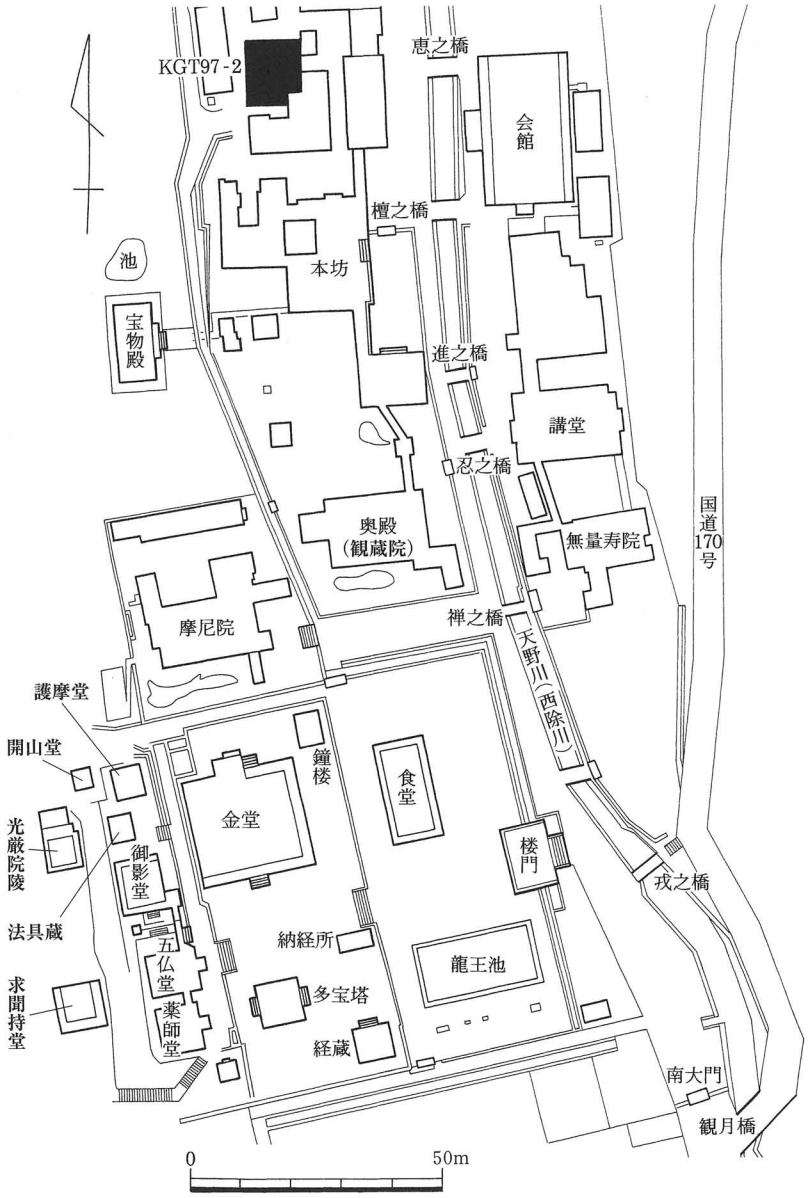
註２　『河内長野市遺跡調査報告ＸＸⅨ　天野山金剛寺遺跡』　2000年12月　河内長野市教育委員会・河内長野市遺跡調査会

註３　『河内長野市文化財調査報告書　第７輯　河内長野の古絵図』　1983年３月　河内長野市教育委員会

第3章　ＫＧＴ９７－２

第１節　調査に至る経過

本次調査は庫裏新築工事に伴い実施し、調査区は国史跡金剛寺境内に位置する。原因者は宗教法人天野山金剛寺であり、調査は平成９年10月２日から平成９年10月23日にかけて行った。調査地は天野山金剛寺の境内を、南から北へ流れる金剛岩湧山系を水源とする天野川(西除川)の左岸に位置し、伽藍の北側約130ｍに所在する。調査面積は約110㎡である。



第33図　調査区位置図（1/1500）

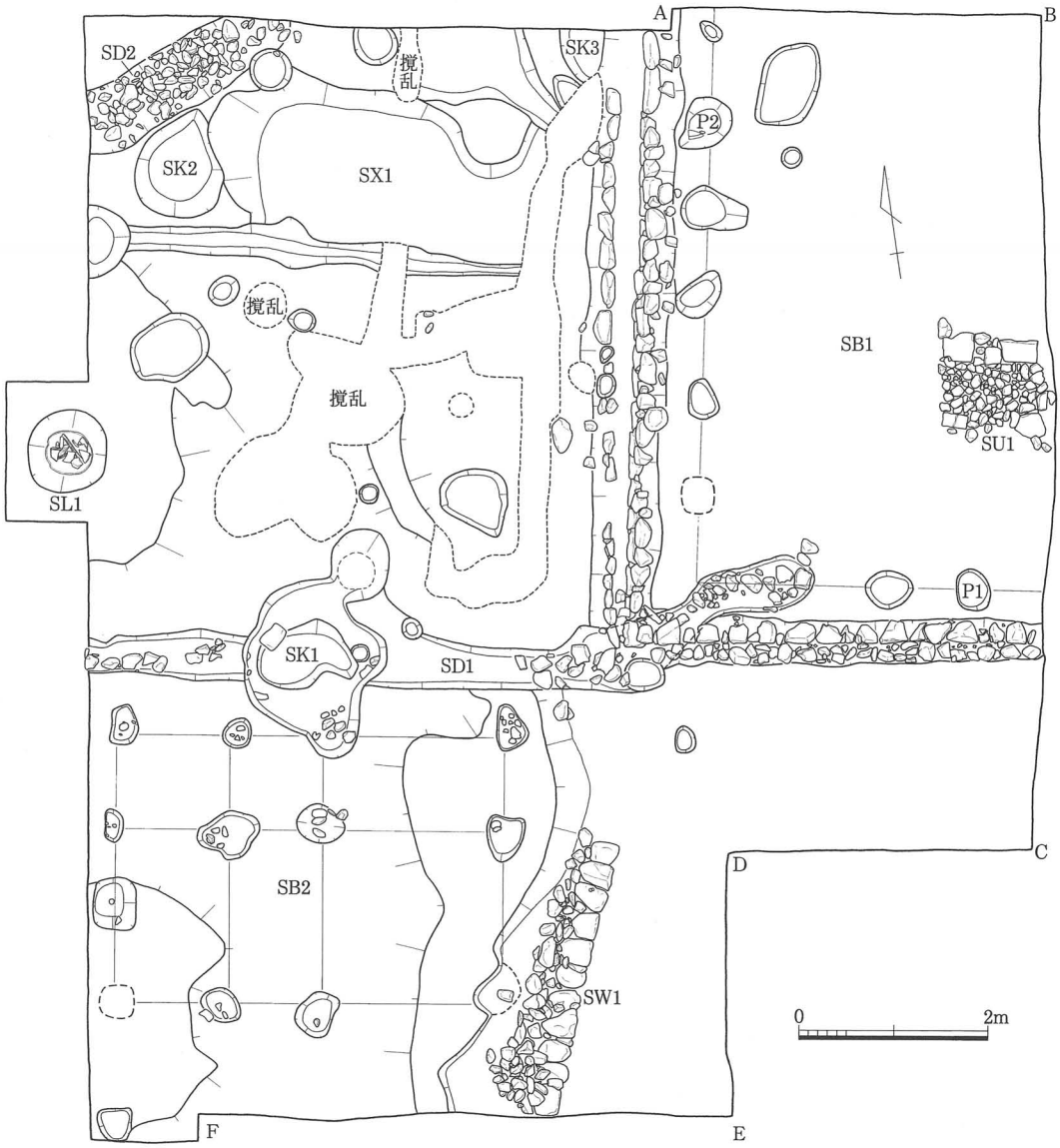
第２節　調査の結果

１　遺構と遺物

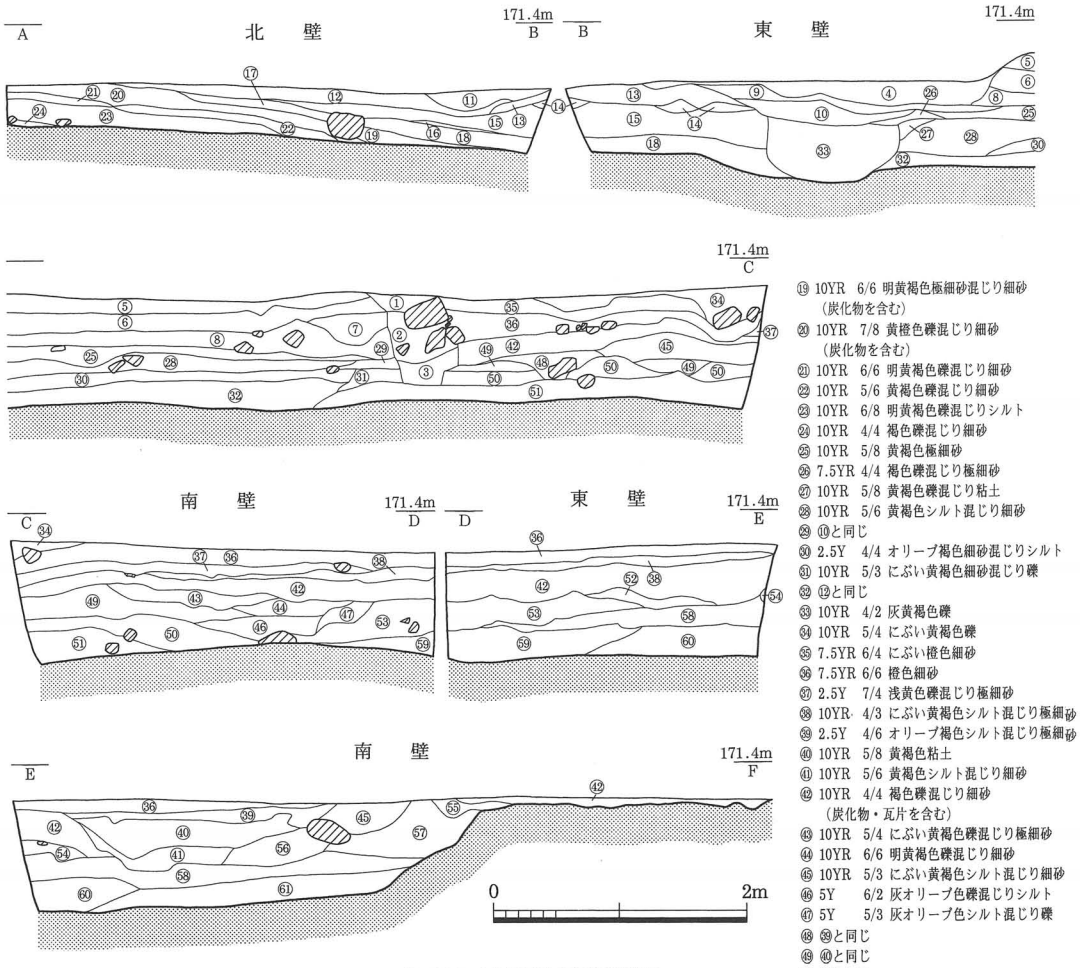
調査区の現地表面から表土を除去すると遺構面が検出された。検出した遺構には礎石建物、溝、土坑、甕埋納遺構、石敷遺構、石垣、落ち込みがあった。

基本層序は、10YR4/4褐色礫混じり細砂（層厚0.1m、表土）の一層であった。

また今回、検出遺構面の下から、石列の石の一部が露頭しているのが観察され、下層遺構の存在が確実視されたが、調査の掘削深度がこれらの遺構に至らず保存上影響がないため、発掘調査の対象としていない。（第34・35図）



第34図　遺構配置図（１/80）



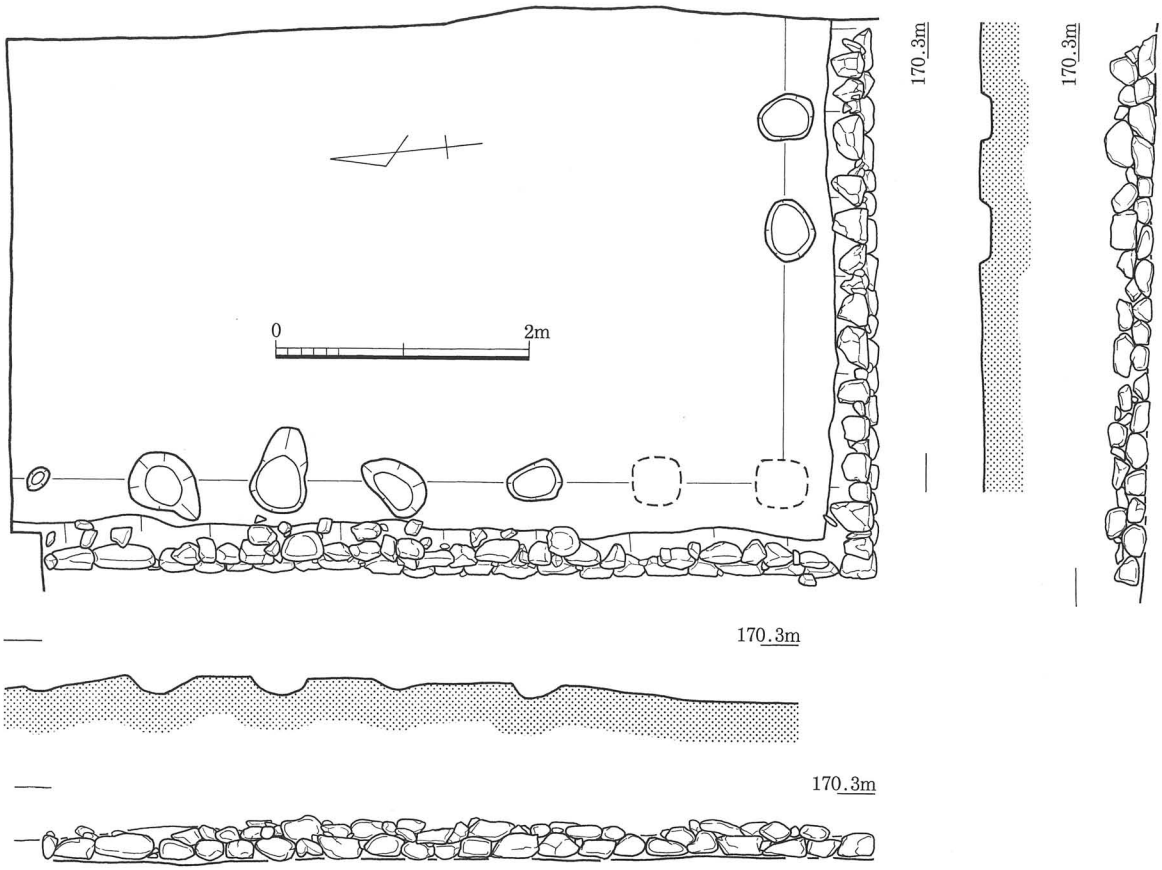
① 10YR　6/8 明黄褐色細砂混じり礫
② 10YR　6/6 明黄褐色極細砂
③ 10YR　3/3 暗褐色シルト混じり極細砂
④ 10YR　4/4 褐色礫混じり極細砂
⑤ 10YR　7/8 黄橙色礫混じりシルト
⑥ 10YR　5/8 黄褐色極細砂混じり礫
⑦ 7.5YR 4/4 褐色細砂混じり礫
（炭化物を含む）
⑧ 10YR　4/4 褐色礫混じり極細砂
（10YR 5/8 黄褐色ブロック土を含む）
⑨ 10YR　6/6 明黄褐色礫混じりシルト
⑩ 10YR　4/2 灰黄褐色礫混じり細砂
⑪ 10YR　6/6 明黄褐色礫混じり極細砂
（炭化物を含む）
⑫ 10YR　6/6 明黄褐色礫
⑬ 10YR　6/6 明黄褐色礫混じり細砂
⑭ 7.5YR 4/4 褐色礫混じり細砂
（炭化物を含む）
⑮ 10YR　5/8 黄褐色礫混じりシルト
⑯ 10YR　5/4 にぶい黄褐色礫混じり極細砂
⑰ 10YR　5/6 黄褐色礫混じり極細砂
⑱ 10YR　5/4 にぶい黄褐色シルト混じり細砂
（炭化物を含む）
⑲ 10YR　6/6 明黄褐色極細砂混じり細砂
（炭化物を含む）
⑳ 10YR　7/8 黄橙色礫混じり細砂
（炭化物を含む）
㉑ 10YR　6/6 明黄褐色礫混じり細砂
㉒ 10YR　5/6 黄褐色礫混じり細砂
㉓ 10YR　6/8 明黄褐色礫混じりシルト
㉔ 10YR　4/4 褐色礫混じり細砂
㉕ 10YR　5/8 黄褐色極細砂
㉖ 7.5YR 4/4 褐色礫混じり極細砂
㉗ 10YR　5/8 黄褐色礫混じり粘土
㉘ 10YR　5/6 黄褐色シルト混じり細砂
㉙ ⑩と同じ
㉚ 2.5Y　4/4 オリーブ褐色細砂混じりシルト
㉛ 10YR　5/3 にぶい黄褐色細砂混じり礫
㉜ ⑫と同じ
㉝ 10YR　4/2 灰黄褐色礫
㉞ 10YR　5/4 にぶい黄褐色礫
㉟ 7.5YR 6/4 にぶい橙色細砂
㊱ 7.5YR 6/6 橙色細砂
㊲ 2.5Y　7/4 浅黄色礫混じり極細砂
㊳ 10YR　4/3 にぶい黄褐色シルト混じり極細砂
㊴ 2.5Y　4/6 オリーブ褐色シルト混じり極細砂
㊵ 10YR　5/8 黄褐色粘土
㊶ 10YR　5/6 黄褐色シルト混じり細砂
㊷ 10YR　4/4 褐色礫混じり細砂
（炭化物・瓦片を含む）
㊸ 10YR　5/4 にぶい黄褐色礫混じり極細砂
㊹ 10YR　6/6 明黄褐色礫混じり細砂
㊺ 10YR　5/3 にぶい黄褐色シルト混じり細砂
㊻ 5Y　6/2 灰オリーブ色礫混じりシルト
㊼ 5Y　5/3 灰オリーブ色シルト混じり礫
㊽ ㊳と同じ
㊾ ㊵と同じ
㊿ ㊶と同じ
(51) ㊳と同じ
(52) 10YR　5/8 黄褐色礫混じり極細砂
(53) 2.5Y　6/8 明黄褐色礫混じり細砂
(54) ㊲と同じ
(55) 2.5Y　6/3 にぶい黄色礫混じり細砂
(56) 10YR　5/6 黄褐色礫混じりシルト
(57) 10YR　4/4 褐色礫混じり極細砂(焼土層)
(58) 2.5Y　3/3 暗オリーブ褐色シルト混じり細砂
(59) 10YR　3/4 暗褐色礫混じりシルト
(60) 10YR　5/3 にぶい黄褐色細砂混じり極細砂
(61) 2.5Y　5/3 黄褐色シルト混じり細砂

第35図　調査区土層断面実測図（1/60）

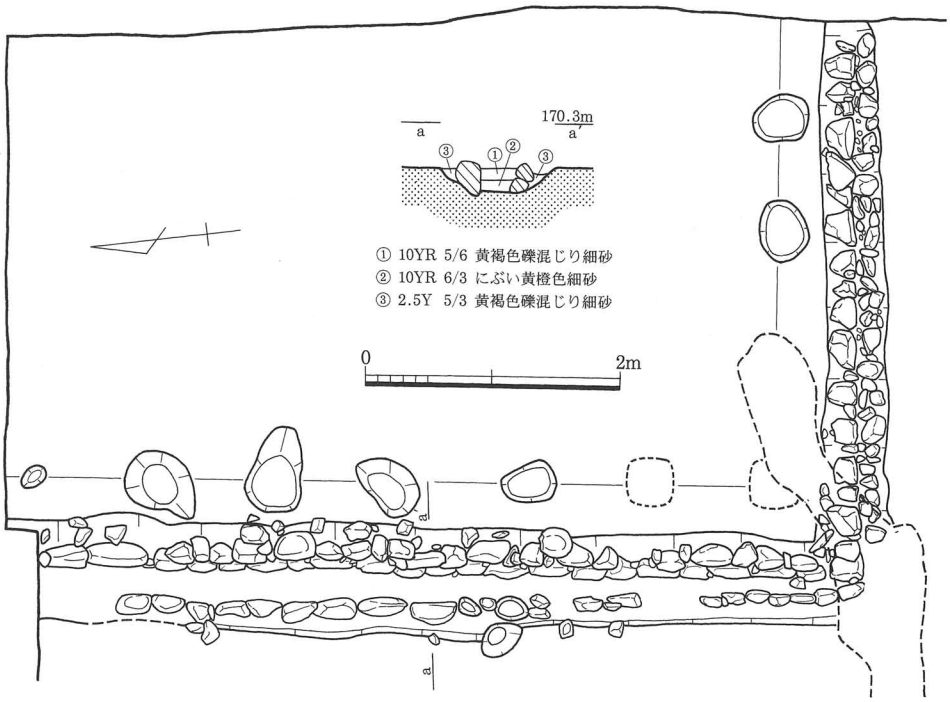
(1)礎石建物

［ＳＢ１］（第36～38図、図版10～12）

ＳＢ１は調査区の北東隅に位置する。建物の北側・東側は調査区外に及び、南西隅の柱穴も、ＳＤ１に切られているため、詳細は不明である。建物の構造は礎石建物で、柱穴の検出状況から、礎石が抜き取られた跡が観察できた。検出した規模は、桁行７間（6.12m）、梁行３間（3.67m）、柱間は桁行0.42～0.7m、梁行0.47mである。礎石の抜き取り穴の平面形は、円形・楕円形・不定形があり、その規模は径0.21～0.69m、深さ0.07～0.15mを測る。建物の主軸方向はＮ－４°－Ｅである。また、建物の西側・南側には石垣が検出され、建物は基壇を伴っていたことが確認された。石垣に用いられた石は、外面に対して、石の面を揃えて並べられ、最高２段に積まれている。石の規模は、最大49cm×21cm×20cmを測る。

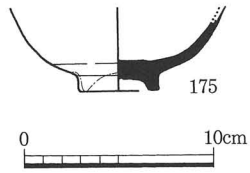


第36図　ＳＢ１（第１次）遺構実測図（１/60）



第37図　ＳＢ１（第２次）遺構実測図（１/60）

そして、層序や遺構の構造からは、後世には基壇の西側に、対となる石列が設けられ、溝としての機能が付加されたことが確認できた。西側石列の石は、基壇の西面の石と揃う様に河原石が用いられ、その規模は最大36cm×20cm×10cmを測る。また、建物南側の造成時に低地を埋めた際、基壇に接して新たに石列が加えられ、暗渠としての機能に改変されたことが窺えた。南側の暗渠に用いられた石は、最大21cm×15cm×10cmを測る。



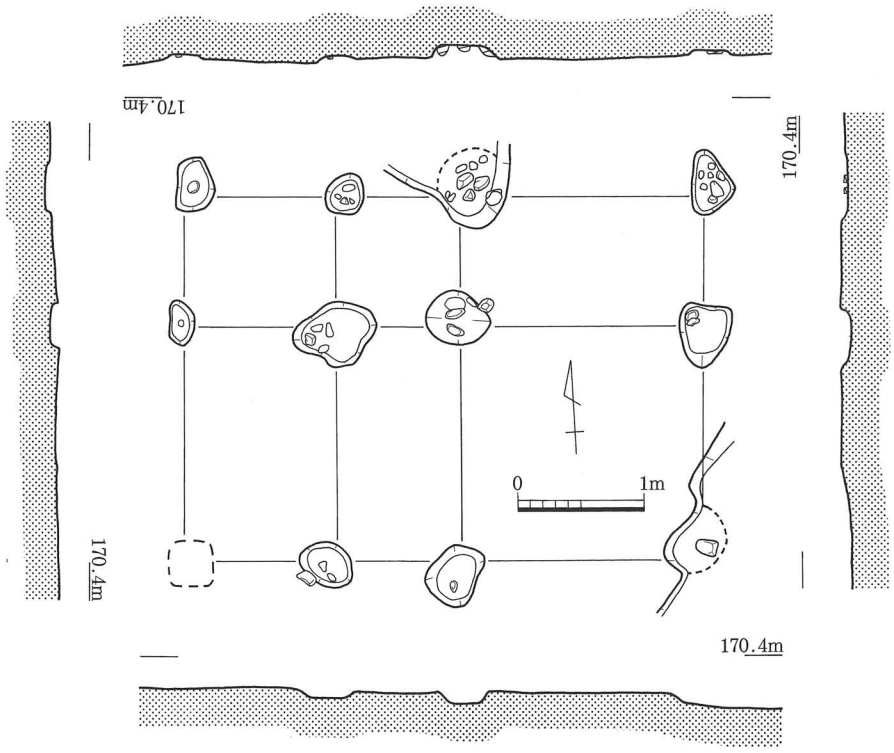
第38図　ＳＢ１
出土遺物実測図

遺物は柱穴Ｐ１から瓦の細片、柱穴Ｐ２から陶磁器、暗渠から唐津埦（175）、瓦が出土した。

［ＳＢ２］（第39図、図版10）

ＳＢ２は調査区の南西隅に位置する。建物の南側と西側は調査区外に延びる可能性がある。建物の構造は礎石建物であるが、柱穴の検出状況から礎石は抜き取られ、礎石の根石の一部が検出された。検出した規模は、梁行２間（2.83m）、桁行３間（4.11m）、柱間は梁行１～1.83m、桁行0.99～1.92m、礎石の抜き取り穴の平面形は円形・楕円形・不定形があり、その規模は径0.19～0.66m、深さ0.05～0.16mを測る。建物の主軸方向はＮ－87.5°－Ｗである。

遺物は出土しなかった。



第39図　ＳＢ２遺構実測図（１/60）

(2)溝

［ＳＤ１］

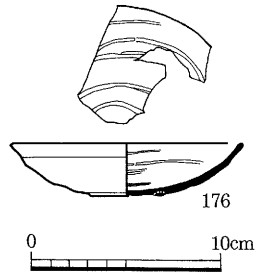
ＳＤ１は調査区中央部に位置する。遺構は東西方向の主軸方向を持つ。平面形は遺構の東側がＳＢ１の南西隅の溝と暗渠を切って基壇にまで及ぶことを確認したが、西側が調査区外に及ぶため、詳細は不明である。遺構の内部に若干の石が確認されたことから、構築当初、その機能は暗渠であったことが考えられる。検出した規模は長さ8.0ｍ、幅0.68ｍ、深さ0.05ｍを測る。主軸方向はＮ－87.5°－Ｗである。埋土は10YR4/4褐色礫混じり細砂であった。

遺物は瓦が出土したが、細片のため図化できなかった。。

［ＳＤ２］（第40図、図版53）

ＳＤ２は調査区の北西隅に位置する。遺構は北東方向の主軸方向を持つが、平面形は遺構の北端・西端が調査区外に及ぶため、詳細は不明である。遺構の内部には石が詰められていることから、その機能は暗渠であったことが考えられる。検出した規模は長さ2.3ｍ、幅0.73ｍ、深さ0.04ｍを測る。暗渠の石は最大22cm×15cm×14cmの河原石が用いられていた。主軸方向はＮ－60°－Ｅである。

遺物は瓦器埦（176）、瓦、鉄釘が出土した。



第40図　ＳＤ２出土遺物実測図

(3)土坑

［ＳＫ１］

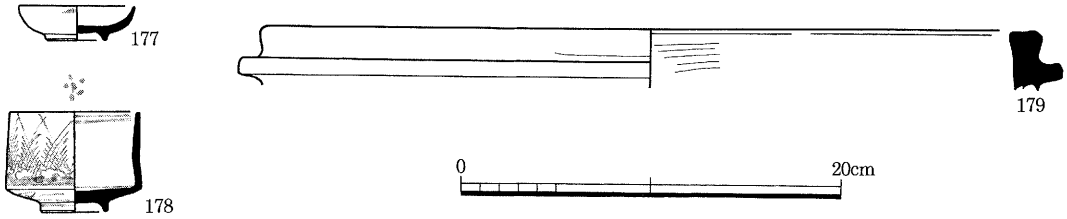
ＳＫ１は調査区中央部西側に位置し、ＳＤ１と重複している。平面形は不定形を呈する。規模は長軸1.07ｍ、短軸0.74ｍ、深さ0.16ｍを測る。埋土は10YR5/2灰黄褐色細砂混じり礫であった。

遺物は瓦が出土したが、細片のため図化できなかった。

［ＳＫ２］（第41図）

ＳＫ２は調査区の北西隅、ＳＤ２に近接し位置する。平面形は遺構の東側が後述するＳＸ１に切られているが、不定形を呈することがわかる。検出した規模は長軸1.18ｍ、短軸0.93ｍ、深さ0.12ｍを測る。埋土は10YR5/3にぶい黄褐色礫混じり細砂であった。

遺物は瓦質土器、肥前系磁器小碗（177）・筒型碗（178）、瓦が出土した。



第41図　ＳＫ２・３出土遺物実測図

［ＳＫ３］（第41図）

ＳＫ３は調査区の北端、ＳＢ１の西側に近接し位置する。平面形は東側がＳＢ１の西側の溝に切られ、北側も調査区外に及ぶため、詳細は不明である。検出した規模は南北長0.51m、東西長0.43m、深さ0.12mを測る。

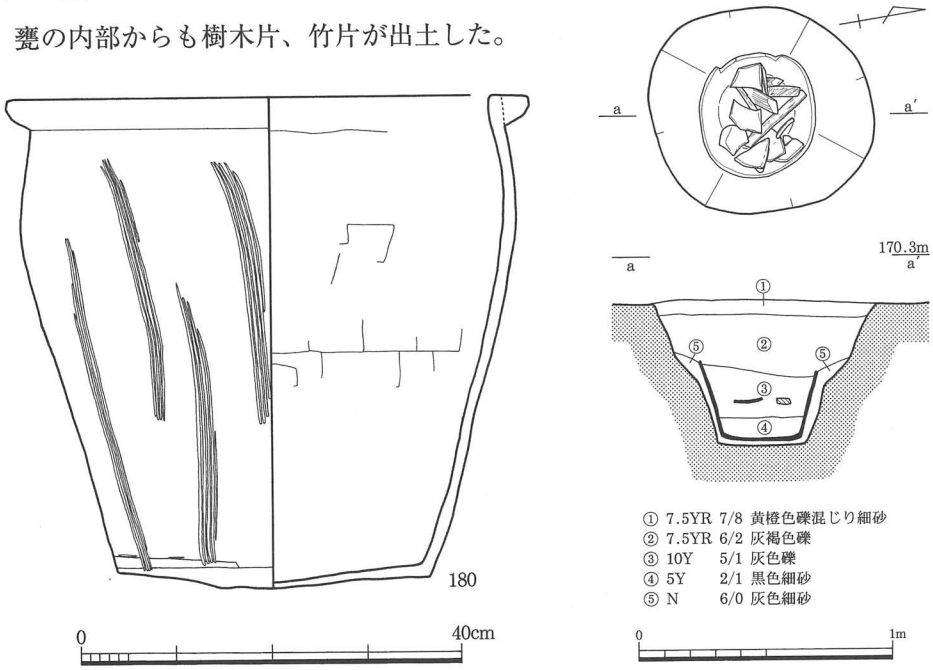
遺物は瓦質土釜（179）、瓦が出土した。

(4)甕埋納遺構

［ＳＬ１］（第42図、図版13）

ＳＬ１は調査区の西端、ＳＤ１の北側1.5mに位置する。遺構は掘形を持ち、掘形の平面形は楕円形を呈する。遺構の規模は長径0.91m、短径0.82m、深さ0.57mを測る。

遺物は遺構内部に納められた土師質甕（180）以外に、甕の内部からも樹木片、竹片が出土した。



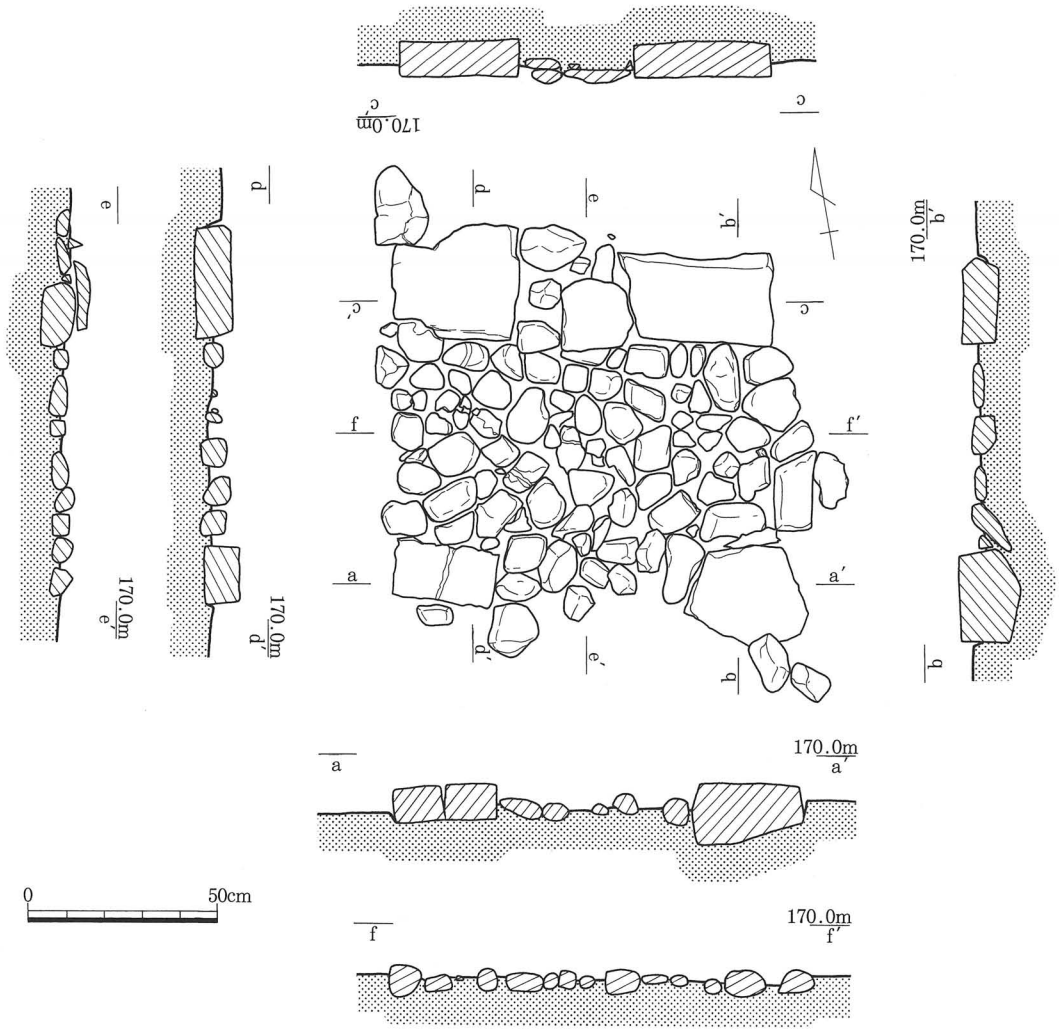
第42図　ＳＬ１遺構実測図（1/30）及び出土遺物実測図

(5)石敷遺構

［ＳＵ１］（第43・44図、図版13・53）

ＳＵ１は調査区の東端に位置する。平面形はやや歪な長方形を呈する。規模は長辺1.1m、短辺１m、また建物が存在したとすれば、東西の柱間は北側の列0.7m、南側の列0.8m、四隅の石の深さ0.14mを測る。遺構は上からみると方形に近い形状で、特に上面の四隅に平坦面を持つ石を据え、これらの石を囲んだ範囲に河原石を敷設している。隅石は花崗岩で最大37cm×20cm×10cm、河原石は最大18cm×10cm×６cmを測る。

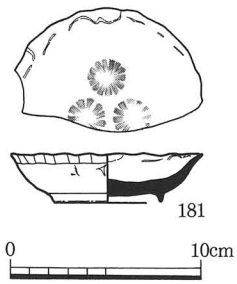
四隅の石の上部が、四隅とも水平面を保ち構築されていることから、礎石の様な機能を持つことも考えられ、上部に小規模な構造物があった可能性がある。また検出位置がＳＢ１内であり、主軸方向も近似していることから、ＳＢ１と関連のある遺構であると考えた



第43図　ＳＵ１遺構実測図（1/20）

場合、土間に設けられた屋内施設の可能性もある。

遺物は瓦質土器、青磁皿（181）、瓦が出土した。

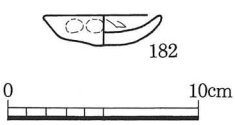


第44図　ＳＵ１
出土遺物実測図

(6)石垣

［ＳＷ１］（第45図）

ＳＷ１は調査区の南側、ＳＢ２の東側に近接し位置する。平面形は当初北端に石垣の延長部分が存在したと考えられるが、南端が調査区外に及ぶため、詳細は不明である。検出した規模は長さ2.97m、石垣の高さ0.08mを測る。主軸方向はＮ－16°－Ｅである。また遺構はＳＢ２の東側が低地であることから、東縁部の保護のために構築された東側に面を持つ石垣であると考えられる。石垣に用いられた石は、最大37cm×31cm×10cmを測り、１段のみで並んでいるのが確認された。裏込めにはこぶし大前後の石が詰められ、石は最大22cm×18cm×15cmを測る。



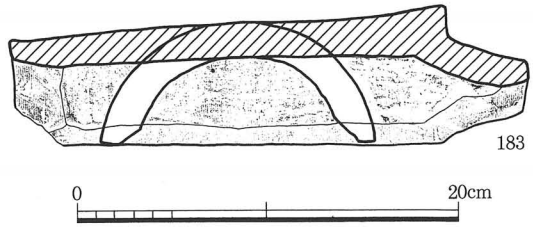
第45図　ＳＷ１
出土遺物実測図

遺物は土師質皿（182）、瓦が出土した。

(7)落ち込み

［ＳＸ１］（第46図）

ＳＸ１は調査区の北部西側に位置する。平面形は遺構の東側が撹乱によって削平され、周辺も幾つかの遺構によって切られているが、不定形を呈することがわかる。検出した規模は南北長1.75m、東西長3.54m、深さ0.14mを測る。埋土は10YR6/3にぶい黄橙色細砂であった。



第46図　ＳＸ１出土遺物実測図

遺物は土師質土器、瓦器、丸瓦（183）が出土した。

(8)包含層・側溝（第47・48図、図版53）

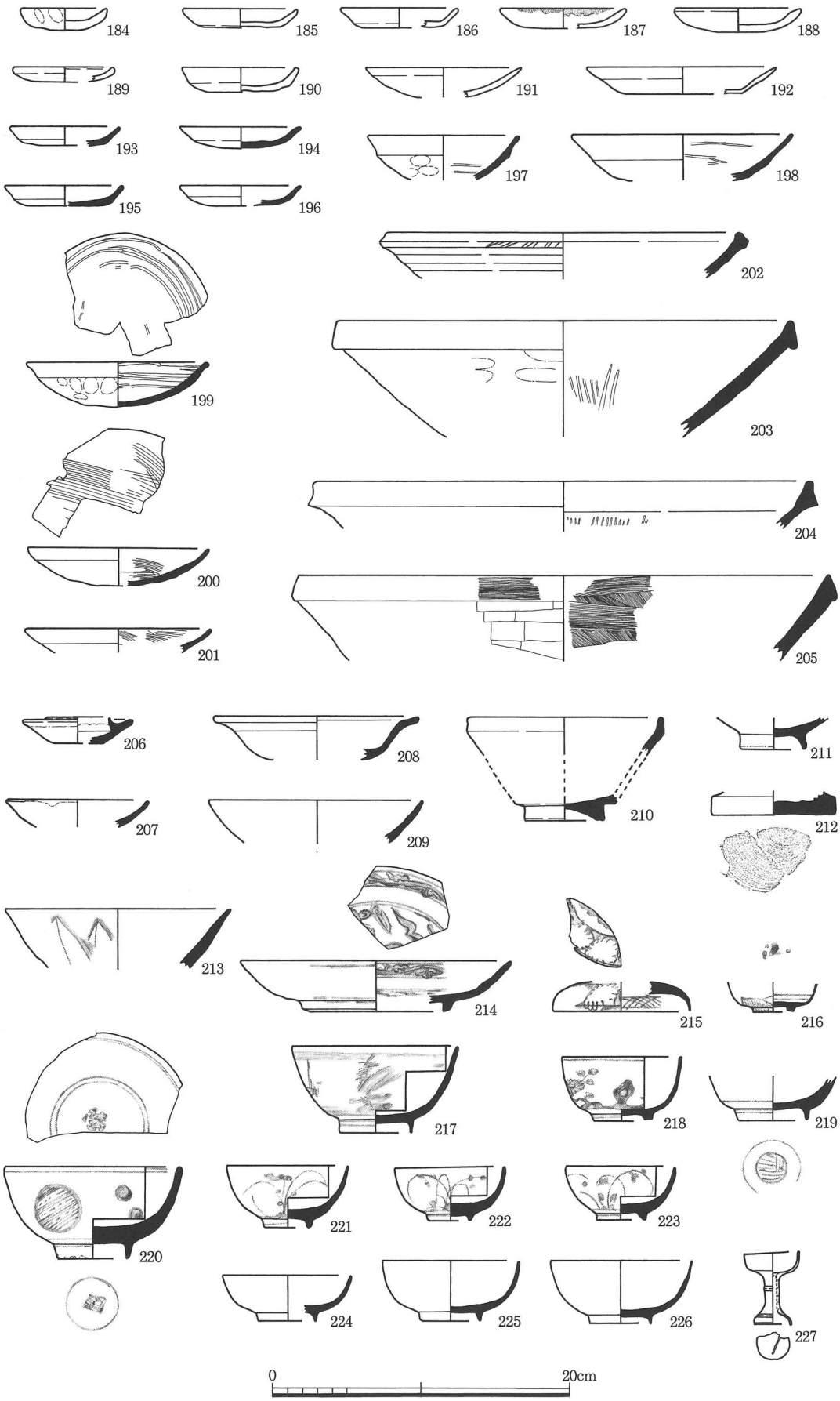
遺物は土師質皿（184～192）、瓦器皿（193～196）・埦（197～199）、瓦質皿（200・201）・擂鉢（203・205）、須恵質擂鉢（202・204）、信楽系灰釉灯明受皿（206）、柿釉灯明皿（207）、瀬戸美濃系皿（208）・埦（211）、唐津埦（209）、天目茶埦（210）、陶器花瓶（212）、鎬蓮弁青磁碗（213）、肥前系磁器皿（214）・蓋（215）・碗（217～223）、磁器小坏（216）・碗（224～226）、銅製仏飯器（227）、軒丸瓦（228・229）・軒平瓦（230）・平瓦（231）、刀子（232・233）・鉄釘（234～237）が出土した。

2　まとめ

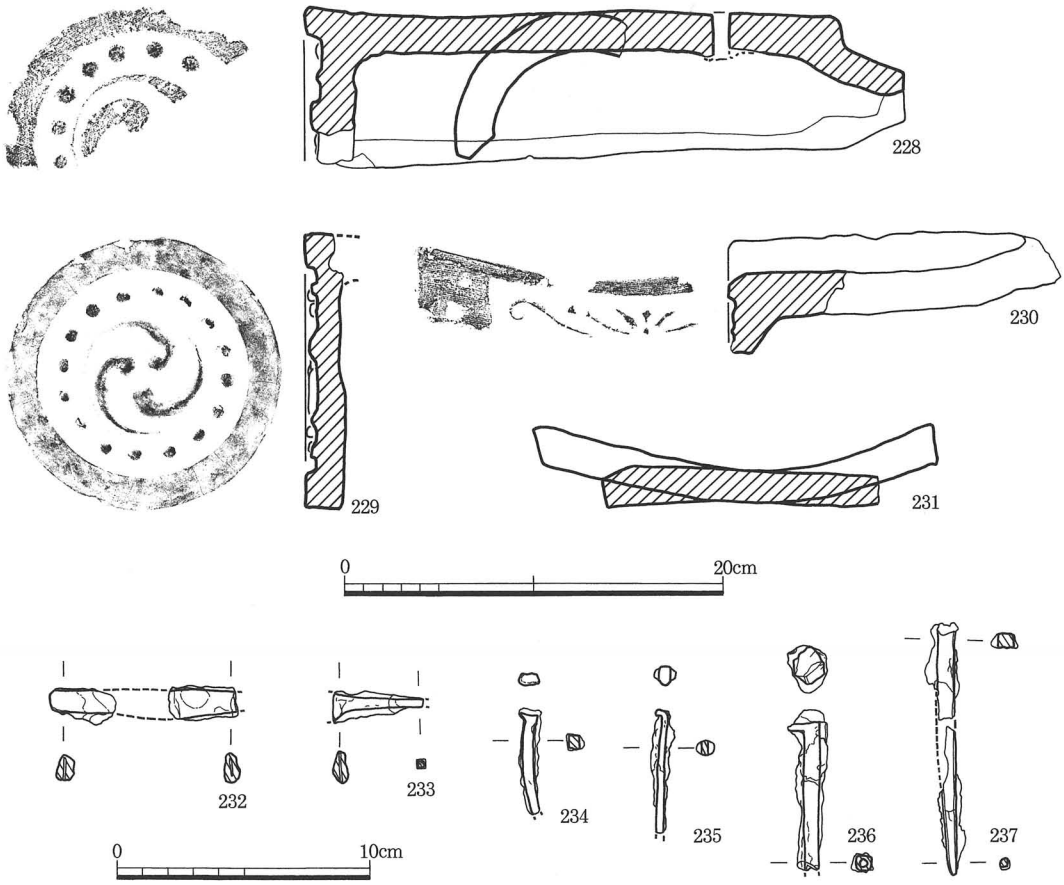
調査の結果、上層では出土遺物の時期から、主に近世の子院跡を検出した。また今回の調査では建物の基礎深度が下層遺構面に、保存上影響を及ぼさないため、調査の対象としなかったが、下層面にも遺構が存在することは、今回調査した遺構面の所々に露頭していた石列などから判明した。

今回、調査区南端に位置するＳＷ１の石垣裏側の埋土に焼土層が検出されたが、遺物は出土しなかった。この層を既往調査で検出している14世紀の兵火による焼土層と考えた場合、調査地に存在した子院も他の子院と同様に焼失したと考えられる。そして焼失後、復興に当たって丁寧に焼土を除去し、土地の削平により造成・整地した上で、土地の利用、建物の建築が行われたものと考えられる。

一般的に天野山金剛寺では兵火の焼土は、被災した子院跡の遺構の埋土におびただしく含まれているが、本次調査ではこの時期の遺構の検出、またその痕跡は窺えなかった。



第47図　包含層・側溝出土遺物実測図（１）



第48図　包含層・側溝出土遺物実測図（２）

第４章　ＫＧＴ９７－３

第１節　調査に至る経過

本次調査は、墓地造成工事に伴い実施した。原因者は宗教法人天野山金剛寺であり、調査は平成10年１月12日から平成10年３月13日にかけて行った。調査地は天野山金剛寺の境内を南から北へ流れる金剛岩湧山系を水源とする天野川（西除川）の左岸に位置し、伽藍の北西側約280ｍに位置し、地理的には伽藍の北西側約290ｍに位置し、東方向に開口する谷の入口に所在する。調査面積は約95㎡である。

また、当該調査地は、天野山金剛寺の歴代座主（ざす）の墓地とされている。

第49図　調査区位置図（1/2500）

第２節　調査の結果

１　遺構と遺物

調査区からは合計２面の遺構面を検出し、３時期の遺構を確認した。調査区の南側は北側に比べて0.5m程高くなっており、遺構は上層遺構検出面で溝、土坑、桶埋納遺構、墓、石列、下層遺構検出面で石列を検出した。上層遺構検出面は⑦10YR4/6褐色礫混じり粗砂層上、下層遺構検出面は地山上であり、各遺構面に伴い多数の遺物が出土した。

なお、下層遺構検出面は調査区の中央部から南側にかけてのみ検出された。

基本層序は、現地表面から①表土（層厚0.1m）、⑦10YR4/6褐色礫混じり粗砂（同0.2m、焼土層）、⑫7.5YR5/8明褐色シルト（同0.05m、焼土）、⑬2.5Y7/3浅黄色礫混じり粗砂（同0.05m）、㉑10YR5/6黄褐色礫混じり細砂（同0.25m）、㉒10YR4/4褐色礫混じり粗砂（同0.05m、炭化物層）、㉖10YR7/2にぶい黄橙色粗砂（同0.05m）である。（第51図）

上層遺構検出面

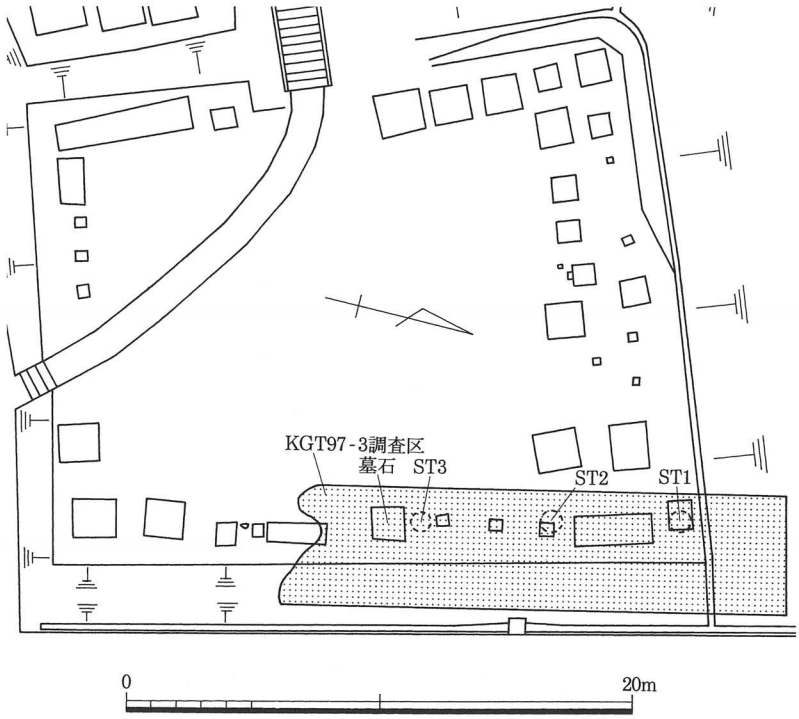
第３次構築遺構

調査区の全域で遺構の存在が確認され、墓と石列を検出した。遺物は中世の子院跡に伴う石列から生活雑器、また近世の墓から副葬品、棺、墓石が出土した。

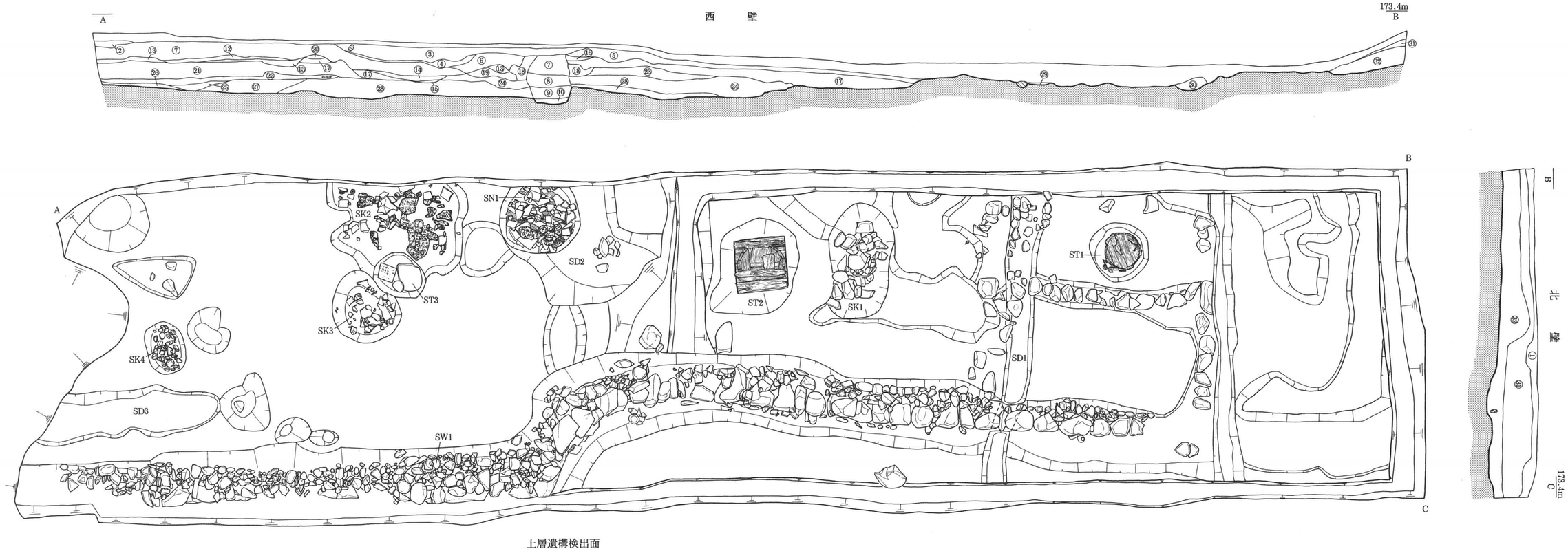
(1)墓（第50図）

本次調査は着手の前に工事が進行したため、現地表上の墓標の詳細な位置図作成作業が行えなかった。しかし、工事業者から入手した平板図により、ＳＴ１～３の上部施設である墓石と、下部施設である遺構の関係、また墓石の紀年銘から、年号と被葬者もある程度判明している。

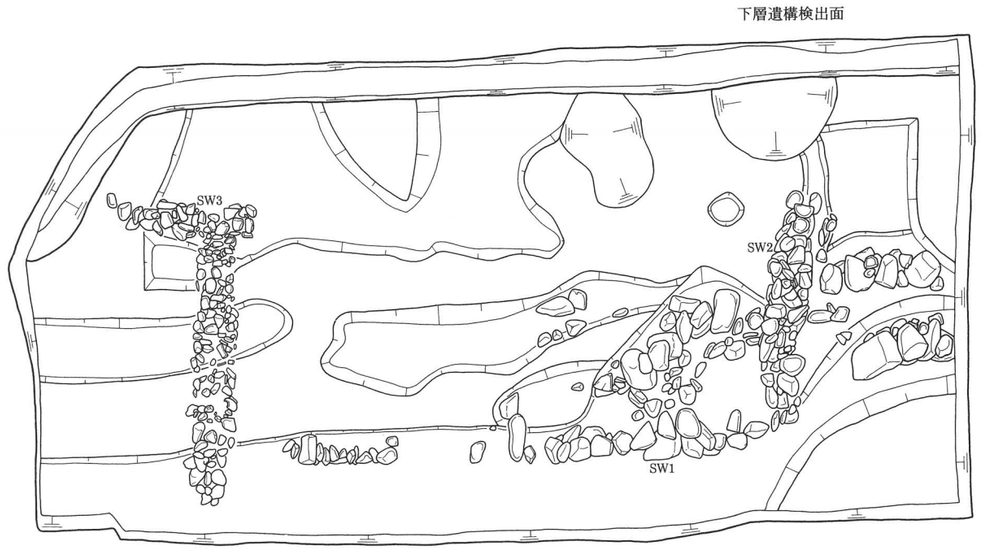
本次調査は、原因者の文化財調査に対する理解と協力を得て実施したが、出土した墓石は図化記録、



第50図　天野山金剛寺寺院墓所の現況と調査区の関連図（１/300）



上層遺構検出面



下層遺構検出面

① 表土
② 10YR　7/8 黄橙色シルト
③ 5YR　4/6 赤褐色礫混じり細砂（焼土層）
④ 炭化物層
⑤ 7.5YR 5/4 にぶい褐色礫混じり粗砂
⑥ 10YR　4/4 褐色礫混じり粗砂
⑦ 10YR　4/6 褐色礫混じり粗砂（焼土層）
⑧ 10YR　6/4 にぶい黄橙色粗砂
⑨ 10YR　6/2 黄褐色礫混じり粗砂
⑩ 2.5Y　5/1 黄灰色粗砂
⑪ 10YR　4/6 褐色礫混じり粗砂
⑫ 7.5YR 5/8 明褐色シルト（焼土ブロック混じり）
⑬ 2.5Y　7/3 浅黄色礫混じり粗砂
⑭ 10YR　4/2 黄褐色礫混じり粗砂
⑮ 10YR　5/2 黄褐色礫混じり極細砂
⑯ 10YR　5/2 黄褐色礫混じり細砂
⑰ 10YR　6/3 にぶい黄橙色粗砂
⑱ 10YR　6/6 明黄褐色シルト
⑲ 10YR　5/2 灰黄褐色礫混じり細砂
⑳ 7.5YR 4/4 褐色粗砂（焼土層）
㉑ 10YR　5/6 黄褐色礫混じり細砂
㉒ 10YR　4/4 褐色礫混じり粗砂（炭化物を含む）
㉓ 2.5Y　4/4 オリーブ褐色礫
㉔ 7.5YR 4/3 褐色礫混じり粗砂
㉕ 10YR　5/1 褐灰色粗砂
㉖ 10YR　7/2 にぶい黄橙色粗砂
㉗ 10YR　5/8 黄褐色礫
㉘ 10YR　5/4 にぶい黄褐色礫混じり粗砂
㉙ 2.5Y　4/1 黄灰色粗砂
㉚ 2.5Y　4/4 オリーブ褐色細砂（植物遺体を含む）
㉛ 10YR　4/4 褐色礫混じり細砂
㉜ 7.5YR 7/1 明褐灰色粗砂混じり細砂

0　5m

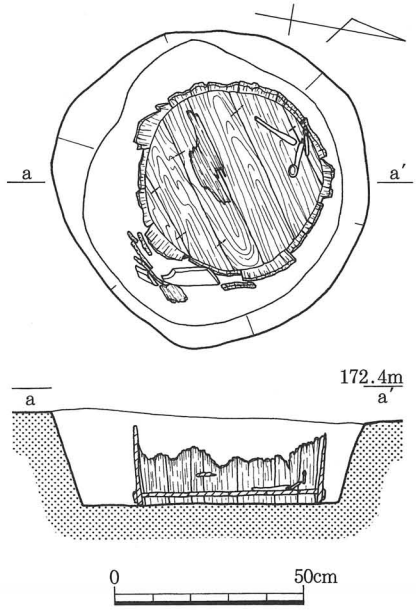
第51図　遺構配置図及び調査区土層断面実測図（1/60）

写真記録などを経て、人骨と共に新設された歴代座主などの先師墓に、改葬するために返却した。仏教においては、人骨も信仰の対象であり、今日もその人骨を供養する寺院が存続しているため、本書収載の報告は、文化財調査が行うべき所定の記録保存をすべて行っていないことも付記しておきたい。

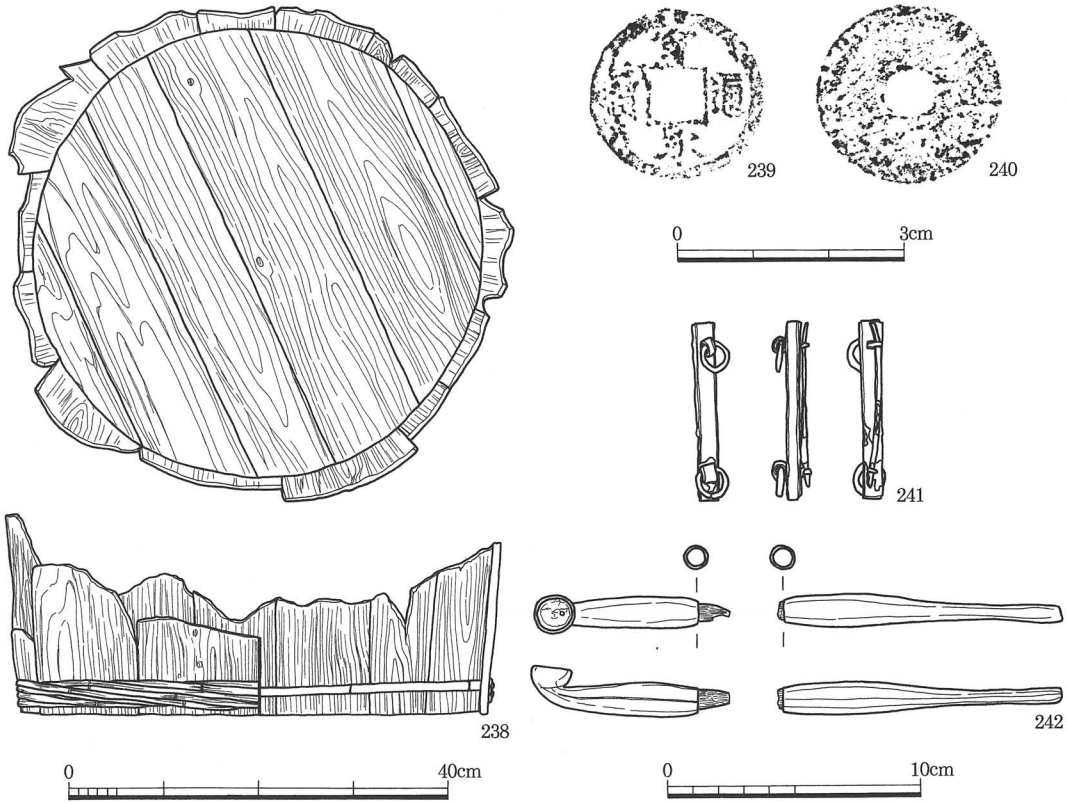
［ＳＴ１］（第52・53図、図版15・54）

ＳＴ１は調査区の北側に位置する。平面形はやや歪な円形を呈する。規模は径0.83m、深さ0.25mを測る。遺構の上部は削平されているが、内部には丸桶の座棺の底部（238）が残存していた。座棺の規模は径50cm、残存高21cmを測る。

遺物は寛永通宝（初鋳1636年、239）・銅銭（240）、煙管（242）、用途不明銅製品（241）が出土した。一般的に銅銭には、六文銭、または煙草銭としての意味を持つものとに二分されるが[註1]、今回、その何れを意図して副葬されたものかは、今後、各宗派の副葬品に関する調査を進め、検討しなければならない課題である。また、煙管の出土については、この遺構を僧侶の墓とみた場合、その関連が興味深い。この点についても、今後の調査例の増加が待たれる。



第52図　ＳＴ１
遺構実測図（１/20）



第53図　ＳＴ１出土遺物実測図

［ＳＴ２］（第54・55図、図版16・17・54）

ＳＴ２は調査区の中央に位置する。平面形は不定形を呈する。規模は長軸1.36ｍ、短軸1.11ｍ、深さ0.9ｍを測る。遺構には墓坑の内部に幅75cm、奥行75cm、高さ54cmの方形の龕（244）、更にその中に上部の径60cm、下部の径51cm、高さ61cmの丸桶の棺（243）が納められ、丸桶の中では被葬者の人骨が頭骨から手先、足先骨に至るまで遺存していた。龕は板材を鉄釘で組み合わせており、板蓋を伴っている。また龕と棺の底部には、一部に藁で編んだ縄の痕跡も確認された。埋葬は棺の形状から、座棺であったことがわかる。使用された木材は樹種判定の結果、スギであることもわかった。

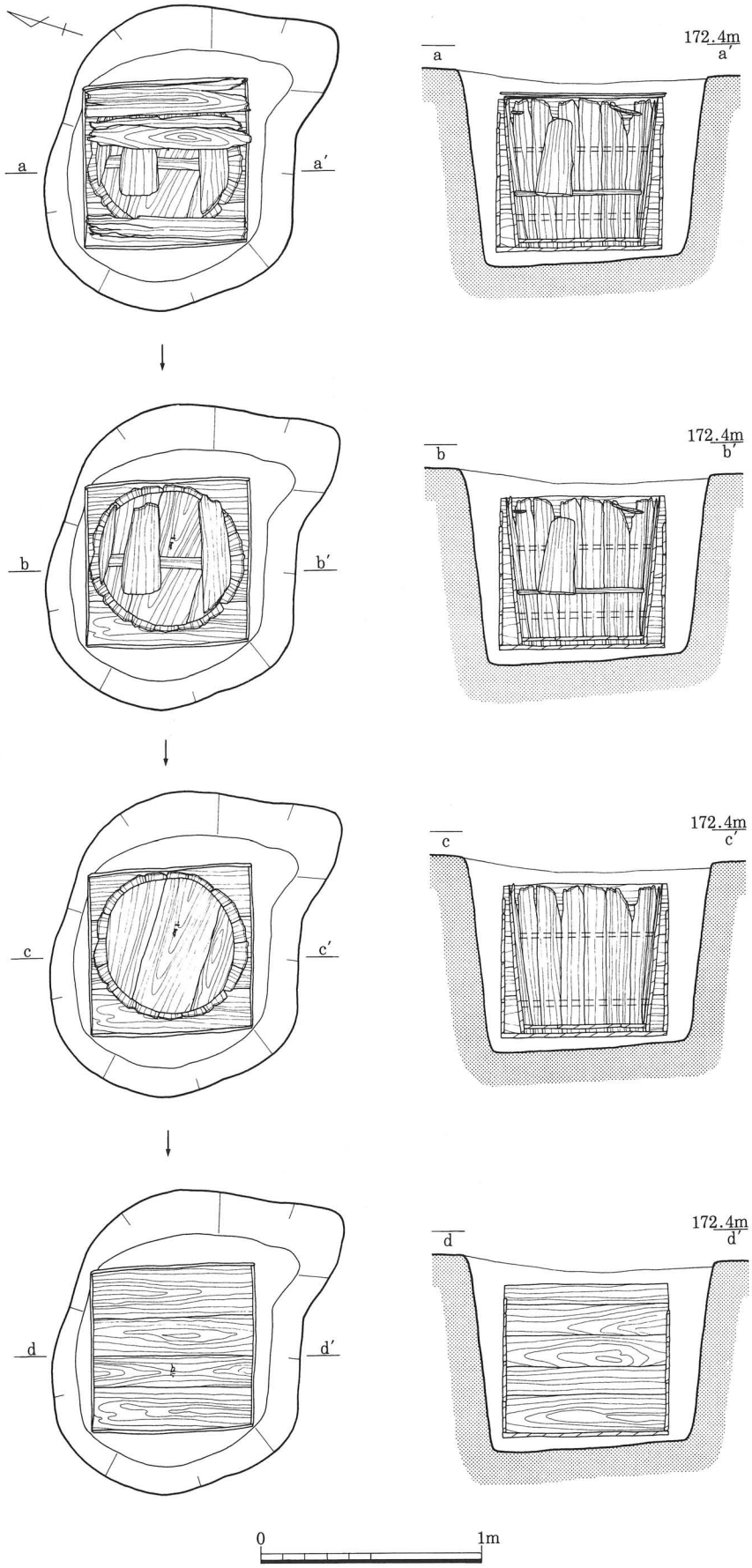
僧侶を土葬する場合、一般的には今日でも棺は座棺である。その際の棺内の体位は、下半身が半跏坐、もしくは結跏趺坐にさせ、手には印を結ばせ納棺する。今回の場合、墓坑の構造・深さから、土葬までの納棺作業の行程は、棺に遺体を納めた後に蓋をし、蓋と棺を縄で結んで閉棺する。続いて棺を龕に納めて再び蓋をして、縄で結んで閉塞する。さらに龕の底部に四辺から数本の縄を通す。そしてそのまま墓坑の底まで棺を下ろした後、土をかけて埋葬したと想定される。

また、龕の埋納状態の西側、つまり正面には、上部の損傷していて文字の判読ができない部分を除いた残存する種子によると、向かって右側から『阿弥陀如来根本陀羅尼』（４行）、『大随求随心咒』（１行）、『光明真言』（１行）、『滅罪真言』（１行）が合計７行にわたり墨書されていた。特に、龕に墨書された文字は行数が多いので、墨書する際の利便をはかるために、事前に書写する桁を行間に線刻した後、墨書していることも確認された。また内部底にも密教の根本仏である金剛界の大日如来の種子である「𑖨（バン）」が墨書されていることを確認した[註2]。しかし、龕の上部の蓋板は、腐食による損傷が激しいため文字の有無は確認できなかった。また、棺の内部の底にも、同じく金剛界大日如来の種子である「𑖨（バン）」が墨書され、検出された遺物にも多くの墨書がみられた。

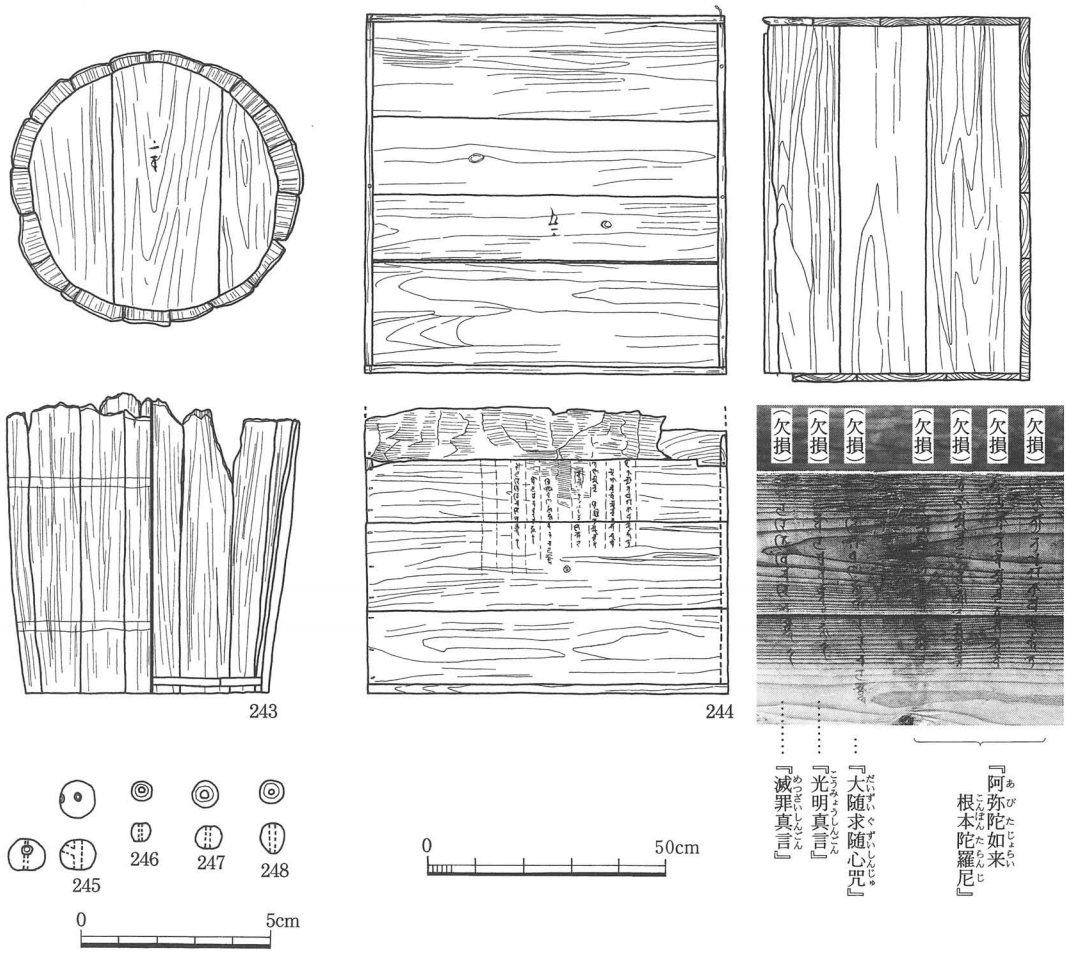
今日の真言宗では、棺の前面に種子「𑖀（ア）」、棺の底には大日如来の胎蔵界の種子「𑖀𑖽（アーク・大日如来・中央）」、さらに棺の外側の四面には、それぞれ「𑖀（ア・宝憧如来・東方）」、「𑖀𑖿（アー・開敷華王如来・南方）」、「𑖀𑖾（アン・無量寿如来・西方）」、「𑖀𑖽（アク・天鼓雷音如来・北方）」を記し、棺の底の金剛界大日如来の種子「𑖨（バン）」と合わせて胎蔵界五仏を表している。これらの種子は、死者が成仏し、仏の世界の一部であることを意味している。

なお墨書の『阿弥陀如来根本陀羅尼』、『大随求随心咒』、『光明真言』、『滅罪真言』については、死者に対する仏の守護や滅罪などを意図し、祈念されたものである。

棺内部の埋土は、調査区が谷地に位置することから、水分を多分に含んだ非常に軟質な泥土が堆積していたため、安定した人骨の出土状況を保持したまま、図化することはできなかった。しかし、泥土から被葬者の人骨を採取する際、その他の副葬品が遺存・残留していないかは、十分に確認しながら、掘削作業を行った。



第54図　ＳＴ２遺構実測図（1/30）



第55図　ＳＴ２出土遺物実測図

また、工事施工時に、工事業者が測量した平板図によれば、上部施設とみられる墓石は、宝篋印塔で、紀年銘として基礎石の正面には「法眼脩覚」、裏面には「文政十年(1827)九月二十二日」と記されている。天野山金剛寺の過去帳によれば、脩覚は天野山金剛寺の子院である禅光院の住職であった人物と考えられる。

出土した遺物には、木製の念珠玉（245～248）があった。その形状・大きさから判断すると、(245) は親玉、(246) は四天玉もしくは弟子玉・浄明玉のいずれか、(247) は主玉、(248) はツユ玉と考えられる。またこれらは、樹種鑑定の結果、樹種はヤマザクラであることが判明した[註3]。

真言宗では用いる念珠に関しても、素材が木製である場合には、その樹種はヤマザクラ、ウメとされていることから、副葬された念珠にも所定の樹種を用いていることが窺える。

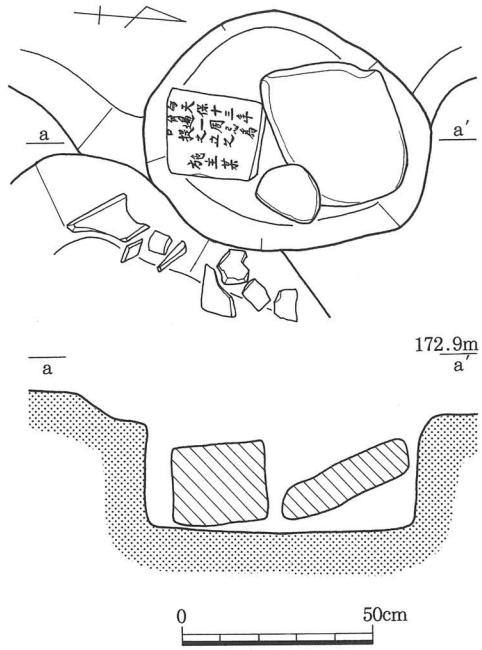
以上のように、種子の標記方法とその内容、また副葬品は、真言宗の僧侶、特に天野山金剛寺における埋葬の在り方を考える上で、大変貴重な成果であったといえる。

［ＳＴ３］（第56・57図、図版18・54）

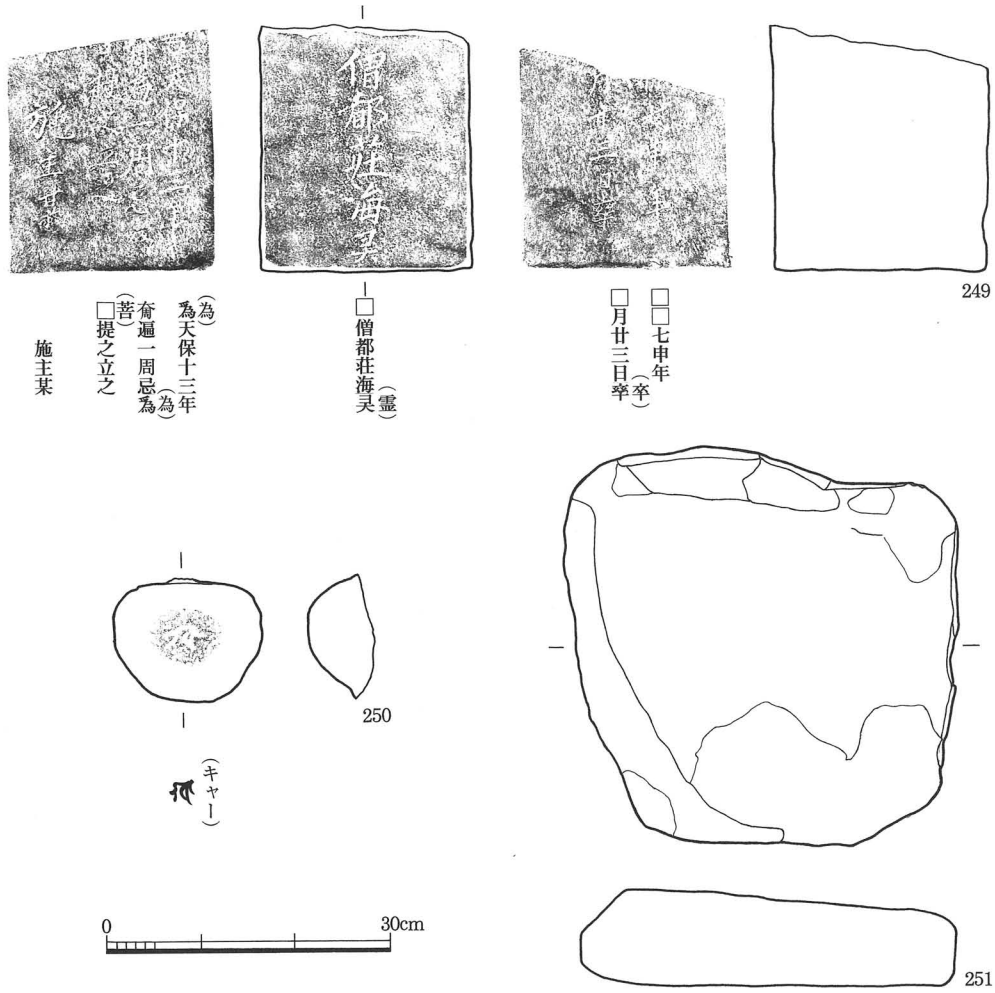
ＳＴ３は調査区の南側に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径0.76m、短径0.64m、深さ0.31mを測る。また、検出位置がＳＴ１とＳＴ２とは等間隔の約13mで、同

じ直線上に配列されていることから、棺や六文銭などの遺物は検出されなかったが、墓であることが考えられる。

遺物は五輪塔の空輪部である宝珠（250）、方柱状の石塔（249）、墓の台石などに用いたことが考えられる砂岩製平石（251）が出土した。また、方柱状の墓石の正面には「□僧都荘海昊」、左側面には「為天保十三年(1842)　奮遍一周忌為　□提之立之　施主某」、右側面には「□□七申年　□月廿三日卒」と記されていることから、「奮遍」の一周忌である1842年に、墓石が墓に据えられたことがわかる。



第56図　ＳＴ３遺構実測図（１/20）

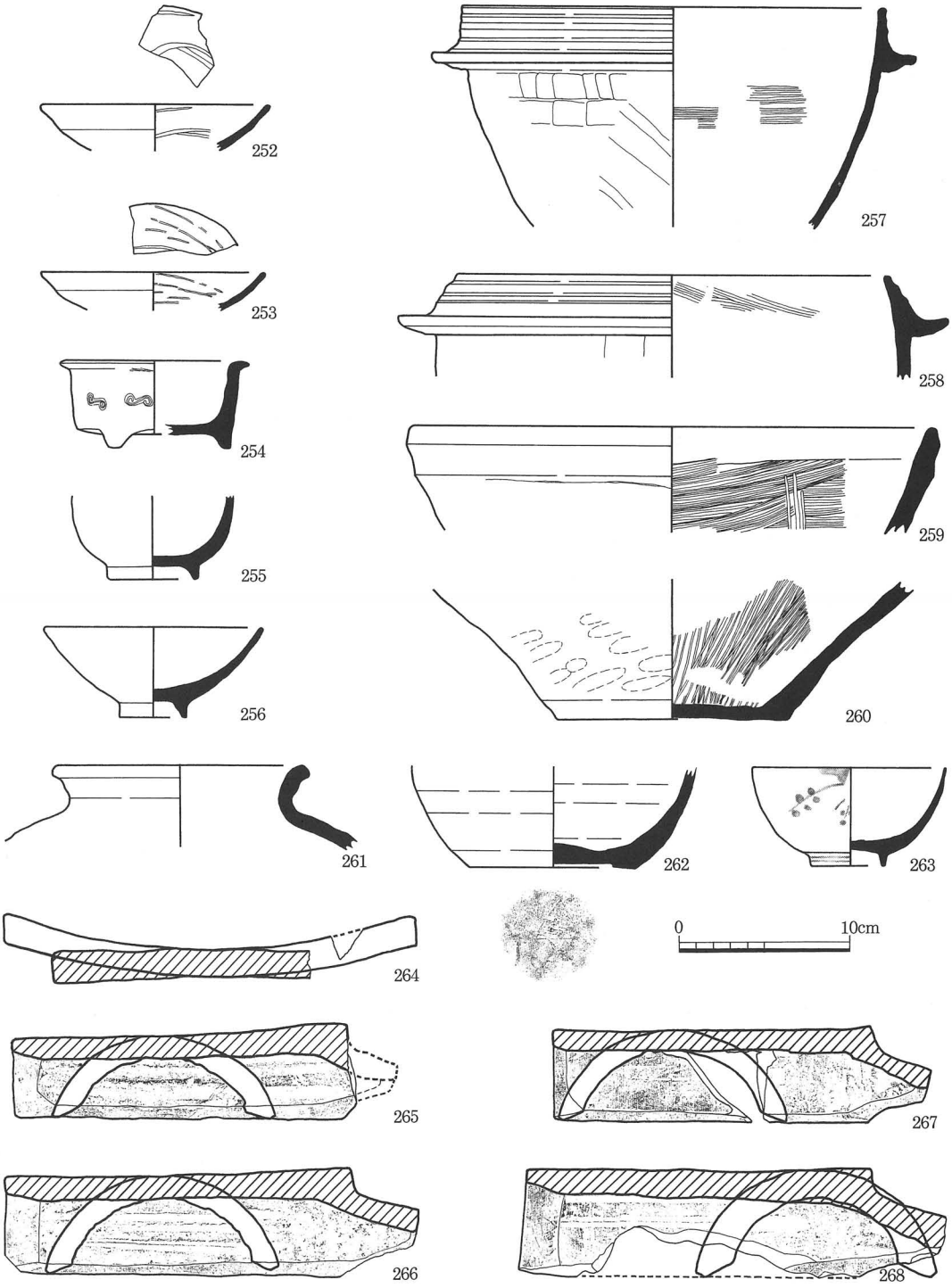


第57図　ＳＴ３出土遺物実測図

(2)石列・石垣

［ＳＷ１］（第58図、図版55）

ＳＷ１は調査区の東側全域に位置する。遺構の大部分は南北方向の主軸方向を持つ石垣であるが、北端には一部西側、更に南側に派生する石列が付属する。検出した規模は南北の長さ19.56m、東西の長さ４ｍ、幅1.26m、深さ0.29m、石垣部分の長さ15.6m、幅0.78m、高さ0.3mを測る。内部の石垣は東側に面を持ち、主軸方向は北側がＮ－10°－Ｗ、南側がＮ－17°－Ｗである。石組は最大２段検出し、最大のものは60cm×40cm×38cmを測り、裏



第58図　ＳＷ１出土遺物実測図

込めにはこぶし大の河原石が主に用いられている。

またＳＷ１は下層遺構検出面の時期から存在し、石垣の積み直しにより、上層遺構面の時期でも用いられていたことがわかった。下層遺構検出面の時期のＳＷ１については、次項で後述する。

遺物は瓦器椀（252・253）、瓦質土釜（257・258）・擂鉢（259）・香炉（254）、瀬戸美濃系椀（255）、唐津椀（256）、丹波系擂鉢（260）、備前壺（261・262）、肥前系磁器碗（263）、丸瓦（265～268）・平瓦（264）が出土した。

第２次構築遺構

調査区の全域で確認され、中世の子院跡に伴う溝、土坑、埋桶を検出し、生活雑器が出土した。

(1)溝

［ＳＤ１］（第59図）

ＳＤ１は調査区の北側に位置する。平面形は遺構の東端・西端が調査区外に及ぶため、詳細は不明である。検出した規模は長さ4.16m、掘形の幅0.52m、石列の内法0.3m、深さ0.06mを測る。石列に使用された石は、最大18cm×10cm×８cmを測る。主軸方向はＮ－83°－Ｅである。埋土は2.5YR4/1黄灰色粗砂であった。

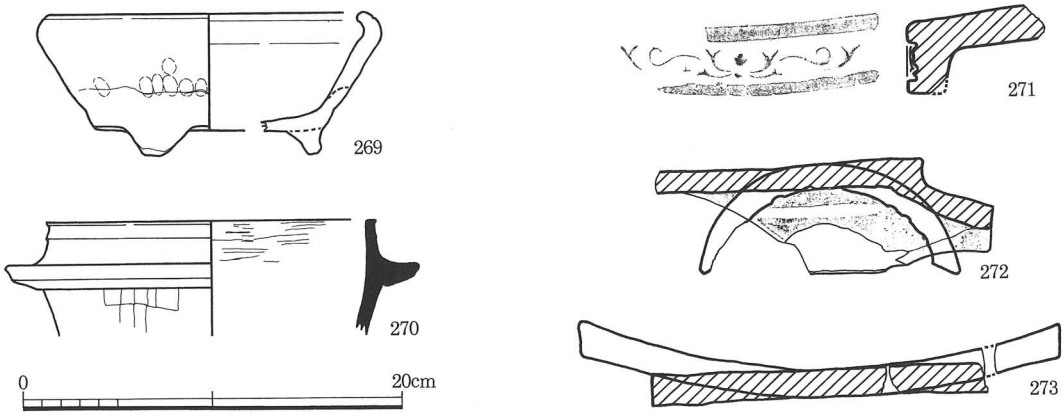
また、調査区の西側では、遺構の内部に面を揃えた向かい合う石列が２列検出されていることから、遺構の構築当初は石列が東側まで連続し、その用途は排水溝であったと考えられる。

遺物は土師質火鉢（269）、瓦質土釜（270）、瓦が出土した。

［ＳＤ２］（第59図）

ＳＤ２は調査区の中央部西側に位置する。平面形は遺構の北端が削平を受け、西端も調査区外に及ぶため、詳細は不明である。検出した規模は長さ1.66m、幅1.74m、深さ0.08mを測る。埋土は2.5YR4/4オリーブ褐色粗砂であった。

遺物は、軒丸瓦（271）・丸瓦（272）・平瓦（273）が出土した。



第59図　ＳＤ１・２出土遺物実測図

［ＳＤ３］

ＳＤ３は調査区の南側に位置し、南北方向に軸方向を持つ。平面形は遺構の北端が周辺の遺構に近接し、南端も調査区外に及ぶため、詳細は不明である。検出した規模は長さ2.4m、幅0.76m、深さ0.1mを測る。主軸方向はＮ－19.5°－Ｗである。埋土は2.5YR7/3浅黄色礫混じり細砂であった。

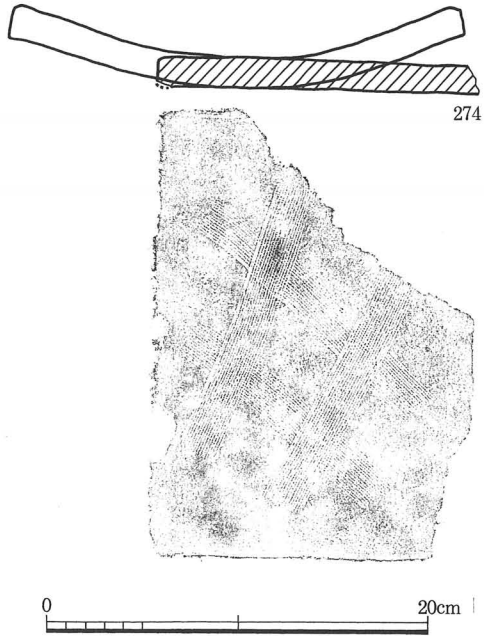
遺物は瓦が出土したが、細片のため図化できなかった。

(2)土坑

［ＳＫ１］（第60図）

ＳＫ１は調査区の中央部西側に位置する。平面形は不定形を呈する。検出した規模は長軸2.71m、短軸1.7m、深さ0.06～0.34mを測る。遺構の南側には遺構の最深部があり、人頭大の集石が見られる。

遺物は平瓦（274）が出土した。



第60図　ＳＫ１出土遺物実測図

［ＳＫ２］（第61・62図）

ＳＫ２は調査区の南側西端に位置する。平面形は遺構の東側が上層遺構のＳＴ３に切られ、西側も調査区外に及ぶため、詳細は不明である。検出した規模は南北長2.01m、東西長0.92m、深さ0.16mを測る。

遺物は瓦質擂鉢（275）、火を受け赤変した丸瓦（279・280）・平瓦（276）や建物の壁材と考えられる塊が、投棄されたと考えられる状態で多数出土した。

［ＳＫ３］（第61・62図）

ＳＫ３は調査区の南側に位置する。平面形は北西部が上層遺構のＳＴ３に一部切られているため、歪な楕円形を呈する。検出した規模は長径1.05m、短径0.9m、深さ0.29mを測る。

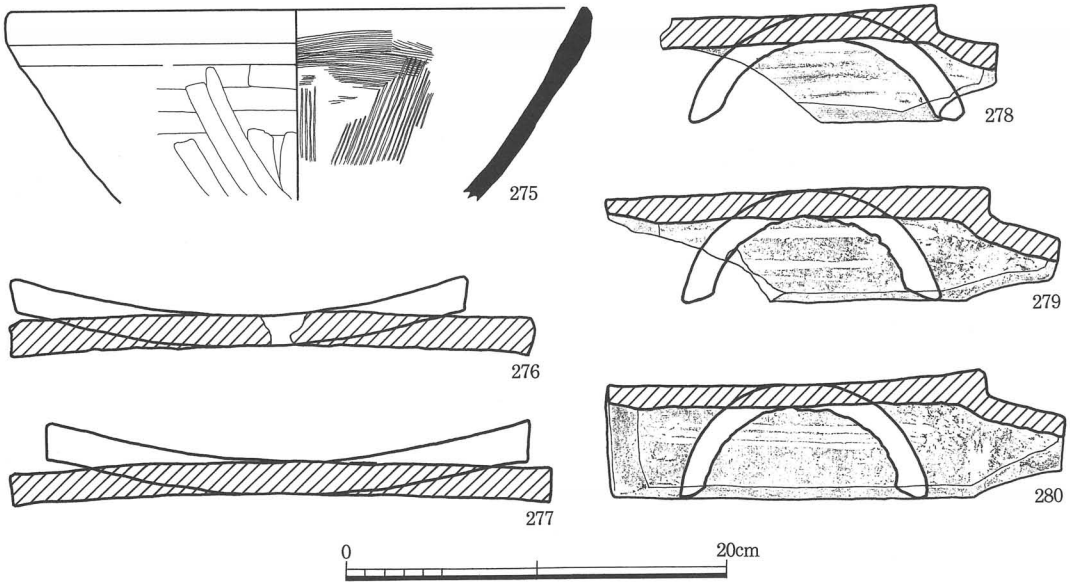
遺物はＳＫ２と同様、火を受け赤変した丸瓦（278）・平瓦（277）が、投棄されたと考えられる状態で多数出土した。

［ＳＫ４］（第63図）

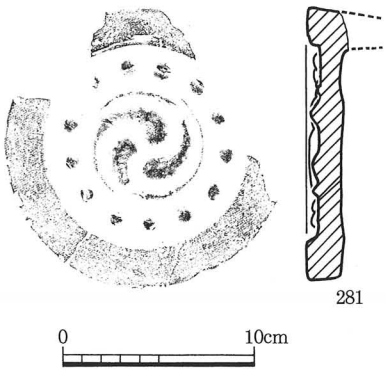
ＳＫ４は調査区の南側に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径0.76m、短径0.55m、深さ0.15mを測る。遺構底部からは、下層遺構のＳＷ３の石組が露頭しているのが窺えた。

遺物は軒丸瓦（281）が出土した。

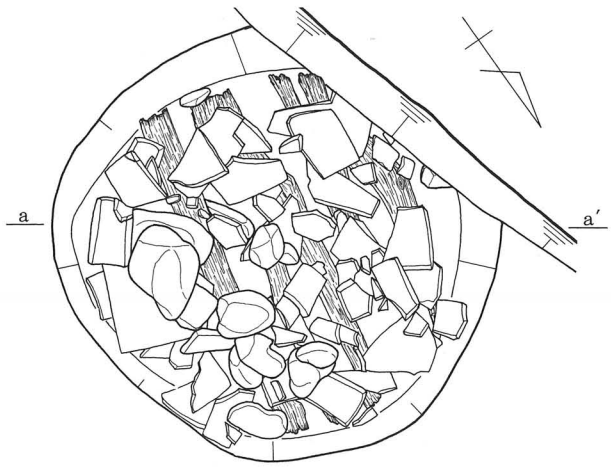
第61図　ＳＫ２・３遺構実測図（１/20）

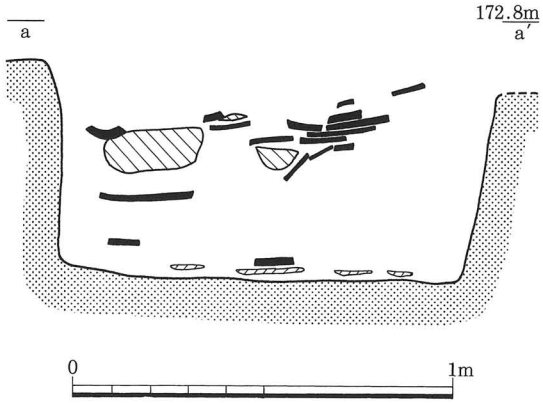


第62図　ＳＫ２・３出土遺物実測図



第63図　ＳＫ４出土遺物実測図





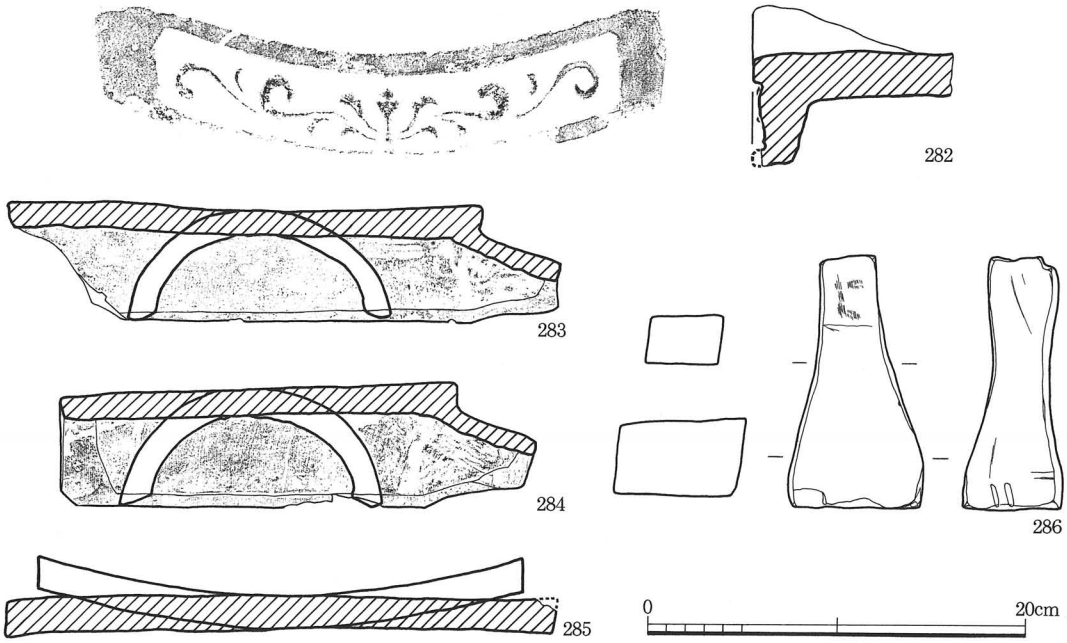
第64図　ＳＮ１遺構実測図（1/20）

(3)桶埋納遺構

［ＳＮ１］（第64・65図、図版18）

ＳＮ１は調査区の南側西端に位置する。平面形は西側が調査区外に及ぶが、遺構底部に木製の桶底が遺存していることから、円形を呈することがわかる。検出した規模は径1.2m、深さ0.58mを測る。また遺構の内部には、石や瓦が投棄されたとみられる状態が確認できた。

遺物は軒丸瓦・軒平瓦（282）・丸瓦（283・284）・平瓦（285）、砥石（286）が出土した。



第65図　ＳＮ１出土遺物実測図

下層遺構検出面

第１次構築遺構

調査区の南側で確認し、中世の子院跡に伴う石列が検出され、生活雑器が出土した。

(1)石列・石垣・石組

［ＳＷ１］

ＳＷ１は上層遺構のところで既に詳述したが、その構築時期は下層遺構検出面の時期に遡る。遺構の北側の石垣は、下層遺構の時期から構築されたものを用いられている様であるが、南側は、上層遺構の構築時期に新な石組が上部に積まれている。また、南北の主軸方向は、上層遺構検出面と同様である。

［ＳＷ２］

ＳＷ２はＳＷ１の中央部に位置する石垣である。検出した規模は長さ2.38m、幅0.44m、深さ0.38mを測る。石垣の石は最大24cm×20cm×10cmの河原石が使われていた。主軸方向はＮ－80°－Ｅである。遺構の性格は構造・規模から築地塀の基礎と考えられる。

遺物は土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった。

［ＳＷ３］

ＳＷ３は調査区の南側に位置する石組である。平面形はＬ字形を呈し、構造は東西方向の石組の西端に南北方向の石組が連続する。検出した規模は東西列の長さ2.87m、幅0.43m、高さ0.25m、南北列の長さ1.47m、幅0.33m、高さ0.25mを測る。石組の石は最大16cm×14cm×12cmの河原石が使われていた。東西の主軸方向はＮ－77°－Ｅ、南北の主軸方向はＮ－20°－Ｗである。東西主軸は北側に位置するＳＷ２とほぼ平行し、その構造も類似することから関連があると考えられ、遺構の性格も築地塀の基礎と考えられる。

遺物は瓦が出土したが、細片のため図化できなかった。

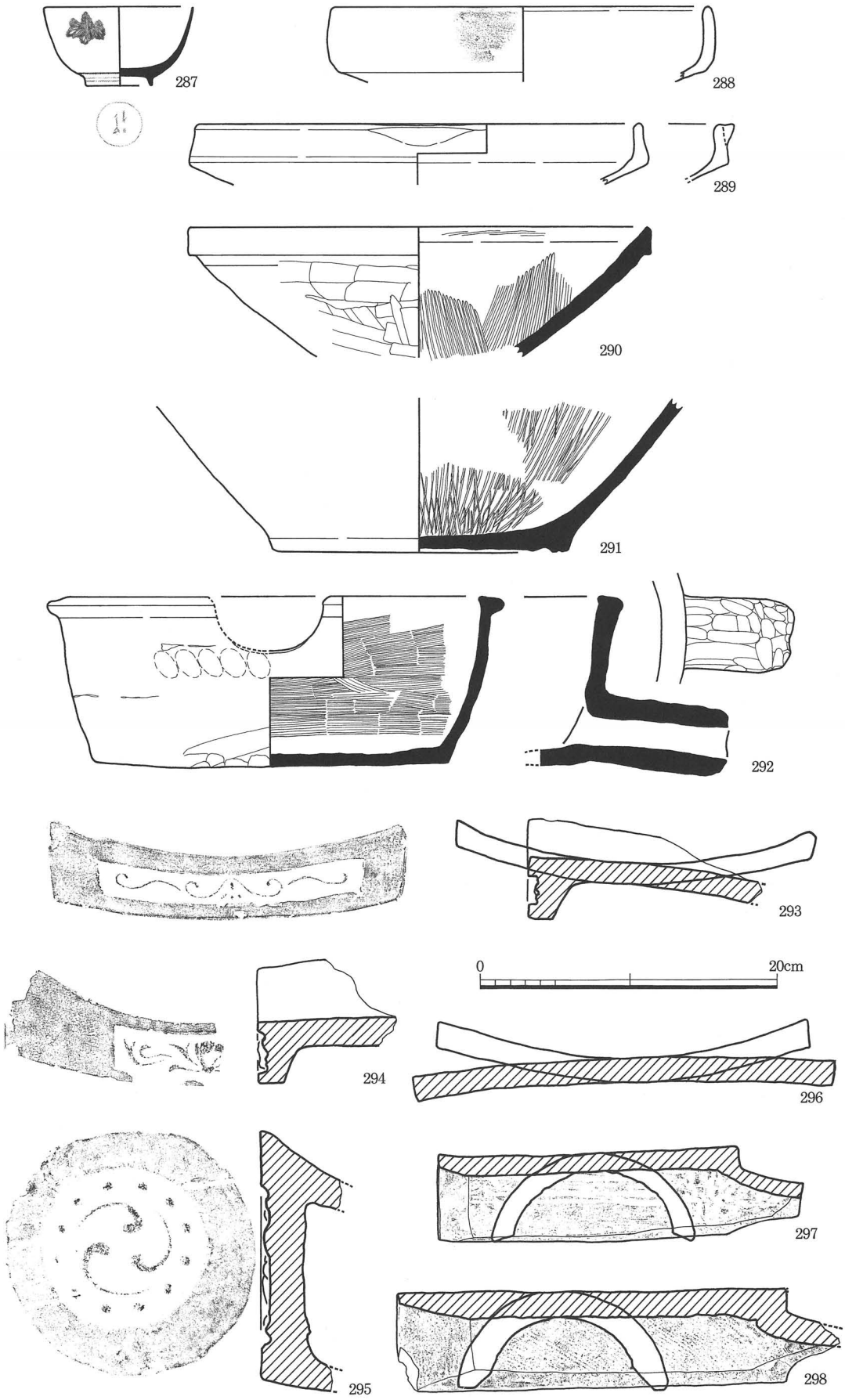
(2)包含層（第66図、図版55）

遺物は土師質炮烙（288・289）、瓦質土釜・擂鉢（290）・火舎（292）、堺擂鉢（291）、磁器碗（287）、軒丸瓦・軒平瓦（293・294）・鳥衾瓦（295）・丸瓦（297・298）・平瓦（296）が出土した。

２　まとめ

調査の結果、上層遺構検出面では18・19世紀の墓、下層遺構検出面では17世紀を中心とする天野山金剛寺の子院跡を検出した。

本調査区の位置する箇所には、『金剛寺境内図』（天野山金剛寺蔵、江戸時代）（第171図③）[註4]によると、子院が描かれている。したがって、調査区の位置する調査地は、17世紀には子院であったが、18世紀以降は土地利用の用途が変更され、歴代座主を中心とした僧侶の墓地となり、今日に至っていることがわかった。



第66図　包含層出土遺物実測図

また、天野山金剛寺遺跡では、1974年の調査で伽藍の南側に、14～16世紀頃の墓地跡が検出されている。寺院には当時、僧侶以外に在家である寺男や童子などの人々が居住している例もあり、これらの墓地が、当時のどの様な階層の人々の墓であるか、また僧侶のものであれば座主や一般僧の墓であるのかなど、現在のところ、その墓に葬られた被葬者の階層、僧侶と在家の区分に関する詳細は不明である。このことは、今後検討すべき課題が得られたといえる。

仏教において、僧侶と在家、また宗団、寺院における僧侶の宗教的立場が異なることから、今後は考古学において遺構である墓を考察する場合、属する宗団の宗教的認識のもとに遺構を分析し、埋葬とその前後の連続する宗教儀礼や仏教習俗、またその背景をも念頭に置いた研究視点が、今後不可欠であることを再認識できた。

いずれにしても、検出したこれらの墓は、真言宗の葬送、特に僧侶の葬送の在り方を考える上で、貴重な成果があったといえる。

註１　小林義孝氏（大阪府教育委員会）に御教示いただいた。

註２　桑原弘海師・桑原法俊師（福徳寺）に御教示いただいた。

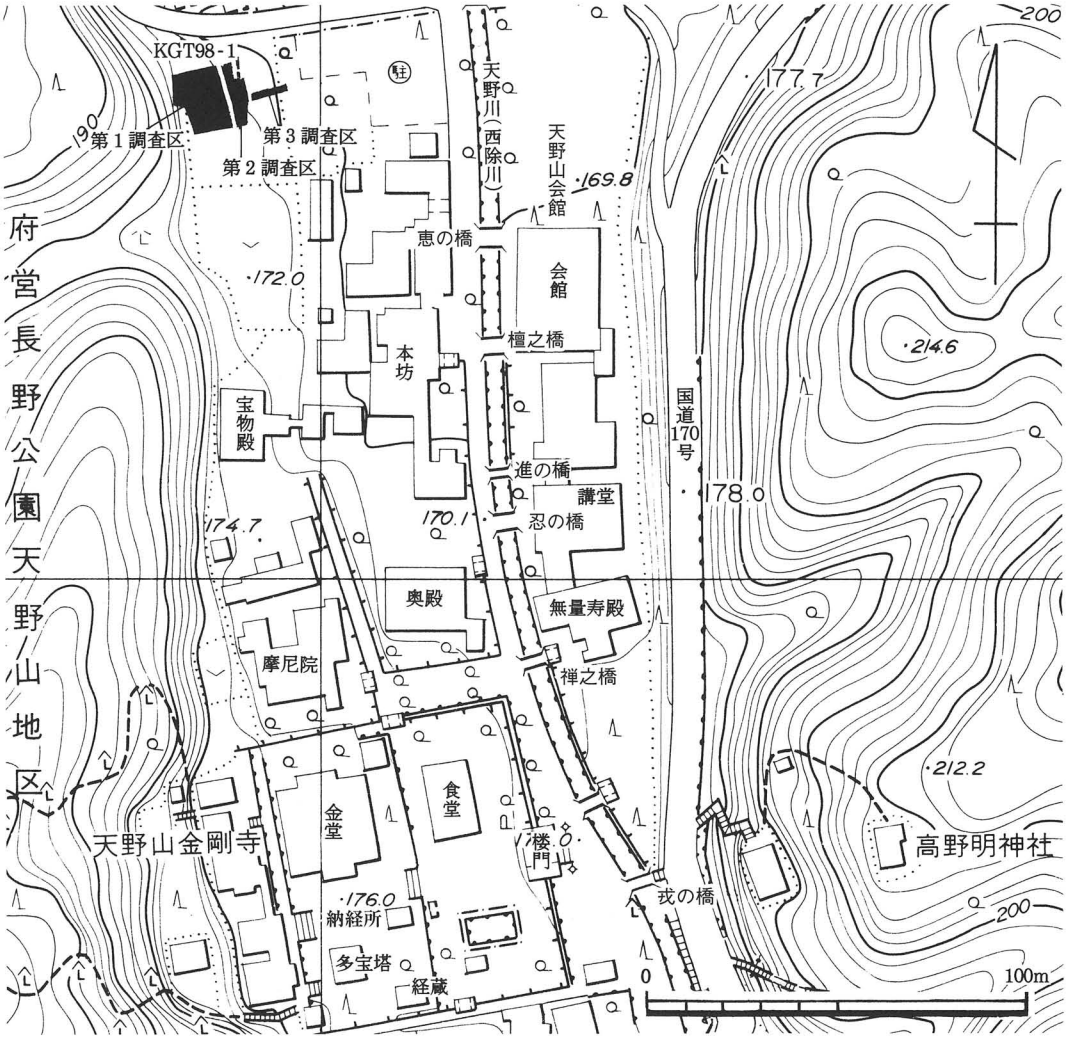
註３　山口誠治氏（(財) 大阪府文化財調査研究センター）に樹種鑑定いただいた。

註４　『河内長野市文化財調査報告書　第７輯　河内長野の古絵図』　1983年３月　河内長野市教育委員会

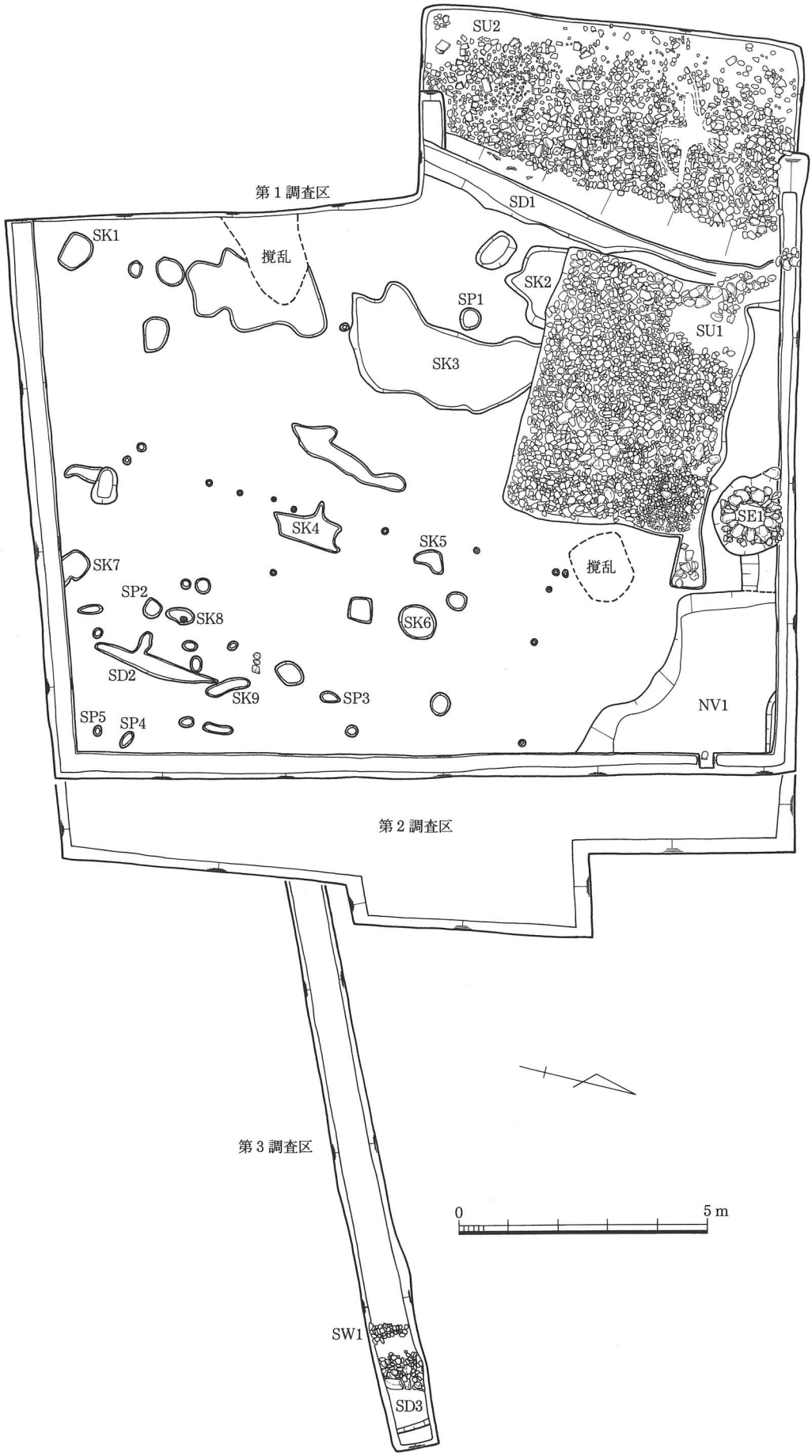
第５章　ＫＧＴ９８－１

第１節　調査に至る経過

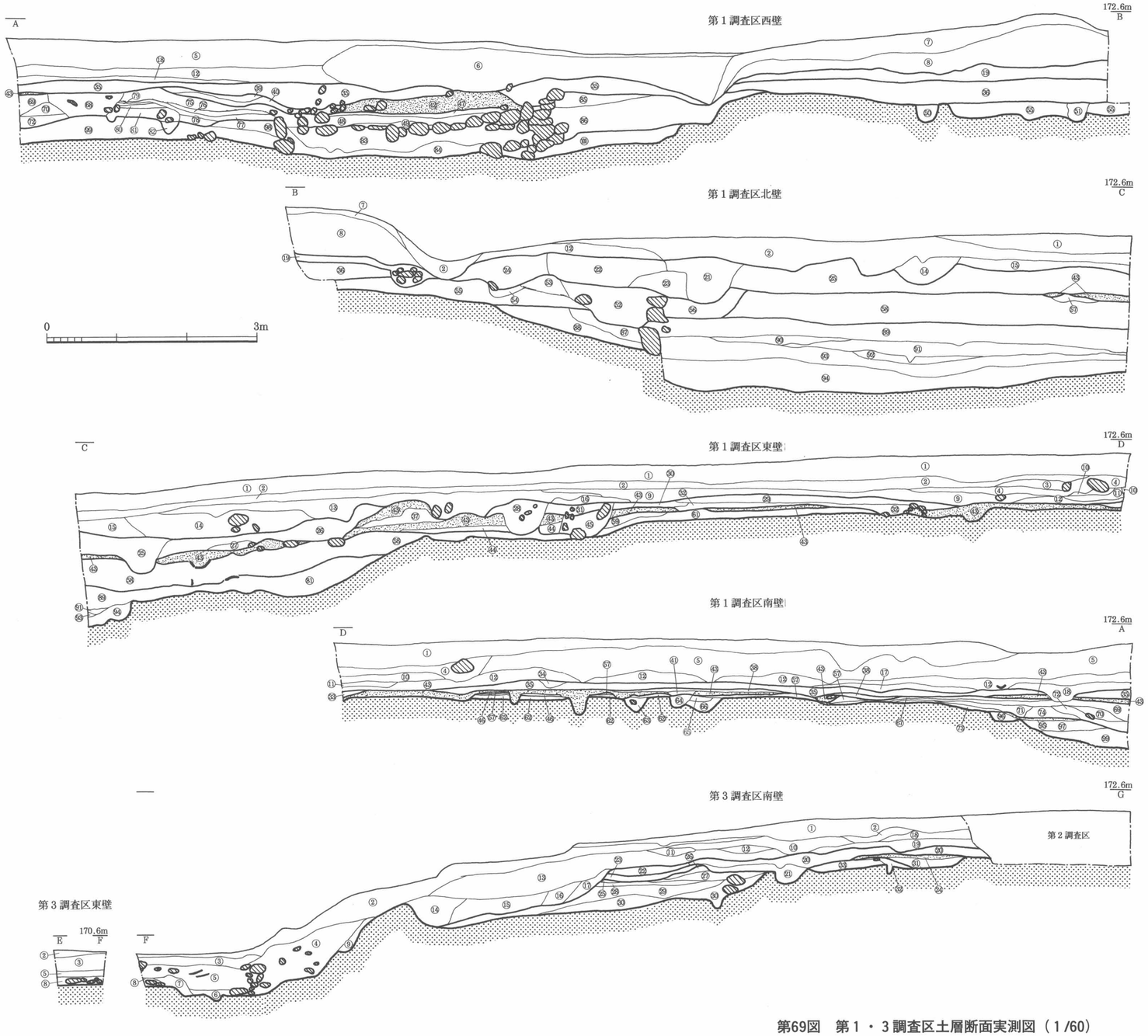
本次調査は防災事業事前調査で、防災施設建設工事に伴い実施した。原因者は宗教法人天野山金剛寺であり、調査は平成11年２月10日から平成11年３月26日にかけて行った。調査地は天野山金剛寺の境内を南から北へ流れる金剛岩湧山系を水源とする天野川（西除川）の左岸に位置し、伽藍の北側約170ｍに所在する。調査区は当初防火水槽の設置予定箇所に設定した１箇所であったが、調査着手後に次年度の工事時期が変更され、またその遺構への影響範囲が拡大されたため、当初予定調査区（第１調査区）に近接する翌年度調査実施予定個所２箇所（第２・３調査区）を追加調査した。調査面積は第１調査区約165㎡、第２調査区約35㎡、第３調査区約12㎡である。



第67図　調査区位置図（１/2000）



第68図　第１～３調査区第１遺構検出面遺構配置図（１/120）

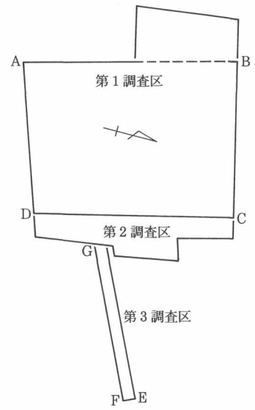


第１調査区（西・北・東・南壁）

① 盛土
② 表土
③ 10YR　7/2 にぶい黄橙色礫混じり粗砂
④ 10YR　7/3 にぶい黄橙色礫
⑤ 表土
⑥ 盛土
⑦ 石組瓦組層
⑧ 10YR　4/4 褐色礫混じり細砂
⑨ 10YR　7/6 明黄褐色礫
⑩ 10YR　5/6 黄褐色礫混じり細砂
⑪ 10YR　6/6 明黄褐色礫混じり細砂
⑫ 10YR　5/8 黄褐色細砂
⑬ 2.5Y　6/4 にぶい黄色粗砂混じり極細砂
⑭ 10YR　8/6 黄橙色礫
⑮ 10YR　6/4 にぶい黄橙色礫混じり細砂
⑯ 10YR　5/6 黄褐色礫混じり細砂
⑰ 2.5Y　4/6 オリーブ褐色礫混じり細砂
⑱ 2.5Y　5/4 黄褐色礫混じり細砂
⑲ 10YR　6/6 明黄褐色礫混じり細砂（上層整地面）
⑳ 7.5YR 5/4 にぶい褐色礫混じり粗砂
㉑ 10YR　5/3 にぶい黄褐色礫混じり極細砂
㉒ 10YR　6/8 明黄褐色礫混じり細砂
㉓ 10YR　5/4 にぶい黄褐色礫混じり極細砂
㉔ 10YR　4/6 褐色礫混じりシルト
㉕ 10YR　5/6 黄褐色礫混じり細砂
（炭化物・土器片を少し含む）
㉖ 2.5Y　8/8 黄色礫混じり細砂
㉗ 10YR　8/6 黄橙色シルトブロック（整地面）
㉘ 10YR　6/6 明黄褐色粗混じり極細砂
㉙ 2.5Y　8/8 黄色礫混じり細砂
㉚ 2.5Y　6/8 明黄褐色細砂
㉛ 10YR　6/4 にぶい黄橙色礫混じり細砂
（炭化物を少し含む）
㉜ 10YR　5/6 黄褐色礫混じり極細砂
㉝ 10YR　7/8 黄橙色シルト混じり細砂
㉞ 10YR　6/8 明黄褐色礫混じり細砂
㉟ 10YR　5/8 黄褐色礫混じり細砂
（炭化物を少し含む）
㊱ 10YR　6/3 にぶい黄橙色礫混じり細砂
㊲ 2.5Y　8/6 黄色礫
㊳ 10YR 8/4 浅黄橙色細砂混じり粘土（上層整地面）
㊴ 10YR 7/8 黄橙色粗砂
㊵ 2.5Y　5/2 暗灰黄色礫混じり極細砂
（炭化物を少し含む）
㊶ 10YR 5/3 にぶい黄褐色礫混じり細砂
㊷ 10YR 3/3 暗褐色礫混じり細砂（焼土層）
（酸化した壁材・土器片を多く含む）
㊸ 10YR 3/4 暗褐色礫混じり細砂（焼土層）
（酸化した壁材・土器片・炭化物を多く含む）
㊹ 10YR 5/8 黄褐色礫混じり細砂
㊺ 10YR 5/6 黄褐色礫混じり極細砂
（炭化物・土器片を少し含む）
㊻ 炭化物層
㊼ 炭化物層
㊽ 10YR 6/2 灰黄褐色粗砂
㊾ 10YR 5/2 灰黄褐色礫混じり粗砂
㊿ 2.5Y　5/2 暗灰黄色極細砂
(51) 10YR 7/3 にぶい黄橙色粗砂混じり細砂
(52) 10YR 5/4 にぶい黄褐色礫混じりシルト（盛土）
(53) 10YR 7/2 にぶい黄橙色礫混じり極細砂
(54) 10YR 6/2 灰黄褐色礫混じり極細砂
(55) 10YR 6/4 にぶい黄橙色礫混じり細砂
(56) 10YR 5/2 灰黄褐色礫混じり極細砂
(57) 10YR 7/8 黄橙色シルトブロック（下層整地面）
(58) 10YR 5/4 にぶい黄褐色礫混じり細砂
（炭化物・土器片を少し含む）
(59) 10YR 5/6 黄褐色礫混じり細砂
(60) 10YR 6/4 にぶい黄橙色細砂混じり粗砂
(61) 10YR 5/8 黄褐色礫混じり粘土
(62) 10YR 5/8 黄褐色粘土混じり細砂
(63) 10YR 5/3 にぶい黄褐色シルト混じり細砂
（炭化物を少し含む）
(64) 10YR 5/8 黄褐色シルト混じり極細砂
（炭化物を少し含む）
(65) 10YR 5/6 黄褐色粘土混じり細砂
(66) 10YR 6/3 にぶい黄橙色礫混じり粗砂
(67) 10YR 6/3 にぶい黄橙色粗砂
(68) 10YR 7/3 にぶい黄橙色礫混じり細砂
(69) 10YR 6/8 明黄褐色シルト混じり極細砂
(70) 10YR　5/2 灰黄褐色シルト混じり礫
（炭化物を少し含む）
(71) 10YR　6/6 明黄褐色礫混じり細砂
(72) 2.5Y　5/2 暗灰黄色極細砂
(73) 10YR　6/4 にぶい黄橙色粗砂
(74) 2.5Y　5/1 黄灰色シルト混じり極細砂
（炭化物を少し含む）
(75) 10YR　5/8 黄褐色粗砂細砂
(76) 10YR　7/2 にぶい黄橙色礫混じり極細砂
(77) 10YR　6/3 にぶい黄橙色礫混じり極細砂
(78) 10YR　5/3 にぶい黄褐色礫混じりシルト
(79) 10YR　7/3 にぶい黄橙色極細砂
(80) 10YR　6/6 明黄褐色細砂
(81) 10YR　5/2 灰黄褐色礫混じり細砂
（炭化物を多く含む）
(82) 10YR　4/4 褐色礫混じり細砂
（炭化物を少し含む）
(83) 7.5YR 6/8 橙色礫混じり細砂
(84) 10YR　3/3 暗褐色礫混じり極細砂
（植物遺体を少し含む）
(85) 10YR　6/1 褐灰色礫混じり極細砂
(86) 10YR　5/3 にぶい黄褐色礫混じり細砂
(87) 10YR　4/2 灰黄褐色礫混じり細砂（水性）
(88) 10YR　5/3 にぶい黄褐色礫混じり細砂
(89) 10YR　6/4 にぶい黄橙色礫混じり粗砂
(90) 10YR　6/2 灰黄褐色極細砂
(91) 2.5Y　5/4 黄褐色礫混じり粗砂
(92) 2.5Y　5/2 暗灰黄色礫混じりシルト
(93) 2.5Y　5/3 黄褐色礫混じり粗砂
(94) 2.5Y　3/2 黒褐色礫混じりシルト
（植物遺体を多く含む）
(95) 2.5Y　6/1 黄灰色礫混じり極細砂（焼土層）
（炭化物を多く含む）
(96) 2.5Y　5/3 黄褐色礫混じりシルト
（炭化物を多く含む）
(97) 2.5Y　6/8 明黄褐色礫混じりシルト
(98) 10YR　4/2 灰黄褐色礫混じり極細砂
(99) 10YR　5/2 灰黄褐色礫混じり粗砂
(100) 10YR　4/2 灰黄褐色礫混じり細砂
（炭化物を少し含む）

第３調査区（南壁）

① 盛土
② 表土
③ 10YR 5/6 黄褐色粗砂混じり細砂
④ 2.5Y　5/4 黄褐色礫混じりシルト
⑤ 10YR 4/4 褐色礫混じり細砂
⑥ 10YR 6/2 灰黄褐色礫混じり細砂
⑦ 10YR 3/2 黒褐色粗砂混じり細砂
⑧ 10YR 6/4 にぶい黄橙色礫混じり粗砂
⑨ 2.5Y　4/6 オリーブ褐色礫混じりシルト
⑩ 10YR 5/4 にぶい黄褐色礫混じり細砂
（炭化物・土器片を微少に含む）
⑪ 10YR 7/8 黄橙色礫混じりシルト
⑫ 2.5Y　7/2 灰黄色礫混じり細砂
⑬ 2.5Y　4/6 オリーブ褐色礫混じり細砂
⑭ 2.5Y　5/3 黄褐色礫混じりシルト
⑮ 2.5Y　6/4 にぶい黄色礫混じりシルト
⑯ 10YR 5/4 にぶい黄褐色礫混じりシルト
（10YR 7/8 黄橙色のブロック土を多く含む）
⑰ 10YR 5/6 黄褐色礫混じり細砂
⑱ 2.5Y　4/4 オリーブ褐色礫混じり細砂
⑲ 10YR　5/6 黄褐色礫混じり細砂
（炭化物・土器片を少し含む）
⑳ 2.5Y　4/6 オリーブ褐色礫混じり細砂
（炭化物・土器片を微少に含む）
㉑ 10YR　5/8 黄褐色礫混じり細砂
㉒ 10YR　6/6 明黄褐色礫混じりシルト
㉓ 10YR　4/4 褐色礫混じり細砂
（炭化物・土器片を多く含む）
㉔ 10YR　3/3 暗褐色礫混じり細砂（焼土層）
（炭化物・土器片を多く含む）
㉕ 7.5YR 7/6 橙色シルト
㉖ 10YR　6/4 にぶい黄橙色礫混じり細砂
㉗ 10YR　7/6 明黄褐色礫混じりシルト
㉘ 10YR　7/8 黄橙色礫混じり粘土（整地層）
㉙ 10YR　6/3 にぶい黄橙色礫混じり細砂
㉚ 10YR　4/4 褐色礫混じり細砂
㉛ 10YR　5/4 にぶい黄褐色礫混じり粗砂
㉜ 10YR　5/8 黄褐色粗砂混じりシルト
㉝ 10YR　6/6 明黄褐色礫混じり細砂



第69図　第１・３調査区土層断面実測図（１/60）

第２節　調査の結果

１　遺構と遺物

第１調査区の遺構面は合計５面検出した。第２・３調査区で検出した遺構が、第１調査区の遺構と関連性があるため、第１調査区で検出した遺構面に対応して検出された第２・３調査区の遺構は、便宜上その同一遺構面検出として報告している。

遺構は第１遺構検出面である㊳10YR8/4浅黄橙色細砂混じり粘土（上層整地層）層上では、溝、井戸、土坑、ピット、集石、石列、谷状地形、第２遺構検出面である㊸10YR3/4暗褐色礫混じり細砂（焼土層）層上では、土坑、土釜埋納遺構（土公供作法遺構）、ピット、石列、第３遺構検出面である㊻炭化物層上では、ピット、第４遺構検出面である㊼10YR7/8黄橙色シルトブロック（下層整地層）・㊼10YR6/3にぶい黄橙色粗砂・㊾10YR6/8明黄褐色シルト混じり極細砂層上では、掘立柱建物、溝、井戸、通路、土坑、甕埋納遺構、ピット、集石、第５遺構検出面である地山上では、溝、土坑、土釜埋納遺構（土公供作法遺構）、ピット、石列、谷状地形を検出し、また各遺構に伴って、多量の遺物が出土した。

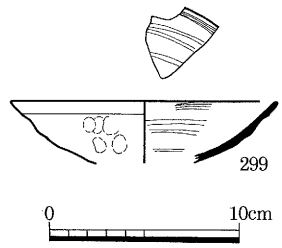
基本層序は、現地表面から①盛土（層厚0.2m）、⑤表土（同0.2m）、⑫10YR5/8黄褐色細砂（同0.2m）、㉟10YR5/8黄褐色礫混じり細砂（同0.1m）、㊳10YR8/4浅黄橙色細砂混じり粘土（同0.4m、上層整地層）、㊸10YR3/4暗褐色礫混じり細砂（同0.04m、焼土層）、㊻炭化物層（同0.03m）、㊼10YR7/8黄橙色シルトブロック（同0.02m、下層整地層）、㊷10YR5/8黄褐色粘土混じり細砂（同0.08m）であった。（第69図）

第１遺構検出面（第68図、図版19）

(1)溝

［ＳＤ１］（第70図、図版56）

ＳＤ１は第１調査区の北西部に位置する。平面形は遺構の北端・南端が調査区外に及ぶため、詳細は不明である。検出した規模は長さ3.84m、幅0.36m、深さ0.24mを測る。主軸方向はＮ－６°－Ｅである。また主軸方向が後述するＳＵ２と近似することから、何らかの関連がある遺構と考えられる。



第70図　ＳＤ１
出土遺物実測図

遺物は瓦器椀（299）が出土した。

［ＳＤ２］

ＳＤ２は第１調査区の南東端に位置する。平面形は不定形を呈する。規模は長軸2.58m、短軸0.76m、深さ0.09mを測る。主軸方向はＮ－２°－Ｅである。

遺物は出土したが、細片のため図化できなかった。

［ＳＤ３］（図版20）

ＳＤ３は第３調査区の東端に位置する。平面形は遺構の北端・南端が、調査区外に及ぶため、詳細は不明である。検出した規模は長さ0.7ｍ、幅0.9ｍ、深さ0.3ｍを測る。主軸方向はＮ－17.5°－Ｅである。遺構の西側には東側に面を持つ石列が設けられ、最大のものは30cm×21cm×12cmを測る。また西側の裏込めにもこぶし大の河原石が用いられている。

遺物は出土したが、細片のため図化できなかった。

(2)井戸

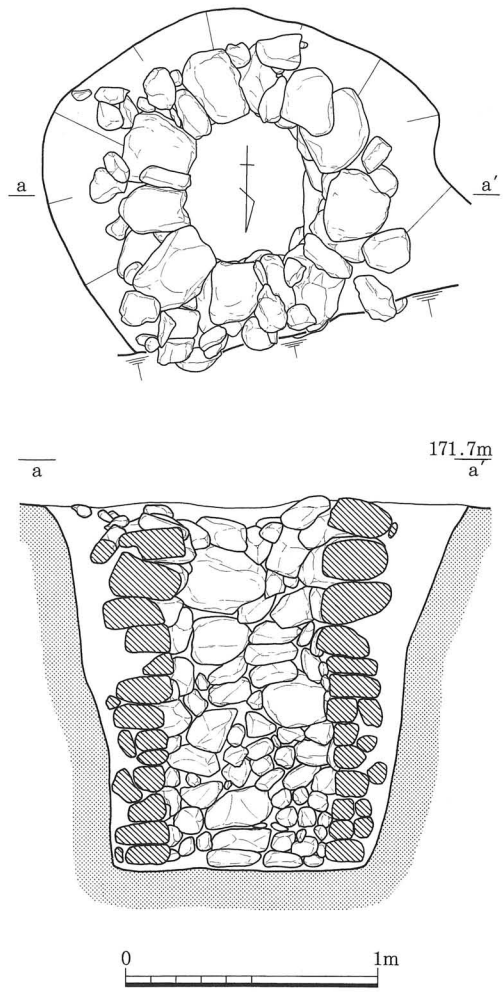
［ＳＥ１］（第71・72図、図版21・56）

ＳＥ１は第１調査区の北端部に位置する。平面形は遺構の北側を側溝に切られているが、ほぼ円形であることがわかる。検出した掘形の規模は長径1.57ｍ、短径1.36ｍ、深さ３ｍ、石組の内法は径0.56ｍ、深さ1.4ｍを測る。井戸は河原石で構築されており、石の最大のものは45cm×28cm×27cmを測る。

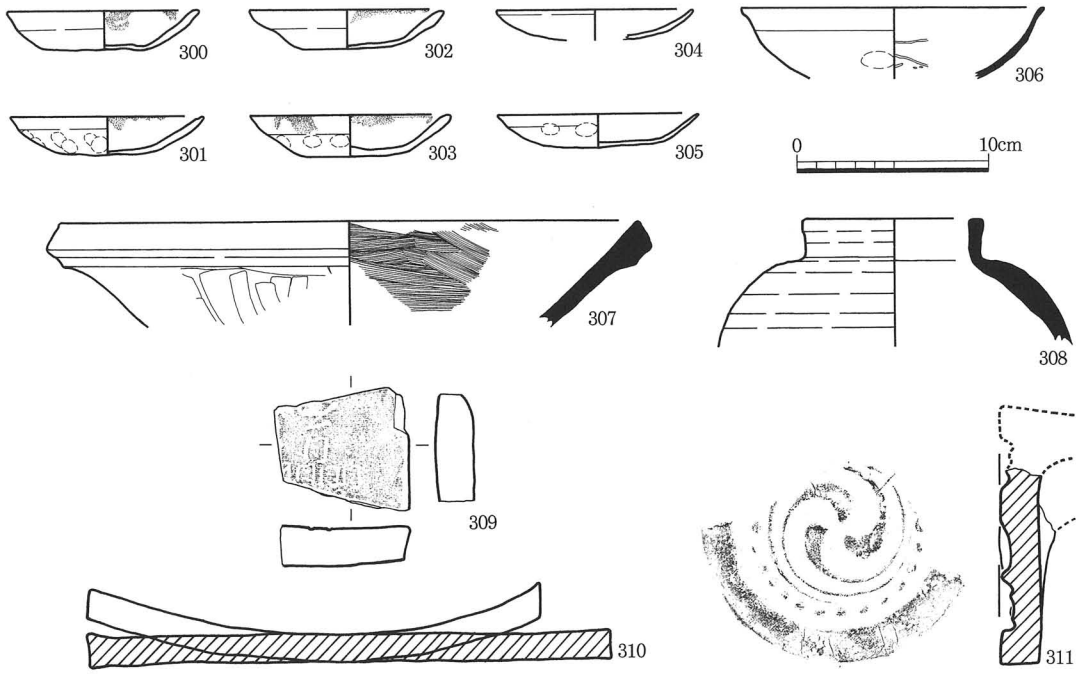
また石組の石は、下層の遺構の検出面である第４遺構検出面と、組み方が異なっていることが観察できたため、長期間にわたり使用されたことがわかった。また構築時期は、第１次構築が第５遺構検出面の時期で、第４遺構検出面にかけて使用され、第２次構築が第３遺構検出面の時期で、第１遺構検出面にかけて使用されていたことも、埋没した層序から窺えた。

遺物は土師質灯明皿（300～303）・皿（304・305）、瓦器椀（306）、瓦質擂鉢（307）、備前壺（308）、軒丸瓦（311）・平瓦（309・310）が出土した。（309）には「目」という漢字が多数、階段状に記されていて、その上方にも解読不明の文字が記されている。そして、それぞれの文字は天地が向き合うかたちで表記されている。一般的に瓦に書かれる文字等は、寄進瓦にみられる願文、施主名、紀年銘などが多いが、しかし、今回の場合、その性格は明らかに異なり、信仰に関わるものとなっていることが窺える。

この様な表記の民俗例としては、四国八十八ヶ所霊場の札所寺院に納められている札



第71図　ＳＥ１遺構実測図（1/30）



第72図　ＳＥ１出土遺物実測図

に、眼病の治癒を祈願するための、「目」という文字を多数記したものの存在が知られている[註1]。また、「鬼」や「目」等の漢字一文字を多数書写する類例として、陰陽道や修験道の呪符もみられる。

以上のことから、今後、この様な表記方法の意図を考察する参考資料における、類例の一つになることを付記しておきたい。

(3)土坑

［ＳＫ１］

ＳＫ１は第１調査区の南西端に位置する。平面形は不定形を呈する。規模は長軸0.78m、短軸0.62m、深さ0.08mを測る。

遺物は出土したが、細片のため図化できなかった。

［ＳＫ２］

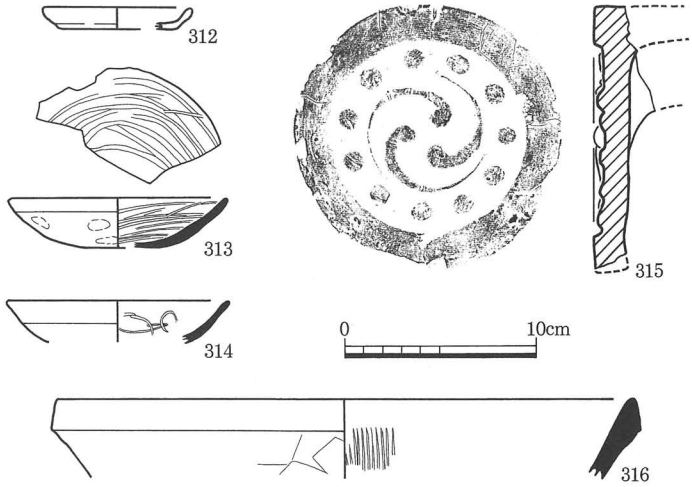
ＳＫ２は第１調査区の北西部、ＳＤ１の東側0.2mに位置する。平面形は遺構の北側が後述するＳＵ１に切られているため、詳細は不明である。検出した規模は南北長0.98m、東西長1.66m、深さ0.13mを測る。

遺物は出土したが、細片のため図化できなかった。

［ＳＫ３］（第73図、図版56）

ＳＫ３は第１調査区の北西部、ＳＫ２の東側0.3mに位置する。平面形は遺構の北側が後述するＳＵ１に切られているため、詳細は不明である。検出した規模は長軸4.05m、短軸1.42m、深さ0.16mを測る。

遺物は瓦質擂鉢（316）、瓦が出土した。



第73図　ＳＫ３・６・９出土遺物実測図

［ＳＫ４］

ＳＫ４は第１調査区の中央部に位置する。平面形は不定形を呈する。規模は長軸1.54m、短軸0.98m、深さ0.05mを測る。

遺物は出土したが、細片のため図化できなかった。

［ＳＫ５］

ＳＫ５は第１調査区の中央部、ＳＫ４の北側1.4mに位置する。平面形は不定形を呈する。規模は長軸0.64m、短軸0.32m、深さ0.02mを測る。

遺物は出土したが、細片のため図化できなかった。

［ＳＫ６］（第73図、図版56）

ＳＫ６は第１調査区の中央部東側、ＳＫ５の東側0.7mに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径0.8m、短径0.67m、深さ0.09mを測る。

遺物は軒丸瓦（315）が出土した。

［ＳＫ７］

ＳＫ７は第１調査区の南端に位置する。平面形は遺構の南側が側溝に切られているため、詳細は不明である。検出した規模は南北長0.84m、東西長0.58m、深さ0.07mを測る。

遺物は出土したが、細片のため図化できなかった。

［ＳＫ８］

ＳＫ８は第１調査区の南東部、ＳＤ２の東側0.8mに位置する。平面形は不定形を呈する。規模は長軸0.56m、短軸0.32m、深さ0.05mを測る。

遺物は出土したが、細片のため図化できなかった。

［ＳＫ９］（第73図、図版56）

ＳＫ９は第１調査区の南東部、ＳＤ２の北側に近接し位置する。平面形は不定形を呈する。規模は長軸0.91m、短軸0.22m、深さ0.03mを測る。

遺物は土師質皿（312）、瓦器椀（313・314）が出土した。

(4)ピット

［ＳＰ１］

ＳＰ１は第１調査区の西側、ＳＫ３の西側に近接し位置する。平面形は円形を呈する。規模は径0.44m、深さ0.09mを測る。

遺物は出土したが、細片のため図化できなかった。

［ＳＰ２］

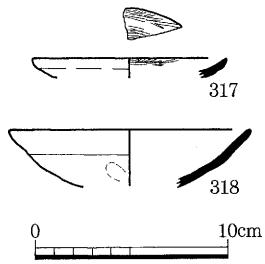
ＳＰ２は第１調査区の南東部、ＳＫ８の南側に近接し位置する。平面形は不定形を呈する。規模は長軸0.4m、短軸0.36m、深さ0.07mを測る。

遺物は出土したが、細片のため図化できなかった。

［ＳＰ３］（第74図）

ＳＰ３は第１調査区の東側、ＳＫ９の北側1.4mに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径0.4m、短径0.21m、深さ0.04mを測る。

遺物は瓦質皿（317）、瓦が出土した。



第74図　ＳＰ３・４出土遺物実測図

［ＳＰ４］（第74図）

ＳＰ４は第１調査区の南東隅に位置する。平面形は長楕円形を呈する。規模は長径0.36m、短径0.18m、深さ0.04mを測る。

遺物は瓦器椀（318）が出土した。

［ＳＰ５］

ＳＰ５は第１調査区の南東隅、ＳＰ４の南側0.4mに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径0.36m、短径0.18m、深さ0.04mを測る。

遺物は出土したが、細片のため図化できなかった。

(5)集石

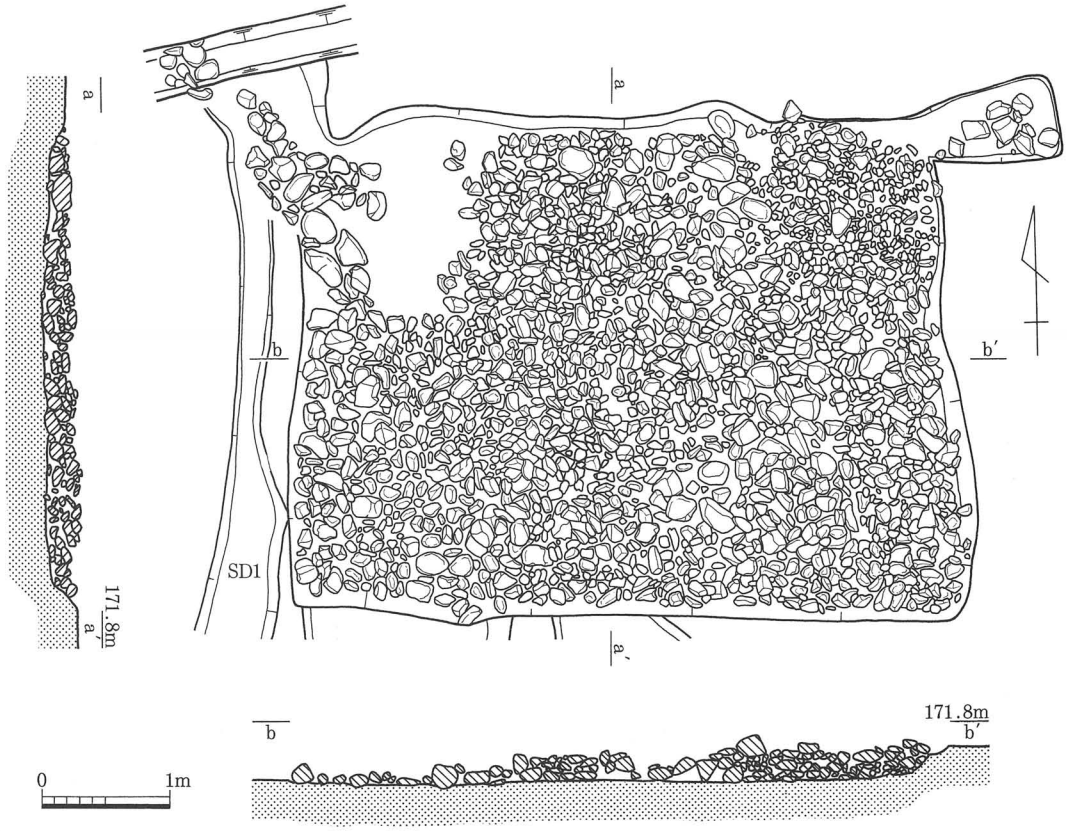
［ＳＵ１］（第75・76図、図版21・56）

ＳＵ１は第１調査区の北側、ＳＤ１の東側に接して位置する。遺構の主体となる掘形の平面形は、南側でＳＫ２・３を切るように長方形を呈している。また、遺構内には北西端の一部を除いて、河原石が詰められている。規模は主体となる長方形の長辺3.38m、短辺2.63m、深さ0.13mを測る。河原石の最大のものは15cm×10cm×８cmを測る。調査区の北西隅には、河原石を用いた暗渠が付属し、北東隅にも当初は暗渠であったかもしれない河原石の集石が確認できた。

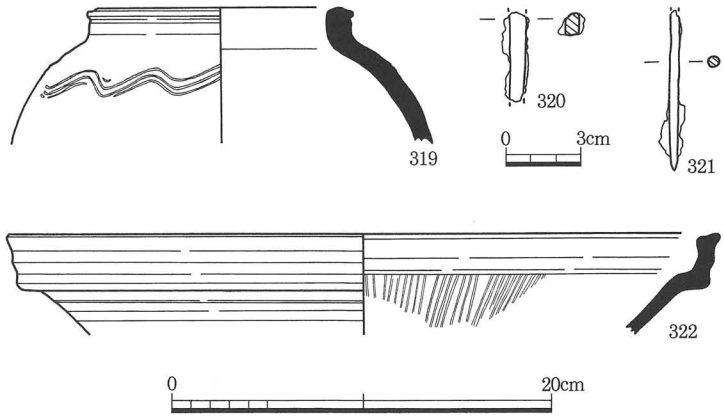
遺物は備前壺（319）、丹波擂鉢（322）、鉄釘（320・321）が出土した。

［ＳＵ２］（第77・78図、図版22・56）

ＳＵ２は第１調査区の北西端、ＳＤ１の西側に接して位置する。遺構の平面形は南端、北端、西側が調査区外に及ぶため、詳細は不明である。また、遺構内にはこぶし大の河原



第75図　ＳＵ１遺構実測図（１/60）



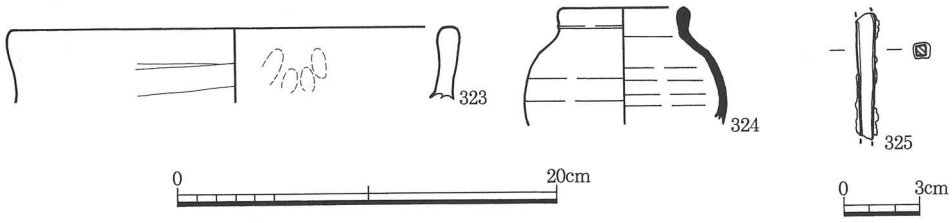
第76図　ＳＵ１出土遺物実測図

石と平瓦の破片が葺かれている。検出した規模は長さ4.88m、幅2.88m、石・瓦葺きの幅2.5m、高さ1.08mを測る。主軸方向はＮ－６°－Ｅである。遺構の東側にはほぼ主軸方向が共通して、構築されているＳＤ１が存在することから、関連性があると考えられる。

遺構の性格としては、『金剛寺境内図』（第171図）によると、調査区西側の谷に、子院が描かれていることから、各子院や各建物の境界を示すものとも考えられる。

遺物は土師質炮烙（323）、丹波お歯黒壺（324）、軒丸瓦・軒平瓦、鉄釘（325）が出土した。

第77図　ＳＵ２遺構実測図（１/60）



第78図　ＳＵ２出土遺物実測図

(6)石列

［ＳＷ１］（図版20）

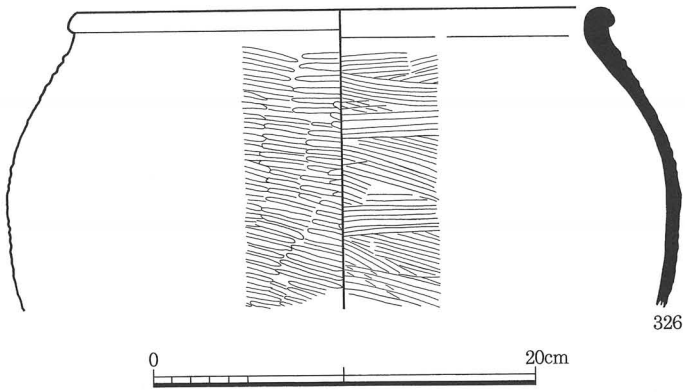
ＳＷ１は第３調査区の東側、ＳＤ３の西側0.4mに位置する。平面形は遺構の北端・南端調査区外に及ぶため、詳細は不明である。規模は長さ0.8m、幅0.2～0.5m、高さ0.15mを測る。主軸方向は並列しているＳＤ３内の石列と共通している。

遺物は出土しなかった。

(7)谷状地形

［ＮＶ１］（第79図、図版57）

ＮＶ１は第１調査区の北東端に位置する。平面形は遺構の北側・東側が調査区外に及ぶため、詳細は不明である。検出した規模は南北長5.16m、東西長2.92m、深さ0.46mを測る。



第79図　ＮＶ１出土遺物実測図

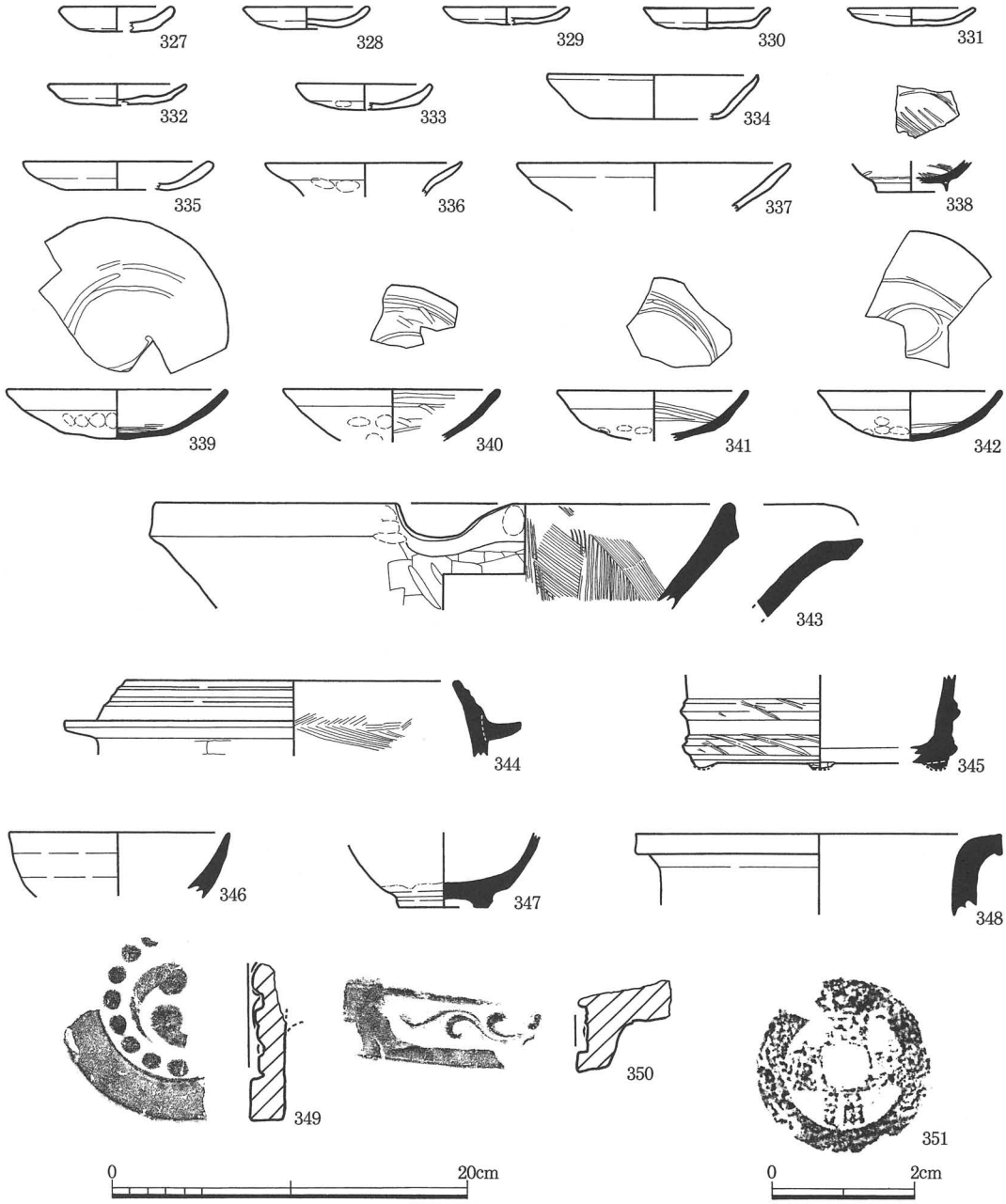
遺物は瓦質甕（326）が出土した。

(8)包含層（第80～82図、図版57）

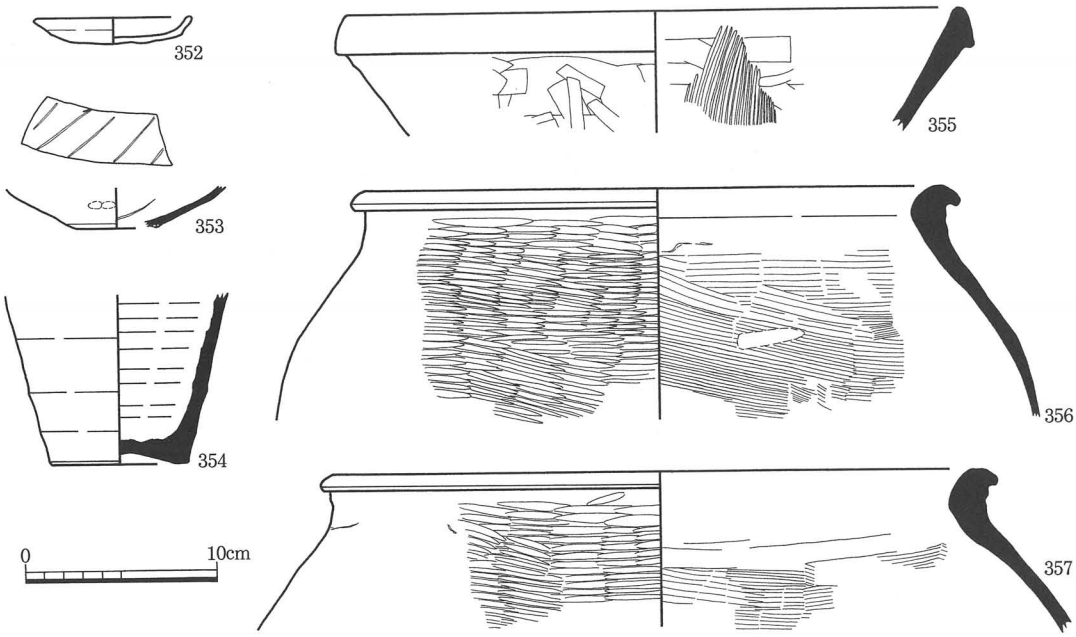
遺物は第１調査区の包含層である表土から㊳10YR8/4浅黄橙色細砂混じり粘土（上層整地層）層上までの層中から、土師質皿（327～337）、瓦器小椀（338）・椀（339～342）、瓦質土釜（344）・片口擂鉢（343）・芋桶（345）、瀬戸美濃系天目茶椀（346）、唐津椀（347）、常滑壺（348）、軒丸瓦（349）・軒平瓦（350）・丸瓦、銅銭（351）が出土した。

第２調査区からは、土師質皿（352）、瓦器椀（353）、瓦質擂鉢（355）・甕（356・357）、陶器壺（354）、鉄釘が出土した。

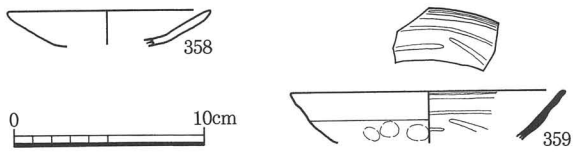
第３調査区からは、土師質皿（358）、瓦器椀（359）が出土した。



第80図　第１調査区第１遺構検出面包含層出土実測図



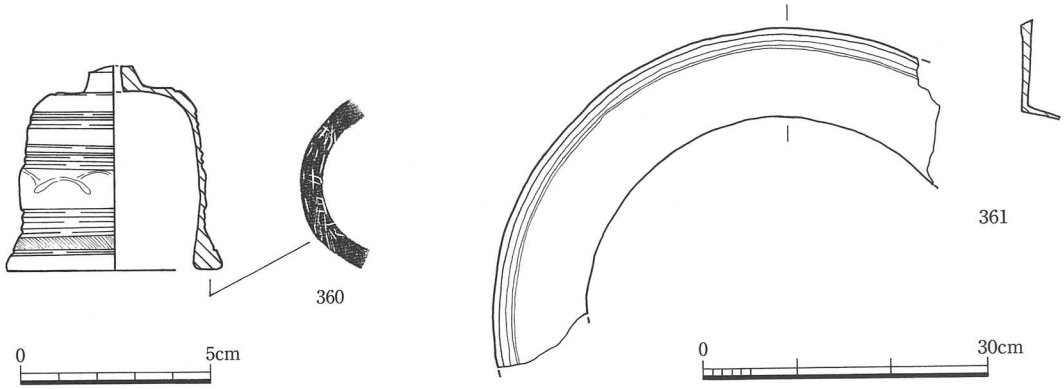
第81図　第２調査区第１遺構検出面包含層出土遺物実測図



第82図　第３調査区第１遺構検出面包含層出土遺物実測図

(9)表採（第83図、図版58）

遺物は御詠歌に用いる鈴鉦、もしくは金剛鈴の鈴身（360）、護摩炉の可能性のある鉄製品（361）が出土した。（360）の底面には「粉河中田作」の刻銘があり、粉河寺の門前に拠点をおいて、仏具を中心に鋳造していた、粉河鋳物師による製品である[註2]。なお、制作時期については、色調が銀色を帯びていることから、ニッケルなどを含有する合金から成るものとみられ、近代のものと考えられる。（361）の口縁部の裏には、スサに含まれる植物質のものが付着しており、護摩壇に取り付けられた痕跡であるのかも知れない[註3]。



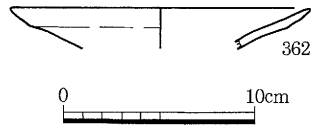
第83図　第１調査区表採遺物実測図

第２遺構検出面（第85図、図版23）

(1)土坑

［ＳＫ10］（第84図、図版25）

ＳＫ10は第１調査区の北西部に位置する。平面形は北側を上層の遺構であるＳＵ１に切られているため、詳細は不明である。検出した規模は長軸1.3m、短軸0.96m、深さ0.08mを測る。



第84図　ＳＫ10
出土遺物実測図

遺物は土師質皿（362）出土した。

［ＳＫ11］

ＳＫ11は第１調査区の南側、ＳＫ10の南東側7.1mに位置する。平面形は不定形を呈する。規模は長軸0.98m、短軸0.96m、深さ0.06mを測る。

遺物は出土したが、細片のため図化できなかった。

(2)土釜埋納遺構（土公供作法遺構）

［ＳＯ１］（第86～88図、図版24・25・58～61）

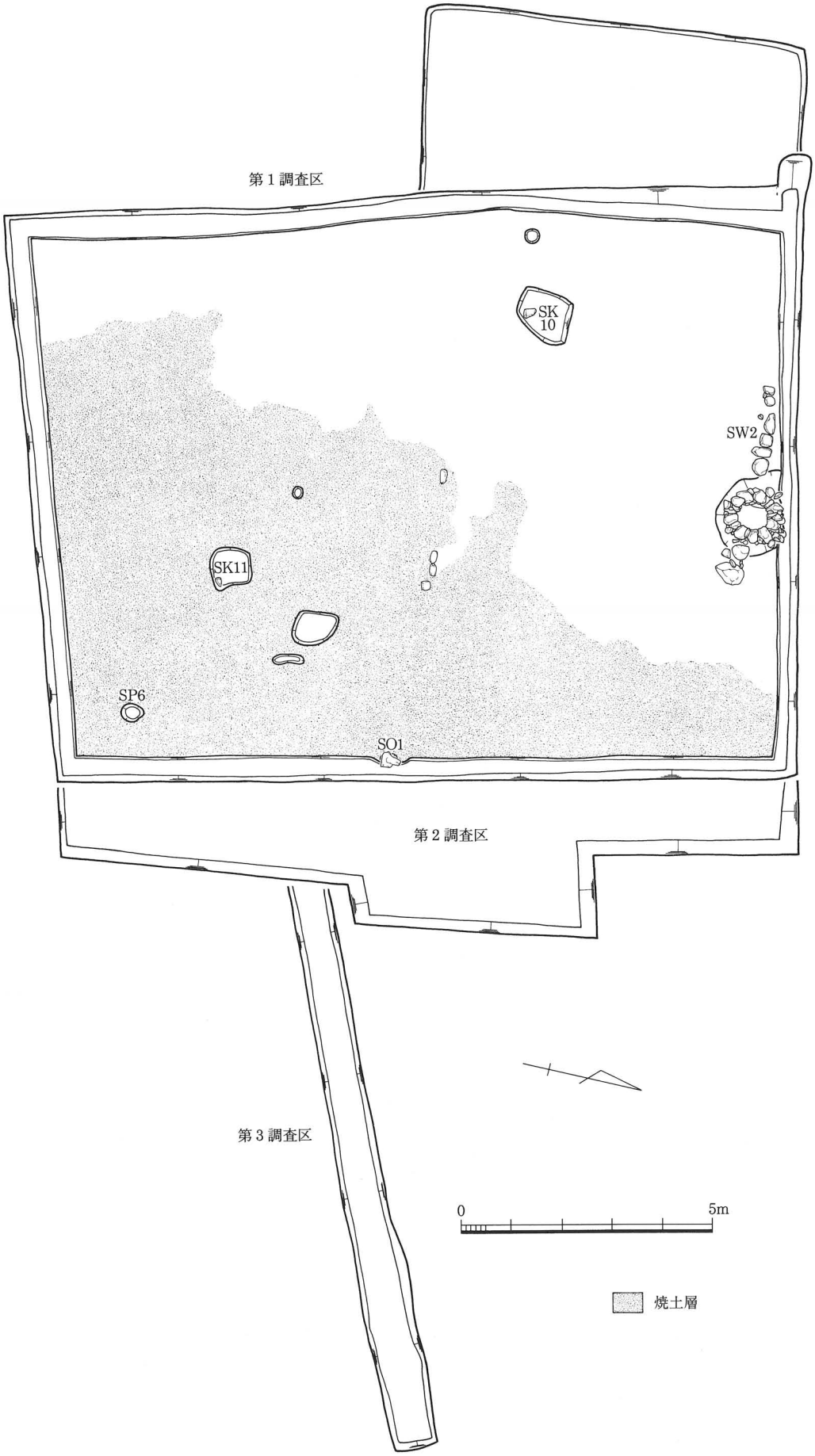
ＳＯ１は第１調査区の中央部東端に位置する。遺構は掘形である土坑を伴い、東側を側溝に切られているが、当初の平面形は楕円形であったと考えられる。検出した規模は長径0.32m、短径0.24m、深さ0.12mを測る。また、土坑の内部には瓦質土釜１点が据えられ、土釜体部の北側外面に瓦質皿３点が、見込みを内側に向け、体部に沿って立てられていた。土釜内部には土師質皿34点、瓦質皿12点、そのほとんどが伏せられた状態で納められており、銅銭44点も一緒に納められていた。そして土釜の口縁部には、相当な重量の石１点が、蓋をする様な状態で乗せられていた。この様な状況から、この石は埋納地点を表示する鎮石とみられる。

出土した遺物としては、土師質皿（363～396）、瓦質皿（397～408）・土釜（409）、銅銭（410～453）があった。なお、出土した銅銭は、いずれも模鋳銭では無く、本銭を用いていることも判明した[註4]。

遺構の性格としては、真言宗の地鎮修法の作法である「地天供作法」・「土公供作法」に則り修されたものと考えられ、また、その出土形態は、土釜の外面に二次焼成痕が認められないことと、共伴する土師質皿や瓦質土器の器種構成や出土点数などから、出土品分類のⅡ′類に相当するものと考えられる。

更に、修法は瓦質皿の出土点数が12点であることから、修法に用意された幣串は12本、もしくは５本で、この幣串は「十二天」、「12ヶ月を一年をとする月数」や、「五帝龍王」、「五智如来」の依り代であったことが推測される。

またＳＯ１は1360年の兵火により成された焼土層上で検出されているが、この年は閏年であることと、瓦質皿が尾谷分類８類に相当した15世紀後半で、その出土点数が12点であ

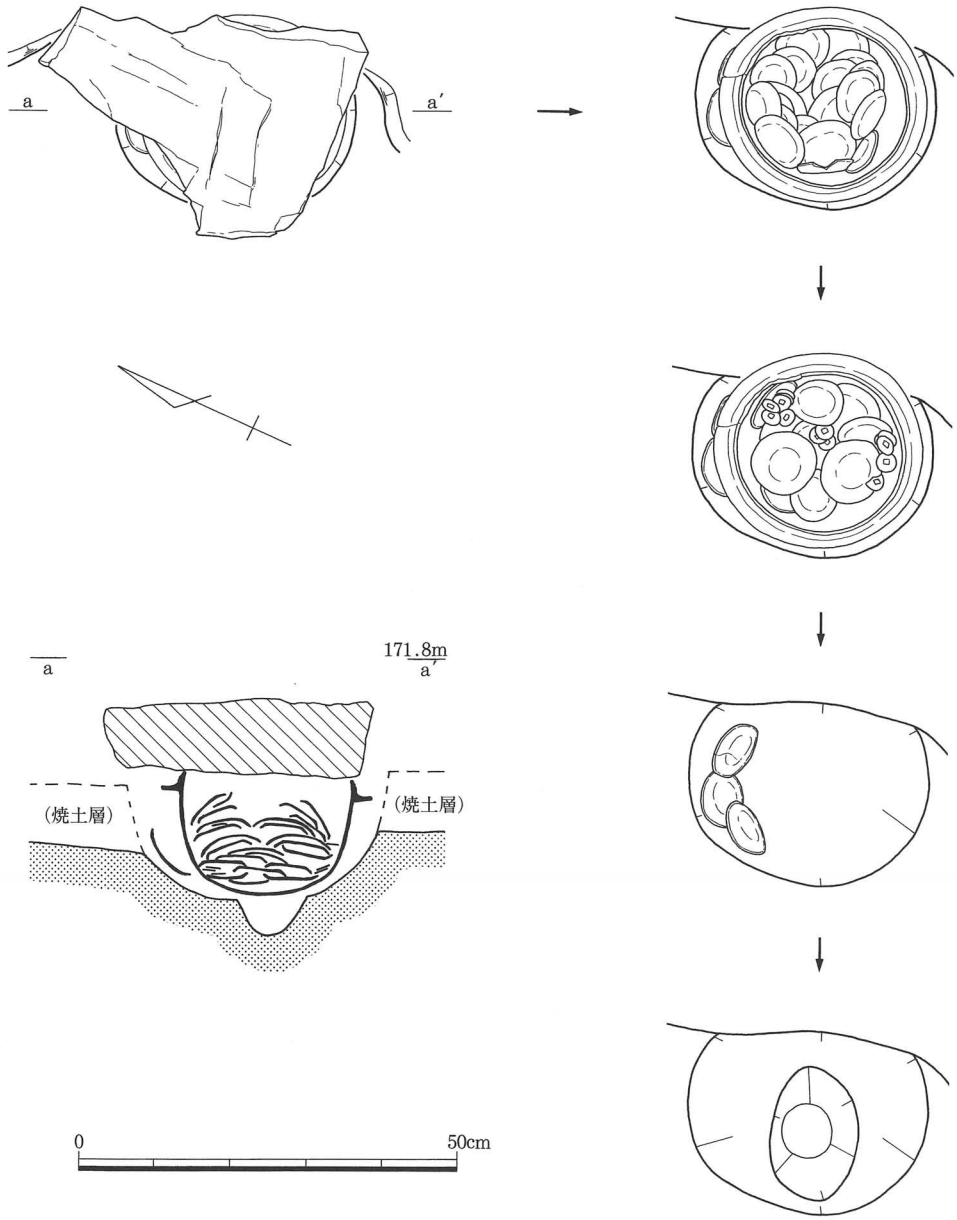


第85図　第１～３調査区第２遺構検出面遺構配置図（１/120）

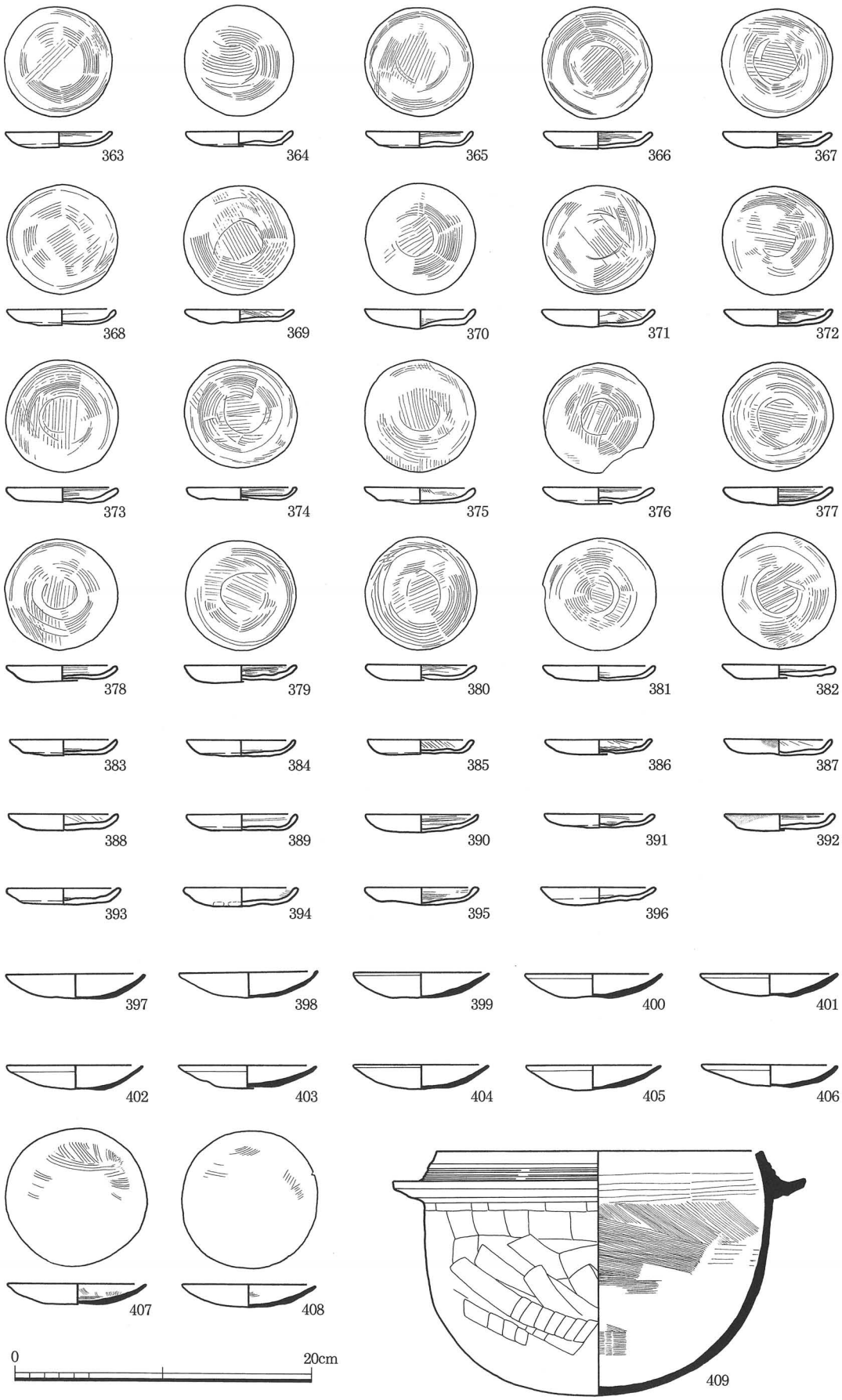
ることなどから、修法は1360年の翌年以降から15世紀後半にかけての閏年以外の時期に、修法が行われたことが考えられる。しかし、建物跡が未検出で、調査面積も狭小のため、周辺遺構との関連、またその対象は不明である。

銅銭44点の出土点数については、『土公用意並鎮宅等』（天野山金剛寺蔵）の内容に、供物である銅銭に関し、「施主年数銭等可儲置之」とあることから、修法時点での子院の住職や有力な信者などの年齢数（数え年）であると考えられる[註5]。

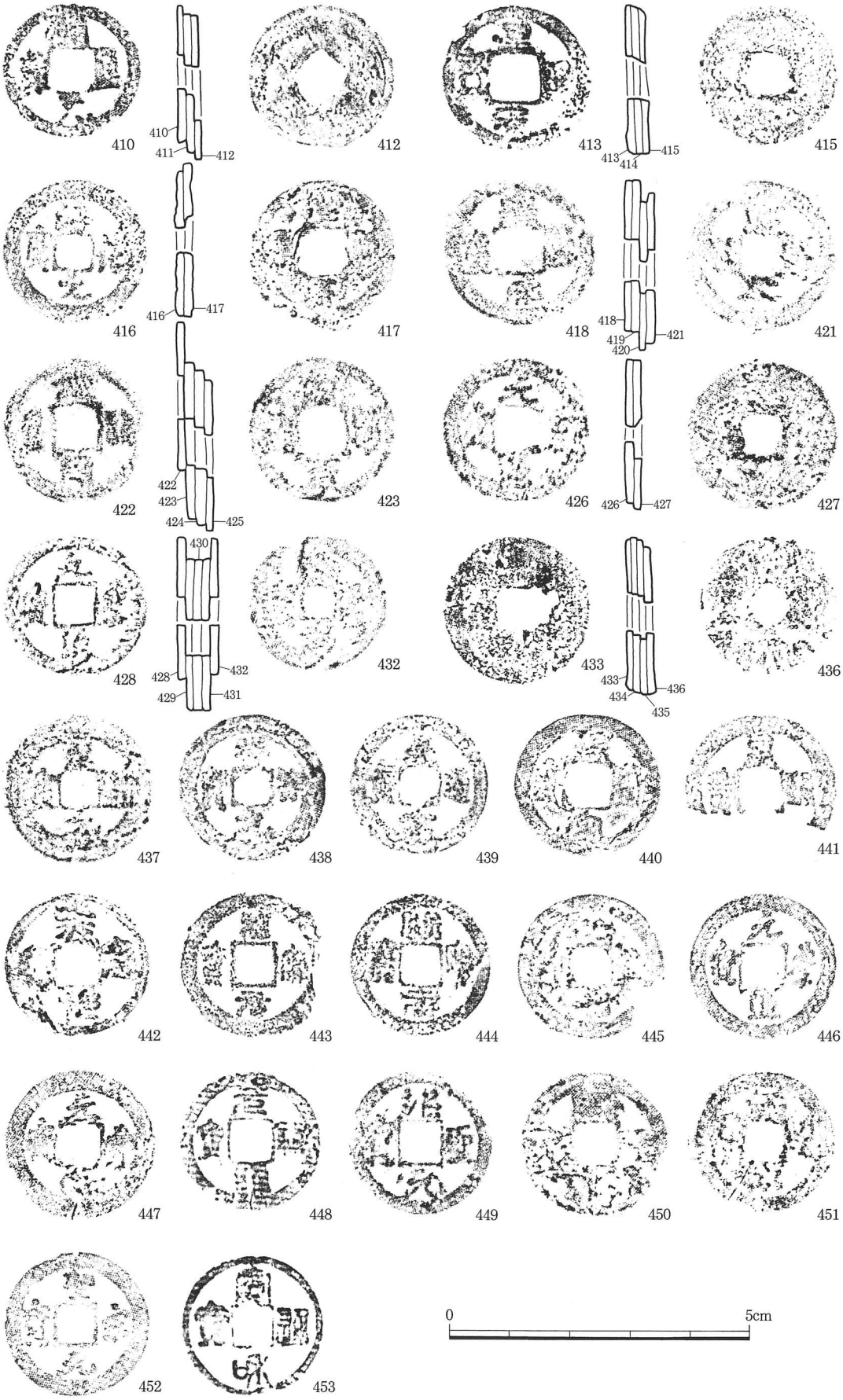
なお、遺構は掘形を伴っていたと考えられるが、確認はできなかった。しかし、下層遺構検出面で遺構が検出されたことや、上部に乗せられた石の位置と状況から、焼土層形成後の修法跡と考えられ、遺構の構築時期は第２遺構検出面と認められる。



第86図　ＳＯ１遺構実測図（１/10）



第87図　ＳＯ１出土遺物実測図（１）



第88図　ＳＯ１出土遺物実測図（２）

遺物番号	銭貨名	初鋳造年	遺物番号	銭貨名	初鋳造年	遺物番号	銭貨名	初鋳造年
410	開元通宝	621年（唐）	427	天元通宝？		444	熙寧元宝	1068年（北宋）
413	皇宋通宝	1039年（北宋）	428	天豊通宝	1078年（北宋）	445	熙寧元宝	1068年（北宋）
415	開元通宝	621年（唐）	432	洪武通宝	1368年（明）	446	天豊通宝	1078年（北宋）
416	祥符元宝	1008年（北宋）	437	至道元宝	995年（北宋）	447	天豊通宝	1078年（北宋）
417	開元通宝	621年（唐）	438	祥符元宝	1008年（北宋）	448	元祐通宝	1086年（北宋）
418	皇宋通宝	1039年（北宋）	439	皇宋通宝	1039年（北宋）	449	紹聖元宝	1094年（北宋）
421	景祐元宝	1034年（北宋）	440	皇宋通宝	1039年（北宋）	450	紹聖元宝	1094年（北宋）
422	元祐通宝	1086年（北宋）	441	皇宋通宝	1039年（北宋）	451	聖宋元宝	1101年（北宋）
425	皇宋通宝	1039年（北宋）	442	熙寧元宝	1068年（北宋）	452	聖宋元宝	1101年（北宋）
426	天豊通宝	1078年（北宋）	443	熙寧元宝	1068年（北宋）	453	宣和通宝	1119年（北宋）

第２表　ＳＯ１出土輸入銭一覧表

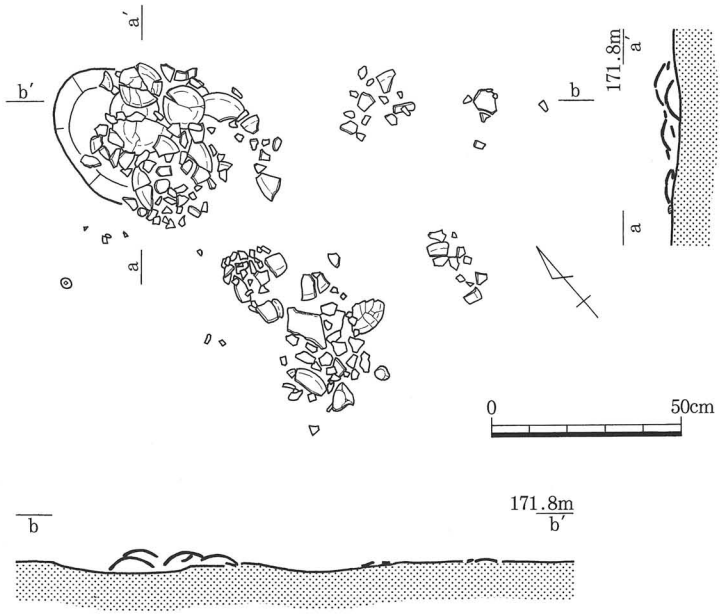
(3)ピット

［ＳＰ６］（第89・90図、図版25・62）

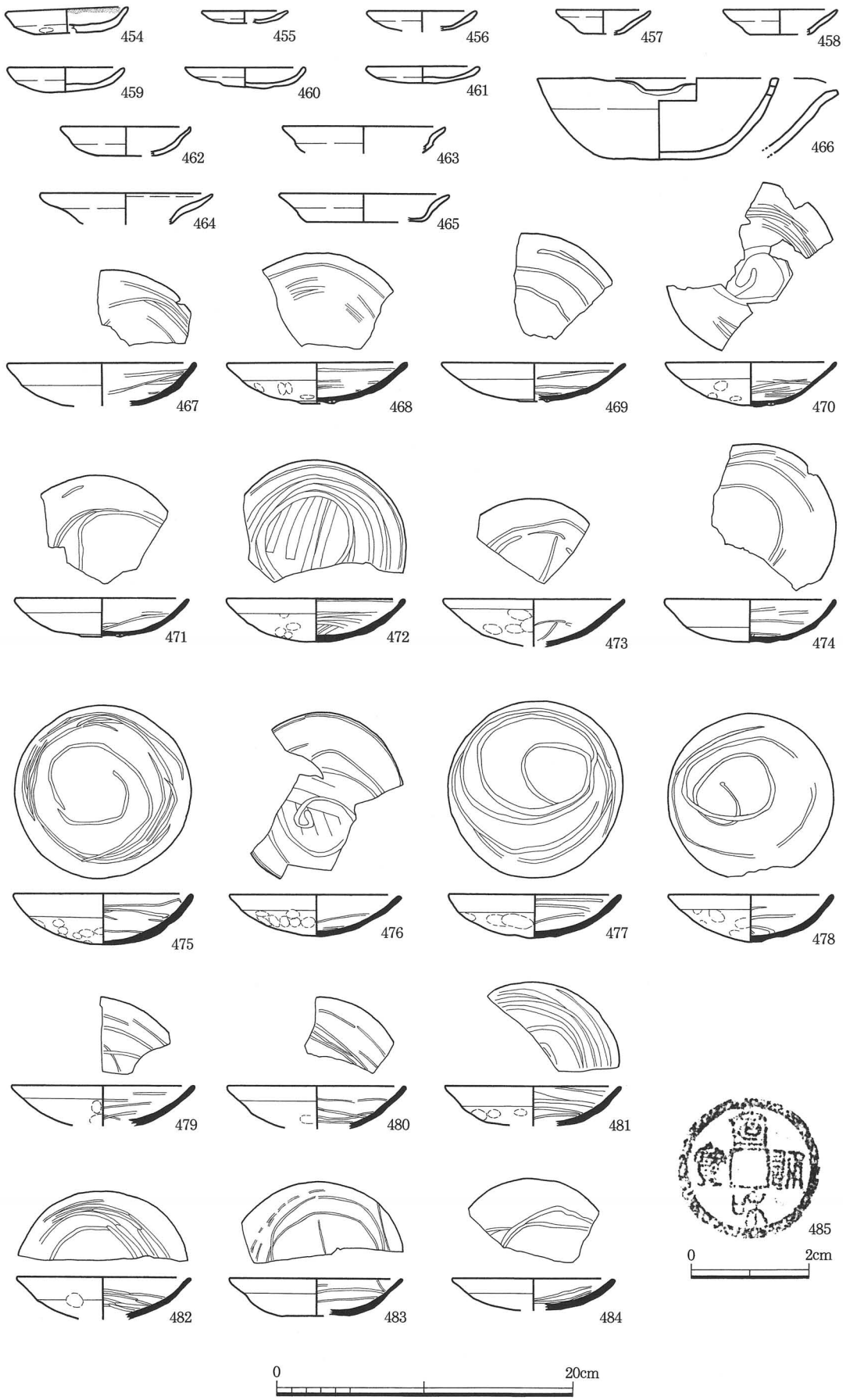
ＳＰ６は第１調査区の南東端に位置する。遺構は掘形である土坑を伴い、平面形はやや歪な楕円形を呈する。検出した土坑の規模は長径0.42m、短径0.36m、深さ0.05mを測る。土坑は大変浅く、内部及び周辺には土師質皿（20点確認）、瓦器椀（26点確認）が伏せられた状態で検出された。また、本来ＳＰ６およびその周辺に納められていた可能性のある土師質皿、瓦器椀の破片も、周囲から散乱した状況で検出された。

遺物は土師質灯明皿（454）・皿（455～465）・片口鉢（466）、瓦器椀（467～484）、宣和通宝（初鋳1119年、485）などが出土した。

以上のことから、ＳＰ６は遺構の保存状況が、良好でないため断定はできないが、ＳＯ１の様に「地天供作法」・「土公供作法」に則り修されたが、その出土形態は土釜を伴わず、共伴する土師質皿、瓦器椀の器種構成やその出土点数などから考え合わせると、Ⅲ′類の出土状況に極めて近いとの印象を持ったので付記しておきたい。



第89図　ＳＰ６周辺遺物出土状況実測図（１/20）



第90図　ＳＰ６出土遺物実測図

(4)石列

［ＳＷ２］

ＳＷ２は第１調査区の北端に位置する。平面形は西端が調査区外に及ぶため、詳細は不明であるが、ＳＥ１の東西に付属し北側に面を持つ石列であることがわかる。検出した規模は長さ3.6ｍを測る。主軸方向はＮ－88°－Ｅである。石列に用いられた石は河原石で、最大58cm×41cm×29cmを測る。

遺物は出土しなかった。

(5)包含層（第91図、図版63）

遺物は第１調査区の包含層である㊳10YR8/4浅黄橙色細砂混じり粘土（上層整地層）層中から、土師質灯明皿（486）・皿（487～493）・火鉢、瓦器皿（494）・小椀（498）・椀（499～502）、瓦質皿（495～497）・土釜（503）・擂鉢（504）・片口擂鉢（505）、須恵質錬鉢（506）、陶器、青磁碗（507）、白磁碗（508）、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦、粘板岩製の砥石（509）、半鐘ないし梵鐘とみられる鉄製品（510）、永楽通宝（初鋳1408年、511）が出土した。

第３遺構検出面（第92図、図版26）

この面では、後述する第４遺構検出面で検出された、ＳＢ１・ＳＤ４を覆う兵火によって形成された焼土層を除去し、焼失状況を検出した。また、その他には、この第３遺構検出面の時期に構築されたと考えられる遺構として、ピットがあった。

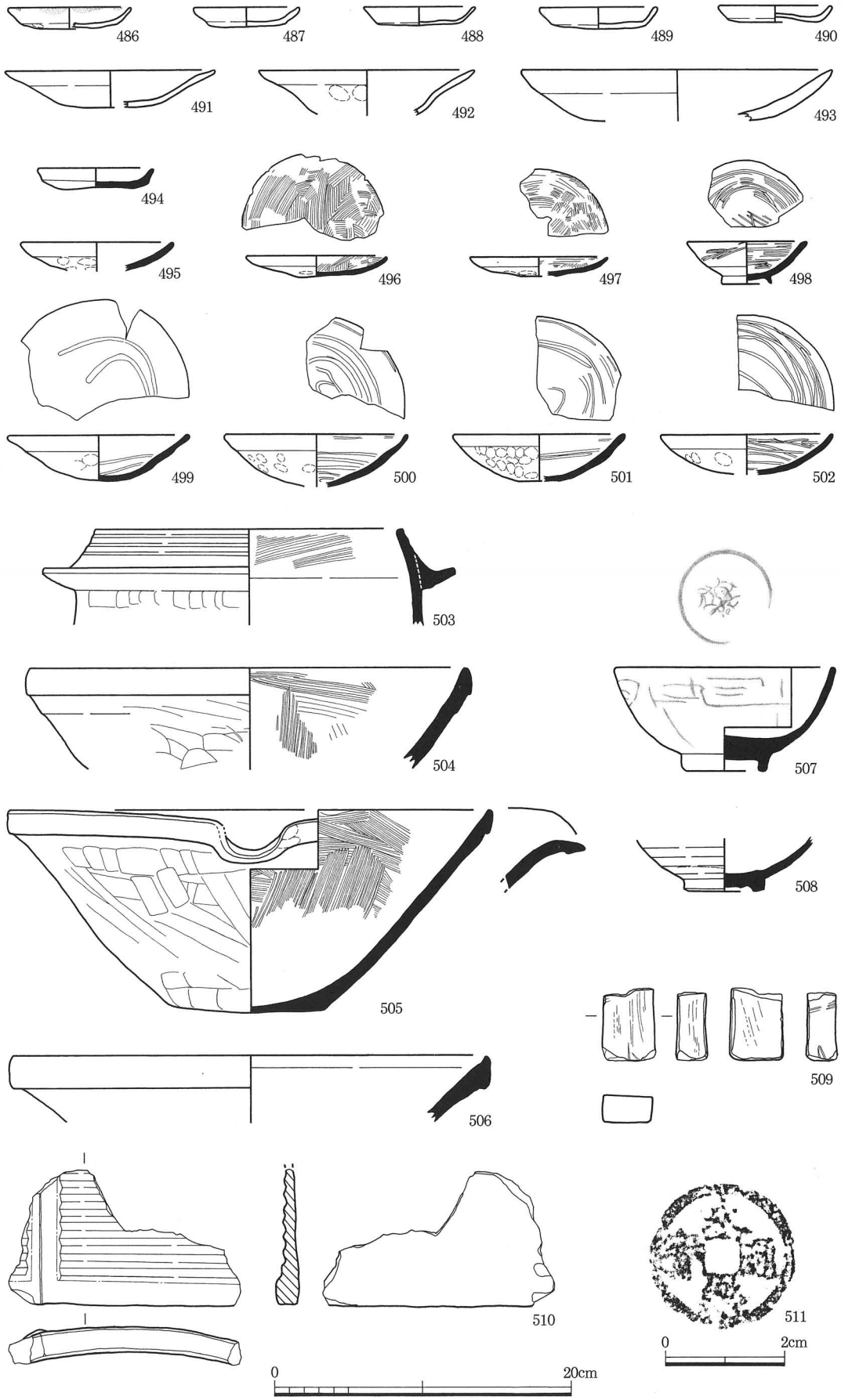
しかし、第３遺構検出面に露頭する後述の下層遺構である、焼失した建造物のＳＢ１やＳＤ４の埋没跡からは、その部材と考えられる炭化した木材が出土し、また焼土層からも、おびただしい土器片と共に木材・建物の壁材とみられる土塊が、出土しているのが確認されたので、ここでＳＢ１やＳＤ４についても述べておく。なお、木材は火災により炭化しており、土器片や壁材と見られる土塊も、赤色酸化していた。

(1)掘立柱建物

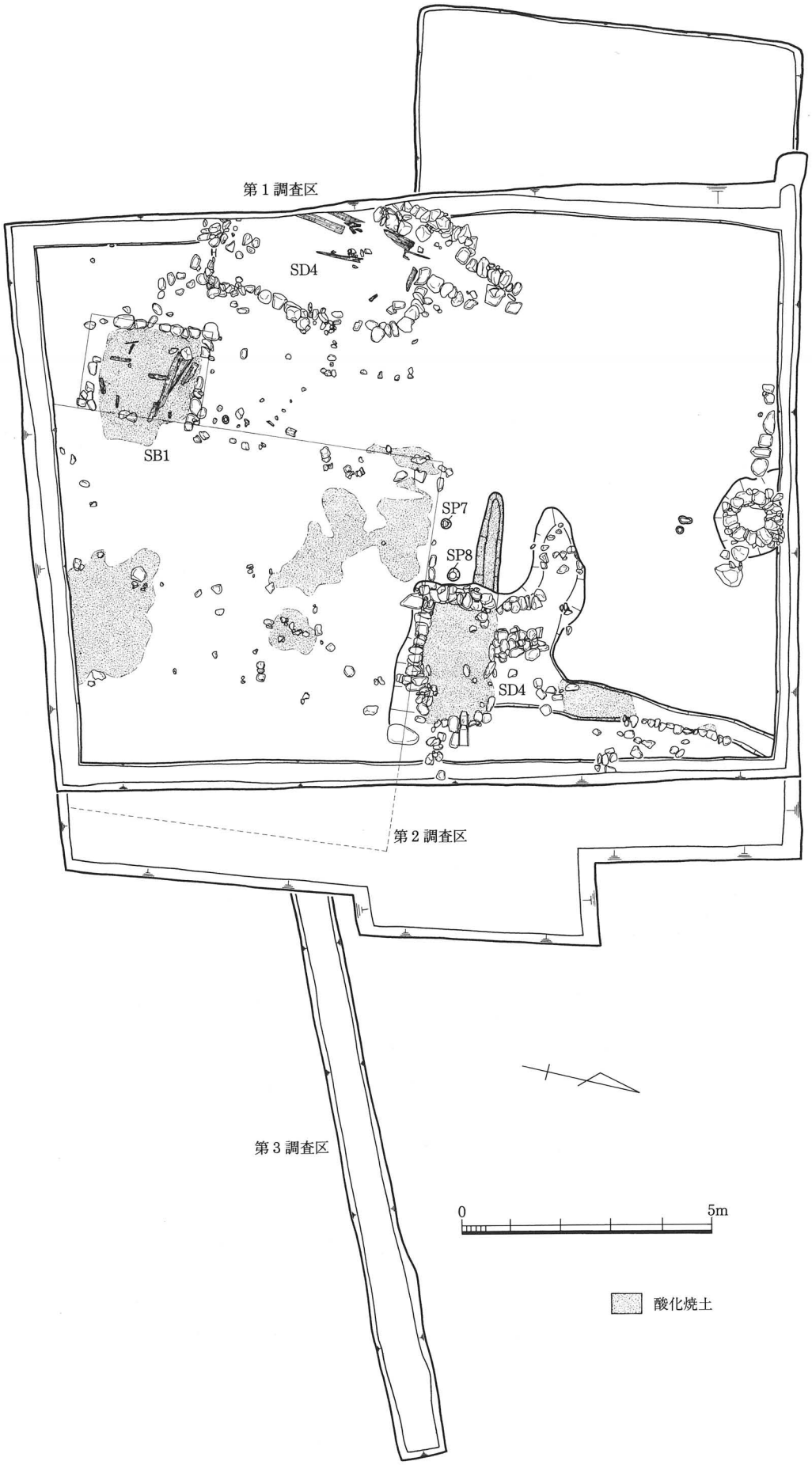
［ＳＢ１］（第93・94図、図版27）

ＳＢ１は第１調査区の南東部と第２調査区の南側にまたがって位置する。但し、第２調査区でのＳＢ１の焼失状況は、調査の進行上行わなかったが、後述する第４遺構検出面で検出しているため、埋没していたことが推測される。建物に伴う北側の壁材の構造は土壁で、壁芯に木材を格子状に組み、骨組みとしていた。外壁は既に剥落していたため、壁厚は不明である。また、建物に伴う北壁の痕跡のある地覆石の南側では、北壁が建物の内側に倒壊した状態で、炭化した木材などを伴って検出された。

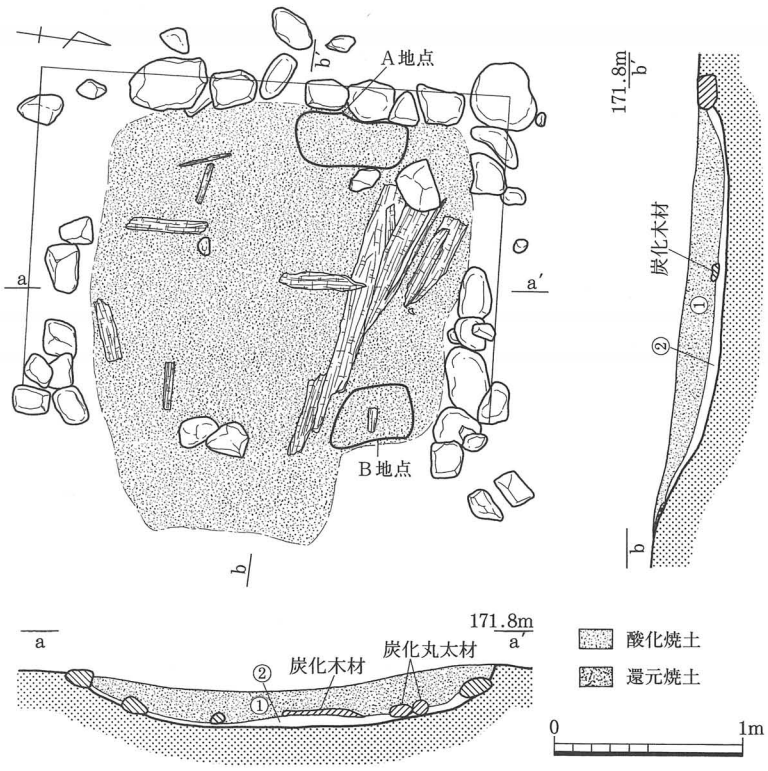
建物の柱跡については、第４遺構検出面で確認できたので、詳細は第４遺構検出面で述べている。



第91図　第１調査区第２遺構検出面包含層（上層整地層）出土遺物実測図

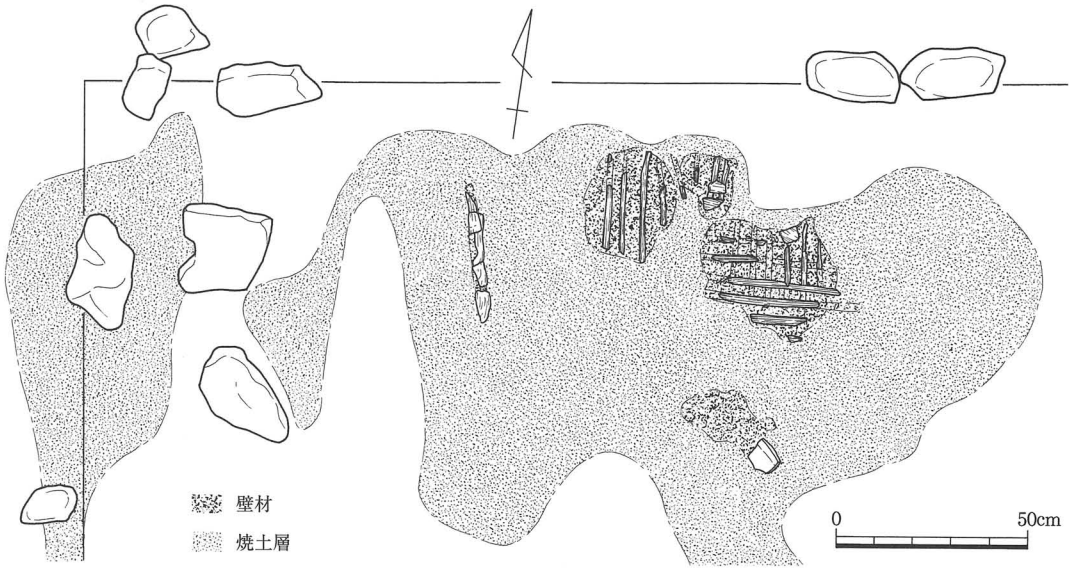


第92図　第１～３調査区第３遺構検出面遺構配置図（１/120）



① 10YR 3/4 暗褐色礫混じり細砂(焼土層)　② 10YR 7/8 黄橙色シルト(下層整地層)

第93図　ＳＢ１(部分)検出状況実測図（１/40）

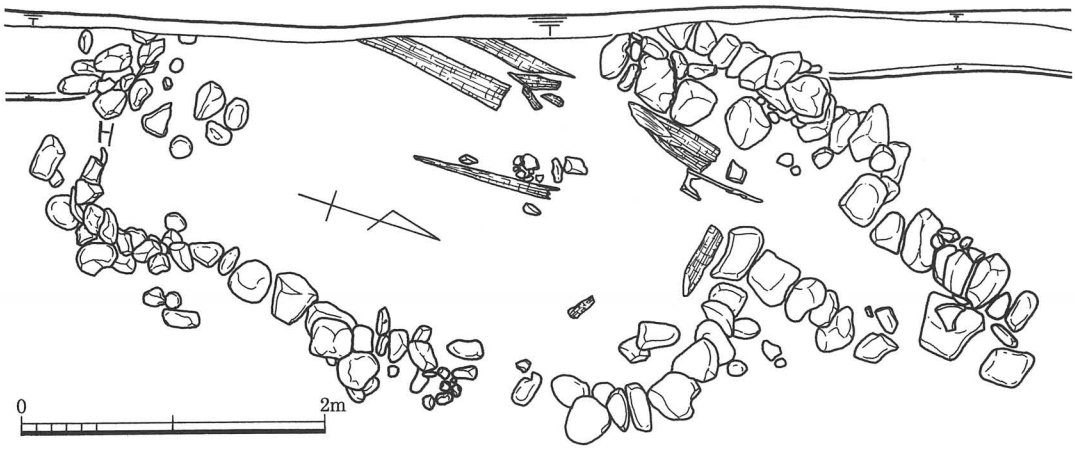


第94図　ＳＢ１(部分)壁材検出状況実測図（１/20）

(2)溝

［ＳＤ４］(第95図)

ＳＤ４は第１調査区の東側と西側に分離された状態で位置する。遺構は、焼失時には流水により流入した土砂が堆積したことによって既に埋没し、その結果、後述する排水機能が失われ、窪地となっていたことを確認できた。



第95図　ＳＤ４(部分)検出状況実測図（1/50）

また、遺構内部では焼失した建物に使用されていた炭化した木材が、投棄されたとみられる状態で検出された。

(3)ピット

［ＳＰ７］

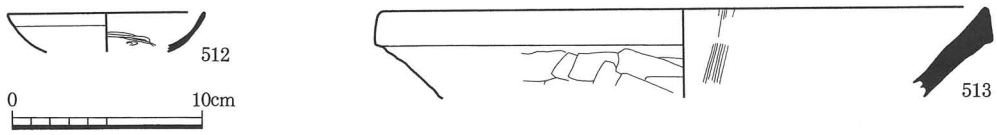
ＳＰ７は第１調査区の中央部に位置する。平面形は円形を呈する。規模は径0.18mを測る。

遺物は出土したが、細片のため図化できなかった。

［ＳＰ８］（第96図）

ＳＰ８は第１調査区の中央部、ＳＰ７の東側0.8mに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径0.28m、短径0.24m、深さ0.11mを測る。

遺物は瓦器椀（512)、瓦質擂鉢（513）が出土した。

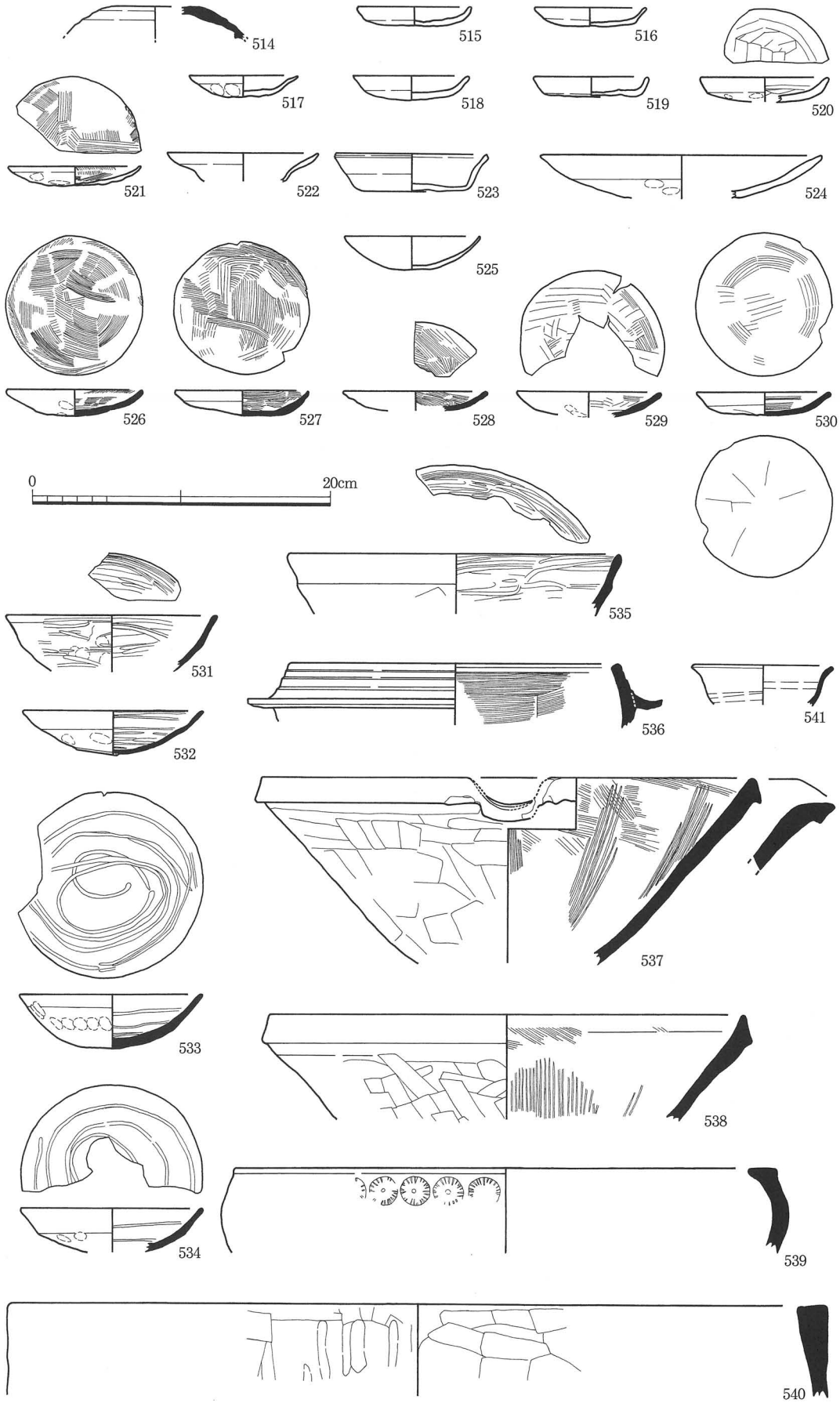


第96図　ＳＰ８出土遺物実測図

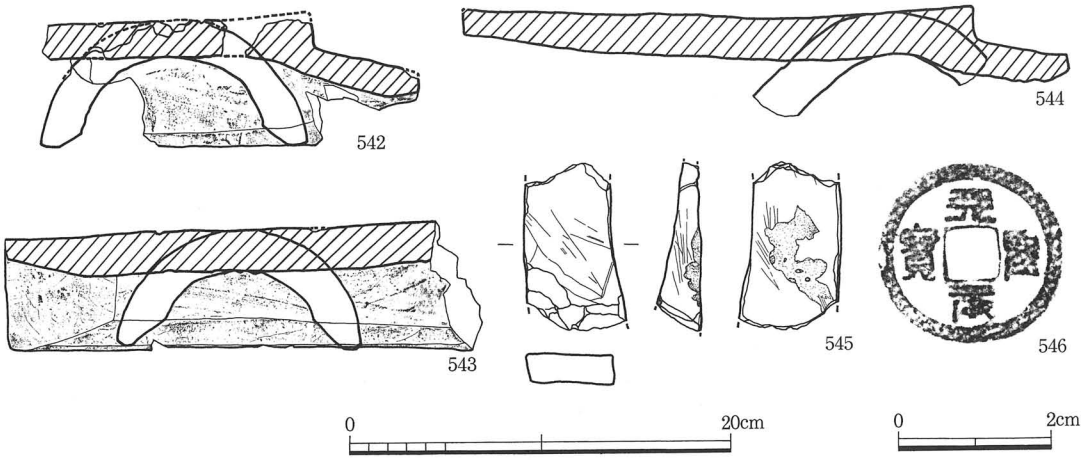
(4)包含層（第97～99図、図版64・65）

遺物は第１調査区の包含層である㊸10YR3/4暗褐色礫混じり細砂(焼土層)層中から、須恵器坏蓋（514)、土師質皿（515～524)・椀（525)、瓦器椀（531～534)・鉢（535)、瓦質皿（526～530)・土釜（536)・片口擂鉢（537)・擂鉢（538)・火鉢（539)・井筒（540)、須恵質錬鉢、陶器、青磁器、白磁碗（541)、軒丸瓦・丸瓦（542・543）・平瓦・雁振瓦(544)、砥石（545)、天聖元宝（初鋳1023年、546）が出土した。

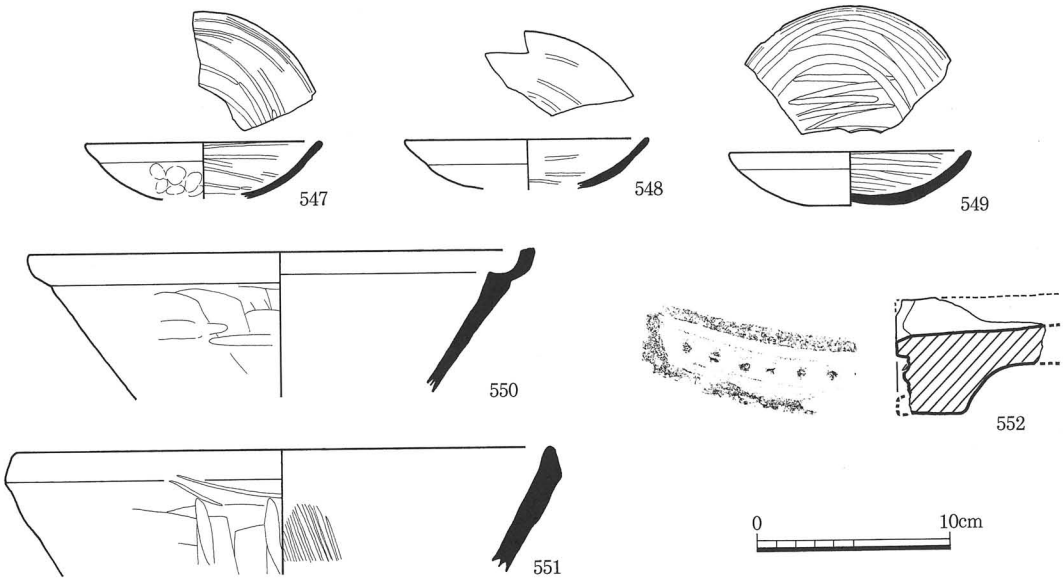
第２調査区からは瓦器椀（547～549)、瓦質堝（550)・擂鉢（551)、軒平瓦（552)、硯が出土した。



第97図　第１調査区第３遺構検出面包含層（焼土層）出土遺物実測図（１）



第98図　第１調査区第３遺構検出面包含層（焼土層）出土遺物実測図（２）



第99図　第２調査区第３遺構検出面包含層出土遺物実測図

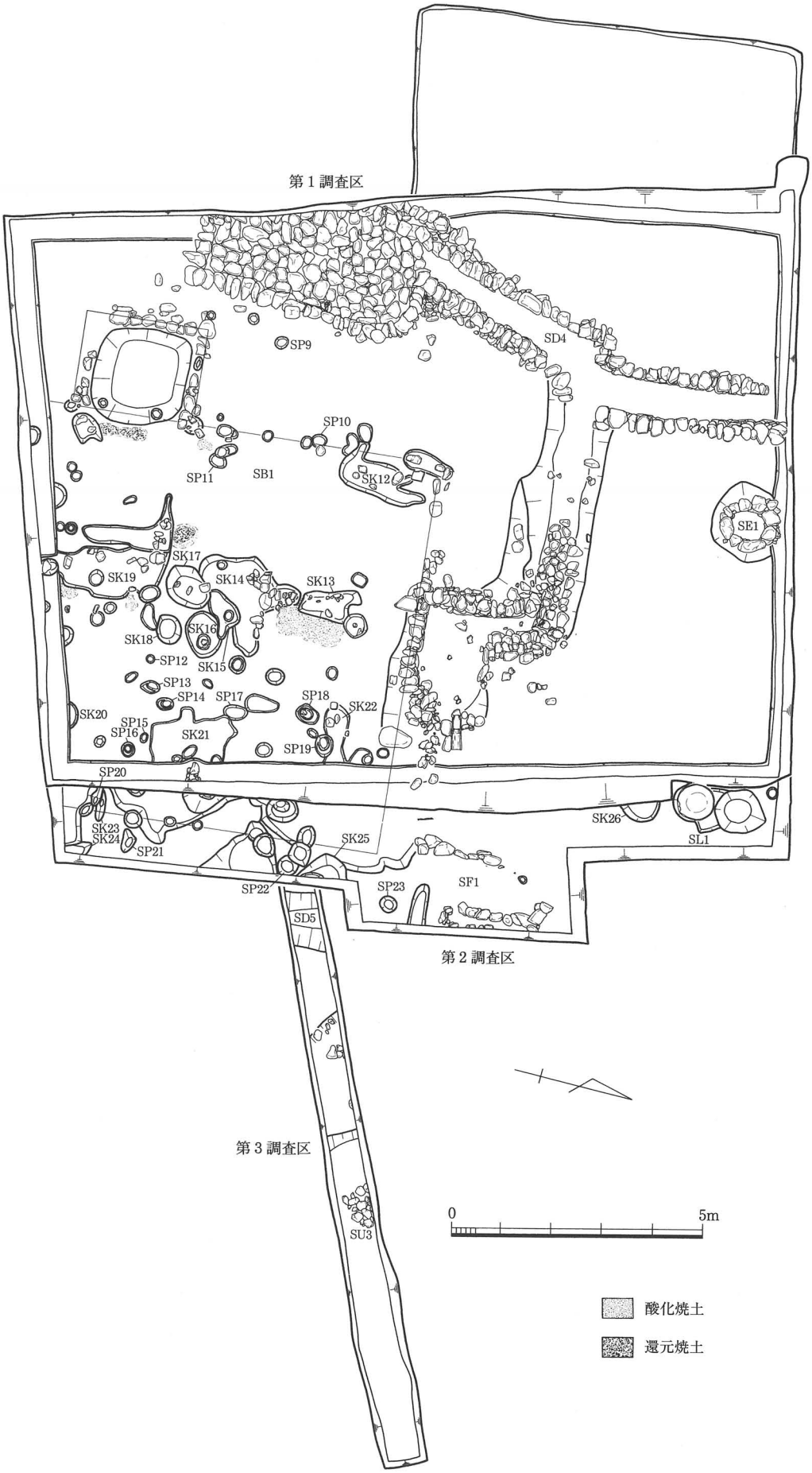
第４遺構検出面（第100図、図版28・29）

(1)掘立柱建物

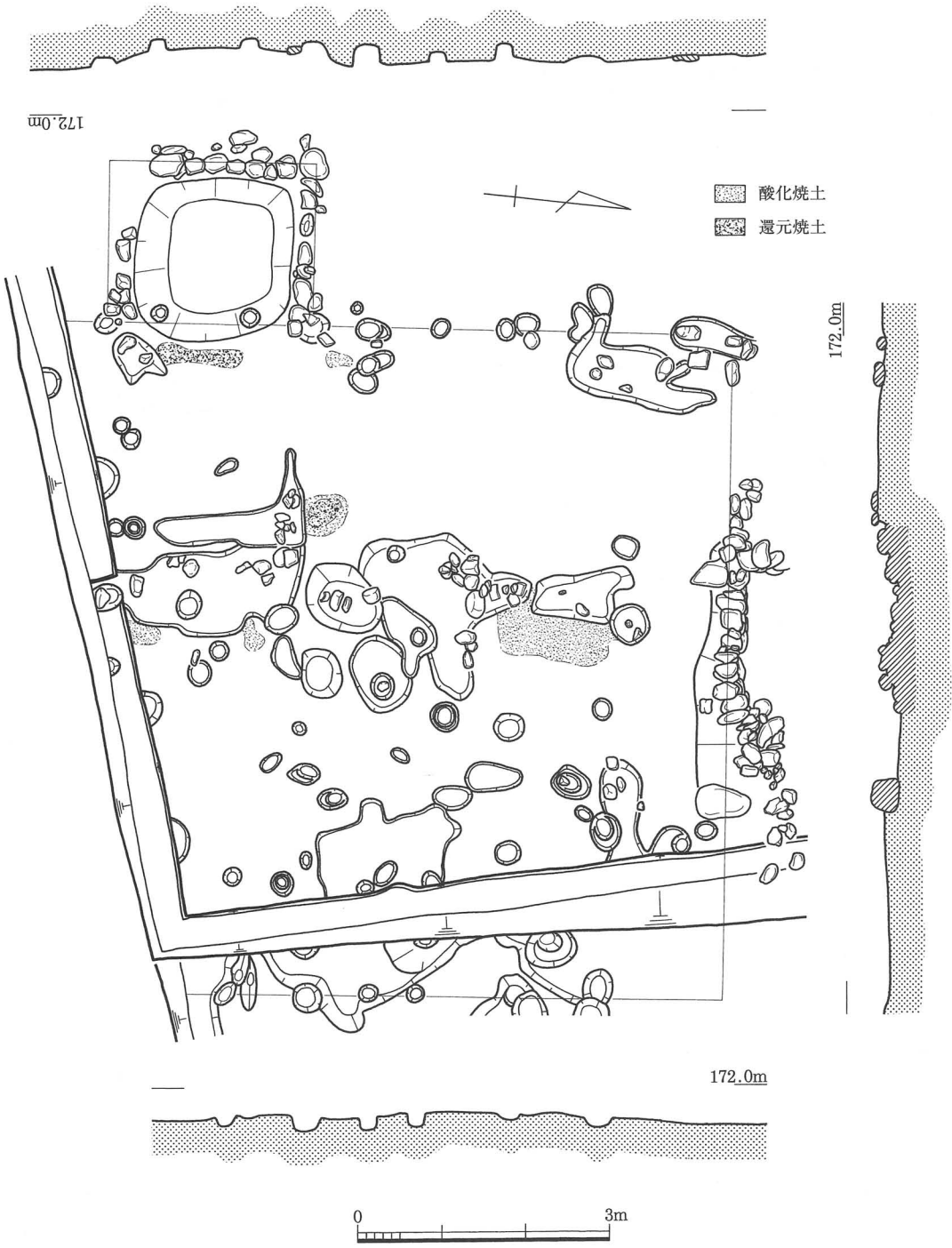
［ＳＢ１］（第101・102図、図版65）

ＳＢ１は第１調査区の南東部と第２調査区の南側にまたがって位置する。遺構の構造は掘立柱建物である。建物の平面形は、南側が調査区外に及ぶが、建物の主体が方形を呈し、その西側には、さらに平面形がコの字の石列部が付属することがわかる。建物の主体は検出した桁行２間（7.9m）以上で、梁行６間（7.7m）、主軸方向はＮ－5.5°－Ｗである。

建物の北壁西側で地覆石上に壁が存在したことは、第３遺構検出面で建物の土壁が、火災により倒壊した状態で検出されていることからわかる。なお、倒壊した土壁の芯にあたる木部が、炭化した状態で検出されたことにより、当時の子院建物の壁材構造としては、丁寧に壁の芯部を作っていることも観察できた[註6]。また、北壁中央部は後述するＳＤ４の



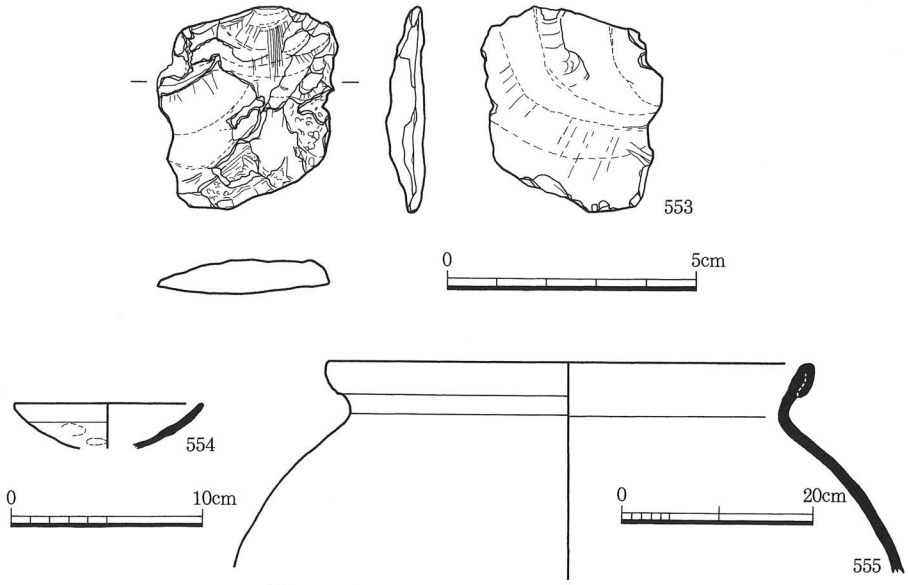
第100図　第１～３調査区第４遺構検出面遺構配置図（１/120）



第101図　ＳＢ１遺構実測図（1/80）

東部南側の石列主軸と重複し、さらに遺構検出面に高低差があることなどから、入口のない妻入り部分であることが考えられる。したがって、これらの遺構の規模・内容等から、この存在した子院は、子院の中でもある程度有力な位置にあったと推測できる。

また、このコの字に付属する石列の四方の石も水平面を整えていることから、これらは礎石であり、上部施設の存在が想定される。その傍証として、本調査区内では六器・二器に相当すると考えられる多数の小型の瓦質土器や瓦器の小椀、また花埦（かかん）や仏供皿（ぶっくざら）が出土していることが挙げられる。これらの出土遺物から、恐らくＳＢ１に付属するこのコの字部



第102図　ＳＢ１出土遺物実測図

分の石列は、六器などの密教法具の洗浄などを行った「閼伽棚（あかだな）」で、四方の石はその基礎であった可能性が考えられる。

遺物は石器（553）、瓦質皿（554）、備前甕（555）が出土した。

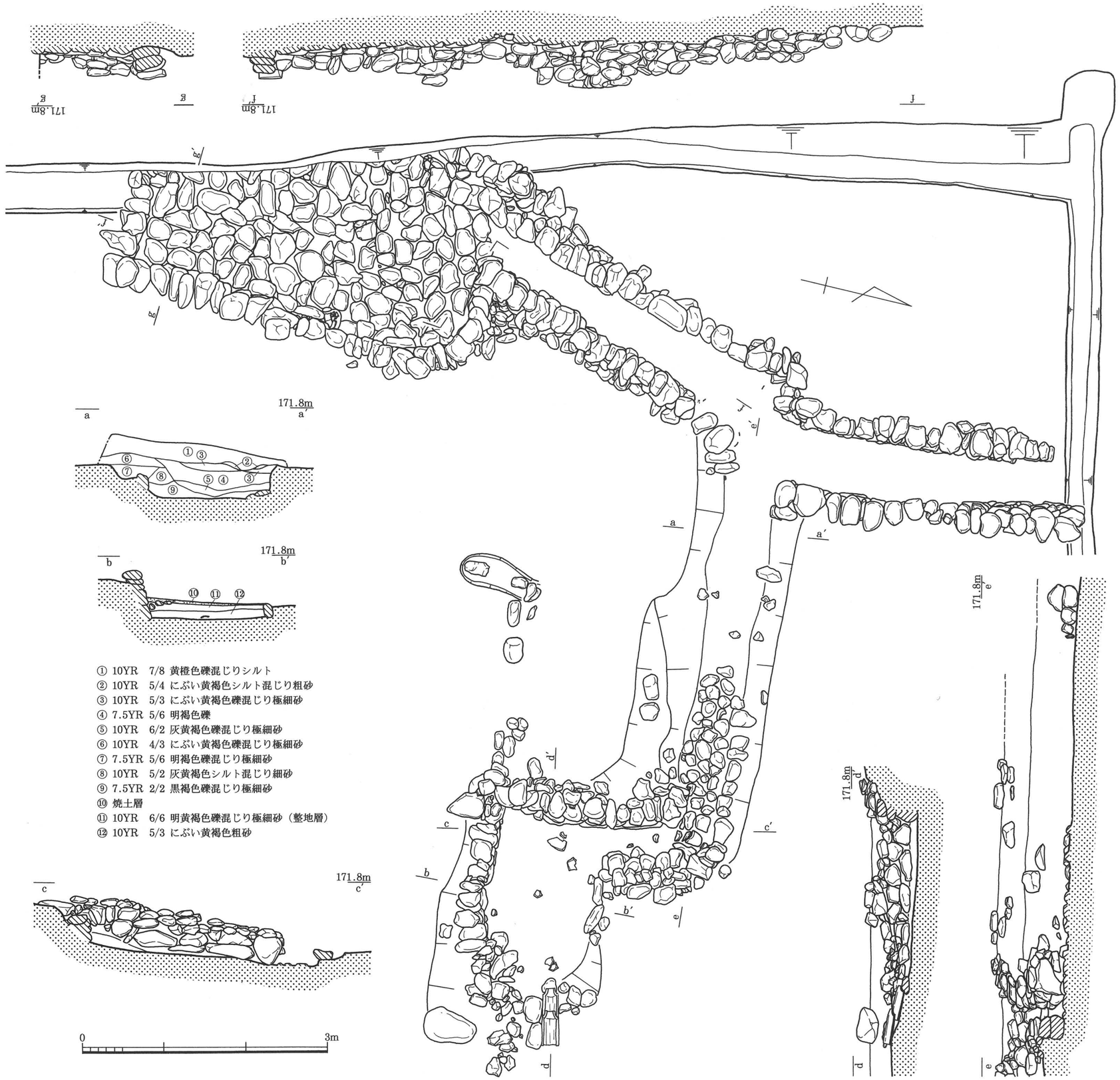
(2)溝

［ＳＤ４］（第103～105図、図版30・65・66）

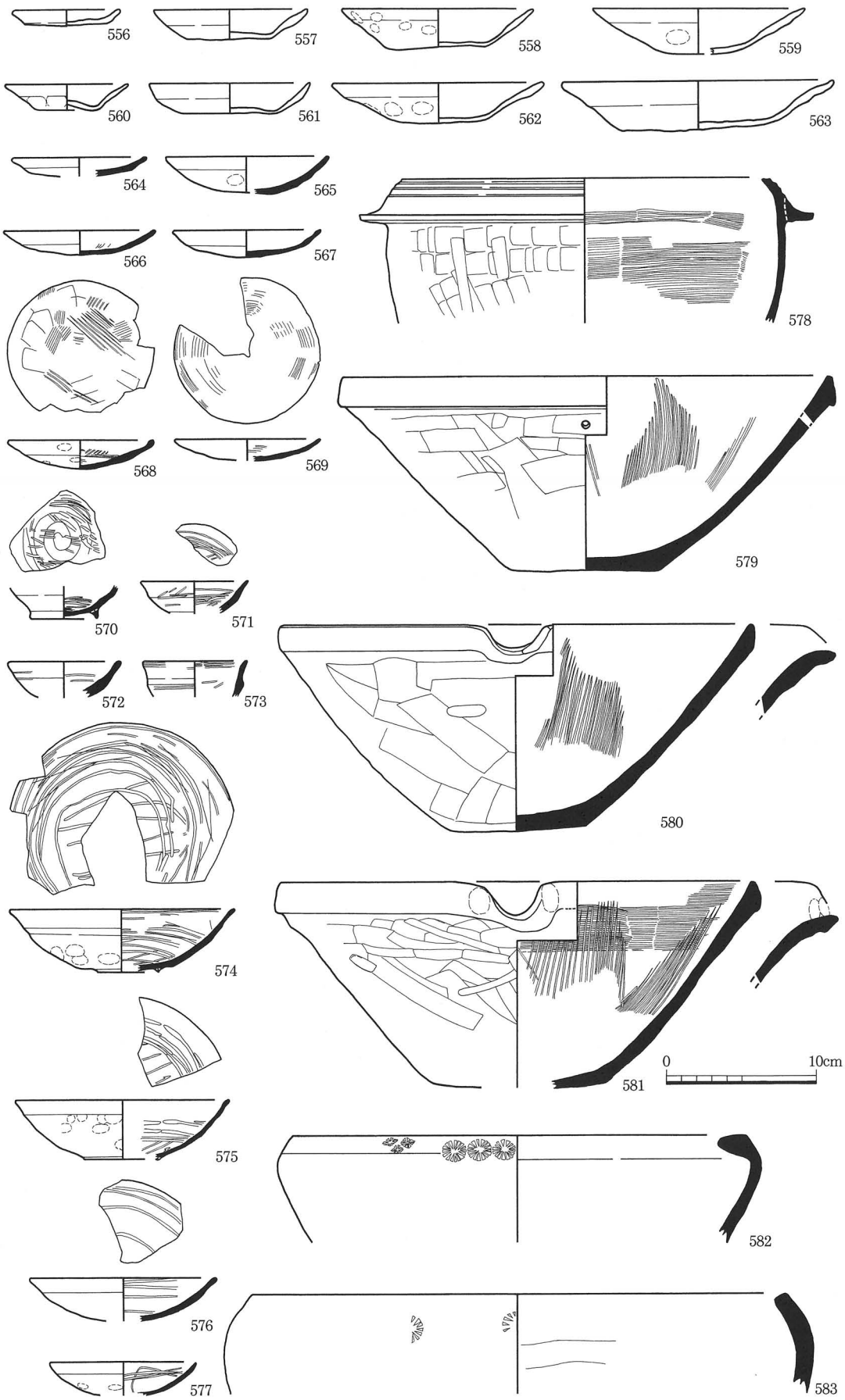
ＳＤ４は主体となる部分が第１調査区の西側に位置し、これに接続する部分が東側から西側にかけて調査区の中央部を横切っている。検出した規模は南北全長９ｍ、東西全長8.3ｍ、東側桝部の長辺2.5ｍ、短辺1.6ｍ、深さ0.6ｍ、西側桝部の長辺4.6ｍ、短辺2.9ｍ、深さ0.4ｍを測る。使用された石のほとんどは河原石で、その規模はこぶし大のものから最大は52cm×29cm×25cmを測る。

遺構の西端部分に位置する石組の一部は、調査区外に及ぶが、立地・構造、埋土に常時水が流れていたことを観察できる砂層を幾層も確認し、底部には石敷が丁寧に敷設されていることなどから、この部分は西側からの集水、調整桝の機能をもつことがわかる。また遺構の東側にも、西側の桝と比較するとやや小規模な桝がある。更にこの桝の東側には丸瓦を２枚繋げる部分があり、構造・勾配から判断して、東方向からの集水機能を持ち、一旦水量を集水・調整し、主体となる西側の溝に接続させて、北側に排水していたことが窺える。すなわち、ＳＤ４は、調査区西側の谷と東側からの水を集水し、北側に排水するための施設と考えられ、天野山金剛寺遺跡の既往調査には検出例のない、非常に丁寧で手間がかけられた構造を持つ排水施設であることがわかった。

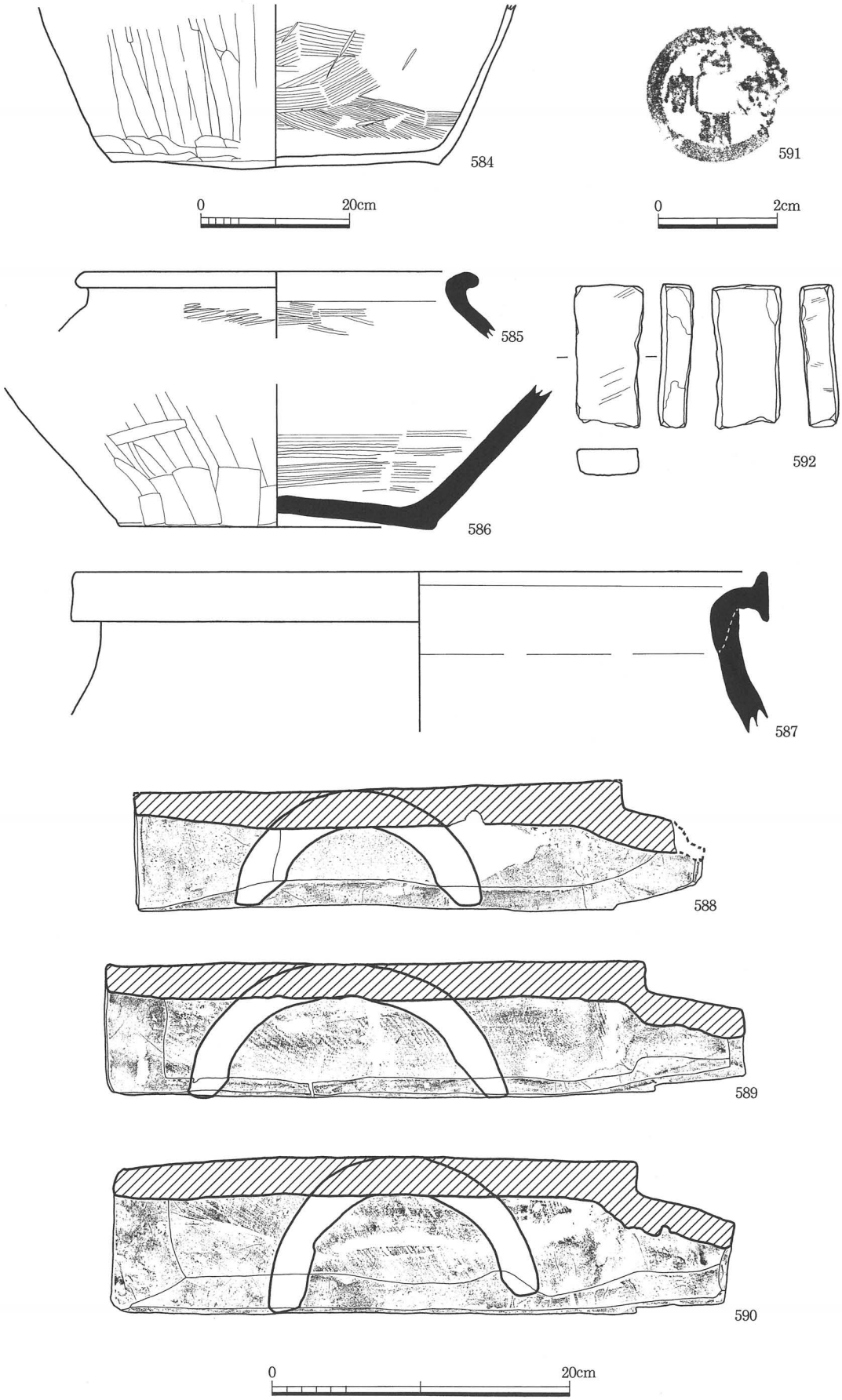
天野山金剛寺遺跡の子院は『金剛寺境内図』（第171図）に記される様に、非常に狭小な谷地形にひしめいて位置していたことが、現在の地形でも窺える。したがって、谷地形での寺院の営みには、常時谷上からの谷水の排水処置が必然的に不可欠となるので、この様



第103図　ＳＤ４遺構実測図（1/50）



第104図　ＳＤ４出土遺物実測図（１）



第105図　ＳＤ４出土遺物実測図（２）

な施設は構造上、また景観上から、子院境内の表側よりもむしろ裏側に構築されたことが一般に考えられる。またこの様な施設の構築等は、子院１ヶ寺が単独で行える土木工事の規模ではないと考えられる上に、先述のＳＢ１とＳＤ４の配置も非常に近接しているが、機能的に配置されていることなどからも、伽藍、子院における緻密な土木工事計画に基づき、行われていたことが想像される。

遺物は土師質皿（556～563）・甕（584）、瓦器皿（564）・小椀（570～573）・椀（574～577）、瓦質皿（565～569）・土釜（578）・擂鉢（579）・片口擂鉢（580・581）・火鉢（582・583）・甕（585）、備前甕（586）・常滑甕（587）、丸瓦（588～590）・雁振瓦、砥石（592）、銅銭（591）が出土した。

［ＳＤ５］

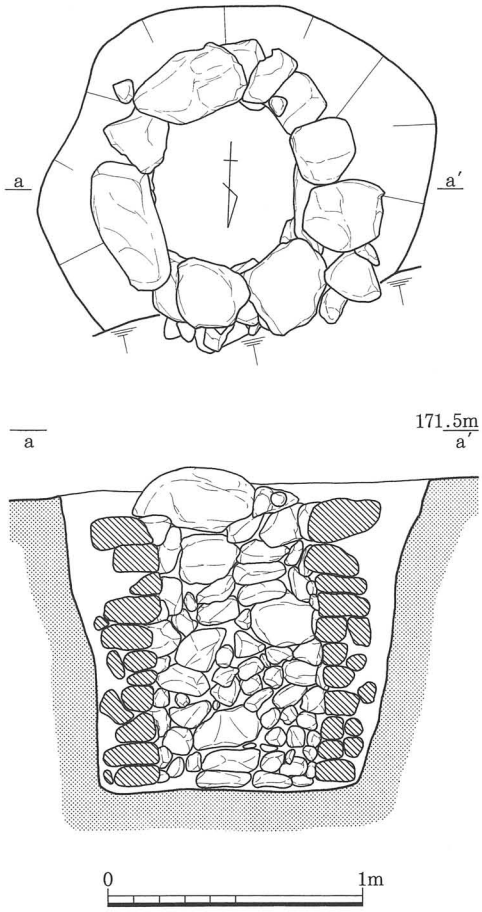
ＳＤ５は第３調査区の西端、ＳＢ１の東側１ｍに位置する。平面形は遺構の北端・南端が調査区外に及ぶため、詳細は不明である。検出した規模は0.58ｍ、幅1.09ｍ、深さ0.03ｍを測る。主軸方向はＮ－８°－Ｗである。

遺物は出土しなかった。

(3)井戸

［ＳＥ１］（第106図）

ＳＥ１は平面形が遺構の北側を側溝に切られているが、ほぼ同様の円形を呈することがわかる。検出した掘形の規模は径0.6ｍ、深さ1.0ｍを測る。またＳＥ１は石組の組み直しなどの改変が行われる以前の第４遺構検出面、つまり焼土層下でも検出されていることから、1360年以前に構築され、その後第１遺構検出面の江戸時代に至るまで、かなりの長期間使用されていたことが、検出遺構面の層序から考えられる。



第106図　ＳＥ１遺構実測図（1/30）

(4)通路

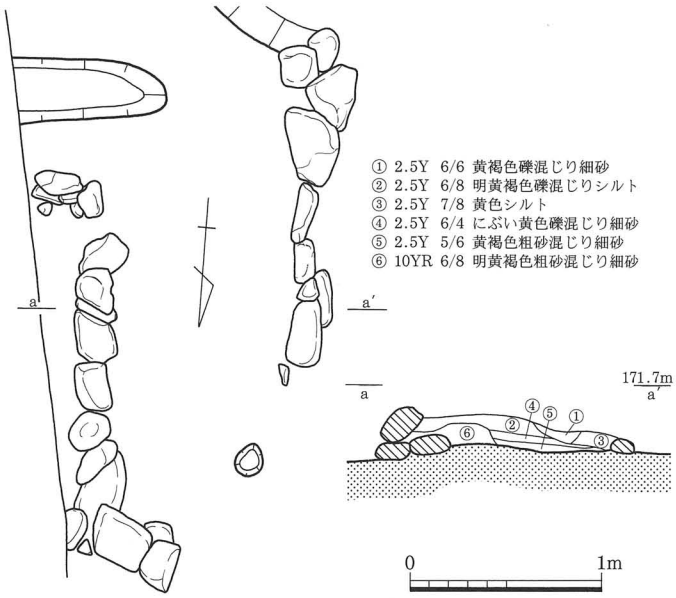
［ＳＦ１］（第107図）

ＳＦ１は第２調査区中央部、ＳＢ１の北東隅に位置する。遺構の東側石列は、東端が調査区外に及び、西側石列も、北側が削平されているため、詳細は不明である。検出した規模は、東側石列の長さ2.65ｍ、西側石列の長さ1.8ｍ、高さ0.2ｍを測る。遺構の構造としては、東西両辺

に石列を持ち、その間に盛土が施されている。

地形的に、南側より北側が低くなっていることや、またＳＢ１との遺構配置の関係や建物の構造から、東側からの入口であった可能性があり、本調査区に所在したであろう子院の境内や庫裏である、ＳＢ１への通路であったものと考えられる。

遺物は出土しなかった。



第107図　ＳＦ１遺構実測図１/40）

(5)土坑

［ＳK12］（第108図、図版67）

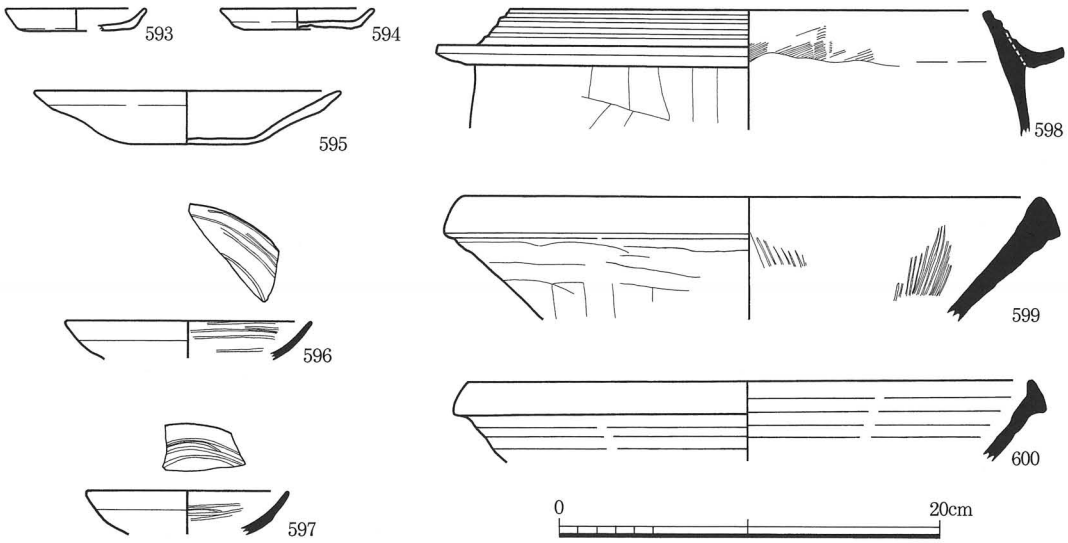
ＳK12は第１調査区の中央部に位置する。平面形は不定形を呈する。規模は長軸1.82m、短軸0.68m、深さ0.17mを測る。

遺物は土師質皿（593・594）、瓦器埦（597）、瓦質土釜（598）・擂鉢（599）、須恵質錬鉢（600）が出土した。

［ＳK13］（第108図）

ＳK13は第１調査区の中央部東側、ＳK12の東側1.9mに位置する。平面形は不定形を呈する。規模は長軸1.28m、短軸0.64m、深さ0.27mを測る。

遺物は土師質皿（595）、瓦器埦（596）が出土した。

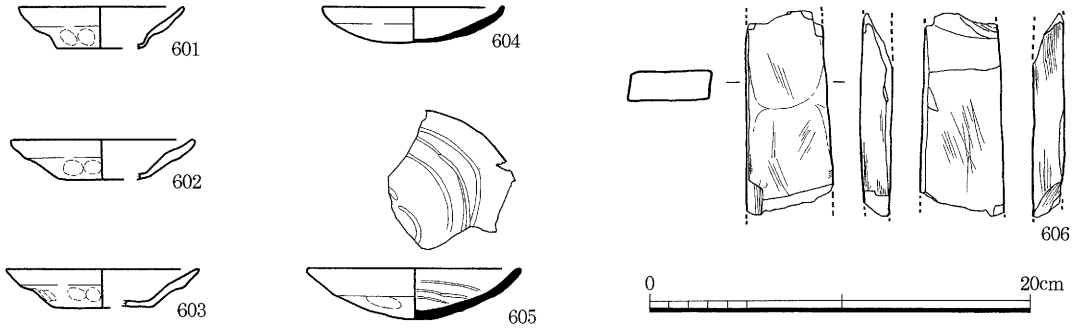


第108図　ＳK12・13出土遺物実測図

［ＳＫ14］（第109図、図版67）

ＳＫ14は第１調査区の南東部、ＳＫ13の南側に近接し位置する。平面形は遺構の南側をＳＫ15・17に切られているが、不定形を呈することがわかる。検出した規模は長軸2.05m、短軸1.68m、深さ0.18mを測る。

遺物は土師質皿（601～603）、瓦器椀（605）、瓦質皿（604）、粘板岩製の砥石（606）が出土した。

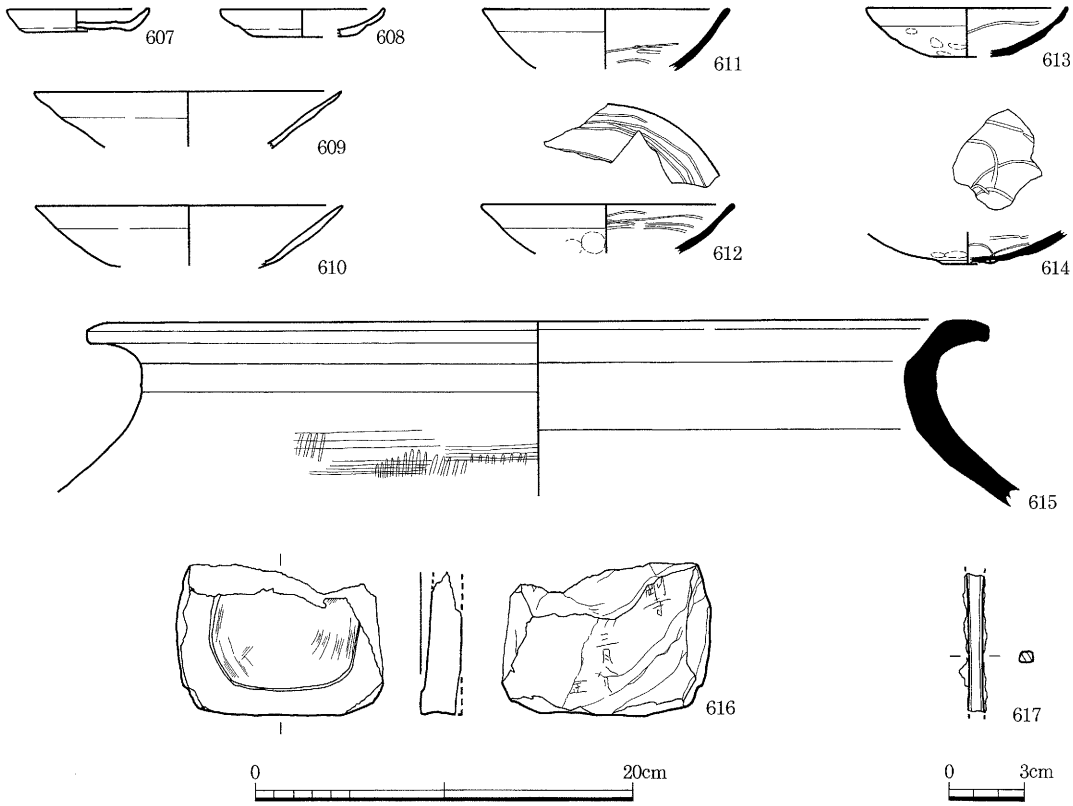


第109図　ＳＫ14出土遺物実測図

［ＳＫ15］（第110図）

ＳＫ15は第１調査区の南東部、ＳＫ14の南側に近接し位置する。平面形は遺構の南側をＳＫ17に切られているが、不定形を呈することがわかる。検出した規模は長軸1.0m、短軸0.54m、深さ0.15mを測る。

遺物は土師質皿（607）、瓦器椀（612・613）、鉄釘（617）が出土した。



第110図　SK15～17出土遺物実測図

［ＳＫ16］（第110図）

ＳＫ16は第１調査区の南東部、ＳＫ15の南側に近接し位置する。平面形は遺構の北側をＳＫ15に切られているが、残存状況から楕円形を呈すると考えられる。検出した規模は長径0.91m、短径0.66m、深さ0.12mを測る。

遺物は土師質皿（608）、瓦器椀（611・614）が出土した。

［ＳＫ17］（第110図、図版67）

ＳＫ17は第１調査区の南東部、ＳＫ15の南側に近接し位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径1.0m、短径0.75m、深さ0.44mを測る。

遺物は土師質皿（609・610）、陶器甕（615）、粘板岩製の硯（616）が出土した。（616）には「□剛寺　三月八日　□」という、陰刻を確認した。

［ＳＫ18］（第111図、図版67）

ＳＫ18は第１調査区の南東部、ＳＫ16の南側0.1mに位置する。平面形は遺構の南端が、周囲の遺構と近接してはいるが、その影響は受けておらず、不定形を呈する。規模は長軸0.61m、短軸0.49m、深さ0.29mを測る。

遺物は土師質皿（618・624）、瀬戸系鉢（627）が出土した。

［ＳＫ19］（第111図、図版67）

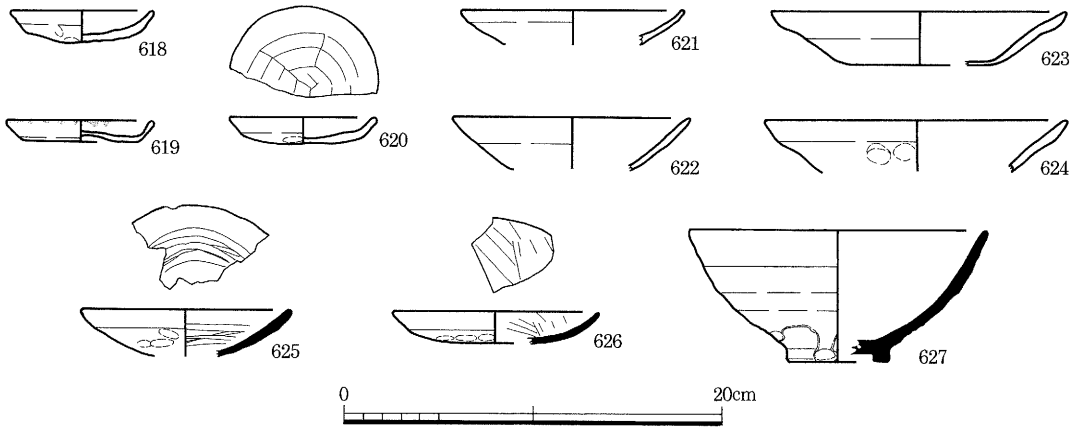
ＳＫ19は第１調査区の南端、ＳＫ17の南側0.1mに位置する。平面形は遺構の北東部・北西部を他の遺構に切られ、また南端が調査区外に及ぶため、詳細は不明である。検出した規模は長軸2.16m、短軸1m、深さ0.1mを測る。

遺物は土師質灯明皿（619）・皿（620～622）、瓦質土釜が出土した。

［ＳＫ20］

ＳＫ20は第１調査区の南東端、ＳＫ19の東側2.2mに位置する。平面形は遺構の南側を側溝に切られているため、詳細は不明である。検出した規模は南北長0.14m、東西長0.55m、深さ0.1mを測る。

遺物は出土したが、細片のため図化できなかった。



第111図　ＳＫ18・19・21・22出土遺物実測図

［S K21］（第111図）

S K21は第１調査区の南東端、S K16の東側１mに位置する。平面形は遺構の東側を側溝に切られているため、詳細は不明である。検出した規模は長軸1.75m、短軸1.2m、深さ0.11mを測る。

遺物は土師質皿（623）、瓦器椀（625）が出土した。

［S K22］（第111図）

S K22は第１調査区の中央部東端、S K21の北側1.7mに位置する。平面形は遺構の東側を側溝に切られているため、詳細は不明である。検出した規模は長軸1.15m、短軸0.92m、深さ0.16mを測る。

遺物は瓦質皿（626）が出土した。

［S K23］（第112図）

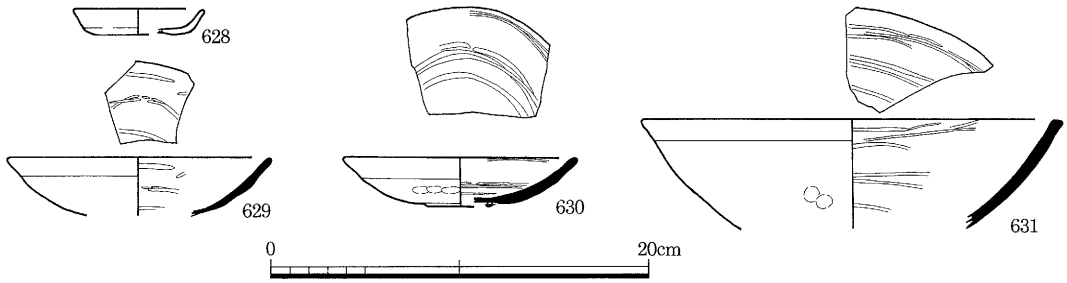
S K23は第２調査区の南西隅に位置する。平面形は遺構の南側を後述するS P20に切られているため、詳細は不明である。検出した規模は長軸0.64m、短軸0.18m、深さ0.13mを測る。

遺物は土師質皿（628）が出土した。

［S K24］（第112図）

S K24は第２調査区の南東隅に位置する。平面形は遺構の東側・南側が調査区外に及ぶため、詳細は不明である。検出した規模は南北長0.56m、東西長0.25m、深さ0.08mを測る。

遺物は瓦器椀（629・630）・鉢（631）が出土した。



第112図　S K23・24出土遺物実測図

［S K25］

S K25は第２調査区の中央部東端、S K24の北側4.2mに位置する。平面形は遺構の東側が調査区外に及ぶため、詳細は不明である。検出した規模は南北長1.0m、東西長0.5m、深さ0.07mを測る。

遺物は出土したが、細片のため図化できなかった。

［S K26］

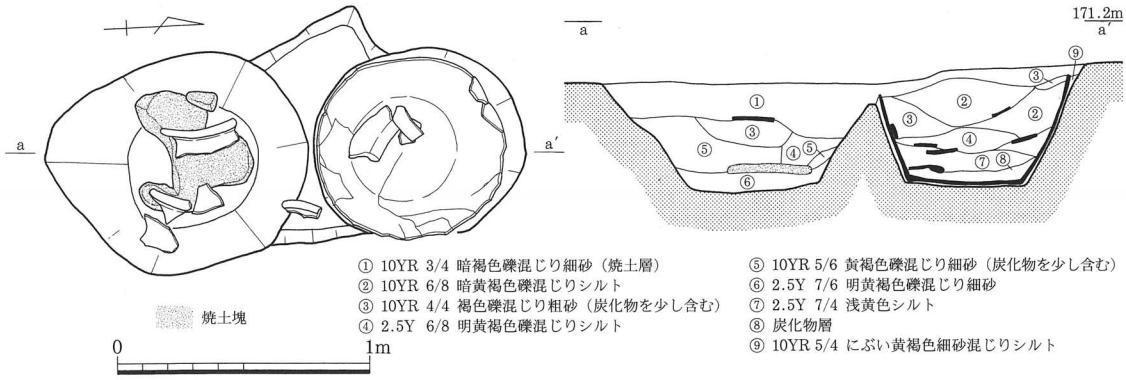
S K26は第２調査区の北側に位置する。平面形は遺構の西側を側溝に切られているため、詳細は不明である。検出した規模は南北長0.79m、東西長0.4m、深さ0.15mを測る。

遺物は出土したが、細片のため図化できなかった。

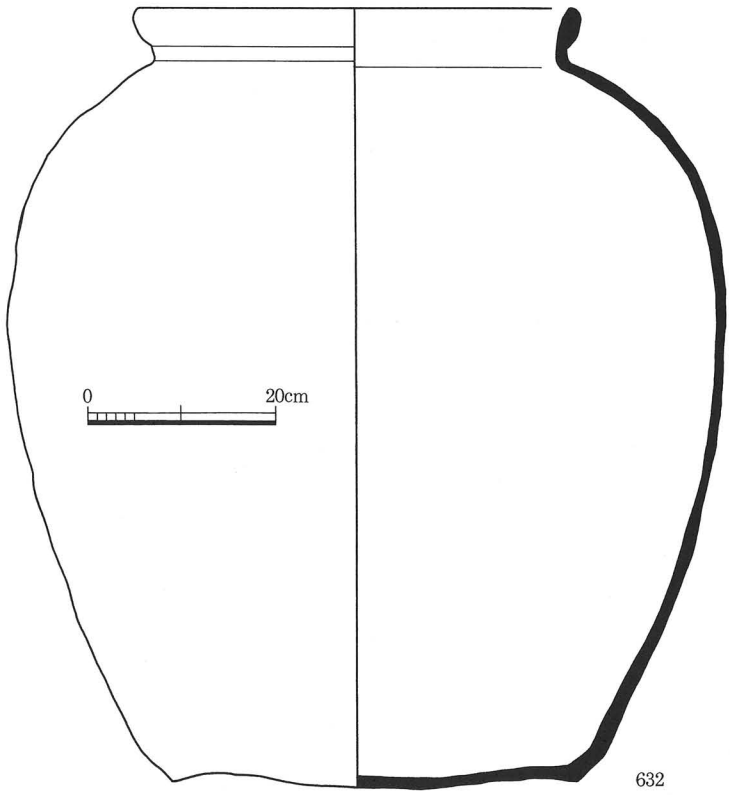
(6)甕埋納遺構

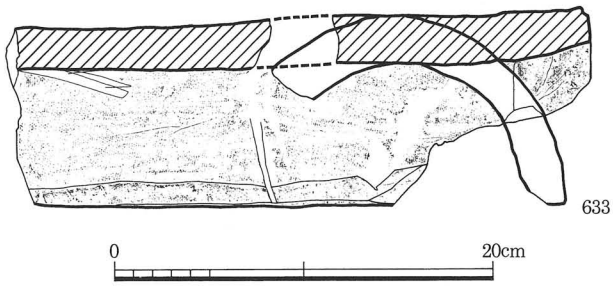
［ＳＬ１］（第113・114図、図版31・68）

ＳＬ１は第２調査区の北東隅、ＳＫ26の北側0.2mに位置する。遺構全体の平面形は不



第113図　ＳＬ１遺構実測図（1/30）





第114図　ＳＬ１出土遺物実測図

定形を呈するが、遺構内部にある二つの土坑の掘形の平面形は各々楕円形である。遺構全体の規模は、長軸1.49m、短軸0.88mを測り、北側の土坑は長径1.06m、短径0.88m、深さ0.42m、南側の土坑は長径0.73m、短径0.43m、深さ0.49mである。その構造は南北に土坑が連なっており、南側の土坑には備前甕（632）が据えられているが、北側の土坑には甕が設けられていない。しかし、南側の土坑に据えられた備前甕の形状とほぼ同様な甕を、北側の土坑に一旦据え、後に抜き取った痕跡が確認できた。

この様な遺構に類似する出土例は、ＫＧT95－１の第７調査区で検出したＳＬ１・３、ＳＬ２・４がある[註7]。これらの出土例も、本次調査で検出したＳＬ１同様に、甕埋納遺構とその抜取穴の土坑との組合せによる構造を持っている。これらはいずれも、調査区端部に位置し、周辺の遺構との十分な関連を検討する資料が無いため、その用途については不明である。今後の新たな資料の増加を待って検討していきたい。

また、遺構の埋土が焼土であることからも、兵火の火災によって遺構が廃絶した可能性が高いと考えられ、遺構に据えられた備前甕の実年代を考える上で、好資料が得られたといえる。

遺物は（632）以外に丸瓦（633）が出土した。

(7)ピット

［ＳＰ９］（第115図、図版68）

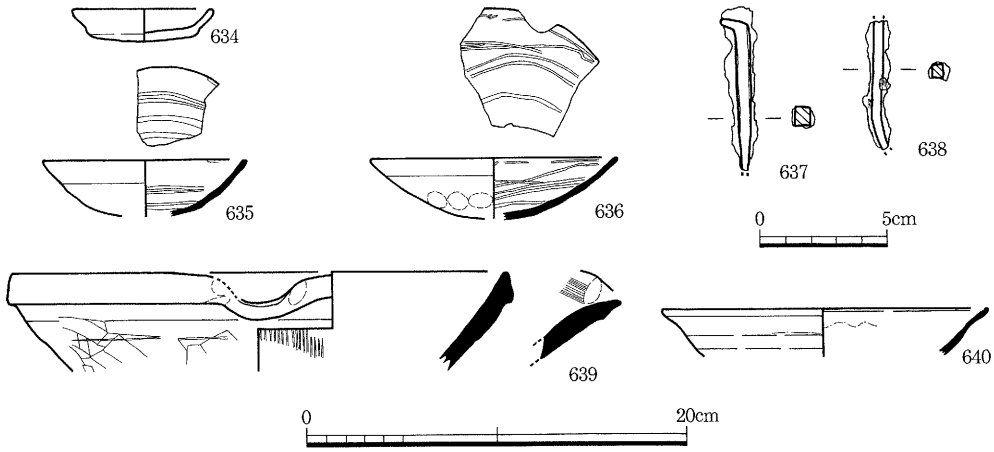
ＳＰ９は第１調査区の南西部、ＳK14の西側4.2mに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径0.26m、短径0.24mを測る。

遺物は鉄釘（637）が出土した。

［ＳP10］

ＳP10は第１調査区の中央部、ＳK12の南側0.5mに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径0.3m、短径0.28m、深さ0.18mを測る。

遺物は出土したが、細片のため図化できなかった。



第115図　ＳＰ９・13～16・18出土遺物実測図

［S P11］

S P11は第１調査区の南側、S K14の西側1.7mに位置する。平面形は遺構の西側を他の遺構に切られているが、楕円形を呈することがわかる。検出した規模は長径0.36m、短径0.25m、深さ0.16mを測る。

遺物は出土したが、細片のため図化できなかった。

［S P12］

S P12は第1調査区の南東隅、SK18の東側0.3mに位置する。平面形は円形を呈する。規模は径0.16m、深さ0.11mを測る。

遺物は出土したが、細片のため図化できなかった。

［S P13］（第115図、図版68）

S P13は第1調査区の南東隅、SP12の東側0.3mに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸0.38m、短軸0.26m、深さ0.17mを測る。

遺物は瓦質片口擂鉢（639）が出土した。

［S P14］（第115図、図版68）

S P14は第1調査区の南東隅、SP13の北東0.1mに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径0.34m、短径0.24m、深さ0.18mを測る。

遺物は土師質皿（634）、磁器皿（640）が出土した。

［S P15］（第115図、図版68）

S P15は、第1調査区の南東隅、SP13の東側0.8mに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径0.18m、短径0.12m、深さ0.03mを測る。

遺物は瓦器椀（635）が出土した。

［S P16］（第115図、図版68）

S P16は第１調査区の南東隅、SP15の南東0.2mに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径0.28m、短径0.26m、深さ0.06mを測る。

遺物は鉄釘（638）が出土した。

［S P17］

S P17は第１調査区の南東部、S P14の北側１mに位置する。平面形は遺構の南東部をS K21に切られているが、楕円形を呈することがわかる。検出した規模は長径0.46m、短径0.3m、深さ0.11mを測る。

遺物は出土したが、細片のため図化できなかった。

［S P18］（第115図、図版68）

S P18は第１調査区の東側、S P17の北側１mに位置する。平面形は遺構全体が別の遺構と重複するが、不定形を呈することがわかる。規模は長軸0.48m、短軸0.36m、深さ0.27mを測る。

遺物は瓦器椀（636）、瓦が出土した。

［S P19］

S P19は第1調査区の東側、SP18の北東0.3mに位置する。平面形は遺構全体が別の遺構と重複するが、楕円形を呈することがわかる。規模は長径0.45m、短径0.36m、深さ0.13mを測る。

遺物は出土したが、細片のため図化できなかった。

［S P20］（第116図）

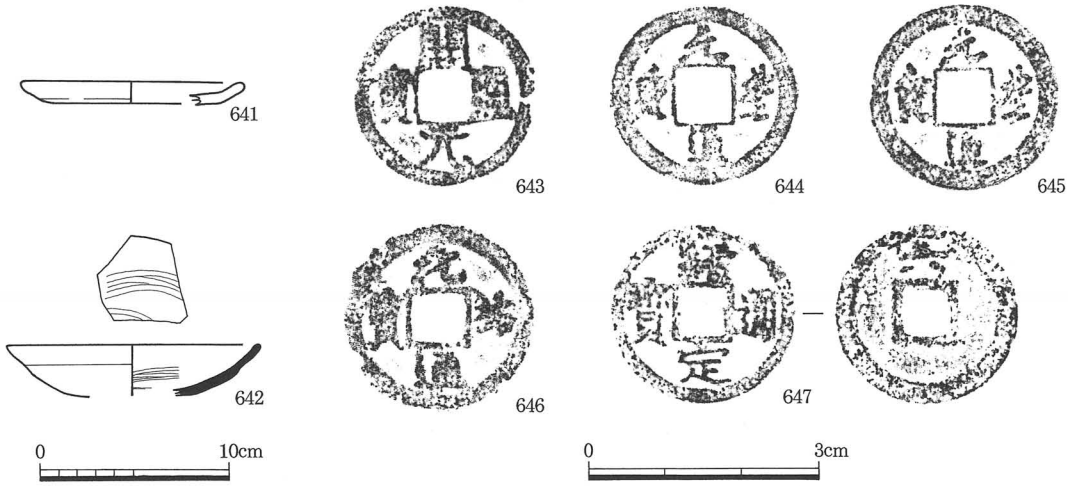
S P20は第2調査区の南西端、S K23に近接して位置する。平面形は遺構の西側を側溝に切られているが、不定形を呈することがわかる。検出した規模は長軸0.39m、短軸0.2m、深さ0.11mを測る。

遺物は土師質皿（641）、瓦器椀（642）が出土した。

［S P21］（第116図、図版68）

S P21は第2調査区の南側、S P20の北東0.8mに位置する。平面形は不定形を呈する。規模は長軸0.45m、短軸0.26m、深さ0.14mを測る。

遺物は開元通宝（初鋳621年、643）・元豊通宝（初鋳1078年、644・645）・元祐通宝（初鋳1086年、646）・紹定通宝（647）が出土した。



第116図　S P20・21出土遺物実測図

［S P22］

S P22は第2調査区の東側に位置する。平面形は遺構の東側が調査区外に及び、西側を他の遺構に切られているが、円形を呈することがわかる。規模は径0.4m、深さ0.03mを測る。

遺物は出土したが、細片のため図化できなかった。

［S P23］

S P23は第2調査区の中央部東側に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径0.34m、短径0.3m、深さ0.11mを測る。

遺物は出土したが、細片のため図化できなかった。

(8)集石

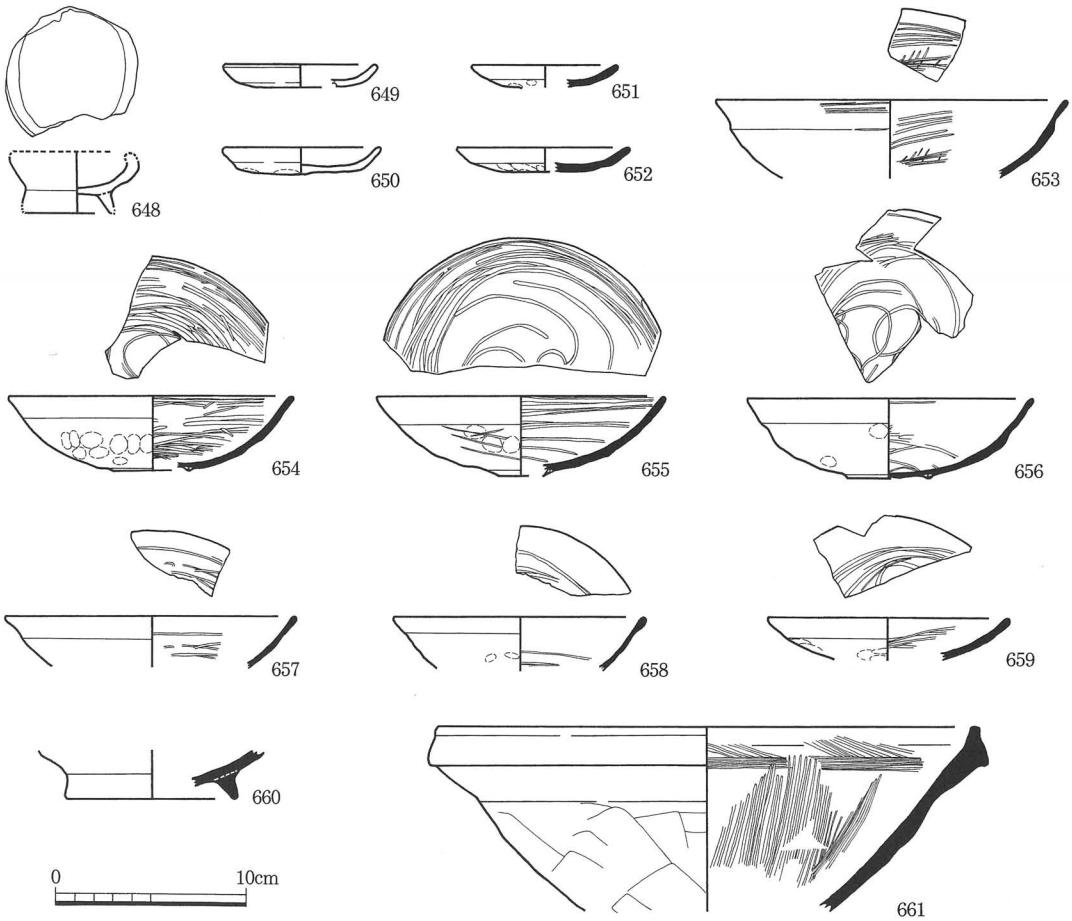
［ＳＵ３］（図版31）

ＳＵ３は第３調査区の中央部北側に位置する。平面形は遺構の北端が調査区外に及ぶため、詳細は不明である。検出した規模は長さ0.85m、幅0.53m、高さ0.2mを測る。用いられた石は最大24cm×21cm×15cmを測る。

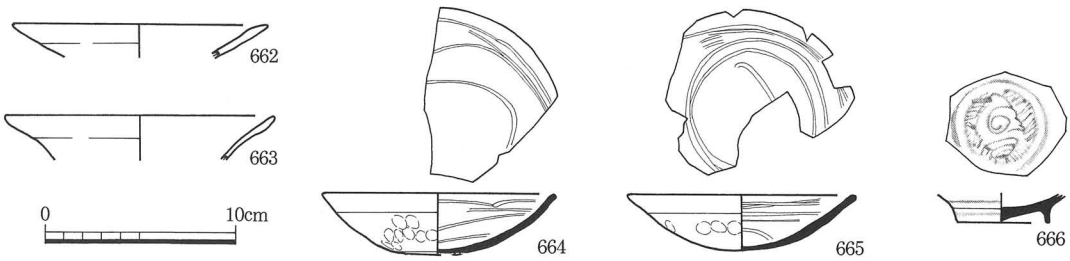
遺物は出土したが、細片のため図化できなかった。

(9)包含層（第117・118図、図版69）

遺物は第１調査区の包含層である㊻炭化物層中から、土師質耳皿（648）・皿（649・650）、瓦器皿（651・652）・椀（653～660）、瓦質擂鉢（661）が出土した。



第117図　第１調査区第４遺構検出面包含層（炭化物層）出土遺物実測図



第118図　第２調査区第４遺構検出面包含層出土遺物実測図

第２調査区からは土師質皿（662・663）、瓦器埦（664・665）、磁器碗（666）が出土した。

第５遺構検出面（第119図、図版32）

(1)溝

［ＳＤ６］（第120図、図版33・34・69）

ＳＤ６は第１調査区の西側に位置する。平面形は上層遺構であるＳＤ４の西側部分とほぼ同様である。検出した掘形の規模は南北長９ｍ、東西幅３ｍ、石組桝部の長辺5.4m、短辺2.7m、深さ0.15m、北側の石組溝の長さ３ｍ、内法0.4m、深さ0.15mを測る。使用された石の大部分は河原石で、その規模はこぶし大のものから最大40cm×40cm×25cmを測る。検出状況としては、北側の石組溝の東側に、溝の主軸方向と平行して木材を枕木状に３本置き、その上にこれらの主軸方向と直行する軸方向の木材を１本置いている。また西側の延長線上の溝内の底部には、木杭が並列して２本打たれている。

遺構の性格として、立地・勾配から水が南から北に流れることは判明しており、またこれらの木材が、集水・調整桝部の北側にあることなどからも、この遺構が水量を調整する構造を備えていたことがわかる。

なお、この遺構は、第４遺構検出面で検出したＳＤ４の南端に位置する集水・調整桝部と、その北側の石組溝の下層遺構にあたり、ＳＤ４の前身遺構であるということがわかる。しかし、集水・調整桝部の底部は、第４遺構検出面で検出したＳＤ４の様に石敷は施されていない。

また遺構が構築される以前は、自然地形の谷状地形の谷部を利用していたが、後にそれを改修し遺構を構築したことも、層序などから窺えた。

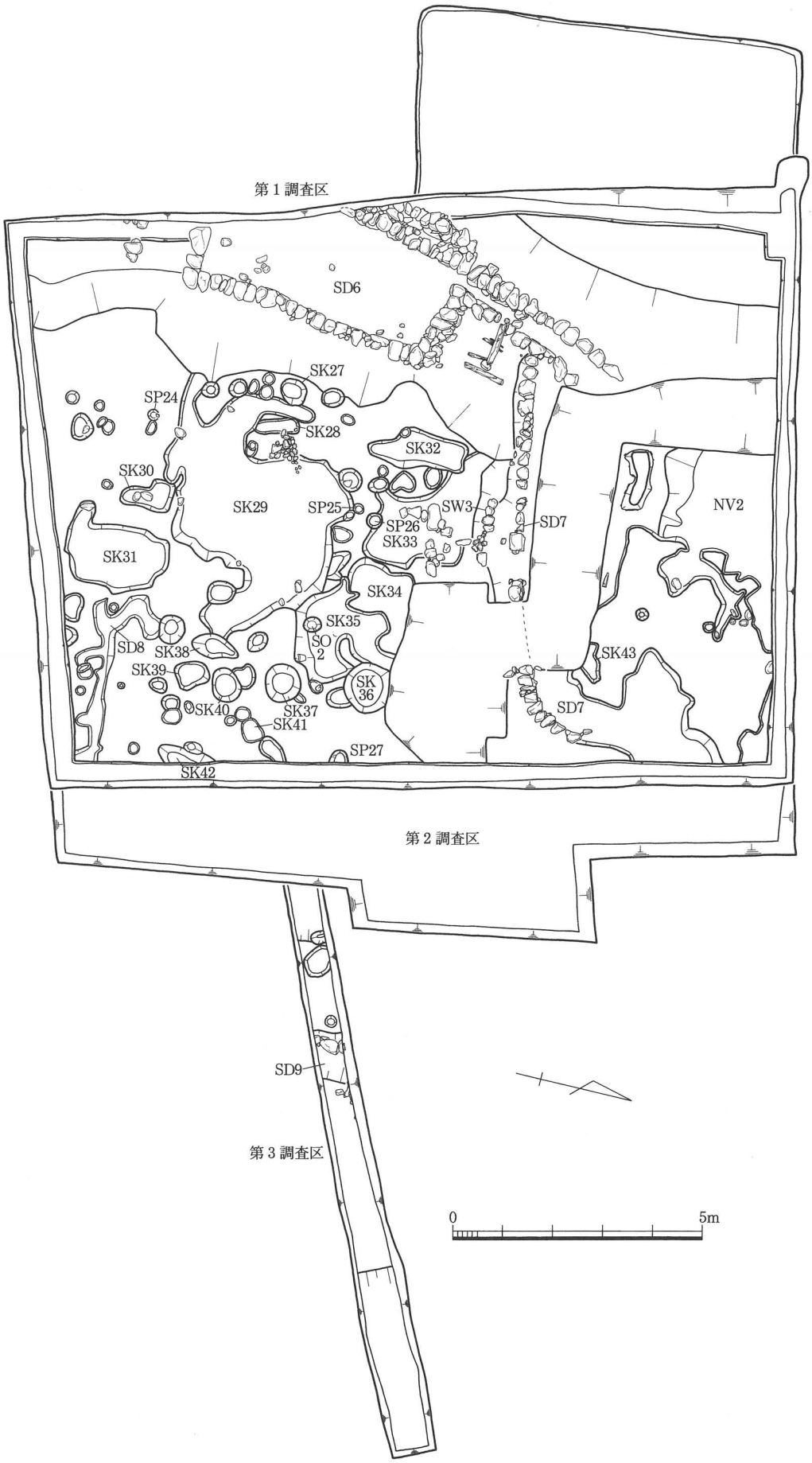
遺物は瓦器小埦（667）・埦（668～672）、瓦質擂鉢（673）、鉄製の楔（くさび）（674）が出土した。

［ＳＤ７］（第121・122図、図版33・69・70）

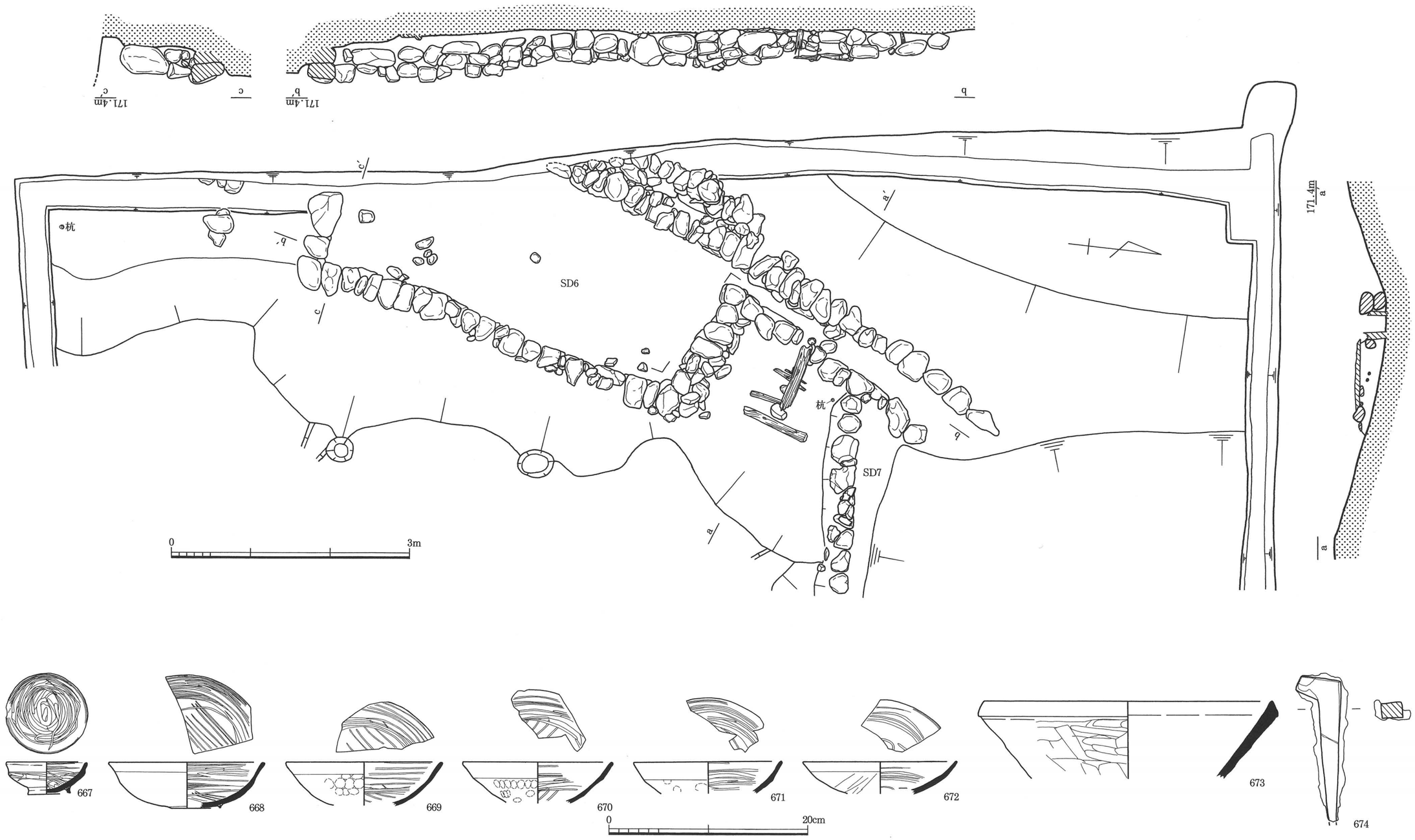
ＳＤ７は第１調査区の中央部、ＳＤ６の北東に位置する。平面形は遺構の西端をＳＤ６に切られ、東側が調査区外に及ぶため、詳細は不明である。また、石組は南側にのみ存在し、北側での存在の有無については不明である。検出した規模は長さ４ｍ、幅0.4m、深さ0.15mを測る。石組に用いられた石は河原石で、最大のものは18cm×16cm×16cmを測る。

これらのことから、ＳＤ６と同様、ＳＤ４東側部分の前身遺構、石組溝であると考えられる。しかし遺構の東端がＳＤ４と異なり、北側へと方向を異にしていることや、遺構の立地・構造・勾配等を考え合わすと、流水方向は西から東、そして北へ流れていたことがわかった。

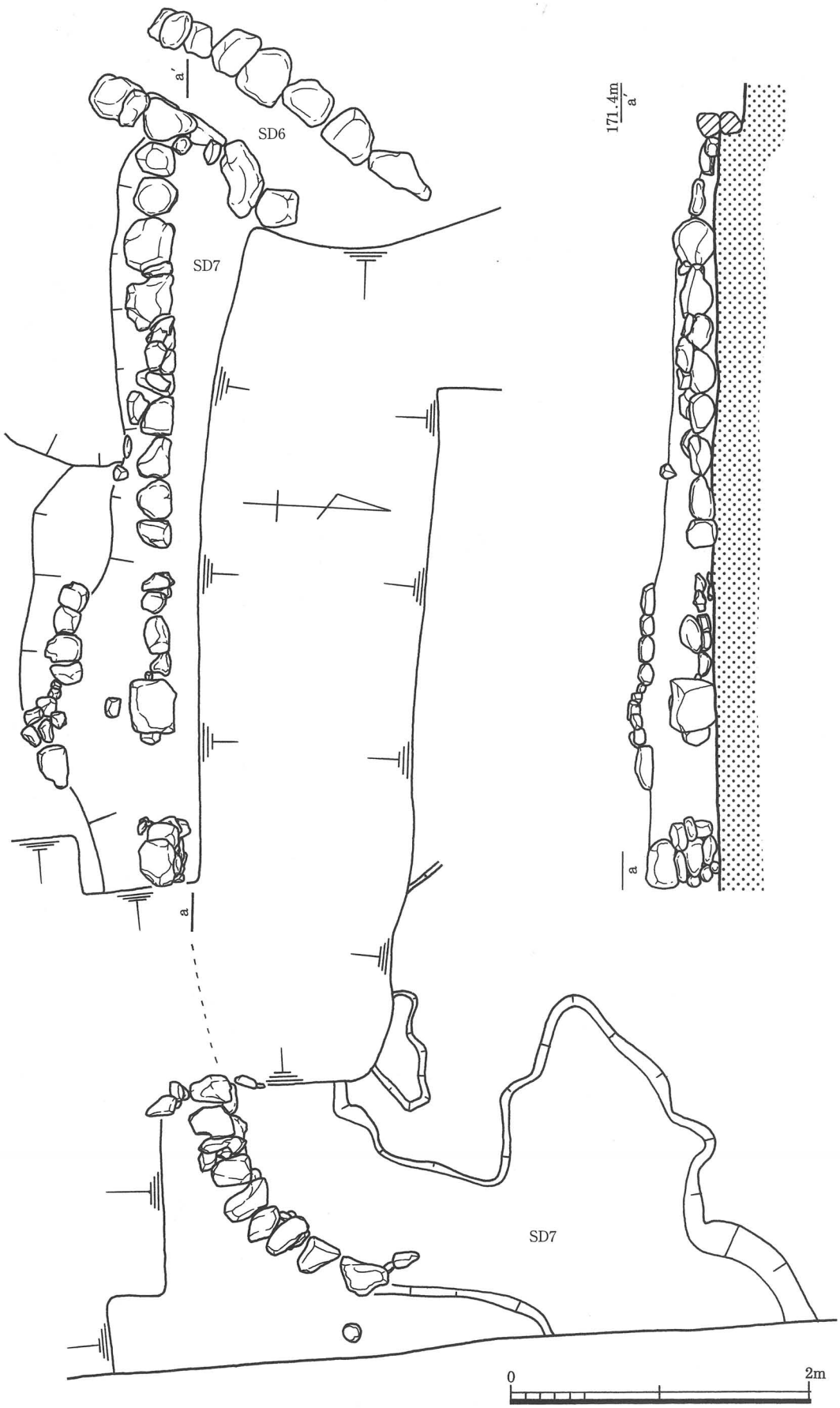
遺物は土師質皿（675～677）・灯明皿（678）、瓦器皿（679）・小埦（680）・埦（681～686）、瓦質皿（687）・擂鉢（692・693）・片口鉢（694）・甕（695）、須恵質錬鉢（690）・片口鉢（691）、陶器擂鉢（689）、磁器碗（688）が出土した。



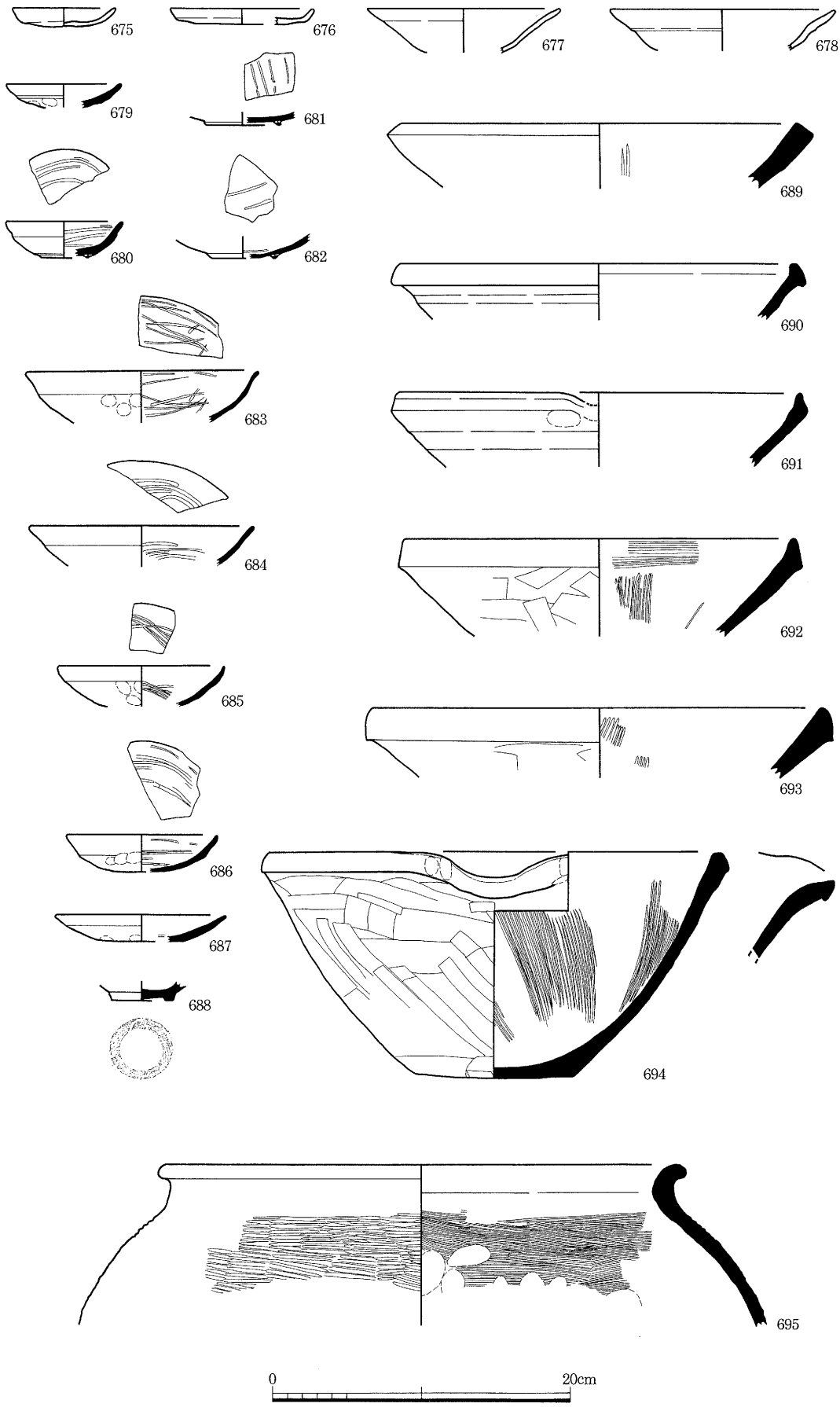
第119図　第１～３調査区第５遺構検出面遺構配置図（１/120）



第120図　ＳＤ６遺構実測図（１/50）及び出土遺物実測図



第121図　ＳＤ７遺構実測図（１/40）

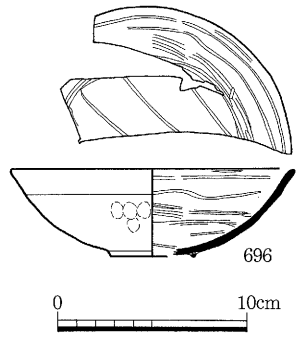


第122図　ＳＤ７出土遺物実測図

［ＳＤ８］（第123図）

ＳＤ８は第１調査区の南東隅に位置する。平面形は東端が側溝によって切られているが、不定形を呈することがわかる。検出した規模は長軸3.88m、短軸0.3m、深さ0.37ｍを測る。主軸方向はＮ－83°－Ｅである。

遺物は、瓦器椀（696）が出土した。



第123図　ＳＤ８
出土遺物実測図

［ＳＤ９］（図版35）

ＳＤ９は第３調査区の西側に位置する。平面形は遺構の南北両端が調査区外に及ぶため、詳細は不明である。検出した規模は長さ0.48m、幅0.95m、深さ0.25ｍを測る。主軸方向はＮ－10.5°－Ｗである。

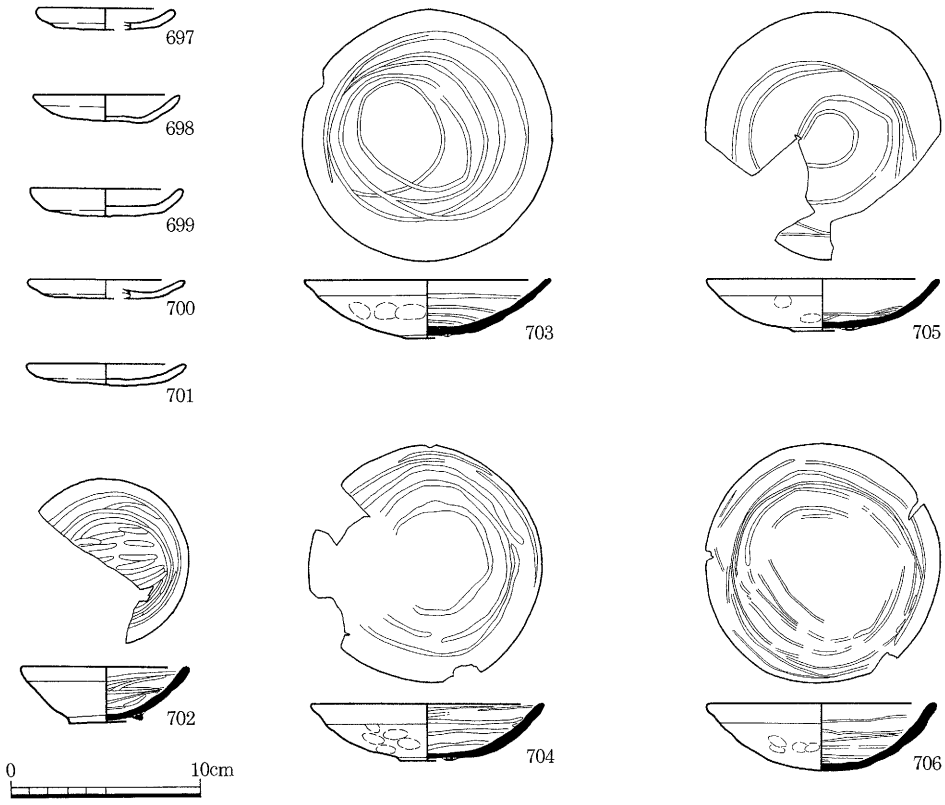
遺物は出土しなかった。

(2)土坑

［ＳＫ27］（第124図、図版70）

ＳＫ27は第１調査区の中央部に位置する。平面形は不定形を呈する。規模は長軸0.6m、幅0.49m、深さ0.21ｍを測る。

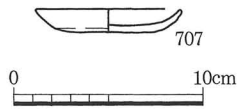
遺物は土師質皿（697～701）、瓦器小椀（702）・椀（703～706）が出土した。



第124図　ＳＫ27出土遺物実測図

［ＳＫ28］（第125図、図版70）

ＳＫ28は第１調査区の中央部、ＳＫ27の東側0.2mに位置する。平面形は遺構の南側を後述するＳＫ29に切られているが、不定形を呈することがわかる。検出した規模は長軸0.87m、短軸0.26m、深さ0.18mを測る。

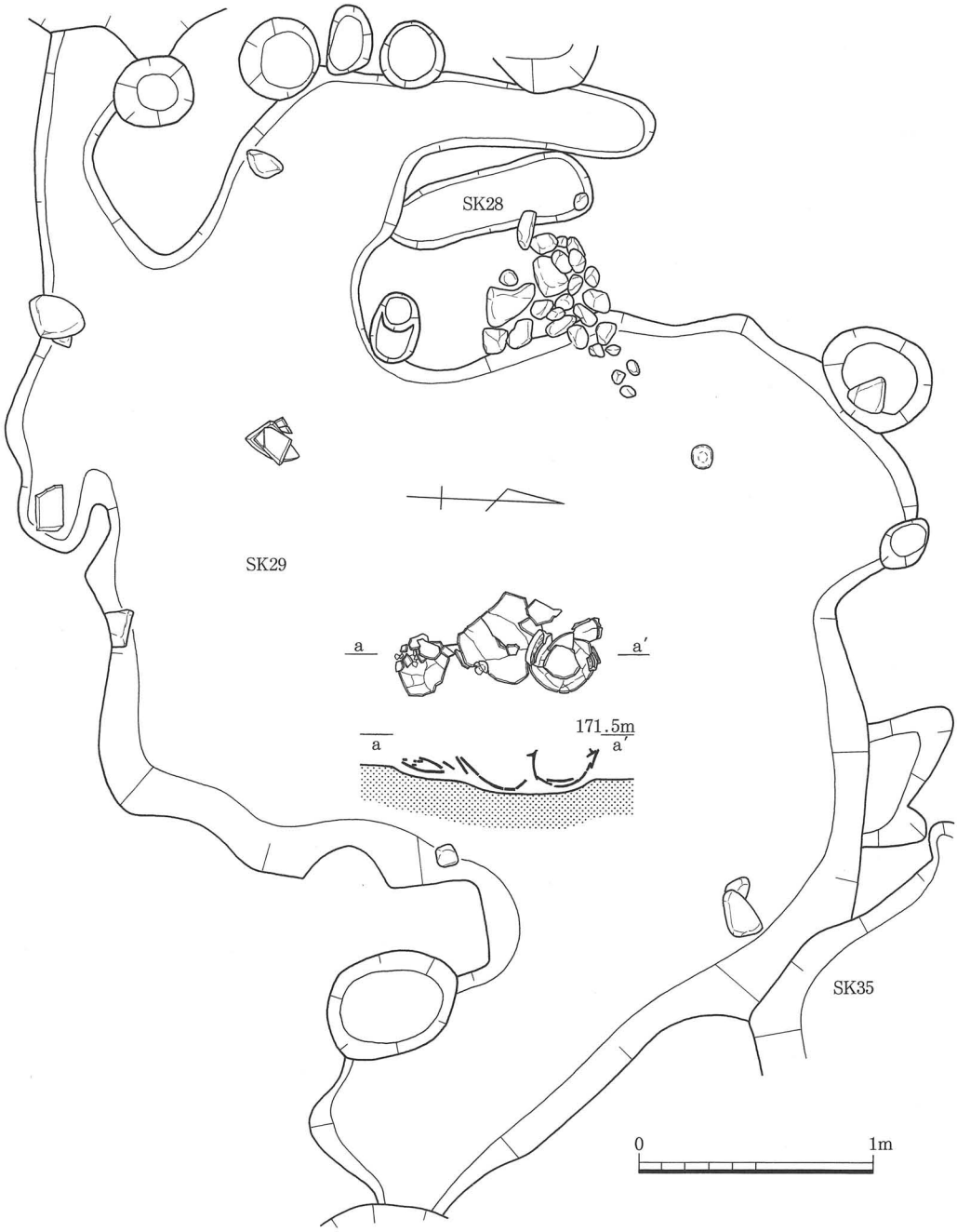


第125図　ＳＫ28 出土遺物実測図

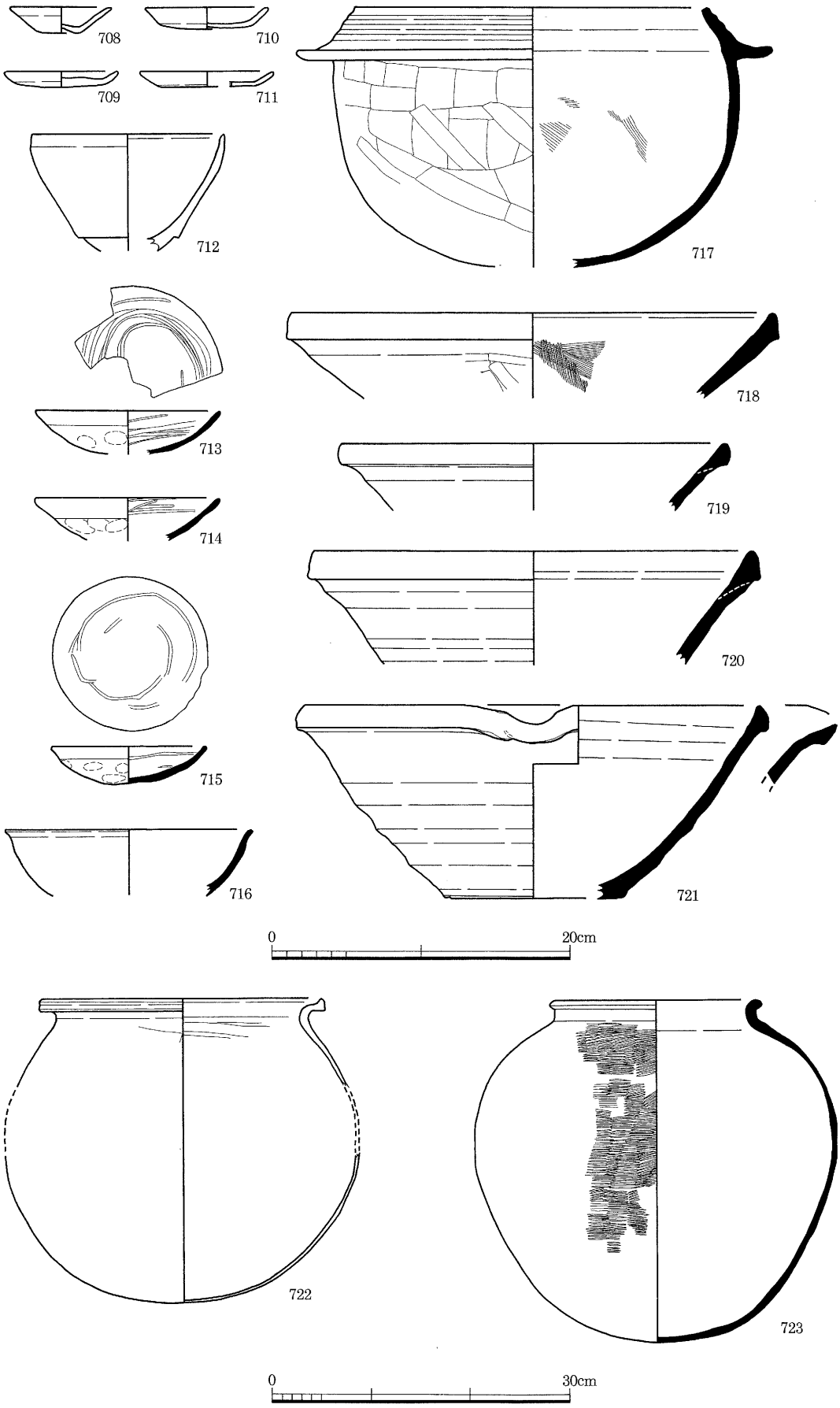
遺物は土師質皿（707）が出土した。

［ＳＫ29］（第126～128図、図版35・70・71）

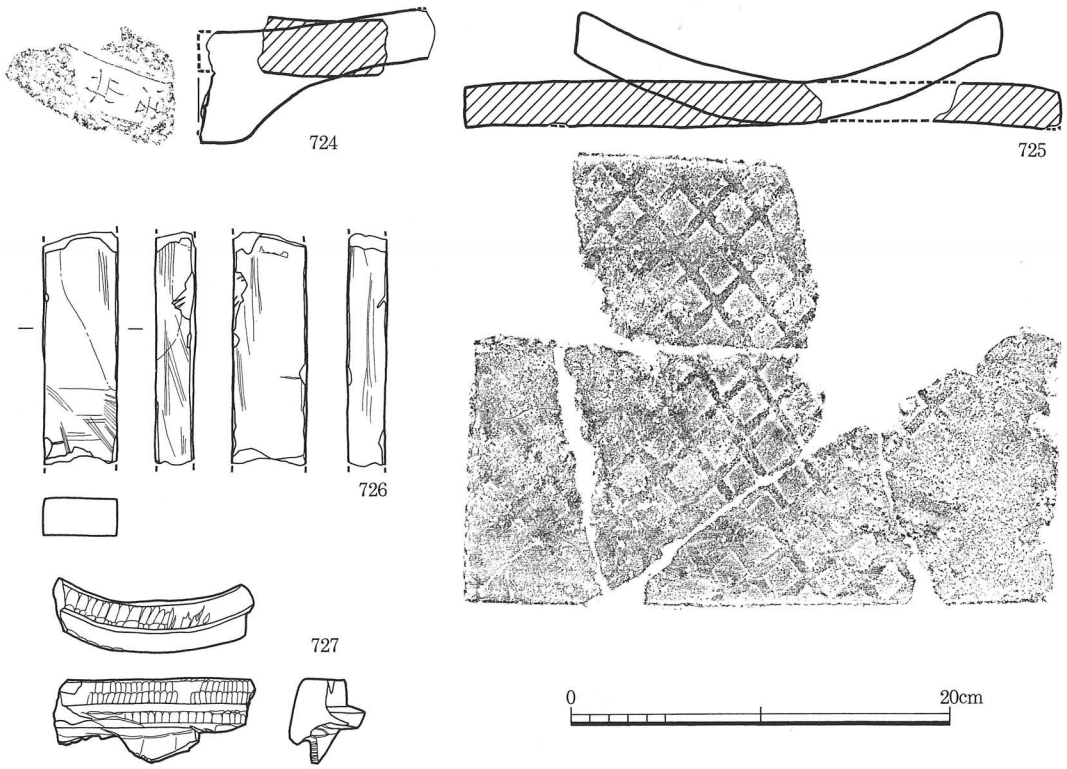
ＳＫ29は第１調査区の中央部南側に位置する。平面形は遺構の周辺を幾つかの遺構に切



第126図　ＳＫ29遺構実測図（１/30）



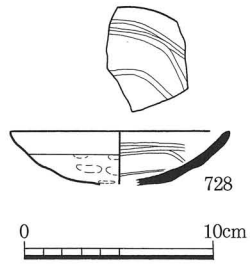
第127図　ＳＫ29出土遺物実測図（１）



第128図　ＳＫ29出土遺物実測図（２）

られているが、不定形を呈することがわかる。検出した規模は長軸2.67m、短軸1.4m、深さ0.23mを測る。

遺物は土師質皿（708～711）・埦（712）・土釜（722）、瓦器埦（713～715）、瓦質土釜（717）・擂鉢（718）・甕（723）、須恵質錬鉢（719・720）・片口鉢（721）、青磁碗（716）、軒平瓦（724）・平瓦（725）、粘板岩製の砥石（726）、滑石製の石鍋転用品（727）が出土した。



第129図　ＳＫ30出土遺物実測図

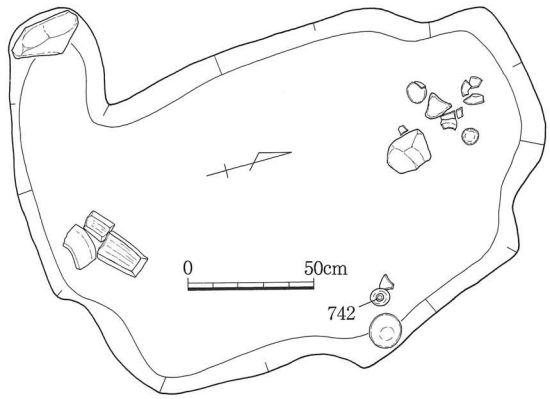
［ＳＫ30］（第129図）

ＳＫ30は第１調査区の南側、ＳＫ29の南側に近接し位置する。平面形は不定形を呈する。規模は長軸1.12m、短軸0.7m、深さ0.2mを測る。

遺物は瓦器埦（728）が出土した。

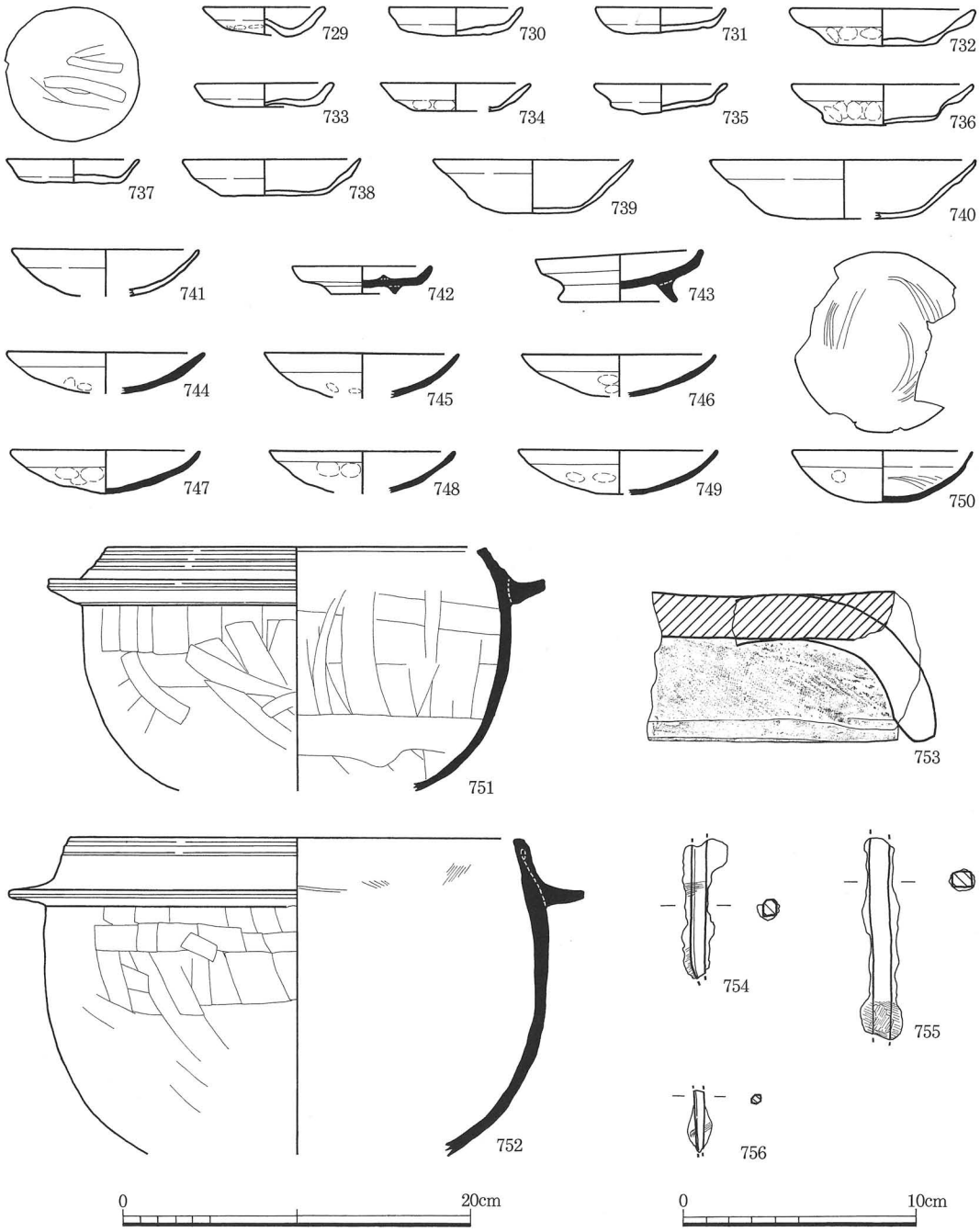
［ＳＫ31］（第130・131図、図版36・71・72）

ＳＫ31は第１調査区の南側、ＳＫ30の東側0.4mに位置する。平面形は不定形を呈する。規模は長軸2.12m、短軸1.39m、深さ0.3mを測る。



第130図　ＳＫ31遺構実測図（１/30）

遺物は土師質皿（729～740）・埦（741）・火鉢、瓦器埦（750）、瓦質花埦



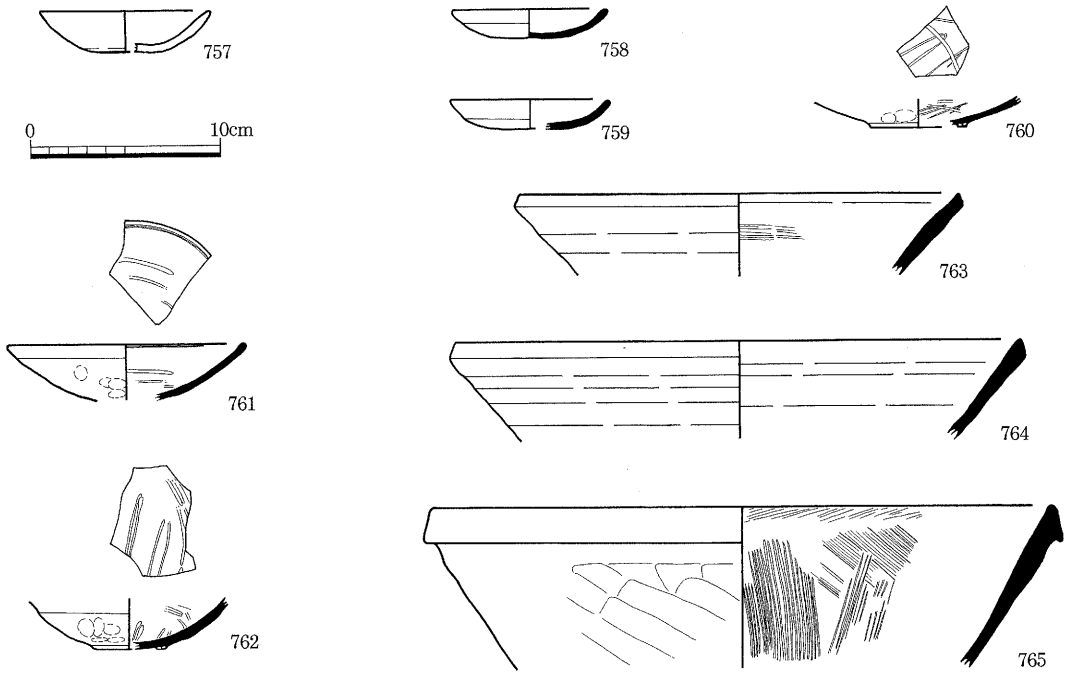
第131図　ＳＫ31出土遺物実測図

(742)・台付皿（743)・皿（744～749)・土釜（751・752)・片口擂鉢、丸瓦（753)、鉄釘（754～756）が出土した。なお、(742）が検出したことにより、今回出土した瓦器小椀は、六器や二器であることが確認できた。

［ＳＫ32］（第132図）

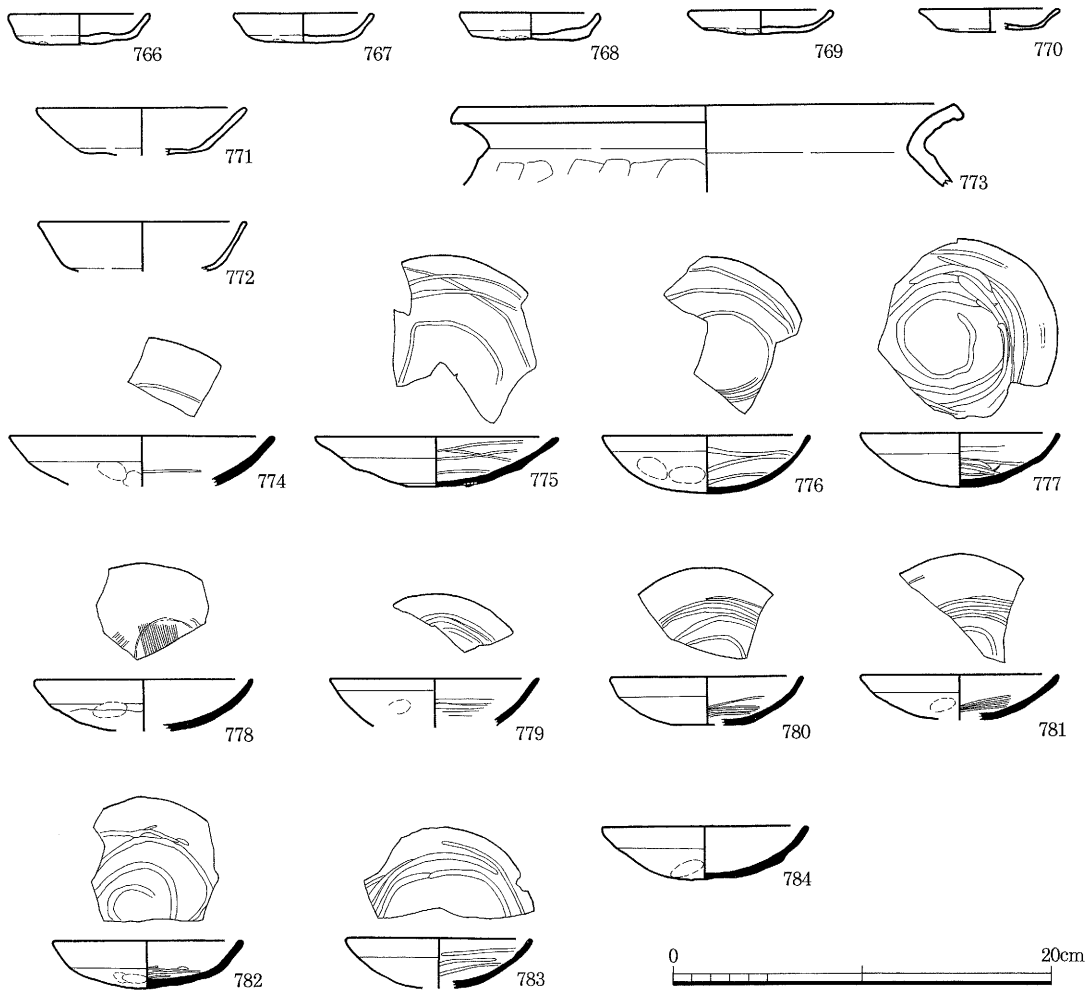
ＳＫ32は第１調査区の中央部、後述するＳＫ33の西側を削平する形で位置する。平面形は不定形を呈する。規模は長軸1.98m、短軸0.82m、深さ0.31ｍを測る。

遺物は土師質皿（757)、瓦器皿（758・759)・椀（760～762)、瓦質擂鉢（765)、須恵質錬鉢（763・764）が出土した。



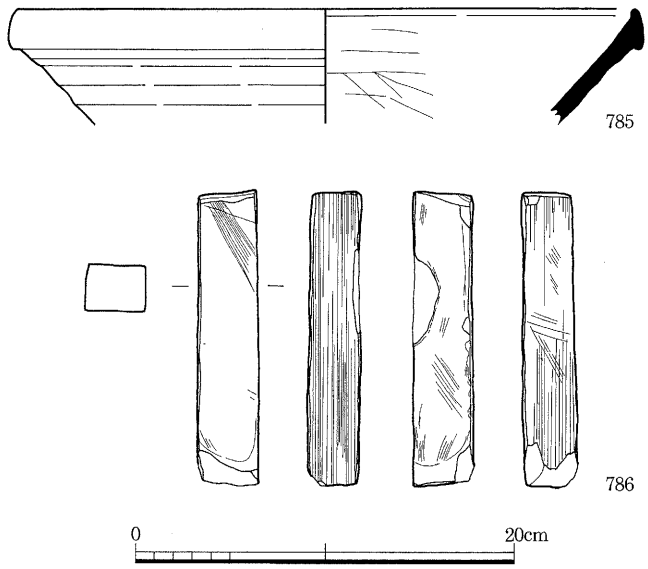
第132図　ＳＫ32出土遺物実測図

［ＳＫ33］（第133・134図、図版72・73）



第133図　ＳＫ33出土遺物実測図（１）

ＳＫ33は第１調査区の中央部、ＳＫ29の北側0.5ｍに位置する。平面形は遺構の北側・南側を周囲の遺構に切られているため、詳細は不明である。検出した規模は長軸3.18ｍ、短軸2.0ｍ、深さ0.15ｍを測る。遺構内部には河原石を用いた石列があり、その規模は最大54㎝×26㎝×21㎝を測る。

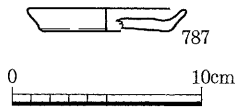


第134図　ＳＫ33出土遺物実測図（２）

遺物は土師質皿（766～772）・土釜（773）、瓦器椀（774～783）、瓦質皿（784）、須恵質錬鉢（785）、鬼瓦、粘板岩製の砥石（786）が出土した。

［ＳＫ34］（第135図）

ＳＫ34は第１調査区の中央部、ＳＫ33の東側に近接し位置する。平面形は遺構の北側が削平され、東側を後述するＳＫ35に切られているが、不定形を呈することがわかる。検出した規模は長軸2.04ｍ、短軸1.3ｍ、深さ0.12ｍを測る。



第135図　ＳＫ34出土遺物実測図

遺物は土師質皿（787）が出土した。

［ＳＫ35］（第136図、図版73）

ＳＫ35は第１調査区の中央部東側、ＳＫ34の東側に近接し位置する。平面形は遺構の北側が削平されているが、不定形を呈することがわかる。検出した規模は南北長2.24ｍ、東西長1.93ｍ、深さ0.17ｍを測る。

遺物は土師質灯明皿（788～790）・皿（791～799）、瓦器皿（800～802）・椀（803～808）、瓦質片口擂鉢（809）が出土した。

［ＳＫ36］

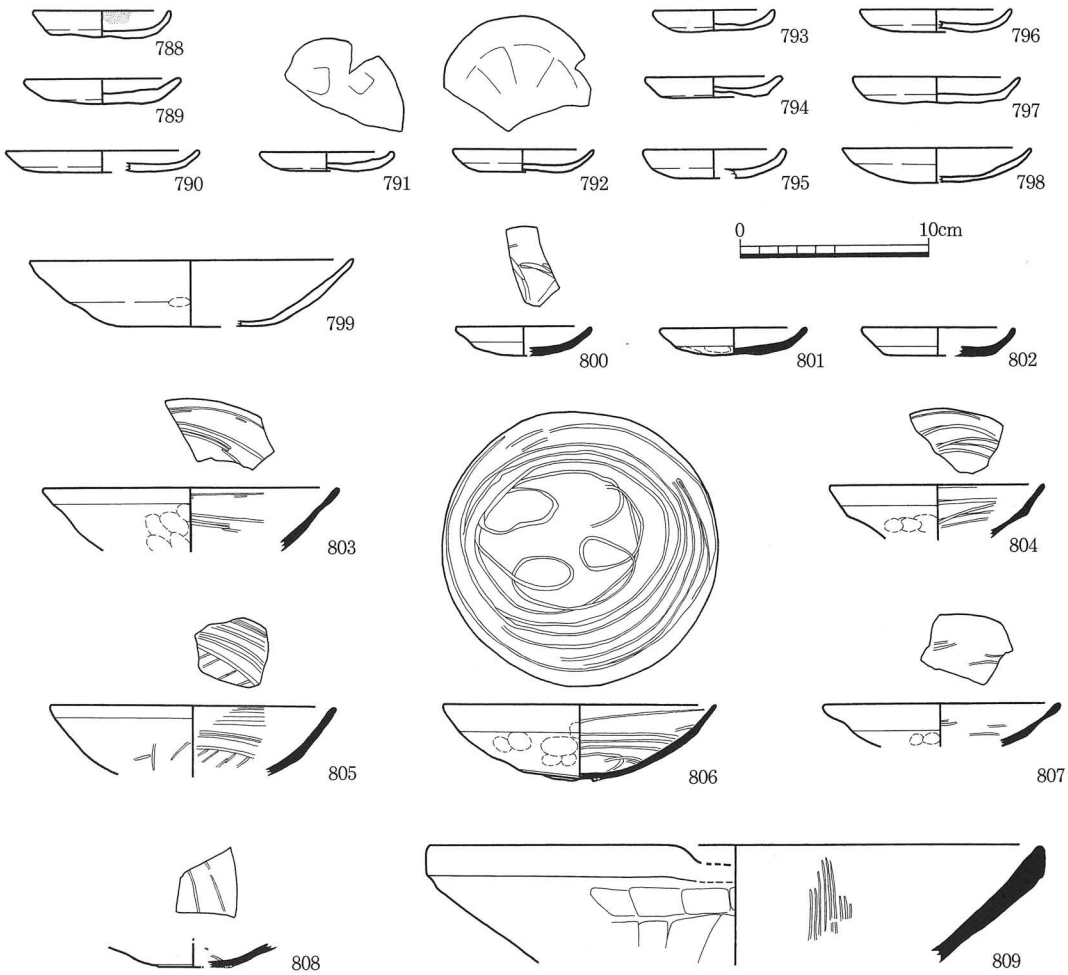
ＳＫ36は第１調査区の東側、ＳＫ35の東側に近接し位置する。平面形は遺構の北側が削平されているが、不定形を呈することがわかる。検出した規模は長軸0.99ｍ、短軸0.9ｍ、深さ0.38ｍを測る。

遺物は出土したが、細片のため図化できなかった。

［ＳＫ37］

ＳＫ37は第１調査区の東側、ＳＫ36の南側0.8ｍに位置する。平面形は円形を呈する。規模は径0.76ｍ、深さ0.29ｍを測る。

遺物は出土したが、細片のため図化できなかった。



第136図　ＳＫ35出土遺物実測図

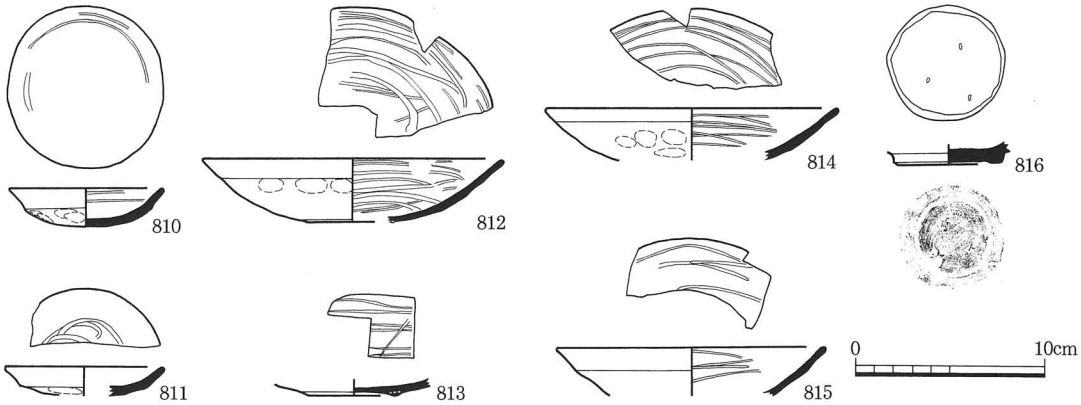
［ＳＫ38］（第137図、図版73）

ＳＫ38は第１調査区の南東部、ＳＫ37の南側0.7ｍに位置する。平面形は不定形を呈する。規模は長軸0.97ｍ、短軸0.47ｍ、深さ0.34ｍを測る。

遺物は瀬戸美濃系椀（816）が出土した。

［ＳＫ39］（第137図、図版73）

ＳＫ39は第１調査区の南東部、ＳＫ38の東側0.2ｍに位置する。平面形は不定形を呈する。



第137図　ＳＫ38・39出土遺物実測図

規模は長軸0.72m、短軸0.62m、深さ0.16mを測る。

遺物は瓦器皿（810・811）・椀（812～815）が出土した。

［ＳＫ40］

ＳＫ40は第１調査区の南東部、ＳＫ39の北側0.1mに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径0.69m、短径0.58m、深さ0.17mを測る。

遺物は出土したが、細片のため図化できなかった。

［ＳＫ41］（第138図）

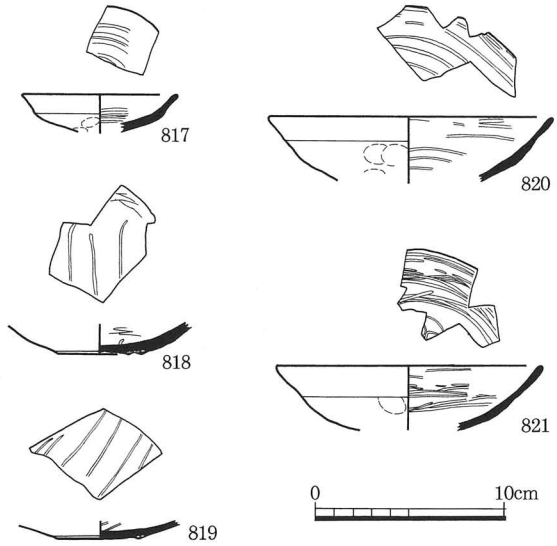
ＳＫ41は第１調査区の東側、ＳＫ40の北東0.5mに位置する。平面形は不定形を呈する。規模は長軸0.52m、短軸0.41m、深さ0.1mを測る。

遺物は瓦器皿（817）・椀（818・821）が出土した。

［ＳＫ42］（第138図）

ＳＫ42は第１調査区の東端、ＳＫ39の東側1.1mに位置する。平面形は東側が側溝に切られているため、詳細は不明である。検出した規模は南北長1.06m、東西長0.36m、深さ0.19mを測る。

遺物は瓦器椀（819・820）が出土した。



第138図　SK41・42出土遺物実測図

［ＳＫ43］

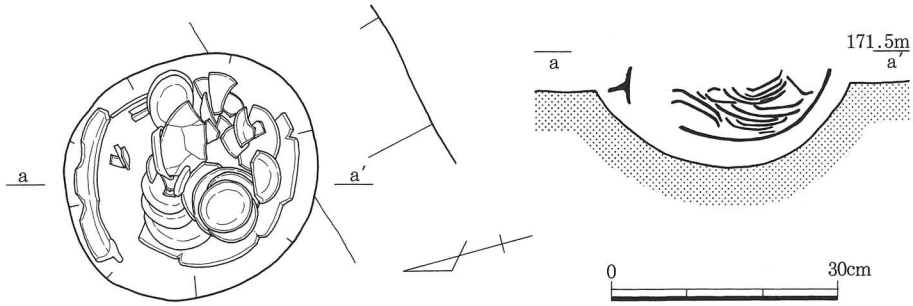
ＳＫ43は、第１調査区の北東部に位置する。平面形は南側が調査区の北から東に延びている撹乱に削平されているため、詳細は不明である。検出した規模は長軸0.8m、短軸0.36m、深さ0.1mを測る。

遺物は出土したが、細片のため図化できなかった。

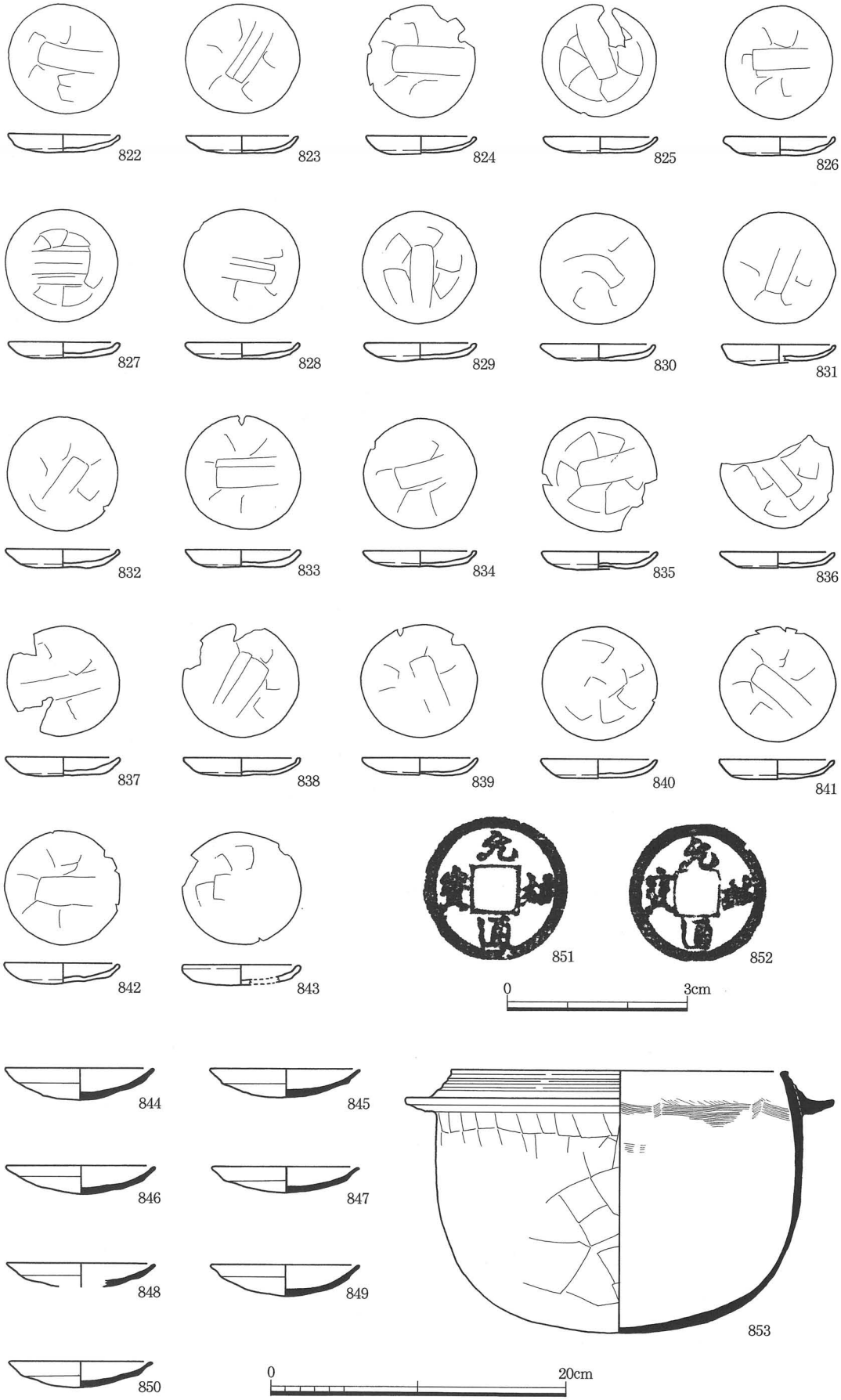
(3)土釜埋納遺構（土公供作法遺構）

［ＳＯ２］（第139・140図、図版36・74・75）

ＳＯ２は第１調査区の中央部、ＳＫ35に重複して位置する。遺構は掘形である土坑を伴



第139図　ＳＯ２遺物実測図（1/10）



第140図　ＳＯ２出土遺物実測図

い、平面形は楕円形を呈する。検出した規模は長径0.34m、短径0.32m、深さ0.12mを測る。遺構は土坑の内部に瓦質土釜１点が据えられ、土釜内部には土師質皿22点、瓦質皿７点、銅銭２点が納められ、皿は見込みを上方に向けているものと伏せているものの両方が確認できた。

また、遺構の検出された地点がＳＢ１建物配置下であり、更にＳＢ１建築以前の造成時のものと思われる下層整地層下で検出されていることから、ＳＢ１建築以前に行われた修法跡である可能性がある。

出土した遺物には土師質皿（822～843）、瓦質皿（844～850）・土釜（853）、元祐通宝（初鋳1086年、851・852）がある。

瓦質皿は、尾谷分類に照らし合わせると８類で、その年代は15世紀後半に相当すると思われる。

銅銭については、幣串に付属すると考える場合、具体的には用意した幣串のうちの２本に、１本につき10点、或いは12点備えることになっているので、前者の場合は合計20点、後者の場合は合計24点となる。また施主の年齢数（数え年）を供物とする場合もあるが、当該遺構の出土点数は、任意の点数の銭を供物としたと推測される。

遺構の性格は、ＳＯ１と同様、真言宗の地鎮修法の作法である「地天供作法」・「土公供作法」に則り修されたものと考えられ、その出土形態は土釜の外面に二次焼成痕が認められないことと、共伴する土師質皿や瓦質土器の出土点数から、出土品分類のⅡ′類に相当するものと考えられる。

しかし、天野山金剛寺遺跡の既往調査例において、土師質土器と瓦質土器が混用されている場合、瓦質土器のその点数は、修法時に主に用意される幣串５本・８本・９本・10本・12本・13本と一致する傾向にあるが、当該遺構はその既往調査の出土傾向とは異なる。これらのことから、今回の修法の対象は不明である。この点については、今後の資料増加を待って、検討を要すると考えられる。いずれにしても、真言宗の地鎮修法の作法を研究する上で、有用な資料が得られた。

(4)ピット

［ＳＰ24］

ＳＰ24は第１調査区の南側、ＳＫ30の西側1.1mに位置する。平面形は円形を呈する。規模は径0.22m、深さ0.14mを測る。

遺物は出土したが、細片のため図化できなかった。

［ＳＰ25］

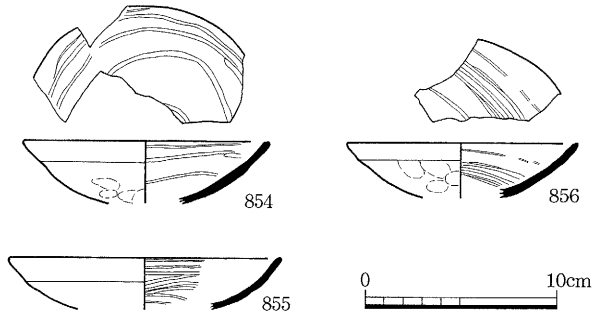
ＳＰ25は第１調査区の中央部、ＳＫ29の北側に近接し位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径0.22m、短径0.2m、深さ0.16mを測る。

遺物は出土したが、細片のため図化できなかった。

［ＳＰ26］（第141図、図版76）

ＳＰ26は第１調査区の中央部、ＳＫ33の南側を遺構の北側で削平するようにして位置する。平面形は円形を呈する。規模は径0.28m、深さ0.14mを測る。

遺物は瓦器埦（854～856）が出土した。

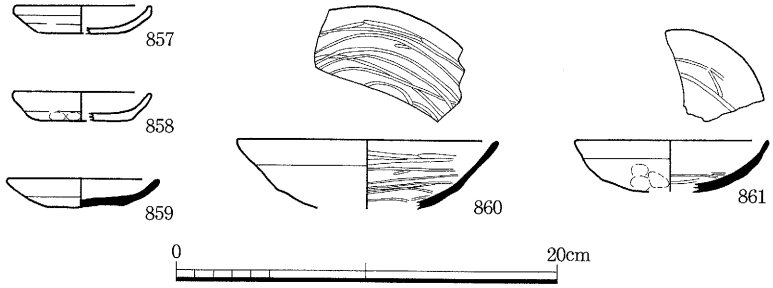


第141図　ＳＰ26出土遺物実測図

［ＳＰ27］（第142図、図版76）

ＳＰ27は第１調査区の東端中央部に位置する。平面形は遺構の東側半分が側溝に切られているため、詳細は不明である。検出した規模は南北長0.26m、東西長0.28m、深さ0.27mを測る。

遺物は土師質皿（857・858）、瓦器皿（859）・埦（860・861）が出土した。

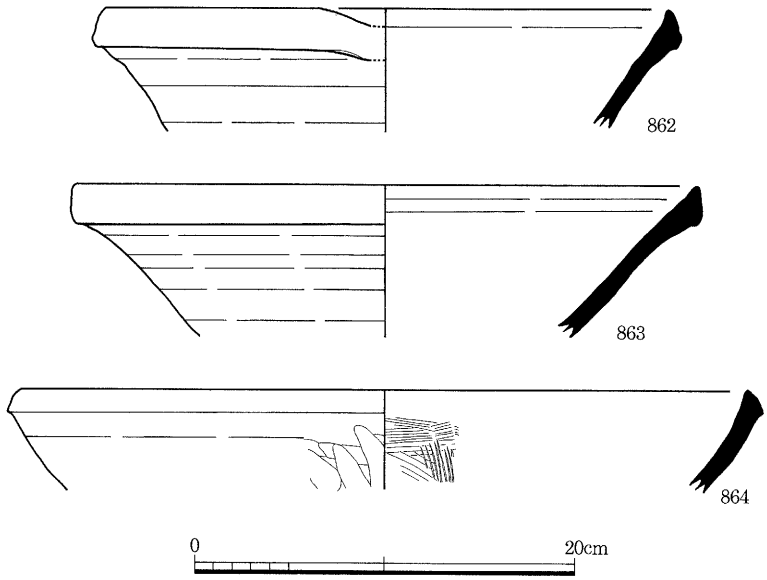


第142図　ＳＰ27出土遺物実測図

(5)石列

［ＳＷ３］（第143図、図版76）

ＳＷ３は第１調査区の中央部、ＳＤ７の南側0.4mに位置する。検出長が短いこともあり詳細は不明である。検出した規模は長さ1.36mを測る。主軸方向はＮ－86°－Ｅである。



第143図　ＳＷ３出土遺物実測図

石列に用いられた石は、最大27cm×20cm×９cmを測る。遺構の性格としては、調査区の北側が南側より水準が高いことから、縁の保護のために設けられたと考えられる。

遺物は瓦質擂鉢（864)、須恵質片口鉢（862）・錬鉢（863）が出土した。

(6)谷状地形

［ＮＶ２］（第144～147図、図版76～79）

ＮＶ２は第１調査区の北東部に位置する。平面形は遺構の西側が調査区の北から東にかけての撹乱によって削平され、北端・東端も調査区外に及び、また検出部分もごく一部であることから、詳細は不明である。検出した規模は長軸6.5m、短軸2.4m、深さ0.01～0.1mを測る。

遺物は遺構の北側では、土師質台付皿（865)・皿（866～877)、瓦器皿（878～880)・小椀（881～883)・椀（884～894)・鉢（897)、瓦質皿（895・896)・土釜（898)・擂鉢（899～901)・片口鉢・火鉢（902)・甕（903)、須恵質錬鉢（904～906)・片口鉢、天目茶椀（907)、陶器甕（908)、青磁皿（909)・碗（910)、丸瓦（911・912)、石鍋転用品が出土した。

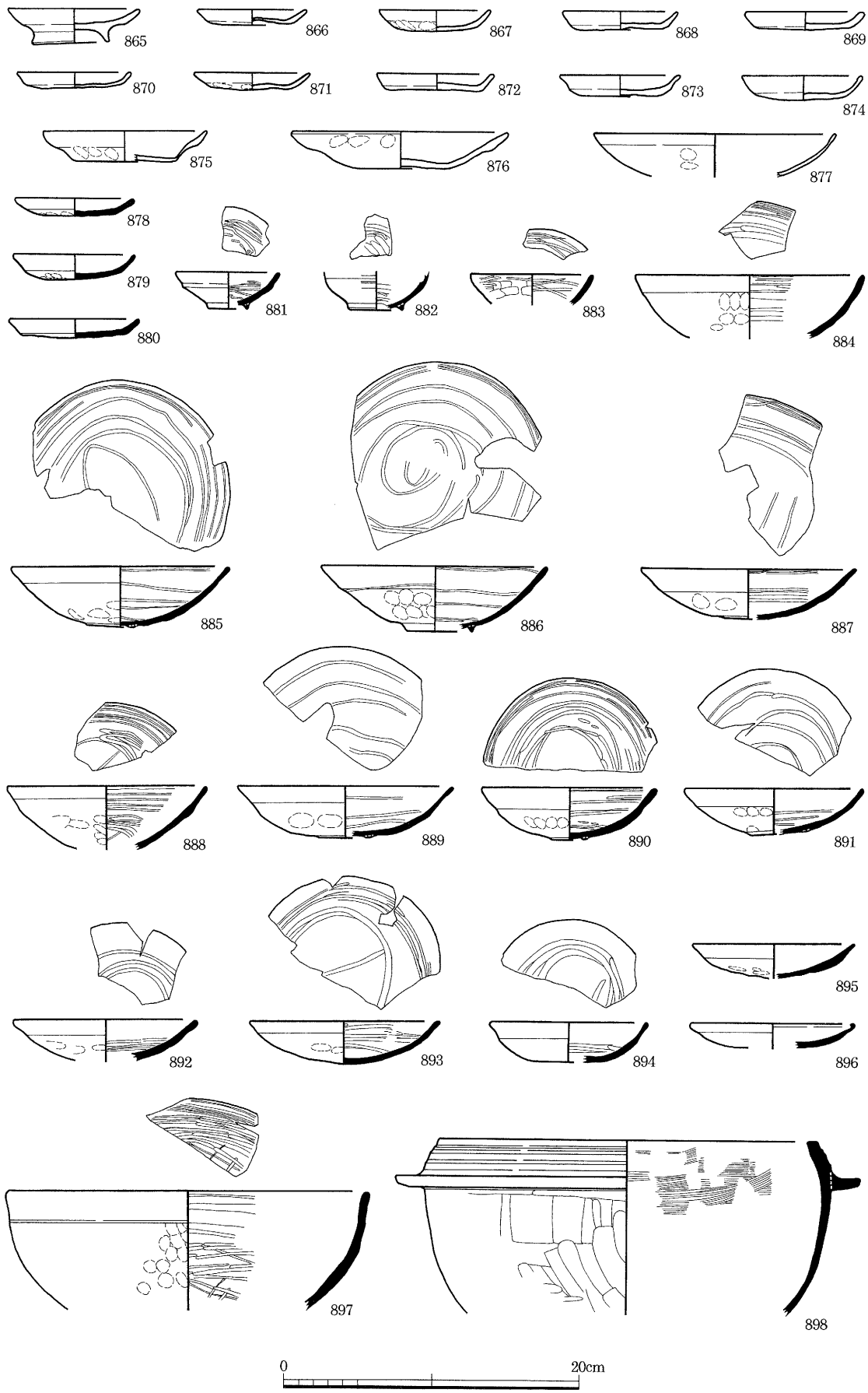
遺構の南側では、土師質灯明皿（913・914)・皿（915～918)・土釜（936～938)、瓦器皿（920～922)・小椀（919)・椀（923～934)、瓦質皿（922)・土釜（935)・擂鉢・火鉢、須恵質錬鉢（939～945)・甕（946)、青磁皿・鎬蓮弁青磁碗（947)、丸瓦（948～950）が出土した。

(7)包含層（第148～150図、図版79～81）

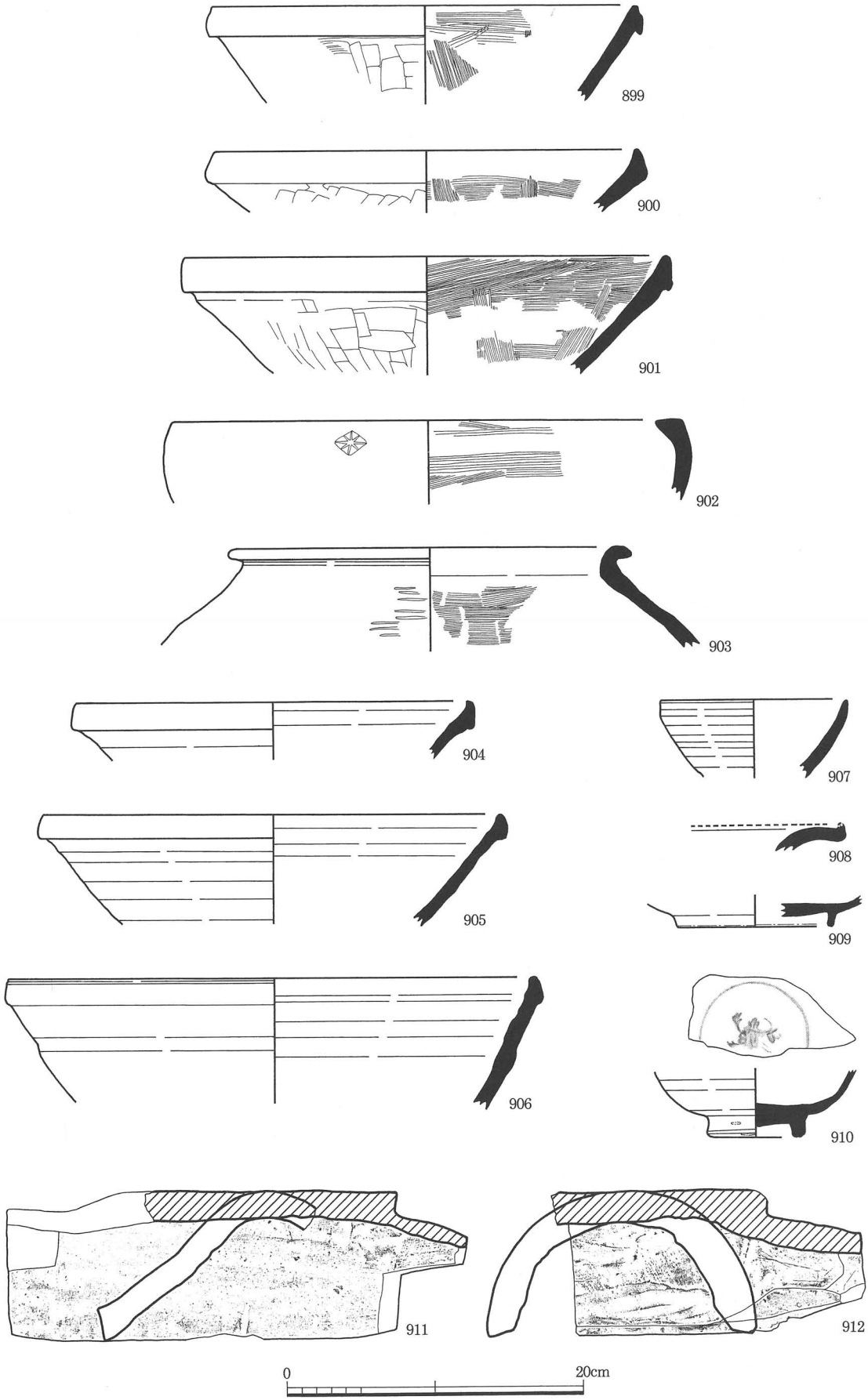
遺物は第１調査区の包含層である㊼10YR7/8黄橙色シルトブロック（下層整地層）・㊼10YR6/3にぶい黄橙色粗砂・㊾10YR6/8明黄褐色シルト混じり極細砂層中から、土師質皿（951～956・972～976)・灯明皿（977・978)・火消し壺蓋（957)、瓦器皿（958・959)・小椀（960・961)・椀（962・963・979～981)、瓦質皿（964～966)・土釜（967・982)・擂鉢（968・969・983・984)・火鉢（989)、須恵質錬鉢（985)、唐津系皿（987)、常滑甕（988)、青磁碗（986)、磁器皿（970)、軒丸瓦（990)、石鍋転用品とみられる石製品(971)、粘板岩製の砥石（991）が出土した。

なお、土師質皿（972～976)・灯明皿（977・978)、瓦器椀（979～981)、瓦質土釜(982)・擂鉢（983・984)・火鉢（989)、須恵質錬鉢（985)、唐津系皿（987)、常滑甕(988)、青磁碗（986)、軒丸瓦（990)、粘板岩製の砥石（991）は、下層整地層である㊼10YR7/8黄橙色シルトブロックから出土した。また（991）からは、「三石四斗一升＝含四石二斗」という陰刻が確認できた。

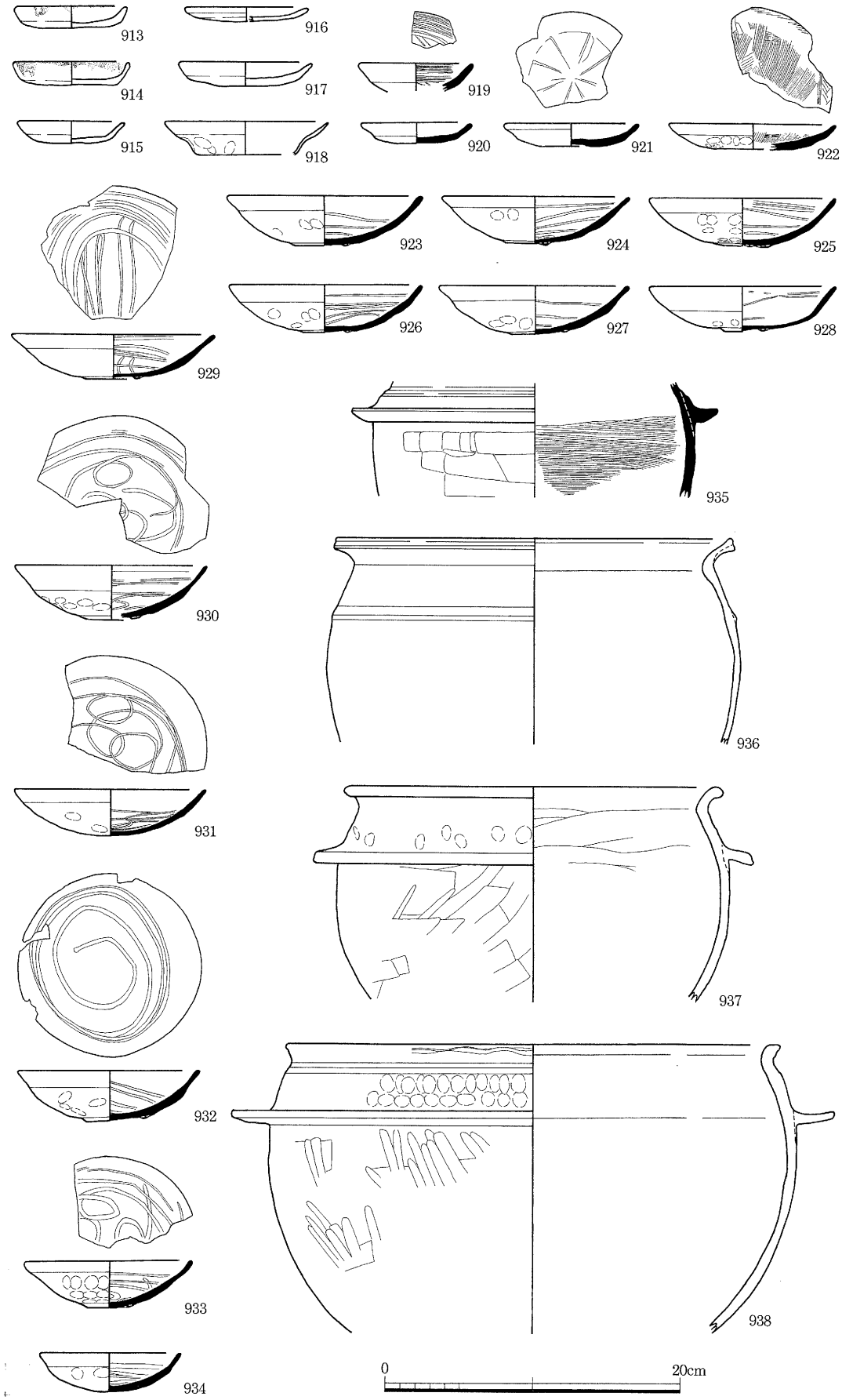
第２調査区からは発掘調査終了後に行った立会調査時に、瀬戸系灰釉四耳壺（992）が出土した。



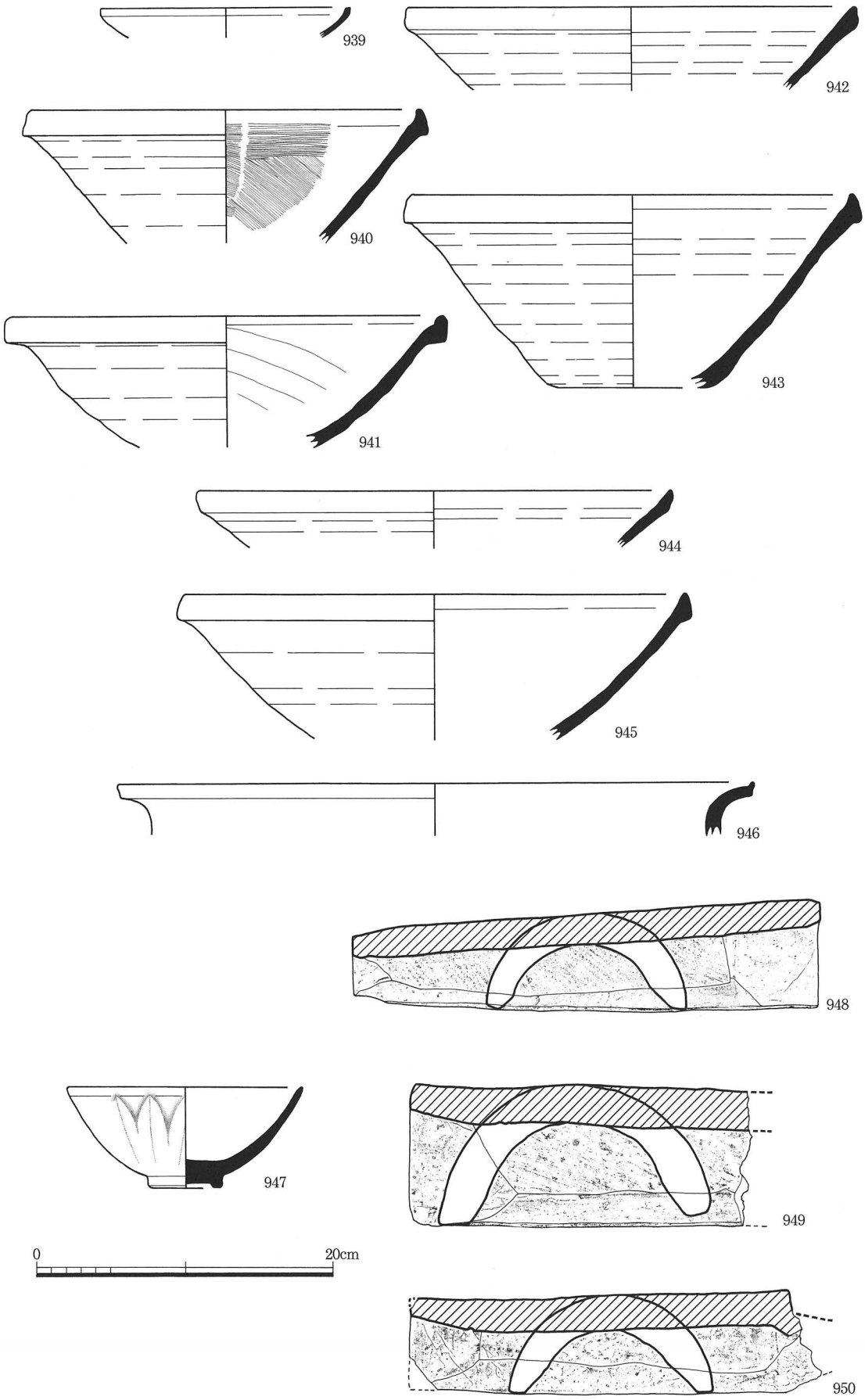
第144図　ＮＶ２北側出土遺物実測図（１）



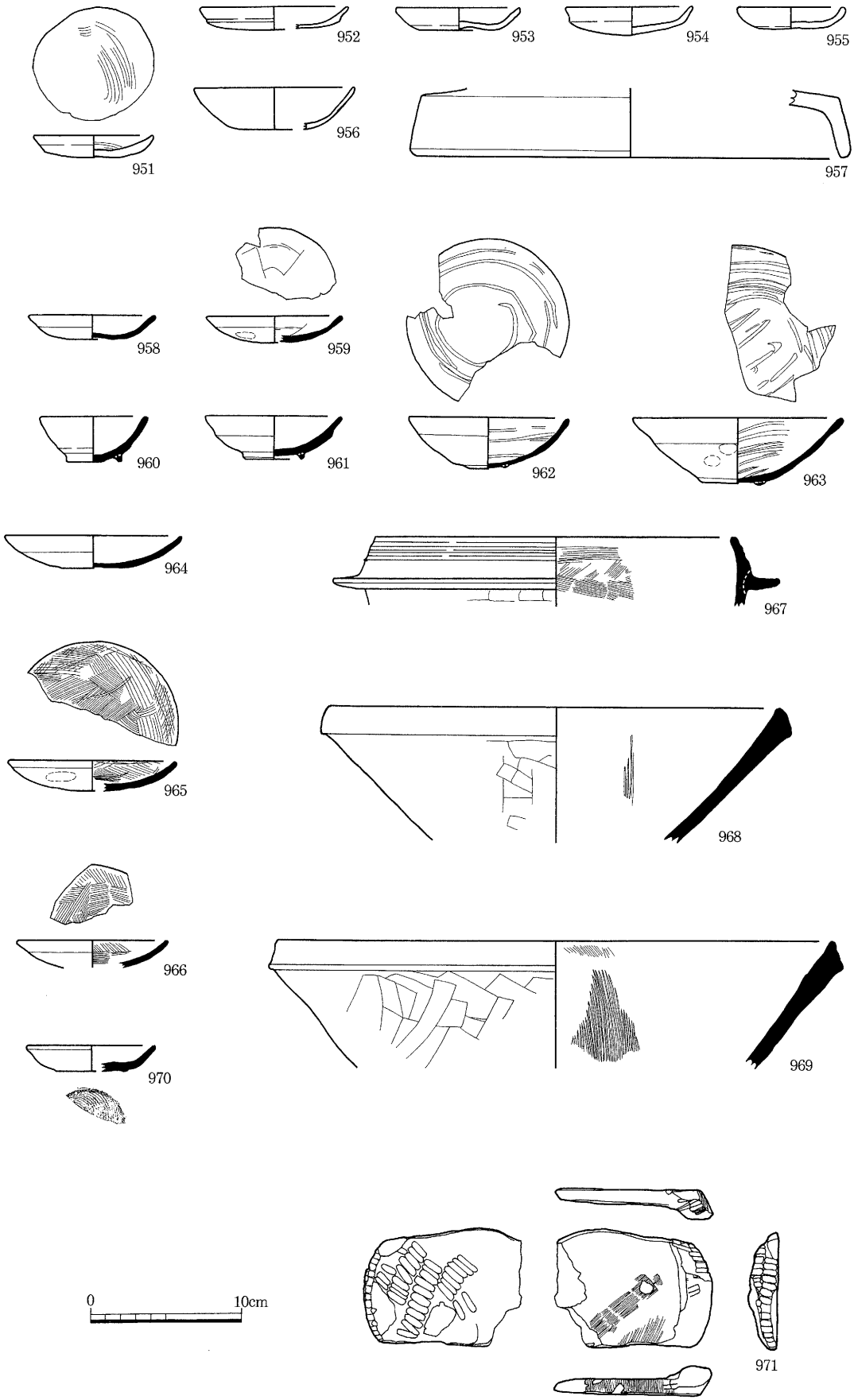
第145図　ＮＶ２北側出土遺物実測図（２）



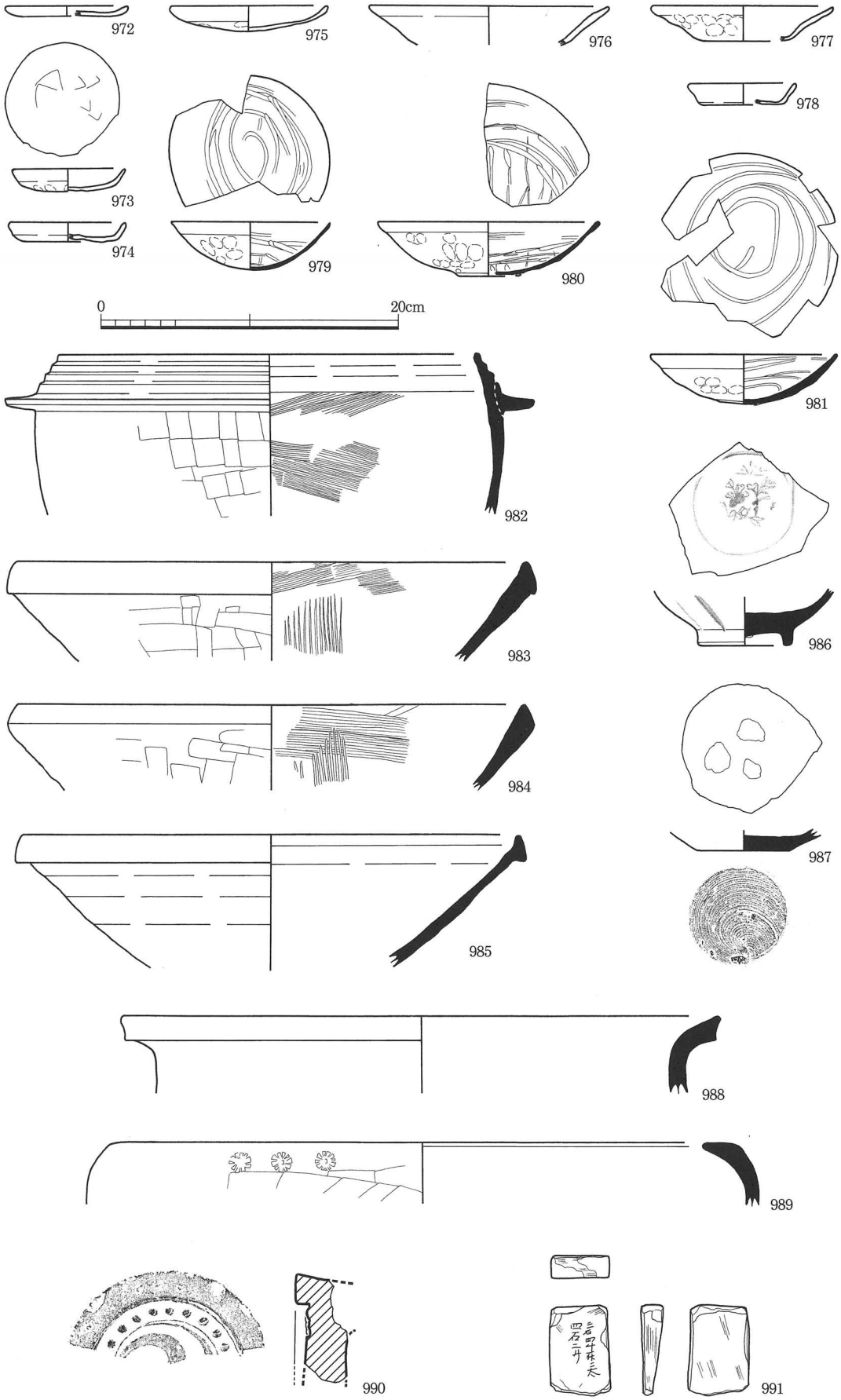
第146図　ＮＶ２南側出土遺物実測図（１）



第147図　ＮＶ２南側出土遺物実測図（２）



第148図　第１調査区第５遺構検出面包含層出土遺物実測図



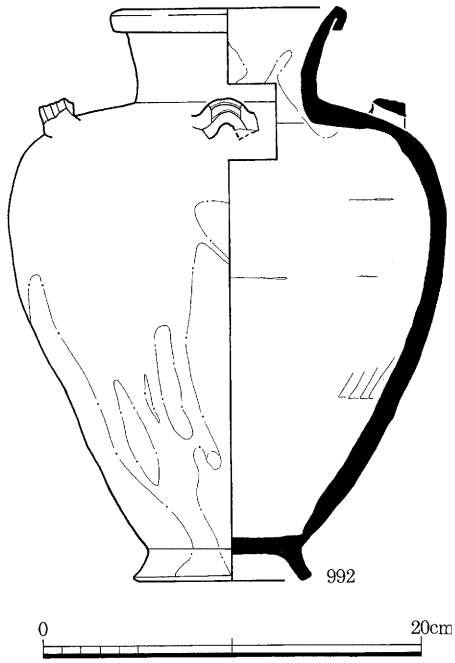
第149図　第１調査区第５遺構検出面包含層（下層整地層）出土遺物実測図

最下位出土遺物層

(1)第１調査区土層断面第89・91層（第151図、図版81・82）

遺物は第１調査区の第89・91層中から、須恵器坏身（993）、土師質耳皿（994）・皿（995・996）・灯明皿（997・998）、瓦器皿（999・1000）・小椀（1001・1002）・椀（1005～1010）、瓦質皿（1011）・土釜（1012）・擂鉢・片口擂鉢（1013）、鎬蓮弁青磁碗（1014）、白磁碗（1015）、叩き石が出土した。

これらの遺物は遺構面に伴うものではないが、調査区内の最下層出土遺物であるため、参考として掲載した。



第150図　第２調査区第５遺構検出面包含層出土遺物実測図

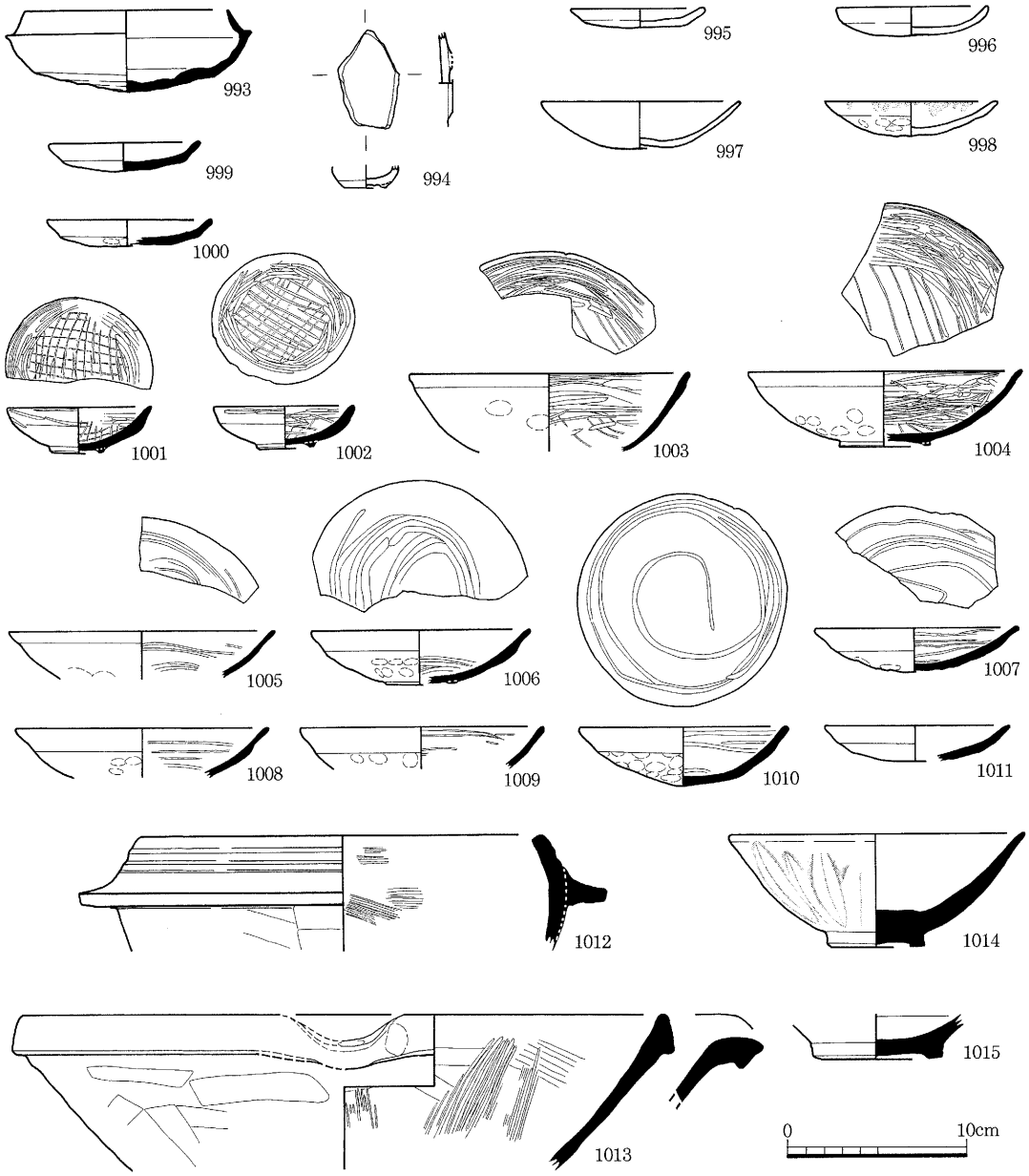
２　まとめ

調査の結果、本調査区からは既往調査には例をみない多数の遺構検出面、及び遺物が検出された。したがって、遺構・遺物の時期は、主に14世紀から18世紀にかけてという長期間のものであり、この時期における天野山金剛寺の子院の様子をうかがう上で、様々な好資料が得られた。

先ず、当該調査区には小字名「天野山」が残されており、検出した遺構は天野山金剛寺内でも有力な子院跡である可能性が高い。このことは、既往調査でも類を見ない丁寧な石積みや、大容量の排水機能をもつ排水路ＳＤ４が検出されたこと、ＳＢ１の倒壊した壁材の壁芯にあたる木組みが、当時としては大変丁寧に組まれていることからも推測される。

次に、今までは既往調査区の位置する箇所が明らかに子院跡であっても、密教法具の出土例はみられなかったが、当該調査区では第４遺構検出面のＳＤ４から土器製の六器、もしくは二器に相当する瓦器小椀、第５遺構検出面のＳK31からも瓦質花埦や仏供皿が出土した。

密教法具といえば、学史上、先ず金属製のものがその研究対象として挙げられる。しかし９世紀初頭、中国から最澄（767－822年）・空海（774－835年）らによって請来されたいくつかの教典・儀軌に目をやると、その製作素材は金属製と並記して、他の素材に関しても使用が許されていることに気付く。具体的には、以下の様なものがある。『蘇悉地羯羅経中　本尊奉請求品第十七』（７～８世紀前半、善無畏訳・玄昉・最澄・空海・円仁・円珍請来）に「閼伽を盛る器には、當に金銀を用い、或いは熟銅を用うべし、或いは石を以て作り、或いは土、木を以てし、或いは螺を取って作り、或いは束底を用てし、或いは荷葉を用いて綴りて器を作るべし、或いは乳樹の葉を以てす。」[註8]、『蕤呬耶経』（８世紀



第151図　第１調査区最下位出土遺物層（土層断面第89・91層）出土遺物実測図

成立、不空訳・最澄・空海・円仁・恵運・宗叡請来）には「金、銀、銅、宝石類、或いは木石や貝、樹葉、もしくは新瓦をもって作れよと。よって清貧のものは瓦石を用いるも不都合はない。」[註9]などがある。これらは今日でも密教法具の製作素材に関する、真言宗での密教法具に対する共通認識となっている。したがって、土器製の密教法具は、これらの教典・儀軌に基づき、阿闍梨の要請を受けた工人などが制作したものと理解できる。

今後はこの様な教典・儀軌の内容も、積極的に文化財研究のための比較・参考資料として、密教法具の在り方を考察・研究していく必要性を再認識できた。

また、特筆すべきものとして、多くの瓦質土器や瓦器小埦の体部の内外面、および畳付には著しく磨滅したものが見られた。同様な磨滅跡は、長谷寺[註10]や高野山[註11]での発掘調査で出土した灰釉陶器、黒色土器、瓦器、瓦質土器の埦でも確認されている。この点につ

いては、いずれも真言宗寺院遺跡であるため、真言宗の修法にかかる作法儀礼に基づき、磨滅跡の形成過程を考察する必要があるものと考えられる。今後の資料増加が待たれる。

註1　中西隆英師（西国第二十二番霊場　総持寺）に御教示いただいた。

註2　岩鶴敏治氏（日本考古学協会）に御教示いただいた。

註3　木下密運師（千手寺）にご教示いただいた。

註4　永井久美男氏（出土銭貨研究会）・尾上実氏（同）に御教示いただいた。

註5　『河内長野市遺跡調査報告XXIX　天野山金剛寺遺跡』　2000年12月　河内長野市教育委員会・河内長野市遺跡調査会

註6　林野全孝氏（河内長野市文化財保護審議会会長）に御教示いただいた。

註7　『河内長野市遺跡調査会報XVI　天野山金剛寺遺跡』　1997年3月　河内長野市遺跡調査会

註8　『大正新脩大蔵経』第18巻614c

註9　『大正新脩大蔵経』第18巻766c

註10　『奈良県文化財調査報告書84集　長谷寺』　1999年　奈良県立橿原考古学研究所

註11　『金剛峯寺遺跡－尼僧研修道場建設に伴う発掘調査報告書』　1995年　（財）和歌山県文化財センター

第３節　考古地磁気年代推定

天野山金剛寺遺跡で発掘調査された焼土壙から、考古地磁気年代推定用の試料を、平成11年３月12日に採取した。以下は、その熱残留磁気測定結果および年代推定の結果についての報告である。

１　考古地磁気年代推定の基礎

磁石は北を指す。地球には地磁気が存在するためである。地磁気はベクトル量であり、ある地点における地磁気を記述するために、方向（偏角・伏角）と大きさ（全磁力）が必要である。一般に、磁気コンパスの磁針が指す北（磁北）は、真北（地図の経線方向）からずれている。この磁北と真北の間の角度が偏角である。磁針をその重心で支え、磁南北と平行な鉛直面内で、自由に回転できるようにすると、北半球では磁針のＮ極が、平面の下になるように傾く。この傾斜角が伏角である。これらの地磁気の三要素（偏角・伏角・全磁力）は、観測する地点によって異なる値になる。河内長野市の現在の偏角は約６.７°W、伏角は約48°、全磁力は約0.45エルステッドである。

全世界の地磁気三要素の観測データの分析から、現在の地磁気分布は、地球の中心に棒磁石を置いたときにできる、磁場の分布に近似される。この棒磁石の軸方向は、自転軸から約11.5°傾いている。この磁軸と地表との交点が、地磁気北（南）極である。地磁気は絶えず変動し、時代と共にその地磁気北極の位置を変える。従って、ある地点で観測される偏角・伏角の値も時代と共に変化する。方向だけでなく、大きさ（全磁力）も変化する。この変動を、地磁気永年変化と呼んでいる。

歴史時代の地磁気永年変化は、岩石や焼土の残留磁化の測定を基礎とする考古地磁気測定によって、明らかにすることができる。どんな物質でもある（強）磁場中に置かれると、磁化を帯び、そして磁場が取り除かれると、普通の物質からは磁化が消える。しかし、強磁性物質（磁石になれる物質）では、外部磁場が消えても磁化が残る。これが残留磁化である。残留磁化の強さや安定性は、磁化を獲得する時の条件によって異なる。残留磁化はその獲得方法の違いによっていろいろな名前で呼ばれる。

考古地磁気学で地磁気の化石として、最もよく利用するのが熱残留磁化である。岩石には少量の強磁性粒子（赤鉄鉱や磁鉄鉱などの鉄の酸化物）が含まれている。火成岩では高温のマグマの状態から冷えて岩石になる過程で、強磁性粒子がその時の地磁気によって磁化を帯び、冷えてからはその残留磁化を保持し続ける。これが熱残留磁化である。土も焼かれると冷却の過程で、同様の熱残留磁化を獲得する。

熱残留磁化の性質を簡単にまとめると、次のようになる。岩石の誕生時または土が焼かれた時の大きさに比例し、何億年もの長い期間でも変質しない。これらの性質によって、

地磁気の化石として利用が可能なのである。遺跡の焼土の熱残留磁化測定から得られた、過去2000年間の西南日本における偏角－伏角の変化を第154図に示す（広岡（1977年））と、偏角は20°W～15°E、伏角は35°～60°の間で変化している。

第154図のような地磁気永年変化の標準曲線が得られると、逆に、年代の確かでない遺跡の焼土の残留磁化を測定し、永年変化曲線と比較することで、その年代の推定を行うことができる。これが考古地磁気による年代推定である。この方法は、C^{14}法やフィッショントラック法のような放射（絶対）年代測定法とは異なり、それだけで独立して年代を決定できない。普通、偏角と伏角の組合せで永年変化曲線から２つか３つの候補年代が出てくる。そのうちの何れを採用するかは、考古学的推定に頼ることになる。

従来、考古地磁気年代推定では、二次磁化を除去するための消磁実験は行われていなかった。考古地磁気試料として用いられる焼土は、焼成温度がキューリー温度以上の高温に達していれば、その熱残留磁化は非常に安定なものであると考えられていることや、さらに、せいぜい2000年前までの歴史時代のものを測定の対象としているため、二次磁化の主成分である粘性残留磁化（ＶＲＭ）は少量しか付いていないと推定されていたためである。しかし、近年、測定機器の性能の飛躍的な向上により測定精度が高くなり、わずかな二次磁化の影響も識別できるようになってきた。そこで、中島・谷崎（1990年）は、考古地磁気試料について、段階交流消磁実験を実施し、考古地磁気試料にも消磁実験が必要であることを明らかにした。そこで、本報告では交流消磁を全試料について実施し、第154図の地磁気永年変化曲線の偏角－伏角図上に、その残留磁化測定結果をプロットし、誤差角（α_{95}）を考慮した上で年代推定を行った。

2　試料の採取と測定

(1)試料採取方法

遺構の焼土から次の様な手順で試料を採取する。

① 焼土面に先の尖ったハンマーで、一辺が数cm程度の立方体試料を取り出すための溝を、試料が床面から外れないように、手で押さえながら丁寧に掘る。

② 溝を掘り終わった後、掘り込み作業中に試料表面についた砂や石を、刷毛で丹念に取り除く。

③ 薄く溶いた石膏をビニール袋に入れ、試料全体にかけて表面を補強する。

④ 乾燥後、やや固めの石膏を試料上面にかけ、一辺５cmの正方形のアルミ板をすばやく押しつける。石膏が固まるのを待ち、アルミ板を外す。

⑤ アルミ板を用いて作った平面の最大傾斜の方位と傾斜角を、考古地磁気用磁気コンパス（Hirooka　1971年）で測定し、平面上に方位測定位置を示すマーク（平面を定義する３つの点）と試料番号を記入する。

⑥ ハンマーで試料を掘り起こし、試料の底面を石膏で補強し、新聞紙等に包み持ち帰る。

(2)試料整形方法

遺構で採取した試料は、そのままでは測定できないので、試料整形を以下の様に行う。

① 試料を１辺3.5cmの立方体に切断するために、プラスチックの型板（34×34mmの正方形）を利用し、枠取りの線を引く。この時、型板のマークと試料表面の方位測定位置を示すマーク（３点）を合わせる。

② 試料温度が上がるのを防ぐために、冷却水をかけながらダイヤモンドカッターで一面ずつ切断する。切断面が崩れないように石膏で補強し、次の面の切断を行う前に、試料を充分乾燥させる。この作業を５回繰り返すと立方体試料が得られる。

③ 試料表面についた余分な石膏を、カッターで削り落とす。

(3)残留磁化測定方法

残留磁化は、当社製のリング･コア型スピナー磁力計（ＳＭＤ-88型）を用いて測定した。交流消磁実験には、二軸回転方式の当社製ＤＥＭ-8601-２型を使用した。この装置は、三層の円筒μ-メタルによって、外部磁場（地磁気）が10ｎＴ以下にシールドされている。

以下に、今回実施した残留磁化測定と交流消磁の方法について述べる。

① 採取した全試料について、自然残留磁化（ＮＲＭ）測定を行う。

② ＮＲＭ測定結果をみて、段階交流消磁実験を行うパイロットサンプルを、各遺構より１個選ぶ。

③ パイロットサンプルを2.5・5・10・15・20・30・40・50ｍＴの各磁場で順に消磁し、その都度、残留磁化を測定する。各消磁段階の測定結果を、直交ベクトル図（Zijderveld　1967年）に表わし、同図の直線上にのる最適消磁強度を決定する。

④ 残りの試料を全て最適消磁強度で消磁し、その残留磁化を測定する。そして、その平均値（パイロットサンプルのデータを含む）を、年代推定のための考古地磁気データとして採用する。

(4)データ整理

測定結果として得られるデータは、試料に設定した座標に対するものなので、試料を遺構の元の位置に戻した時、真北を基準方向とする座標に対するものに変換しなければならない。そのためには、試料が残留磁気を獲得した時の位置（地理的緯度･経度）、及び方位（試料の１つの基準面の走向･斜面）が必要である。位置については、１/25000程度の縮尺の地形図から、その遺構の緯度・経度を読取れば良い。方位は、試料採取の作業で磁気コンパスを使って測定している。磁気コンパスの方位は、磁北に対するものなので、真北に対する方位に直すために、試料採取地点の現在の偏角分を補正する必要がある。現在の地磁気偏角は、国土地理院の偏角分布の実験式から求めることができる。

また、測定にはいろいろな要因での誤差がつきものであるため、一つの遺構から８～

10個程度の試料を採取している。これら個々の試料の測定で得られた偏角（Ｄｉ）、伏角（Ｉｉ）から、平均値（Ｄｍ、Ｉｍ）を求める。なお、ここで用いている統計学的方法はFisherによって確立されたものである。各試料の測定値を、方向（Ｄｉ、Ｉｉ）の単位ベクトルとして取り扱う。

まず、ｎ組の（Ｄｉ、Ｉｉ）より

$N = \Sigma \cos Ii \cdot \cos Di$　（北向きの成分）

$E = \Sigma \cos Ii \cdot \sin Di$　（東向きの成分）

$Z = \Sigma \sin Ii$　（鉛直の成分）を求めると、

合ベクトルの大きさＲ、及びα_{95}Ｄｍ、Ｉｍは、

$R = \sqrt{Z^2 + N^2 + E^2}$

$Dm = \tan^{-1} E/N$

$Im = \sin^{-1} Z/R$　で与えられる。

このとき、信頼度係数ｋは、

$k = (n-1)/(n-R)$　となる。

ｋが大きい程、方向の集中は良い。よく焼けた窯跡では100以上の値になる。

誤差角α_{95}は、危険率５％として

$$\alpha = 1 - \frac{n-R}{R}\left\{\left(\frac{1}{0.05}\right)^{\frac{1}{n-1}} - 1\right\}$$ で与えられる。

α_{95}が小さい程、方向の集中は良い。よく焼けた窯跡では数度以内なる。

これによりＤｍ、Ｉｍのそれぞれの誤差の幅として、

$\delta D = \alpha_{95}/\cos Im$　（偏角誤差）

$\delta I = \alpha_{95}$　（伏角誤差）が求められる。

以上のようにして得られた計算結果を、一つの遺構を代表する考古地磁気データとしている。

考古地磁気年代推定の原理や測定方法については、中島・夏原（1981年）に詳しく解説されている。

3　残留磁気測定結果

第３遺構検出面のＳＢ１（第93図）のＡ・Ｂ地点から、16個の古地磁気用の定方位試料を採集し、その残留磁気を測定した後、残留磁気測定結果を第３・４表、第152・153図にまとめた。

第３表は、個々の試料の熱残留磁気測定結果（Ｄｉ、Ｉｉ）である。試料の方位を磁気コンパスで測定しているため、残留磁気測定で得られる偏角は磁北に対する角度である。これを真北に対する角度に補正するには、試料採集地点の現在の地磁気偏角を知る事が必要であった。天野山金剛寺遺跡の現在の地磁気偏角は、国土地理院の1990年の磁気偏角図

A地点

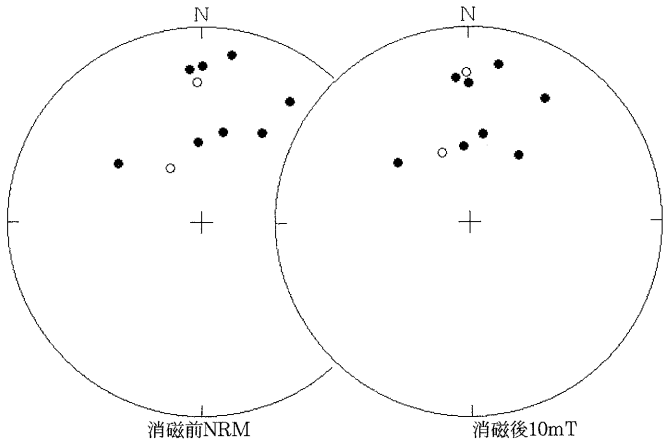
試料名	交流消磁前 偏角 °E	交流消磁前 伏角 °	交流消磁前 強度×10^{-3}emu	交流消磁後 消磁強度＝10mT 偏角 °E	交流消磁後 消磁強度＝10mT 伏角 °	交流消磁後 消磁強度＝10mT 強度×10^{-3}emu
A-1	−1.2	−23.9	11.6	−2.0	−28.8	9.21
A-2	32.4	26.4	6.85	36.0	24.2	4.68
A-3	0.1	29.3	3.89	0.5	20.8	2.50
A-4	−49.8	50.2	7.51	−55.0	45.8	5.34
A-5	9.8	52.3	3.55	14.1	50.7	2.12
A-6	−21.9	−58.5	2.16	−30.1	−63.6	1.02
A-7	11.2	19.0	6.97	10.3	13.8	5.39
A-8	−4.3	57.7	6.32	−2.7	55.9	3.94
A-9	−5.2	26.5	8.52	−4.6	22.2	6.61
A-10	37.0	54.6	1.38	34.1	43.7	0.99
平均磁化強度			5.88			

B地点

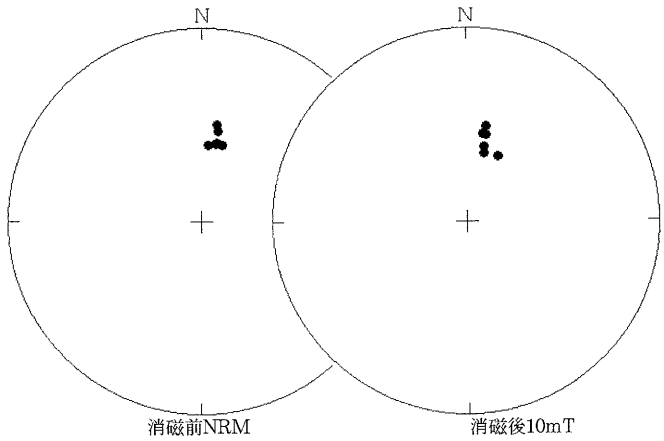
試料名	交流消磁前 偏角 °E	交流消磁前 伏角 °	交流消磁前 強度×10^{-3}emu	交流消磁後 消磁強度＝10mT 偏角 °E	交流消磁後 消磁強度＝10mT 伏角 °	交流消磁後 消磁強度＝10mT 強度×10^{-3}emu
A-11	10.1	50.4	0.66	10.8	51.8	3.43
A-12	11.0	56.0	1.47	13.2	52.3	7.05
A-13	15.3	55.9	1.17	26.0	59.3	5.72
A-14	8.9	47.7	0.71	11.7	48.4	3.85
A-15	4.9	57.4	1.05	14.6	59.9	5.10
A-16	11.0	56.5	1.01	13.5	57.5	4.63
平均磁化強度			1.01			

第３表　熱残留磁気測定結果

A地点



B地点



第152図　消磁前（ＮＲＭ）と消磁後の残留化方向の等面積投影図

から読取った6.7°Wを使用した。

第152図には消磁前と消磁後の磁化方向の等面積投影図を示した。A地点の測定結果は大きくばらついた結果であった。消磁ベクトル図からも磁化そのものが不安定ではなく、磁化強度も10^{-3} emuと強くかなりの高温で焼かれていることは間違いない。おそらく、撹乱を受けた場所から、試料を採集したものと考えられる。B地点の測定結果は、消磁前も消磁後も大きな差はないが、二次磁化が無くなった消磁後の誤差角α_{95}は大きくなった。通常は二次磁化が消された分、まとまりが良くなるのが普通である。このようにまとまりが悪くなった原因は、磁化機構そのものに問題があるのか、測定等に問題があるのかは、現在のところ不明である。

第4表には、消磁前と消磁後の、考古地磁気測定についての磁化方向の平均値（Dm、Im）、誤差角（α_{95}）と信頼度係数（k）、及び平均磁化強度を示した。試料数nは平均値（Dm、Im）を計算した試料数である。測定の信頼度を表す信頼度係数kは消磁後で209と大きく、信頼度の高いデータと考えられ、各々試料の磁化強度も10^{-2}～10^{-3} emuで、焼土壙としては高温で焼成された試料であったといえる。

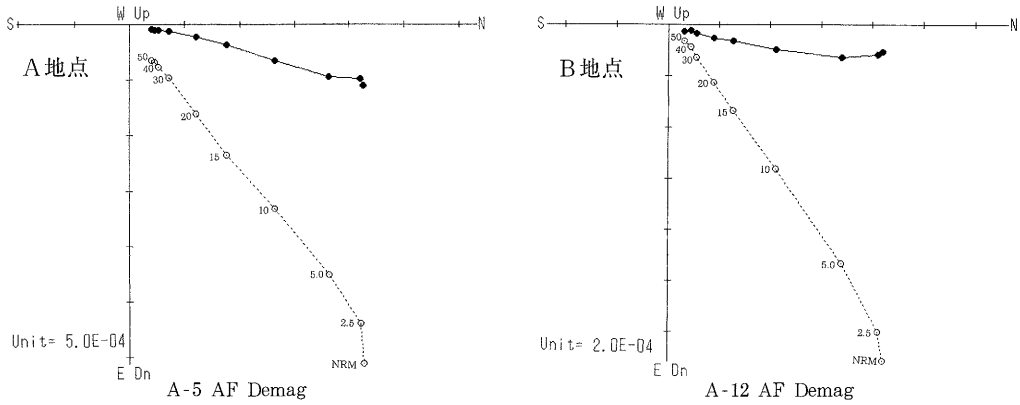
交流消磁前の測定結果

遺構名	試料数n	Dm（°E）	Im（°）	α_{95}（°）	k	平均磁化強度emu
A地点	10	−	−	−	−	5.88×10^{-3}
B地点	6	10.2	54.0	3.6	340.0	1.01×10^{-3}

交流消磁後の測定結果

遺構名	試料数n	Dm（°E）	Im（°）	α_{95}（°）	k
A地点	10	−	−	−	−
B地点	6	14.6	55.0	4.6	209.0

第4表　考古地磁気測定結果（平均磁化方向）

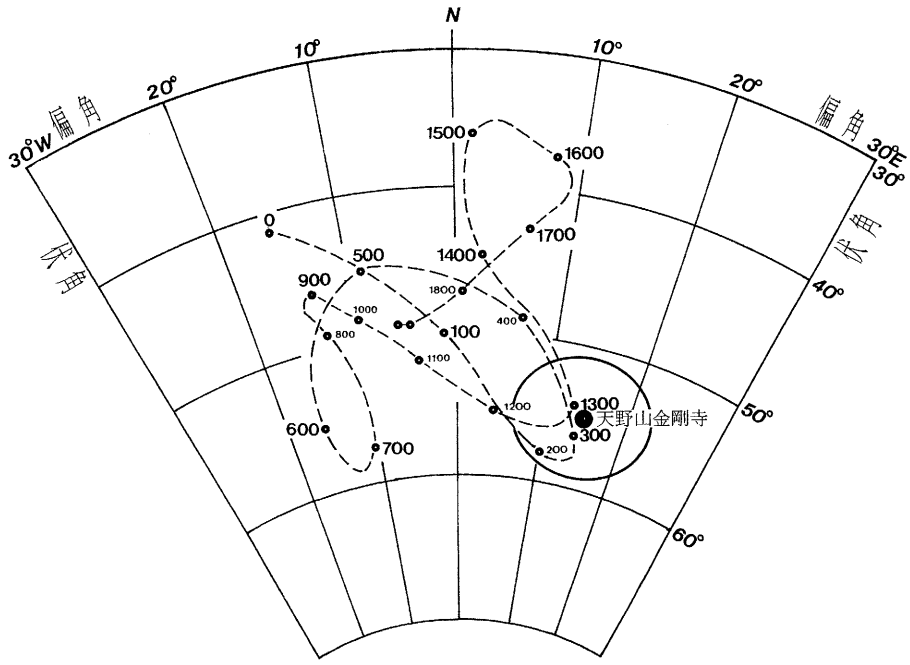


第153図　各遺構のパイロットサンプルA－5、A－12の直交ベクトル図

第153図は磁化の安定性を確かめるために行った、各遺構のパイロットサンプルの段階交流消磁の直交ベクトル図（消磁ベクトル）を示す。同図の黒丸は水平成分、白丸は鉛直成分を表している。S（南）、N（北）、E（東）、W（西）は水平成分の方向、Up（上向き）、Dn（下向き）は鉛直の方向である。白丸の横に記した数字は交流消磁の強度で、単位はmT（ミリテスラ）である。この図で、丸印の間をむすんだ直線が、その消磁段階で消された磁化ベクトルとなる。磁化の各成分は、図上では直線上に並ぶ点の列で表される。特に考古地磁気試料のような単純な受熱を持った試料では、問題とする初期磁化は、原点に向う直線として表される。A地点の消磁ベクトルは5.0mTでかなりの二次磁化成分が無くなり、やや不安定ながら原点に向う直線となっており、まず安定な磁化を獲得しているといえる。B地点のパイロットサンプルでも5.0mTで二次磁化成分が無くなり、後は原点に向う直線となっているため、安定な磁化を獲得しているといえる。両焼土とも最適消磁磁場を10mTと判断して、残りの試料については最適消磁強度10mTで消磁を行い、残留磁気を測定した。

4　推定年代

推定年代は、広岡により考古遺跡焼土の測定から求められた第154図の西南日本の地磁気永年変化曲線と消磁後の偏角（Dm）、伏角（Im）、誤差角（α_{95}）を比較して求めたもので、黒丸は平均磁化方向を示し、それを囲む楕円の実線が誤差角α_{95}の範囲である。この範囲の中、或いはこれに一番近い曲線の部分が、遺構の推定年代である。



第154図　西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線と測定結果
（黒丸は平均磁化方向、実線の楕円は誤差角のα_{95}の範囲を示す。）

A地点は、ばらつきが大きく年代推定には不適当と判断した。B地点の測定結果は、偏角が東偏し伏角が深い時期の14世紀の永年変化曲線に近く、考古地磁気からはA.D.1300±50年の年代が得られ、考古学年代（記録に残っている火災にあった年代）の1360年より少し古い年代となった。

今回は試料を採取した場所が悪く、B地点の6個での推定となった。そこで今後の試料採集場所の選定する際に参考となる点を少し挙げておくと、考古地磁気による年代推定の最も基本的な原理は、測定によって土が焼かれた時の地磁気の方向を復元して、既にある程度明らかになっている過去の地磁気方位と比較することである。従って、土が熱を受けた後に、動いていないことが非常に重要である。これは、移動していない事はもちろん同じ位置で回転をしてはいけない。回転に対しては考古地磁気測定は大変弱く、数度の回転が致命的な影響を与える。窯跡などでは大きな回転や地滑りを被っているが多いが、炉跡や焼土などのあまり高温になっていない部分は、機械的にも脆く、移動・回転が大きな問題となってくる。炉などから掻き出した焼土の場合、全く無意味な測定しかできないことになる。そのような場合には焼土の断面が均一ではなく、パッチ状になっていることが多いので、試料採集時に注意が必要である。

5　引用文献

Hirooka　K.　1971：Archaeomagnetic study for the past 2000 years in Southwest Japan　Mem.
Fac. Sci.　Kyoto Univ.　SEr.Geol. Mineral　38, 167－207

広岡公夫　1977：考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向　第四紀研究　15, 200－203

中島正志・夏原信義　1980：考古地磁気年代推定法　考古学ライブラリー9　ニューサイエンス社

中島正志・谷崎有里　1990：考古地磁気試料の交流消磁実験　福井大教育紀要

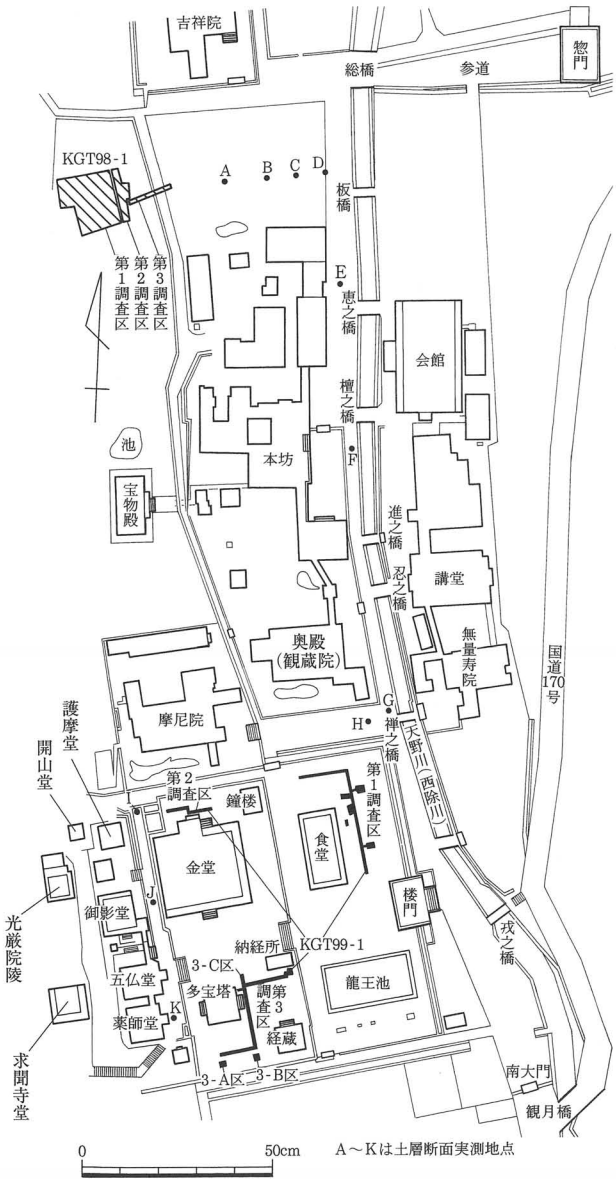
Shibuya　H.　1980：Geomagnetic secular variationin Southwest Japan for the past 2000 years by means of archaeomagnetism.　大阪大基礎工修論　54p.

Zijderveld　J.D.A.　1967：A.C. demagnetization of rocks
：analysis of results.　In Methods in paleeomagnetism, Collinson et al.（eds.）,254－295, Elsevier Pub. Com.

第6章　KGT99－1

第1節　調査に至る経過

本次調査は平成9年度から着手している、防災事業事前調査の、平成10年度工事部分である防火水槽の配管及び放水銃設置箇所部分について実施した。調査地は国史跡金剛寺の境内を南から北へ流れる金剛岩湧山系を水源とする天野川（西除川）の左岸に位置する。原因者は宗教法人天野山金剛寺であり、調査は平成11年6月11日から平成11年7月30日にかけて行った。調査区は工事の進行中に立会調査を行い、発掘調査の既往調査例、文献、絵図などの資料を参考に、工事による遺構への保存上、影響がある箇所について、A～Kの11ヶ所の調査地点と3ヶ所の調査区を設定した。第1調査区は伽藍の北東に位置する食堂（重要文化財）の北側から東側にかけて、第2調査区は金堂（重要文化財）の北側、第3調査区は多宝塔（重要文化財）の北東側から南側にかけて3ヶ所設定した。調査面積は、第1調査区約70㎡、第2調査区約10㎡、第3調査区約50㎡である。



第155図　調査区位置図（1/2000）

第２節　調査の結果

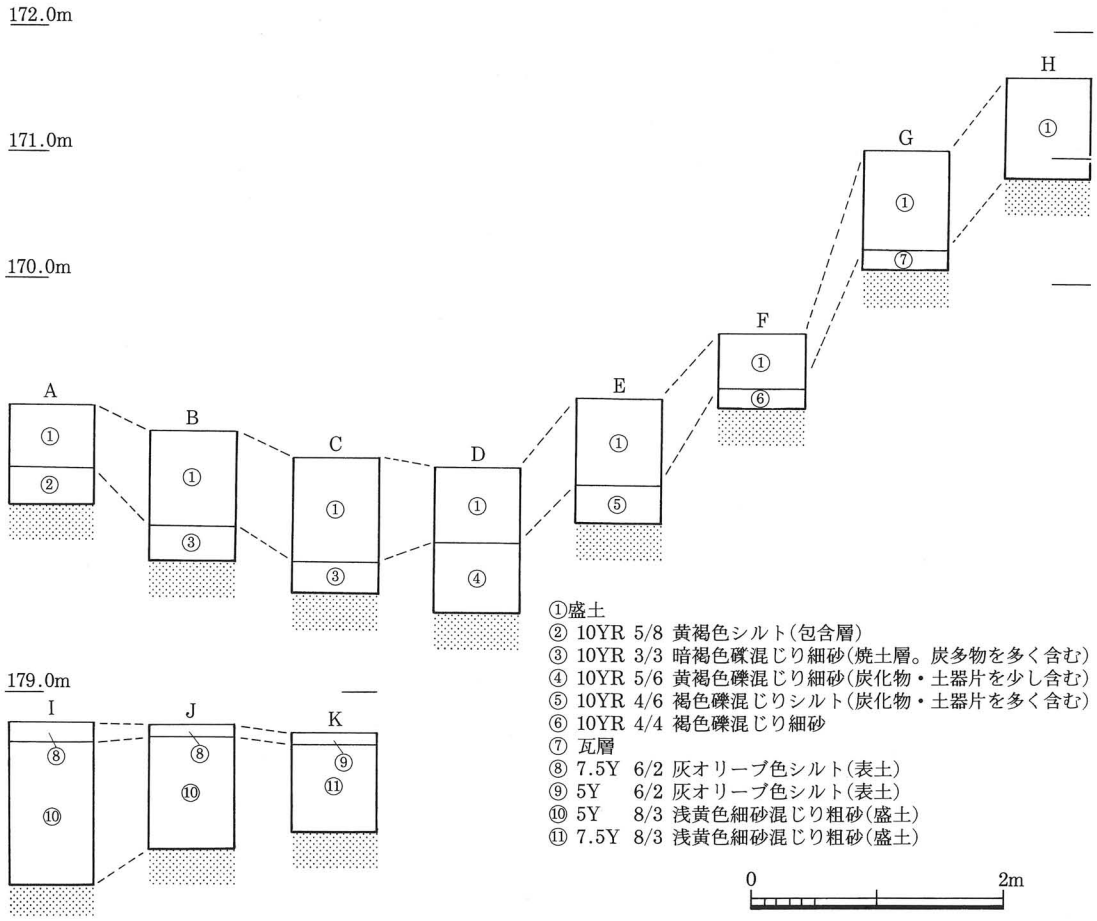
１　遺構と遺物

Ａ～Ｋ調査地点（11ヶ所）は、土層断面を模式的に実測した箇所で、遺物は出土しなかった。（第156図）

第１調査区では、合計２面の遺構検出面を確認した。上層遺構検出面では礎石建物、溝、石列、下層遺構検出面では土坑、ピット、落ち込みを検出し、遺物は土師質土器、瓦器、陶器、瓦、硯、鉄釘、銅銭などが出土した。

第２調査区では、礎石建物を検出し、遺物は土師質土器、瓦器、瓦質土器が出土した。

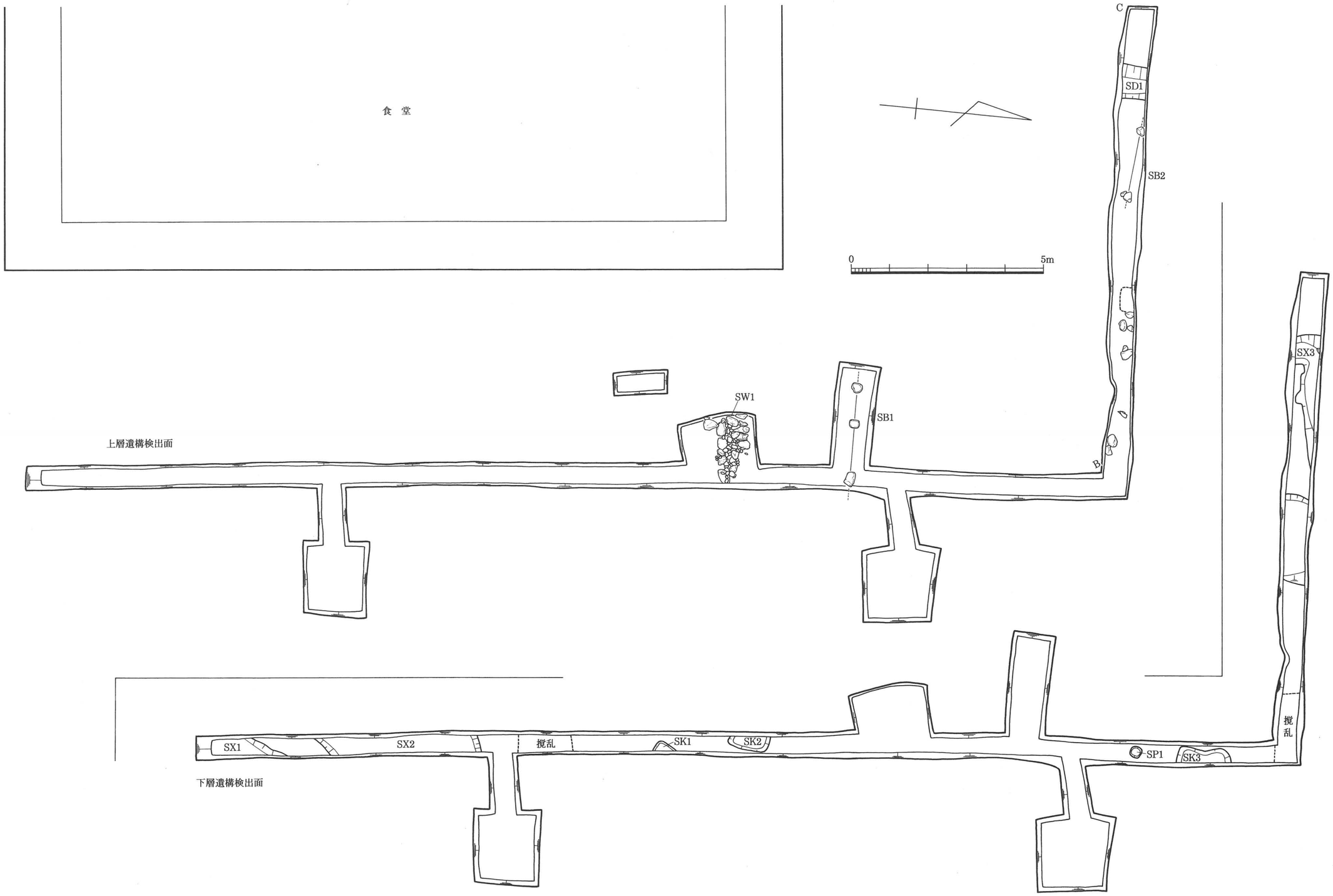
第３調査区では、第３－Ａ・Ｂ・Ｃ地区の３ヶ所に分けて、遺構を検出した。遺構では溝、落ち込みを検出し、遺物は土師質土器、瓦器、瓦質土器、磁器、瓦、銅銭が出土した。



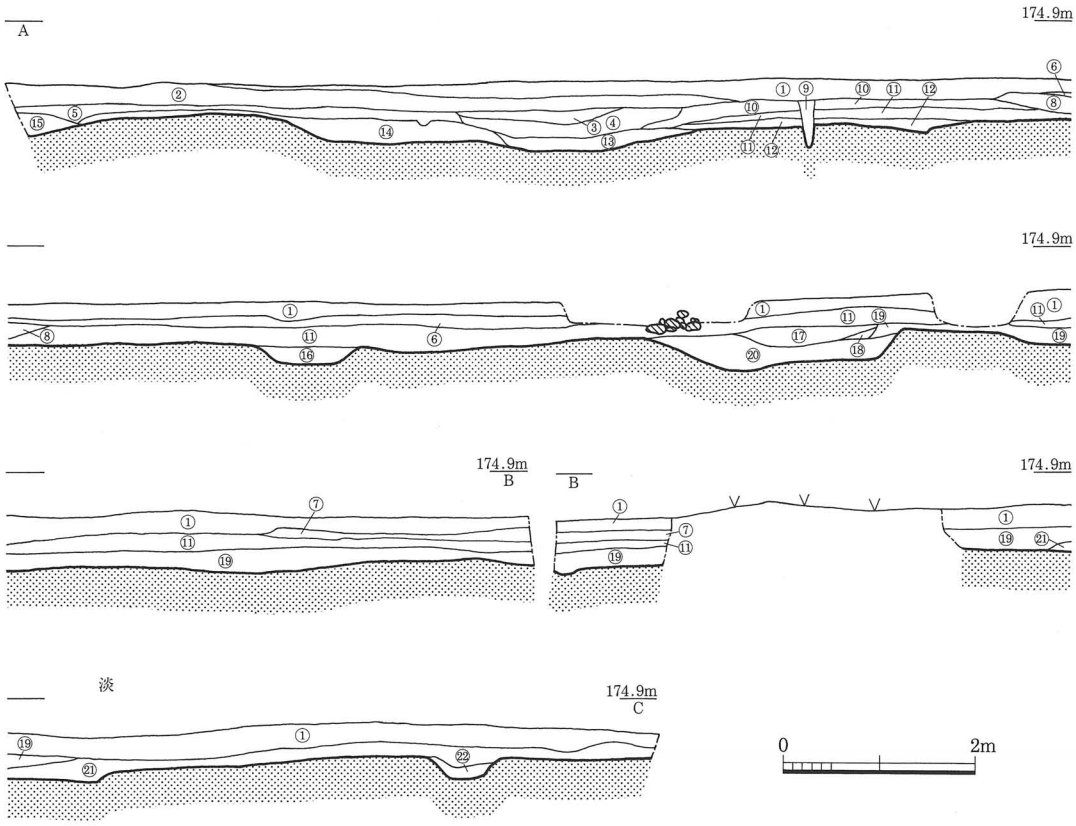
第156図　Ａ～Ｋ地点土層断面模式図（１/60）

第１調査区（食堂北側・東側）（第157・158図、図版39～41・43）

遺構は合計２面の遺構検出面で確認し、礎石建物、溝、土坑、ピット、石列、落ち込みを検出した。



第157図　第１調査区遺構配置図（１/100）



① 2.5Y 5/2 暗灰黄色粗砂混じり細砂
② 2.5Y 8/6 黄色細砂（瓦を含む）
③ 2.5Y 7/4 浅黄色細砂
④ 2.5Y 7/3 浅黄色細砂
⑤ 2.5Y 6/8 明黄褐色細砂
⑥ 2.5Y 8/3 淡黄色細砂
⑦ 10YR 6/3 にぶい黄橙色シルト
（⑲のブロック混じり）
⑧ 10YR 5/4 にぶい黄褐色細砂
⑨ 7.5YR 4/3 褐色細砂混じりシルト
⑩ 10YR 7/4 にぶい黄橙色粗砂混じり細砂
⑪ 7.5YR 6/3 にぶい褐色細砂混じり粘土
⑫ 10YR 6/1 褐灰色細砂混じり粘土
⑬ 2.5Y 7/4 浅黄色粗砂混じり細砂
（多量の瓦を含む）
⑭ 2.5Y 8/8 黄色シルト
⑮ 10YR 4/3 にぶい黄褐色粗砂混じり細砂
⑯ 10YR 6/3 にぶい黄橙色細砂混じりシルト
⑰ 10YR 6/3 にぶい黄橙色細砂混じりシルト
⑱ 2.5Y 8/8 黄色粘土
⑲ 10YR 7/8 黄橙色シルト
⑳ 10YR 7/3 にぶい黄橙色シルト
㉑ 2.5Y 5/4 黄褐色粗砂混じりシルト
㉒ 2.5Y 6/3 にぶい黄色粗砂混じりシルト

第158図　第１調査区土層断面実測図（１/80）

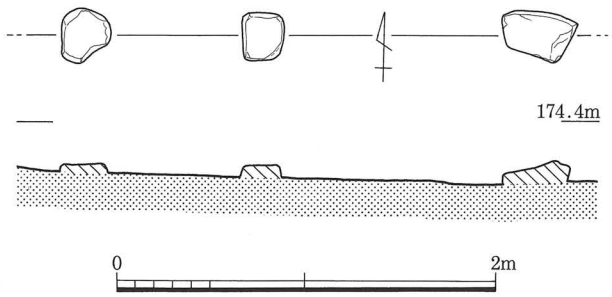
基本層序は、現地表面から①2.5Y5/2暗灰黄色粗砂混じり細砂（層厚0.05m）、②2.5Y8/6黄色細砂（同0.2m）、⑤2.5Y6/8明黄褐色細砂（同0.05m）、⑭2.5Y8/8黄色シルト（同0.05m）で、地山は2.5Y5/4黄褐色粗砂混じりシルトであった。

上層遺構検出面

(1)建物

［ＳＢ１］（第159図、図版42）

ＳＢ１は第１調査区中央部に位置する。平面形は礎石の東西南北のいずれもが調査区外に及ぶため、詳細は不明である。検出した建物の規模は、柱間0.97m～1.5m、礎石の石は最大39cm×22cm×10cmを測る。検出した主軸方向はＮ－89°－Ｅである。



第159図　ＳＢ１遺構実測図（１/40）

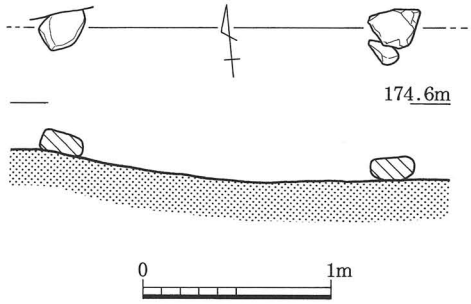
しかし、後述するＳＷ１が、遺構の南側３ｍに位置するため、検出した礎石より以南には、建物の庇部分を考慮すると、この建物は存在しないと考えられる。したがって、今回の発掘調査では、建物の南側梁行の、南壁部分の柱列を、検出した可能性があると考えられる。

遺物は出土しなかった。

［ＳＢ２］（第160図）

ＳＢ２は第１調査区北部に位置する。平面形は礎石の東西の両端が調査区外に及ぶため、詳細は不明である。検出した建物の規模は、柱間1.75m、礎石の石は最大25cm×20cm×10cmを測る。検出した主軸方向はＮ－85.5°－Ｅである。

遺物は出土しなかった。



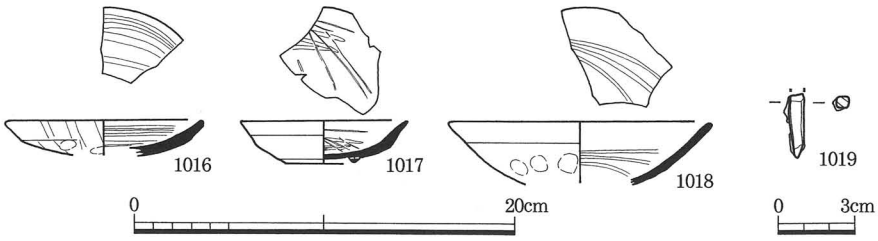
第160図　ＳＢ２遺構実測図（１/40）

(2)溝

［ＳＤ１］（第161図、図版83）

ＳＤ１は第１調査区北部に位置する。検出した規模は長さ0.64m、幅0.87m、深さ0.3mを測る。主軸方向はＮ－０°－Ｅである。埋土は2.5YR6/3にぶい黄褐色粗砂混じりシルトであった。

遺物は瓦器皿（1016）・小埦（1017）・埦（1018）、鉄釘（1019）、瓦が出土した。

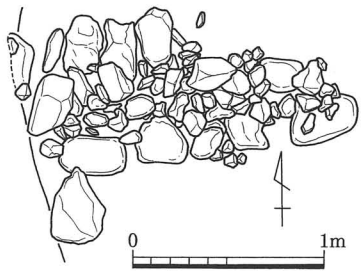


第161図　ＳＤ１出土遺物実測図

(3)石列

［ＳＷ１］（第162図、図版42）

ＳＷ１は第１調査区中央部に位置する。検出した規模は長さ1.45m、幅0.9m、高さ0.3mを測る。主軸方向はＮ－88.5°－Ｅである。石列は最大の40cm×20cm×15cm河原石を積み重ね、最も保存状態の良い箇所では石が２段積まれていた。石組は南側・北側にそれぞれ面を持ち、裏込めにはこぶし大の河原石が詰められている。



第162図　ＳＷ１遺構実測図（１/40）

遺物は出土しなかったが、層序から近世の遺構と考えられる。

(4)包含層（第163図、図版83）

遺物は土師質皿（1020～1022）・灯明皿（1023）、瓦器椀（1024・1025）、陶器皿（1026）・灯明皿（1027～1029）、軒丸瓦（1032・1033）・軒平瓦（1036・1039）・丸瓦（1041）・平瓦（1035）・棟端瓦（1034）・雁振瓦（1040）、硯、鉄釘（1030・1031）、不明銅製品、銅銭が出土した。

下層遺構検出面

(1)土坑

［ＳＫ１］

ＳＫ１は、第１調査区中央部に位置する。平面形は遺構の東端が調査区外に及ぶため、詳細は不明である。検出した規模は南北長0.6m、東西長0.3m、深さ0.07mを測る。

遺物は出土しなかった。

［ＳＫ２］

ＳＫ２は、第１調査区中央部、ＳＫ１の北側1.4mに位置する。平面形は遺構の西端が調査区外に及ぶため、詳細は不明である。検出した規模は南北長1.05m、東西長0.4m、深さ0.14mを測る。

遺物は出土しなかった。

［ＳＫ３］

ＳＫ３は、第１調査区北部に位置する。平面形は遺構の東端が調査区外に及ぶため、詳細は不明である。検出した規模は南北長1.4m、東西長0.4m、深さ0.13mを測る。

遺物は出土しなかった。

(2)ピット

［ＳＰ１］

ＳＰ１は、第１調査区北部、ＳＫ３の南側0.9mに位置する。平面形は円形を呈する。規模は径0.15m、深さ0.09mを測る。

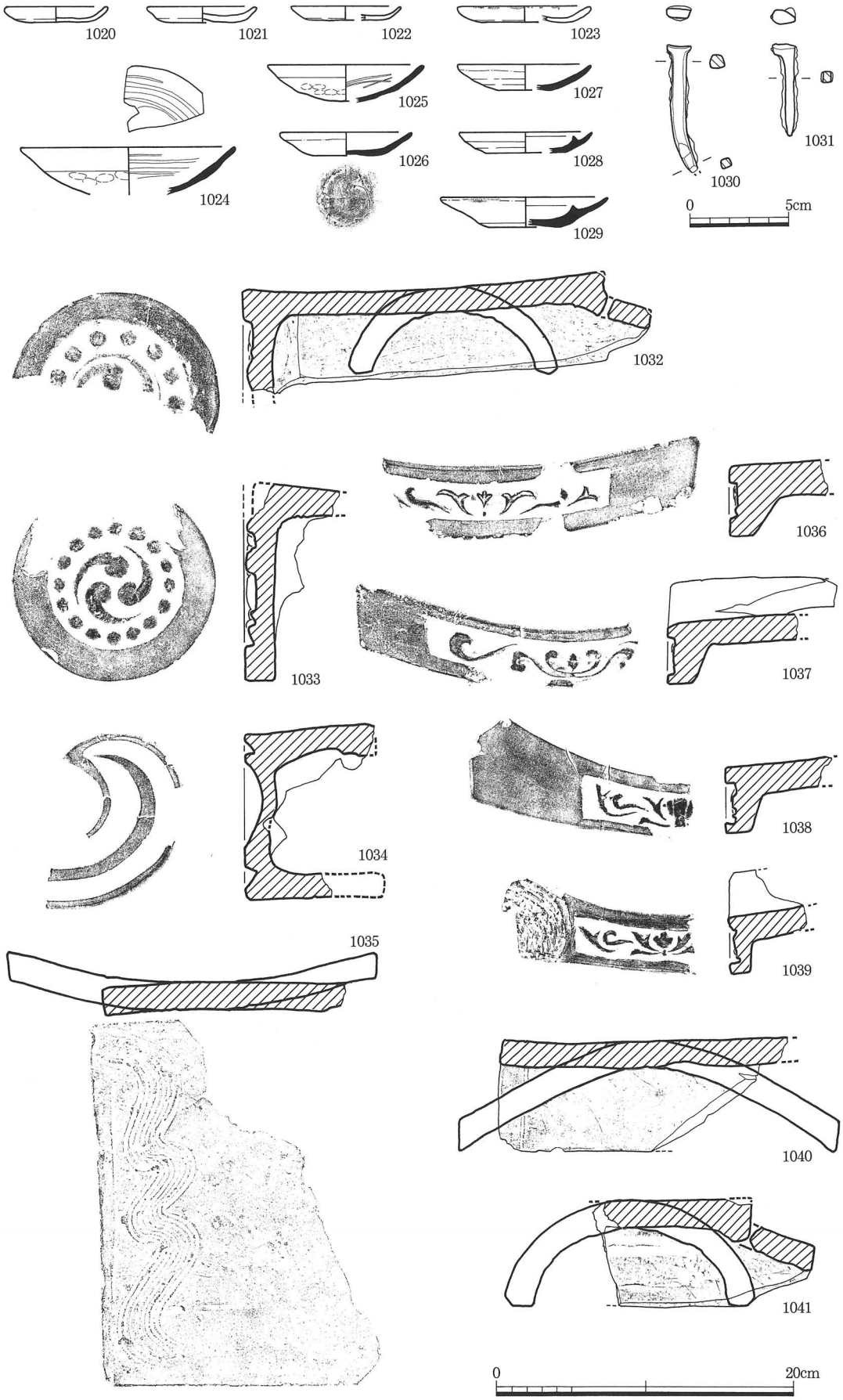
遺物は出土しなかった。

(3)落ち込み

［ＳＸ１］

ＳＸ１は、第１調査区南端に位置する。平面形は遺構の東・西・南側の端が調査区外に及ぶため、詳細は不明である。検出した規模は南北長1.95m、東西長0.4m、深さ0.13mを測る。

遺物は出土しなかった。



第163図　第１調査区包含層出土遺物実測図

［ＳＸ２］

ＳＸ２は、第１調査区南部に位置する。平面形は遺構の東側・南側の両端が調査区外に及ぶため、詳細は不明である。検出した規模は南北長0.5m、東西長4.2m、深さ0.2mを測る。

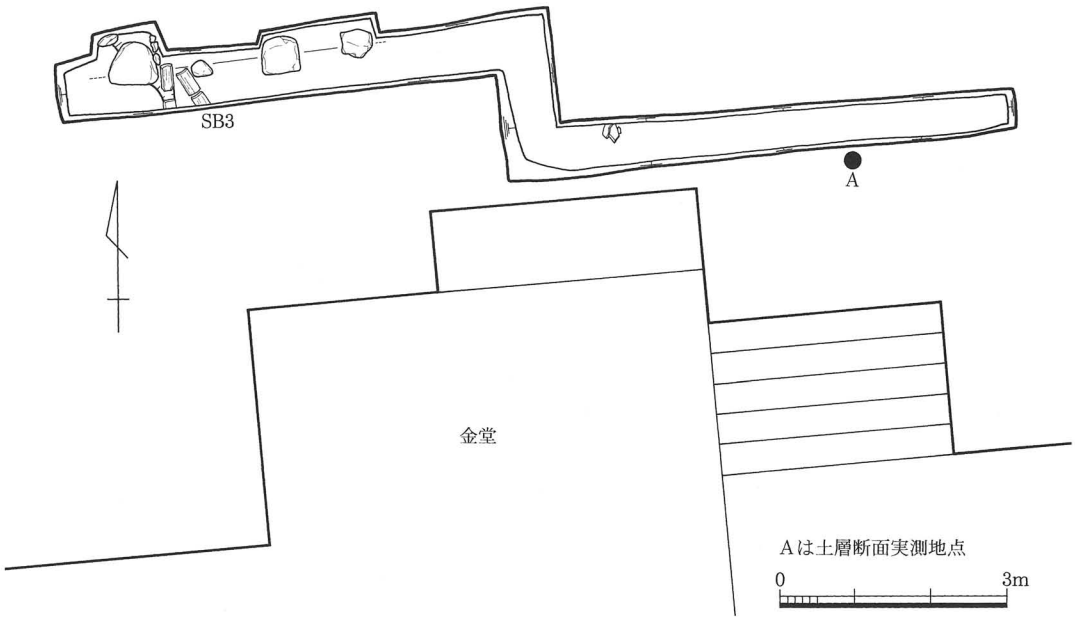
遺物は出土しなかった。

［ＳＸ３］

ＳＸ３は、第１調査区北部の西側に位置する。平面形は遺構の南側・北側の両端が調査区外に及ぶため、詳細は不明である。検出した規模は南北長0.65m、東西長3.6m、深さ0.16mを測る。

遺物は出土しなかった。

第２調査区（金堂北側）（第164・165図、図版44）



第164図　第２調査区遺構配置図（１/100）

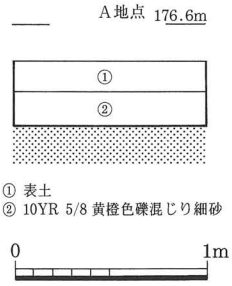
遺構は礎石建物を検出した。

基本層序は表土（層厚0.15m）のみで、地山は10YR5/8黄褐色礫混じり細砂であった。

(1)礎石建物

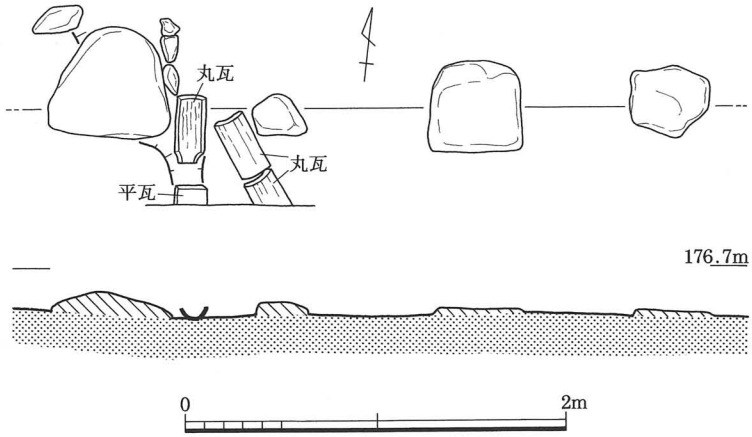
［ＳＢ３］（第166図、図版44）

ＳＢ３は第２調査区北側の西部に位置する。検出した規模は梁行３m、柱間0.85m～1.05m、礎石の規模は最大58cm×54cm×35cmを測る。主軸方向はＮ－84°－Ｅである。



第165図　第２調査区土層断面模式図（１/40）

建物の検出した位置には、『金剛寺境内図』（第171図②）や『河内名所図会』（第173図②）に金堂で法要を行う際の僧侶らの控室である「茶所」という建物が描かれており、礎石はこの建物のものと考えられる。

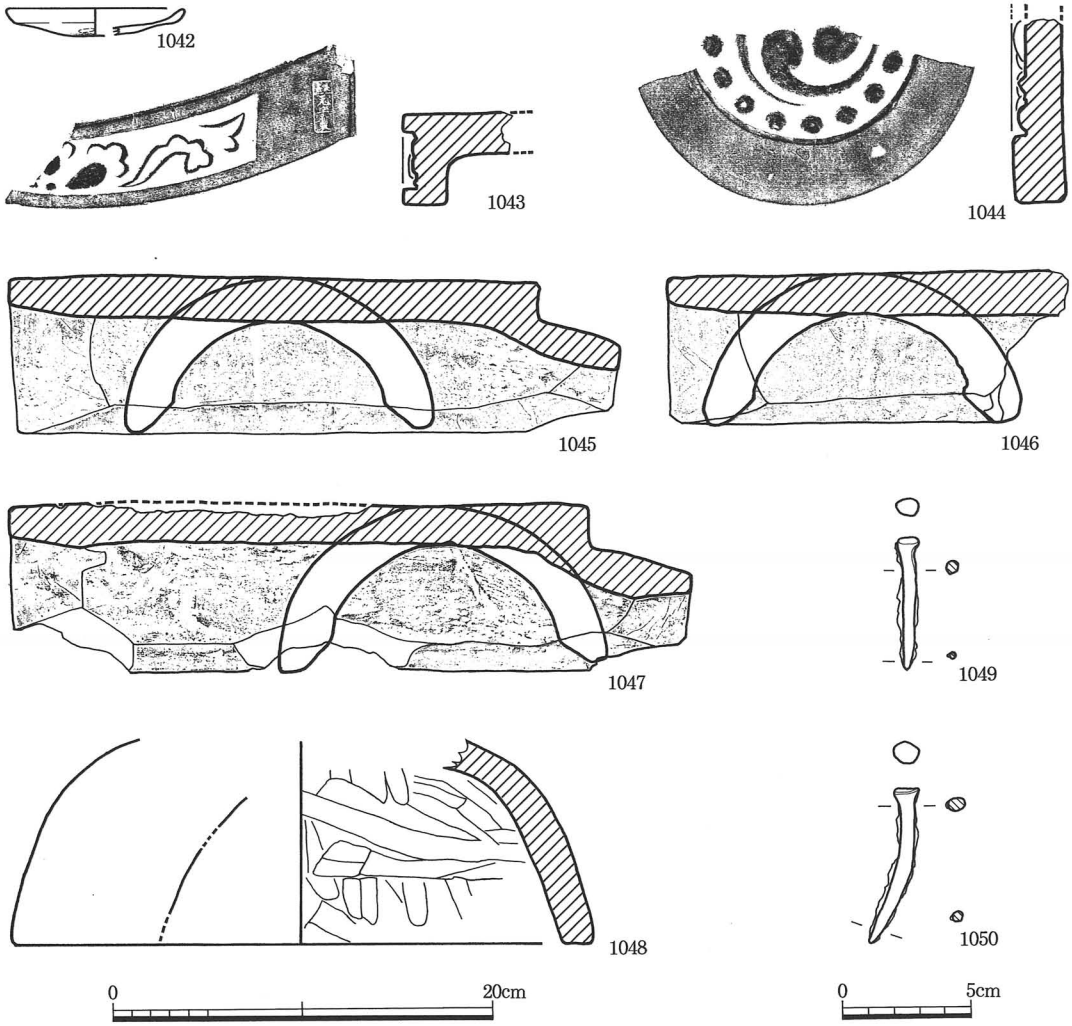


第166図　ＳＢ３遺構実測図（１/40）

遺物は出土しなかった。

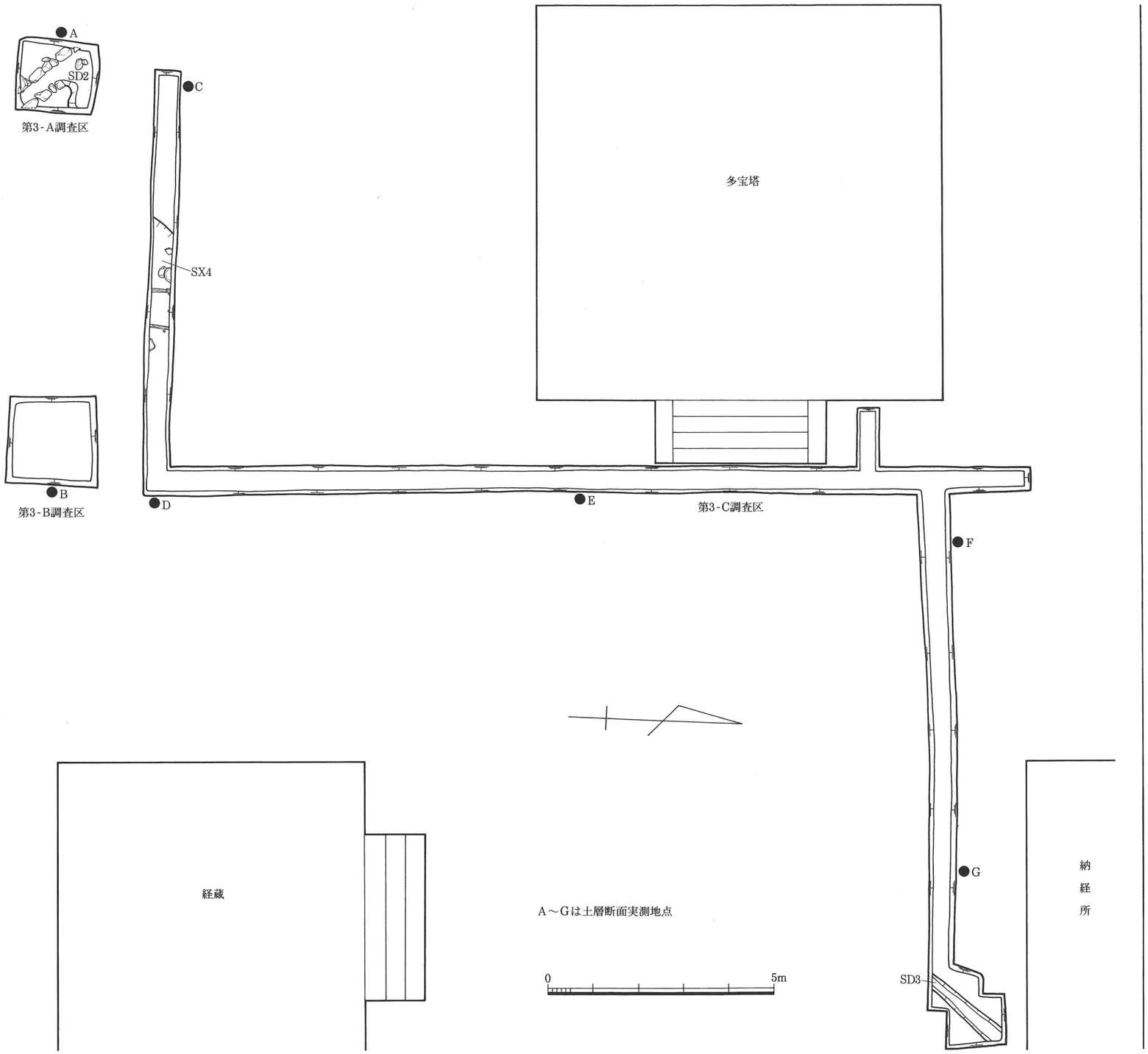
(2)包含層（第167図）

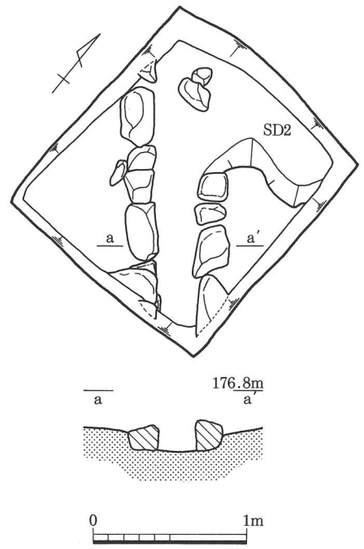
遺物は土師質皿（1042）、軒丸瓦（1044）・軒平瓦（1043）・丸瓦（1045～1047）・用途不明瓦（1048）、鉄釘（1049・1050）が出土した。



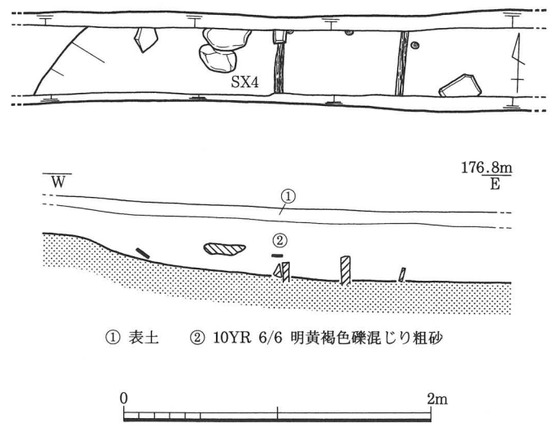
第167図　第２調査区包含層出土遺物実測図

第３調査区（金堂北側）（第168、169図、図版45、46）



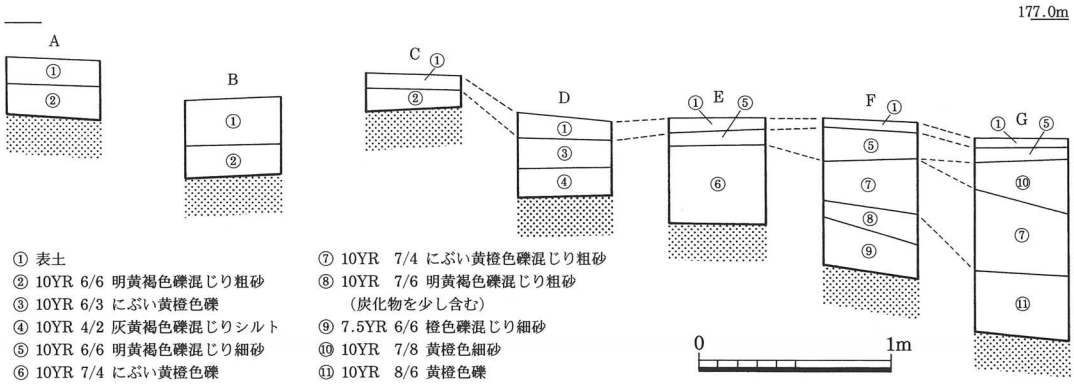


ＳＤ２遺構実測図（１/40）



ＳＸ４遺構実測図（１/40）

第168図　第３調査区遺構配置図（１/100）及びＳＤ２・ＳＸ４遺構実測図（１/40）



第169図　第３調査区土層断面模式図（１/40）

遺構は溝、落ち込みを検出した。

基本層序は①表土（層厚0.3m）、②10YR6/6明黄褐色礫混じり粗砂（同0.2m）の２層であった。

(1)溝

［ＳＤ２］（第168図）

ＳＤ２は第３－Ａ調査区の中央、北端から南東端かけて位置する。平面形は遺構の北端・南端が調査区外に及ぶため、詳細は不明である。遺構の内部は河原石が二列に平行して並べられている。検出した規模は長さ1.85m、掘形の幅0.7m、石列の内法幅0.3m、深さ0.2mを測る。主軸方向はＮ－38.5°－Ｅである。埋土は10YR6/6明黄褐色礫混じり粗砂であった。

遺物は出土しなかった。

［ＳＤ３］（図版47）

ＳＤ３は第３－Ｃ調査区の北側、北東端に位置する。平面形は遺構の北端・南端が調査区外に及ぶため、詳細は不明である。検出した規模は長さ2.22m、幅0.44m、深さ0.15mを測る。主軸方向はＮ－38°－Ｅである。

また、『金剛寺境内図』（第171図）や『河内名所図会』（第173図）の両絵図によれば、かつて多宝塔の東側、金堂の南側には、観音堂が存在していたことが窺える。したがって、検出位置から考察すれば、多宝塔よりも観音堂の配置に影響を受けた遺構の可能性がある。

遺物は瓦が出土したが、細片のため図化できなかった。

(2)落ち込み

［ＳＸ４］（第168図、図版47）

ＳＸ４は第３－Ｃ調査区の南側、中央部に位置する。平面形は遺構の北端・南端が調査区外に及ぶため、詳細は不明である。検出した規模は長さ0.42m、幅0.84m、深さ0.1mを測る。調査区の南側では遺構の内部に板を２列に並べ、それぞれ木杭を用いて打ち止めた構造を持つ。木組みの溝の主軸方向はＮ－７°－Ｅである。埋土は流水による堆積層が見

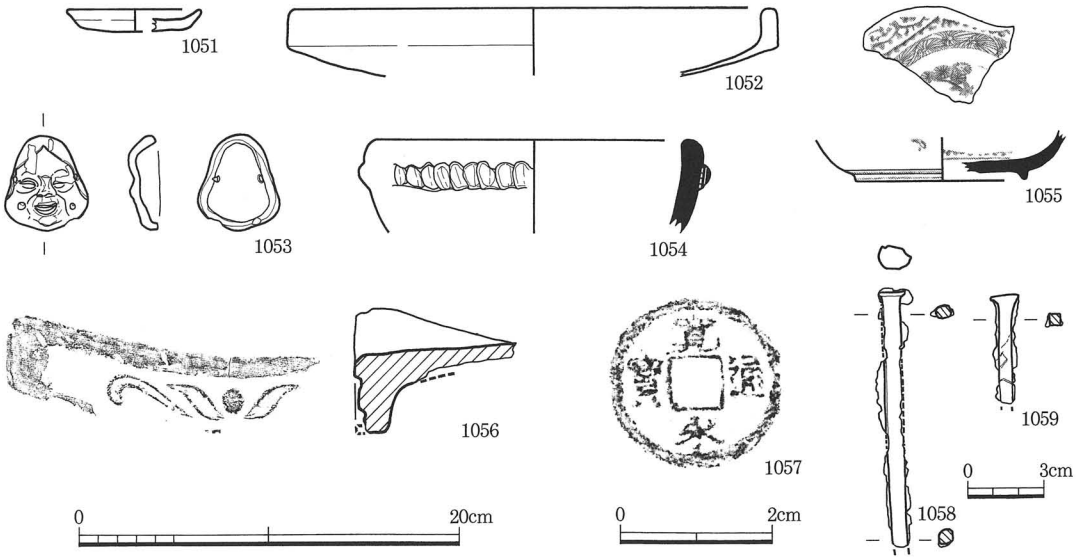
られるため、その用途は排水溝と考えられる。

また検出位置が多宝塔に近接することから、多宝塔の付属施設の可能性がある。

遺物は出土しなかった。

(3)包含層（第170図、図版83）

遺物は土師質皿（1051）・炮烙（1052）、瓦器皿・小埦・埦、瓦質火鉢（1054）、磁器皿（1055）、土製の泥面子（1053）、軒平瓦（1056）・丸瓦、鉄釘（1058・1059）、寛永通宝（初鋳1636年、1057）が出土した。



第170図　第３調査区包含層出土遺物実測図

２　まとめ

第１調査区については、『金剛寺境内図』（第171図①）や『河内名所図会』（第173図①）には、食堂の北側に、食堂に付属するものと考えられる建物が近接して描かれ、また食堂の北側・東側には、伽藍を囲む築地も描かれている。したがって、ＳＢ１・２はその規模・構造・主軸方向・層序から判断して近世の遺構と考えられ、両絵図に描かれた礎石建物であり、ＳＷ１は築地の基礎部分を検出したものと考えられる。

第２調査区については、ＳＢ３は上記の両絵図（第171図②、第173図②）に見られる金堂の北側に描かれた「茶所」を検出したものと考えられる。また、検出した礎石の柱列も、その規模・構造・主軸方向・層序から近世の遺構と判断でき、金堂との距離からも、茶所の梁行きの南側を検出したものと考えられる。

第３調査区については、上記の両絵図には見られないが、ＳＤ２とＳＸ４内の木組みの溝は多宝塔、ＳＤ３はかつて存在した観音堂付近の排水のために、構築されたことが考えられる。またこれらは層序からも、近世に構築された排水溝とみられる。

以上の遺構については、出土遺物の時期・層序などから、『河内名所図会』などの描かれた江戸時代末から、全国的に盛んになった廃仏棄釈運動の影響を受けて明治期の神仏分離令頃に、建造物の解体、また廃絶された可能性がある。

従来、天野山金剛寺遺跡における発掘調査は、両絵図を参考資料として取り扱ってきたが、いずれも伽藍の様な中心的な箇所ですら、建造物に付属する排水溝などの構造物は描かれていない。このことは今後その描写内容を調査の参考とするに当たり、その精度を知る新たな知見が、得られる成果があったといえる。

第７章　まとめ

第１節　焼土層

天野山金剛寺は文献上、建武４年・延元２年（1337)、延文５年・正平15年（1360）の二度の兵火による焼き討ちによって、子院などの多くの建物が焼失したことが知られている。

天野山金剛寺遺跡内において、明らかに火災により形成されたと考えられる焼土層を検出した調査区は数多くあるが、これらの焼土層は、主に瓦質皿の編年から14世紀後半の遺物を包含していることから、二度の兵火のうち、二度目である延文５年・正平15年（1360）の兵火によって形成された焼土層である可能性が高い。したがって、この層の直下で検出した遺構は、兵火の際焼失し、それを機会に廃絶された遺構であることが窺える。

一方、明らかに焼き討ちを逃れた場所としては、主要伽藍がある。今回の主要伽藍で行った調査（ＫＧＴ99－１）において、焼土層や火災により赤変した遺物・炭化物は検出されていない。そして、焼土層を検出した調査区が、主要伽藍の南側・北側・東側に及び、主要伽藍を取り囲むように位置することも、焼き討ちの意図を物語っているものと考えられる。この焼き討ちは、天野山金剛寺のすべての建物を、焼き尽くすことを目的としたのではなく、当時の南朝方の天皇や公家、兵士らの生活の場であった子院を壊滅し、体制に打撃を与えるためのものであったと推測される。したがって、今日、金堂、多宝塔、御影堂、食堂などの建造物が現存しているのは、その対象外であったためによると考えられる。

第２節　宗教

１　密教法具

密教寺院の仏堂や庫裏の内部に設けられた仏間には、修法を行うための密教法具が備えられている。宗教活動を行う上で、密教法具は中心的な存在である。このことに関しては、密教が日本に伝来した当初から入唐八祖とされる、最澄、空海、常暁、円行、円仁、円珍、恵運、宗叡らが請来した経典や儀軌のいくつかに、密教法具に関する材質についての記述もあり、僧侶らはこれらを古来より拠り所としてきた経緯がある。特に六器（閼伽器）の場合は、金属製以外に石、木、樹葉、貝、土器など様々なものから成ることが記されており、これらの使用にあたっては、新しく、未使用のものを仏の供養に用いることが共通事項であって、金属が密教法具の唯一の材料とするという記述にはなっていない。

しかし現在、このような密教法具を、文化財学において研究対象とする場合、その対象は一般的に金属製となっている。

天野山金剛寺遺跡における既往調査のいずれの調査区においても、また、特に火災による焼土層中からも、金属製の密教法具は、現在のところ確認されていない。しかし、ＫＧT98－１の調査区内に所在した子院で、瓦器や瓦質土器の小椀が六器や二器、瓦質土器の台皿が、花埦として使用されていたことを確認し、従来、その存在を想定していなかった土器製の密教法具というものが存在していたことがわかった。

また、主要伽藍の東側丘陵の中腹には、虚空蔵求聞持法を修するための求聞持堂があり、この堂内に、かつて修法に用いたとされる木製の密教法具一式である六器・二器（蓋付）、花埦（かかん）、飲食器（おんじきき）、金剛盤、柄香炉（えこうろ）が伝世している[註1]。但し、基本の密壇法具一式としては、火舎、五鈷杵（ごこしょ）、華瓶（けびょう）、散杖（さんじょう）などの器種は欠いている。

なお、これらの詳細な製作時期は今後の検討課題であるが、金剛盤の裏面に「日野観音寺乾坊」という墨書が記されていたり、日野観音寺が、天野山金剛寺の南東側に位置する丘陵を隔てた立地に存在し、両寺間の距離も約800mであることなどから、この密教法具一式のすべてが、当初から日野観音寺乾坊の什物であったとは断定できないが、少なくとも金剛盤については、当寺を経て天野山金剛寺にもたらされた経緯が明らかになった。

したがって、天野山金剛寺において、金属製の密教法具が出土しないのは、以上のような火災に対して耐火力のない木製密教法具や、土器製密教法具の遺例が存在したことが一因なのかもしれない。

資料が少ないため積極的な議論はできないが、今後このように焼失した密教寺院の場合、寺格、出土状況、寺院への法具の供給体制などを分析し、さらにその上で、密教経典、儀軌（ぎき）などの内容も加味し、調査を進めていく必要性がある。

2　地鎮め

天野山金剛寺の子院跡では、従来、土釜埋納遺構と呼称してきた土公供遺構が、ＫＧＴ88－１・91－１・98－１の調査区で検出された。これらは、主要伽藍の南側・北側・東側に分布し、その検出状況から子院の焼失後、相次いで再建に着手されたことを窺わせる。

なお、これらの地鎮めに関する修法については、真言宗内において西院流、中院流、三宝院流など様々な法流が存在する。今後、これら法流毎の作法内容、作法のための支度品などの特徴を捉えることによって、天野山金剛寺での法流の在り方、つまり遺構・遺物が具体的に、どの法流の修法で行われたものかを、解明していくことも必要であるといえる。

3　埋葬

ＫＧT97－３では、歴代座主の墓などが検出された。

真言宗では古来より、葬儀は『納棺作法』という葬儀方法を記した儀軌に則り、執り行っている。しかし、古老の僧侶の話によれば、「一昔前は、山を１つ隔てた集落の葬儀にいくと（助法僧として）その方法（次第など）が異なった。」という。

ＳＴ２では、棺を龕(がん)に納め、『納棺作法』において、特に棺に記すことが定型とされていない『阿弥陀如来根本陀羅尼』などの墨書も見られた。このことから、埋葬方法は寺院に居住する僧侶の場合であっても、真言宗内の宗派、寺院が所在する地域・時代などの差異・信仰上の理由等によって、実際には教義の域を逸脱せずに、特色をもった葬送に関する方法、習慣などが存在したことが考えられる。

また、ＳＴ１では、六文銭や六道銭、或いは煙草銭とみられる銅銭が副葬されていることが確認されたが、明らかに僧侶であるＳＴ３からは検出できなかった。その理由として、真言宗の場合は、伝法灌頂(でんぽうかんじょう)を受けた僧侶、特に阿闍梨は、既に成仏しているとされるため、葬送の際に六文銭や六道銭は、副葬しないという見解があるためとも考えられる。一方、天台宗では、阿闍梨の葬儀に六文銭や六道銭を副葬する。そのため、比叡山の千日回峰行者(阿闍梨)も、峰中でいつ死に果てても良いとの覚悟で峰入(みねいり)するため、未敷笠(みぶかさ)(阿闍梨笠)の紐の付根に、六文銭・六道銭を結び携えて回峰行を行うという。

このように、仏教宗派、特に密教において覚りを求め、成仏を目指すといった宗教的目標は同じであっても、目標へのその過程が、宗派毎の教義、また地域的な習慣により、実際には差異が存在することを念頭におきながら、今後の調査研究を進めていくことが必要であることを再確認した。

第３節　『金剛寺境内図』と「検出遺構」

『金剛寺境内図』は、その伽藍の様子がいつの時代のものかは詳細不明であるが、古くは鎌倉時代に遡る伽藍内の様子が、記されているとも言われている。

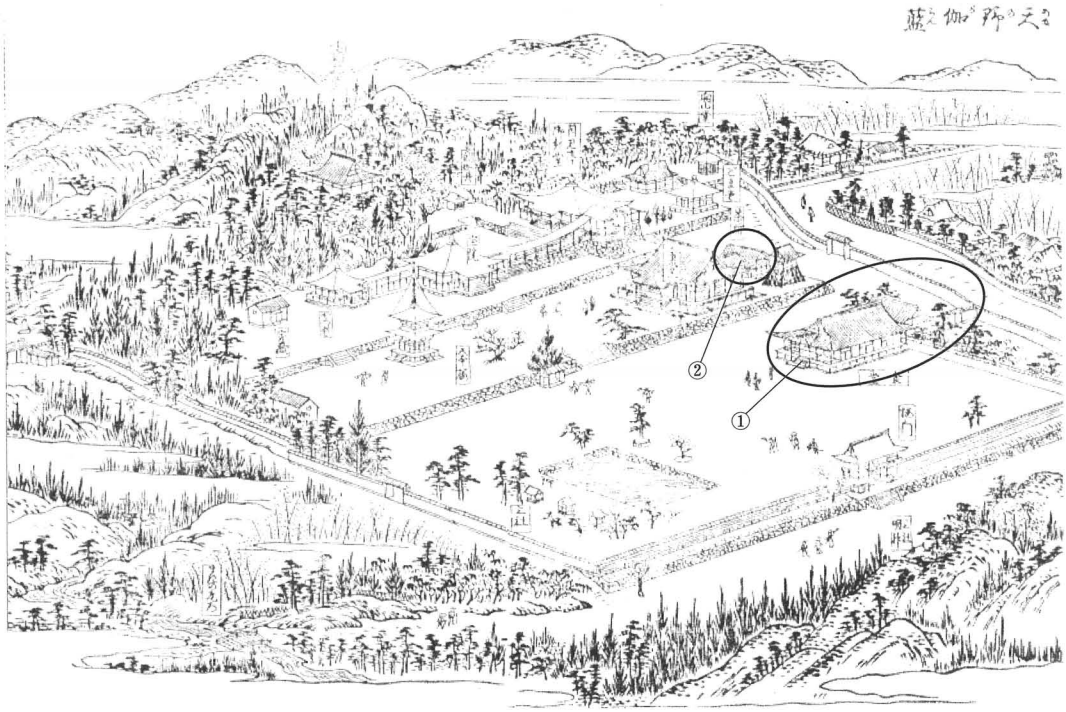
したがって、今までの天野山金剛寺境内での発掘調査の際には、予め調査箇所を絵図上で確認し、調査を着手してきた。その結果、絵図の内容は、実際に検出される子院の遺構の分布や、溝、塀、石垣などの遺構の場合、その軸方向が絵図と一致することなどから、有用な資料と言える。

今回、ＫＧＴ99－１の第１調査区では築地跡、第２調査区では茶所跡が、ほぼ絵図のとおりに検出され、絵図の写実性の高さが証明された。しかし、その一方で、第３－Ｃ調査区の多宝塔の南側には、絵図には見られない溝（ＳＤ２・３）も確認されている。

これらの遺構の年代は江戸時代のものと見られるが、伽藍での構造物の重要度やその規模などによっては、絵図に描かれないものも存在することも認識した。したがって、絵図の内容に依存し過ぎると、かえって出土状況を重視する発掘調査での成果を、見落としてしまう恐れがあることも、再認識させられた。このような絵図は、調査上有用であるが、くれぐれも参考資料に留めて取り扱い、発掘調査を行う必要があるといえる。（第168～170図）

第171図　『金剛寺境内図』

第172図　『河内名所図会』（金剛寺）（１）



第173図　『河内名所図会』（金剛寺）（２）

註１　石堂法瑞師（天野山金剛寺）に御教示いただいた。

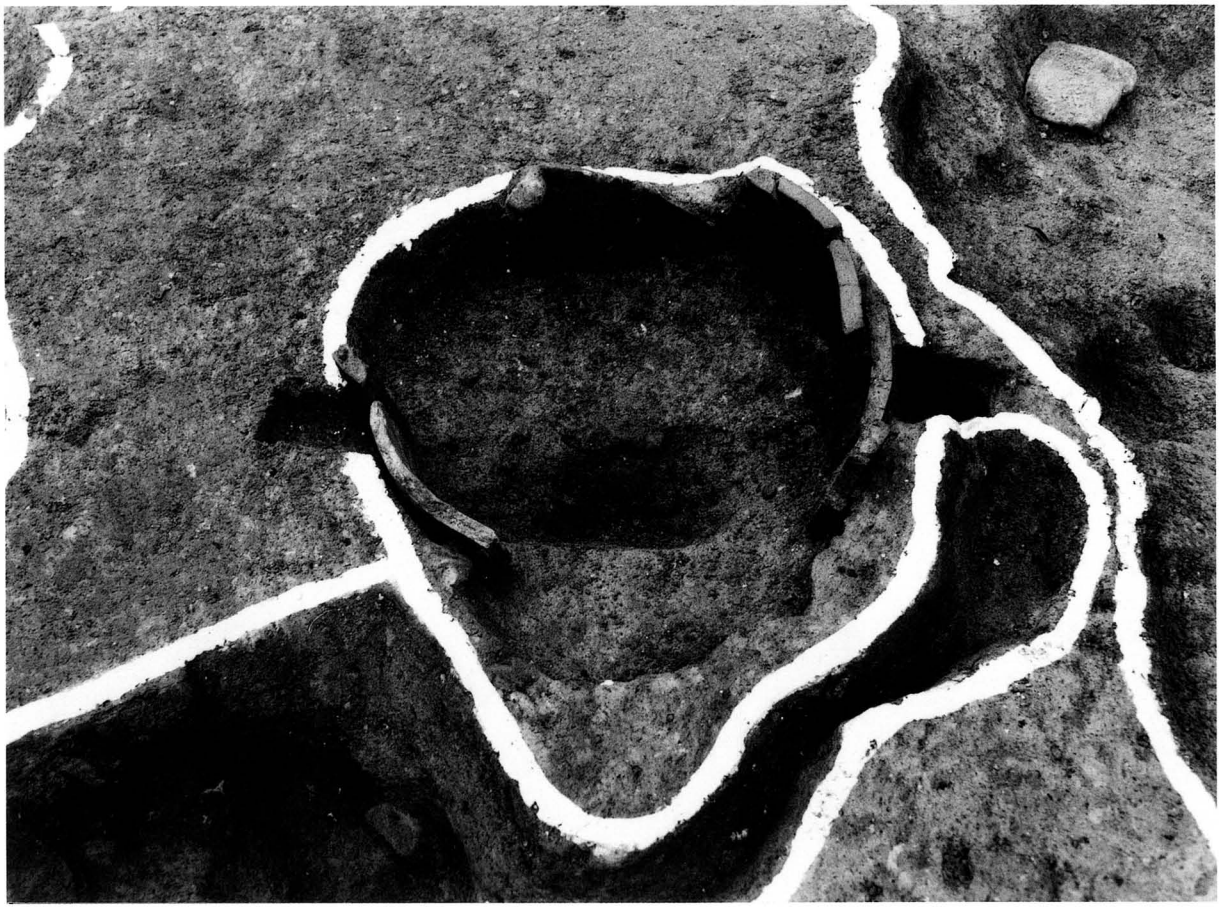
図　　版

図版1　KGT91—1

調査区全景（南から）

SW1（西から）

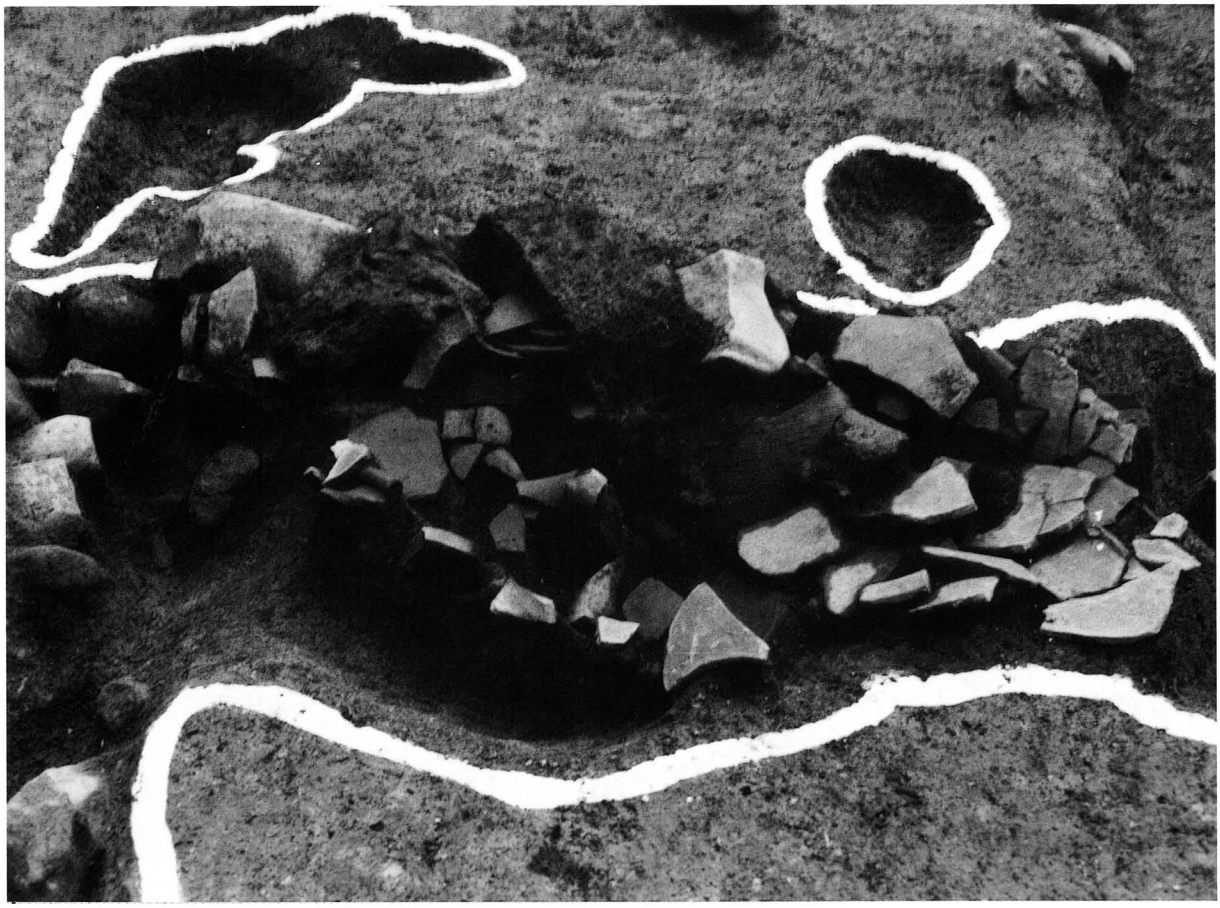
図版2　KGT91—1



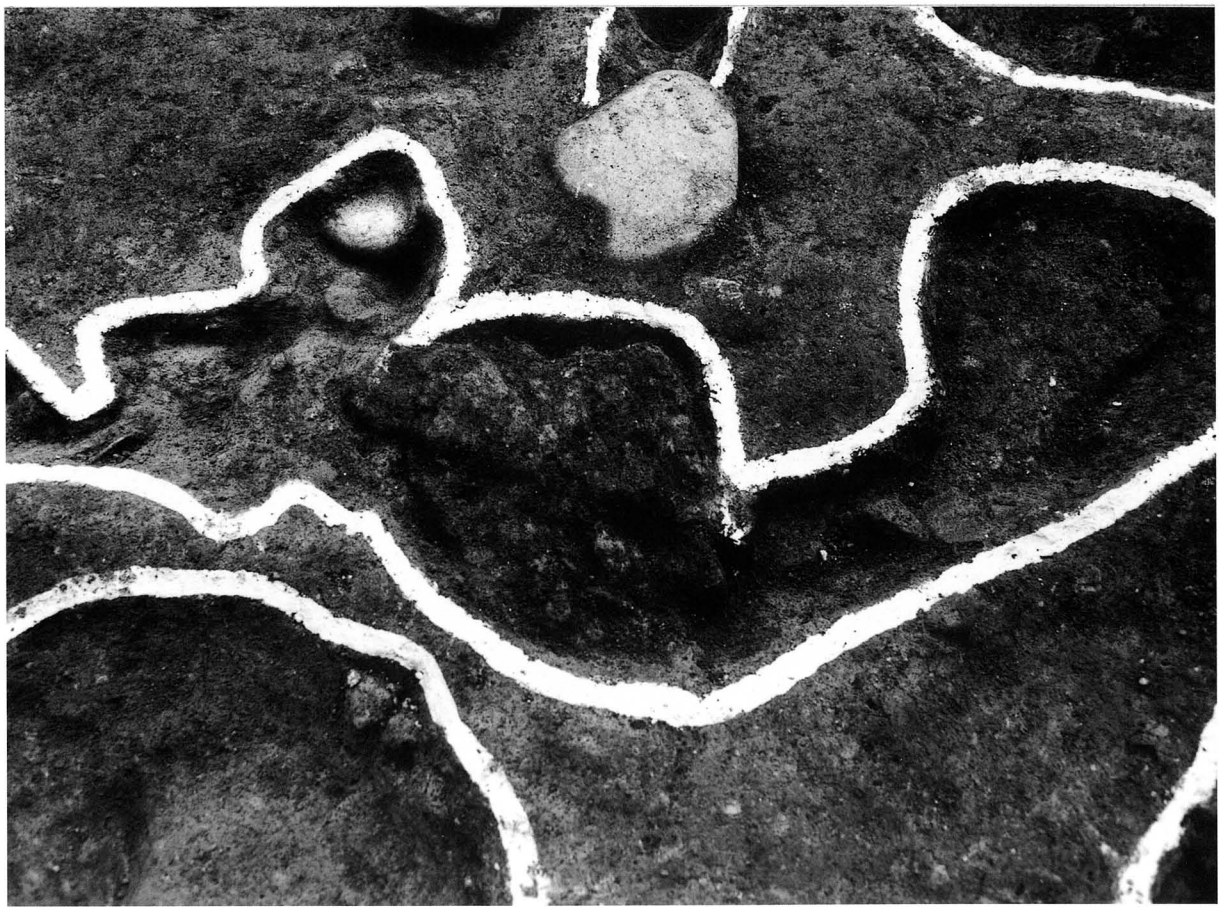
ＳＣ１（南から）

ＳＣ１・２（西から）

図版3　KGT91—1

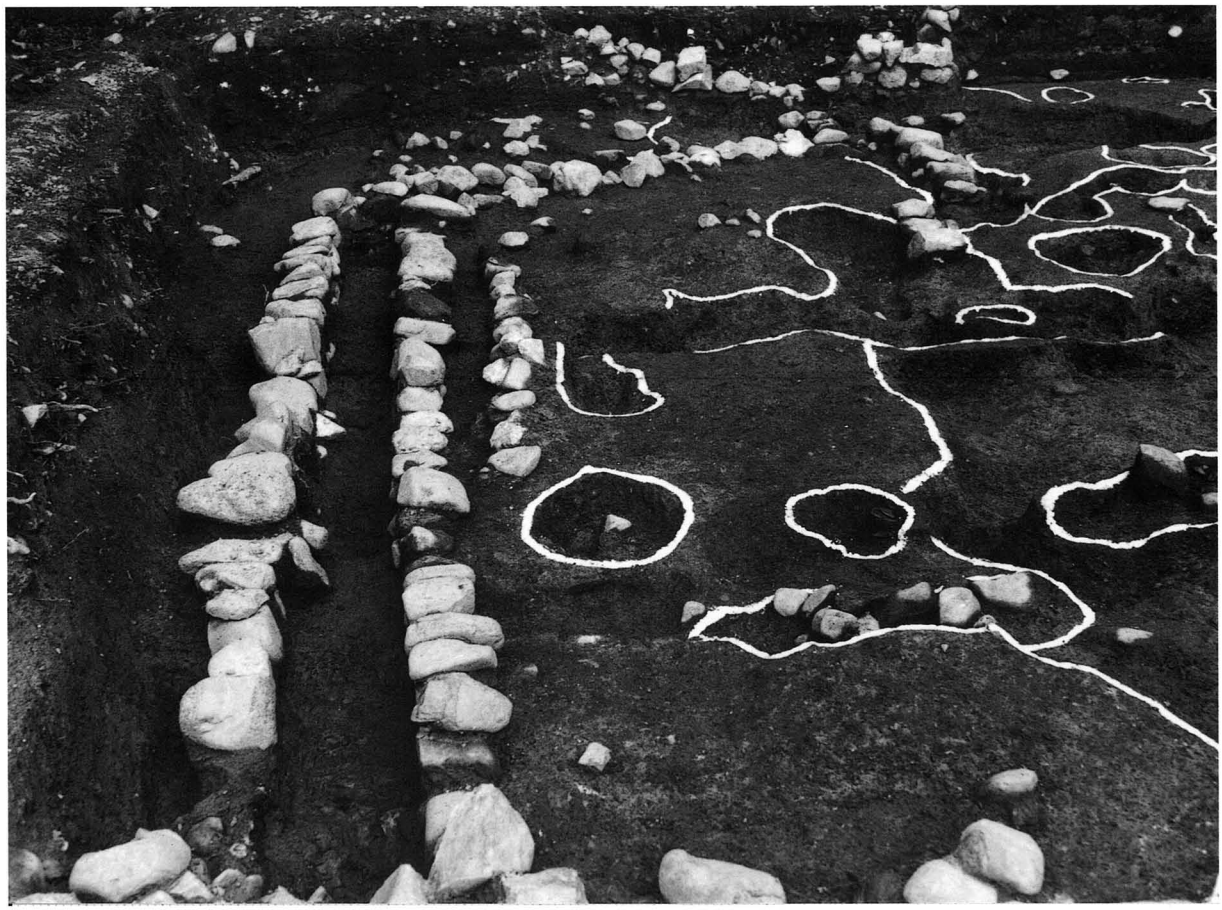


ＳＣ２遺物出土状況（東から）



ＳＣ３（東から）

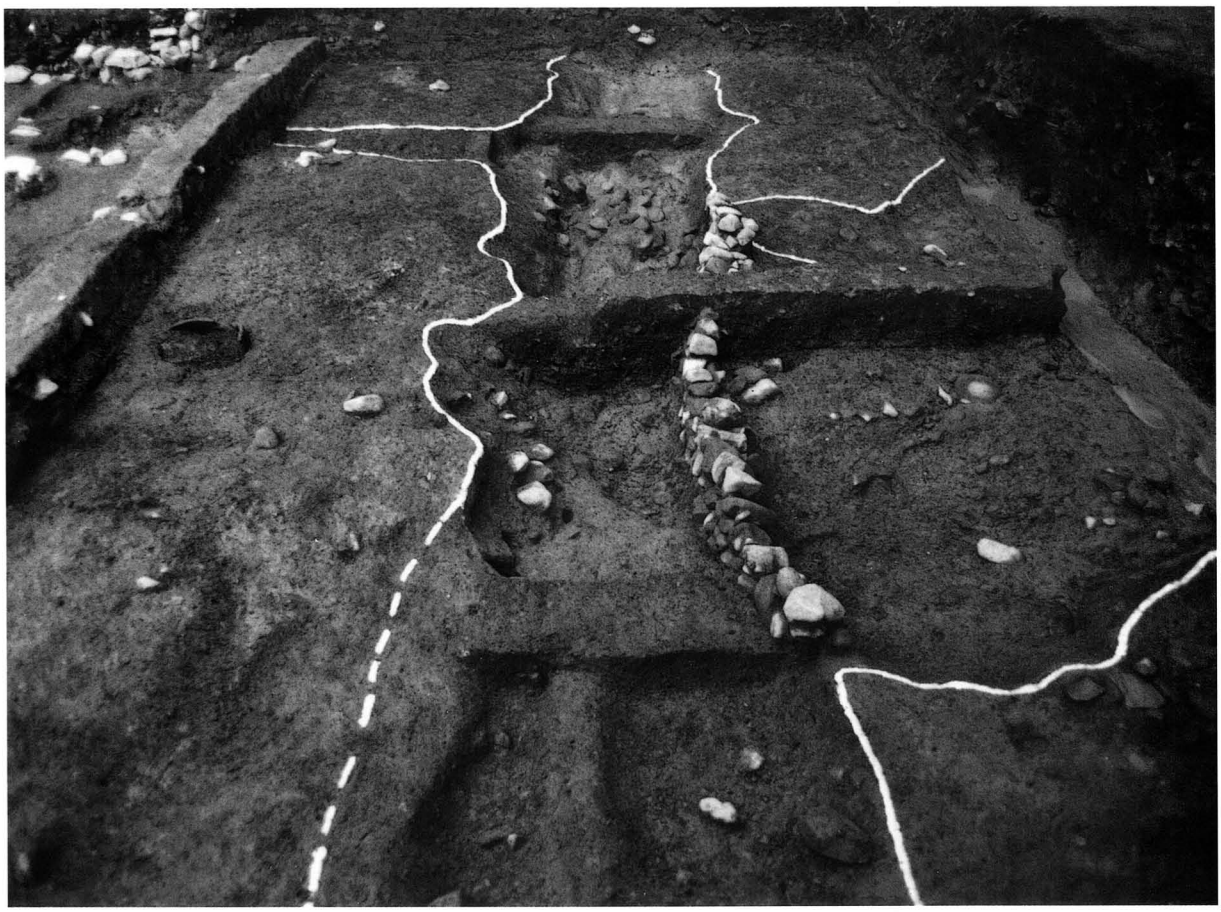
図版4　KGT91—1



ＳＤ２（西から）

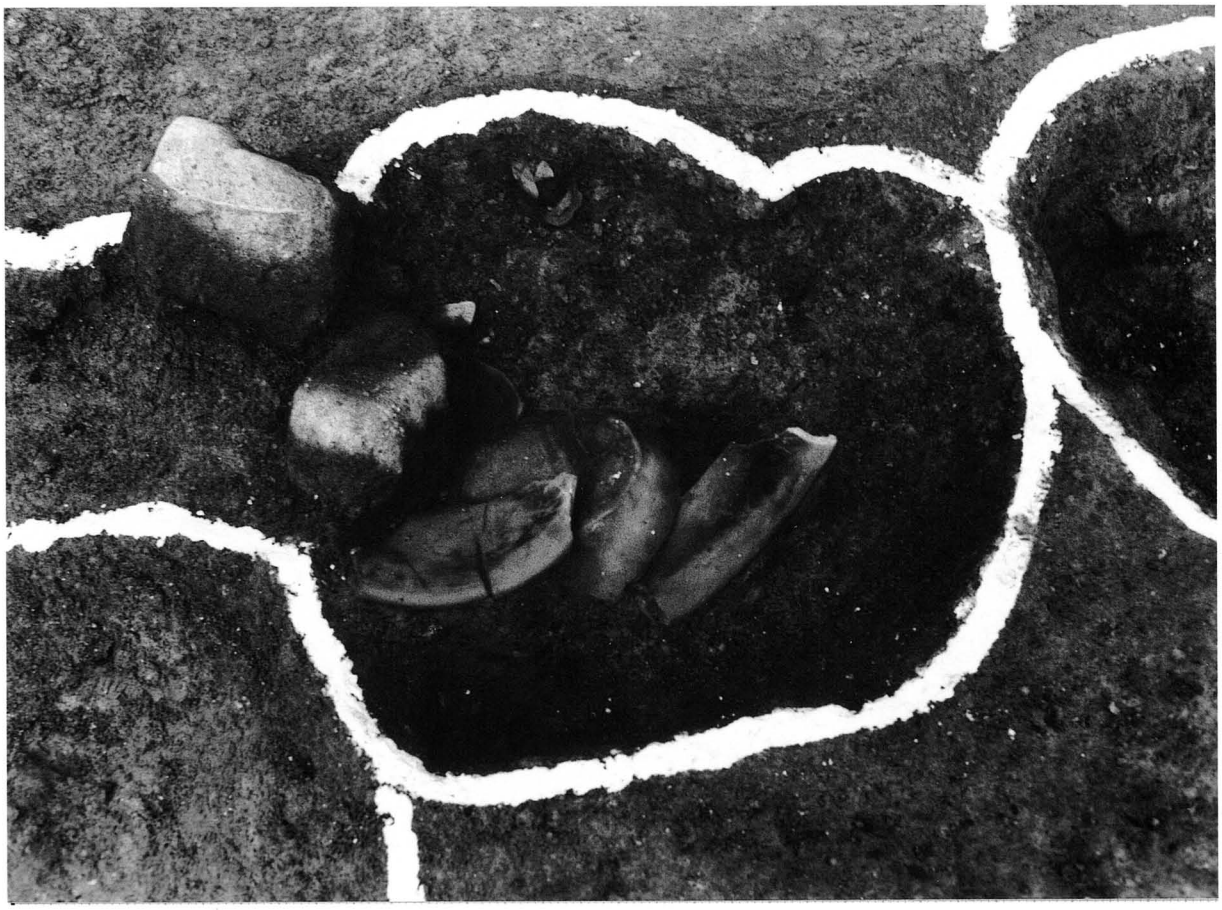
ＳＤ２（東から）

図版5　KGT91—1



ＳＤ３（西から）

ＳＤ３（北から）



ＳＫ４遺物出土状況（西から）

ＳＯ１（西から）

図版7　KGT91—1

ＳＯ１遺物出土状況（東から）

ＳＯ１石除去後（東から）

図版8　KGT91—1

SW2（南から）

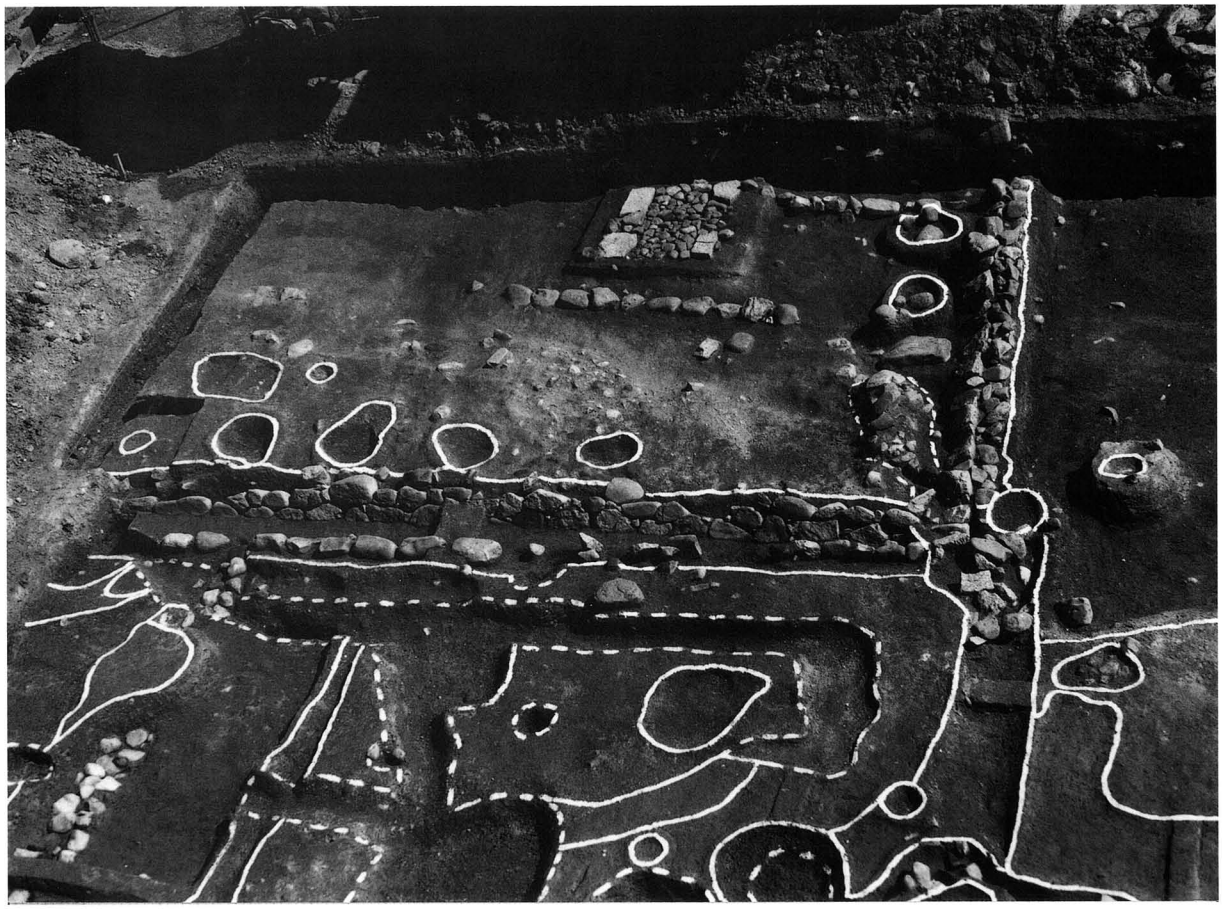
SW2（南から）

図版9　KGT97—2

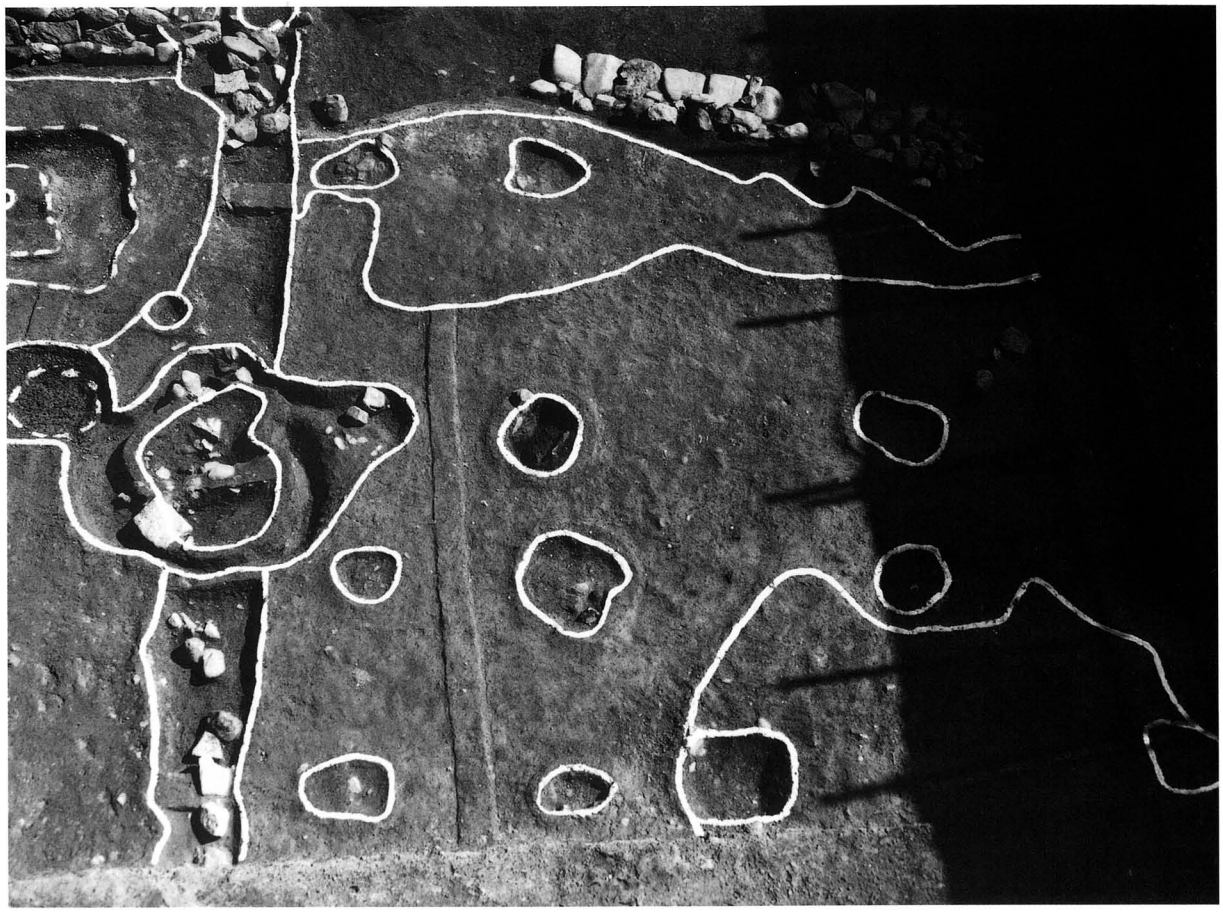
調査区全景（西から）

調査区全景（南から）

図版10　KGT97—2

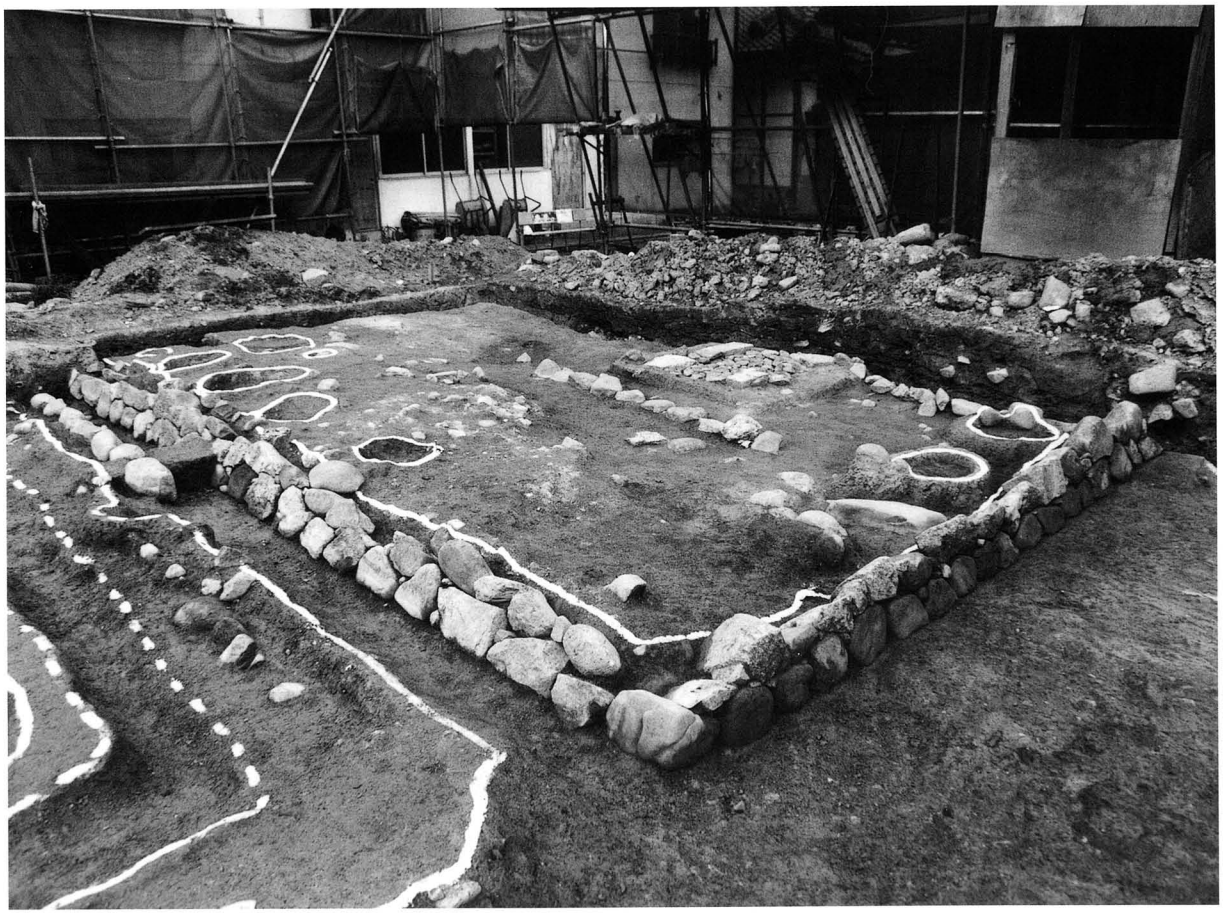


ＳＢ１（西から）



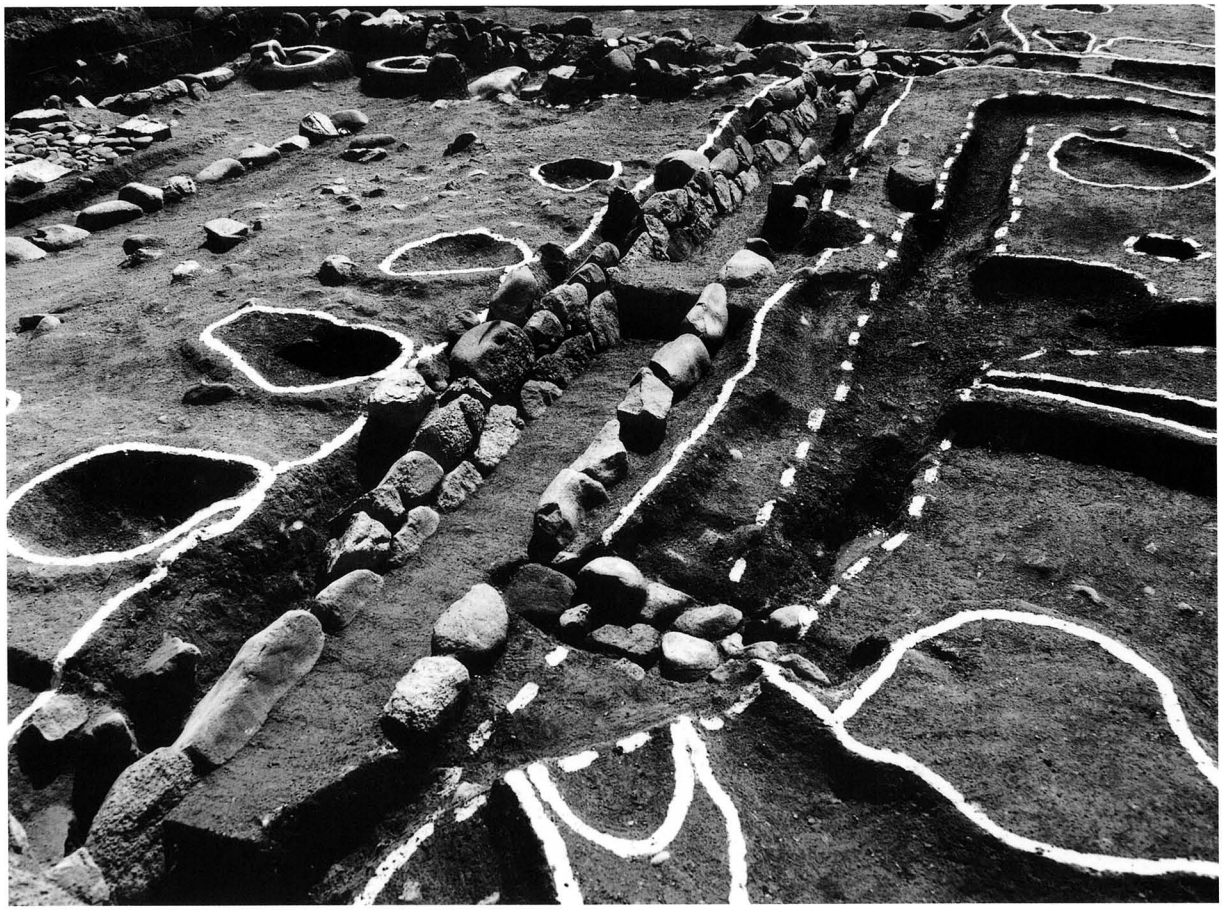
ＳＢ２（西から）

ＳＢ１（第２次）検出状況（西から）

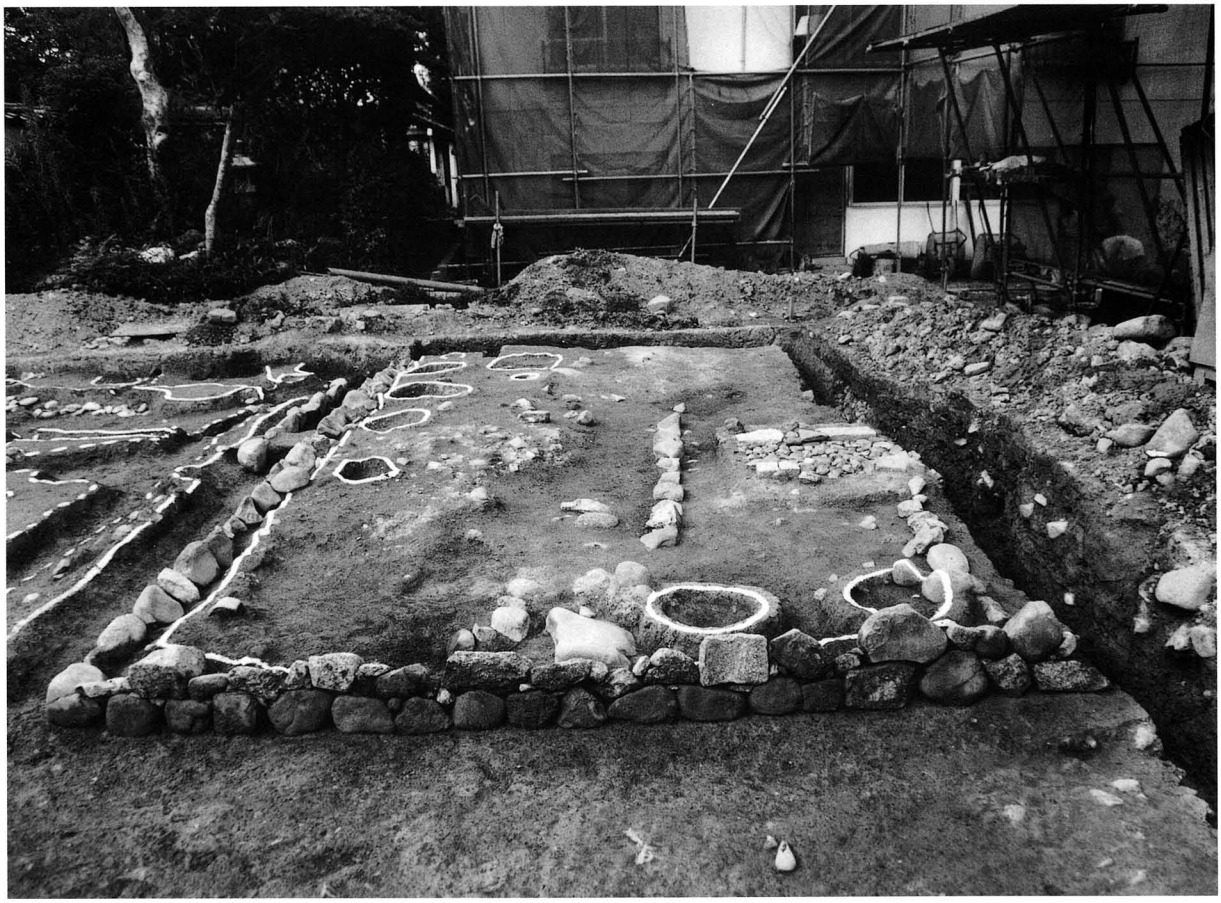


ＳＢ１（第１次）検出状況（西から）

図版12　KGT97—2



ＳＢ１西側墓壇（北から）



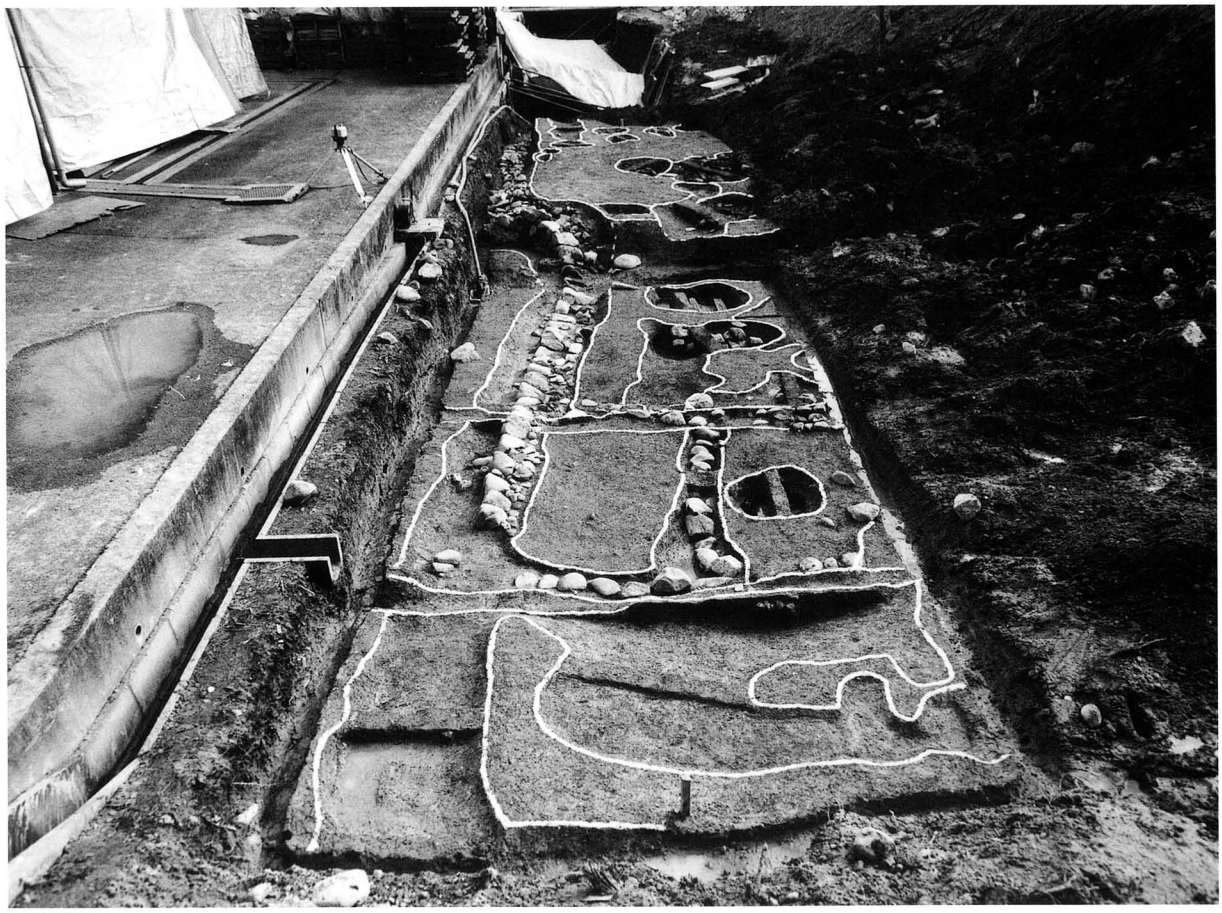
ＳＢ１南側墓壇（南から）

図版13　KGT97—2

ＳＬ１（東から）

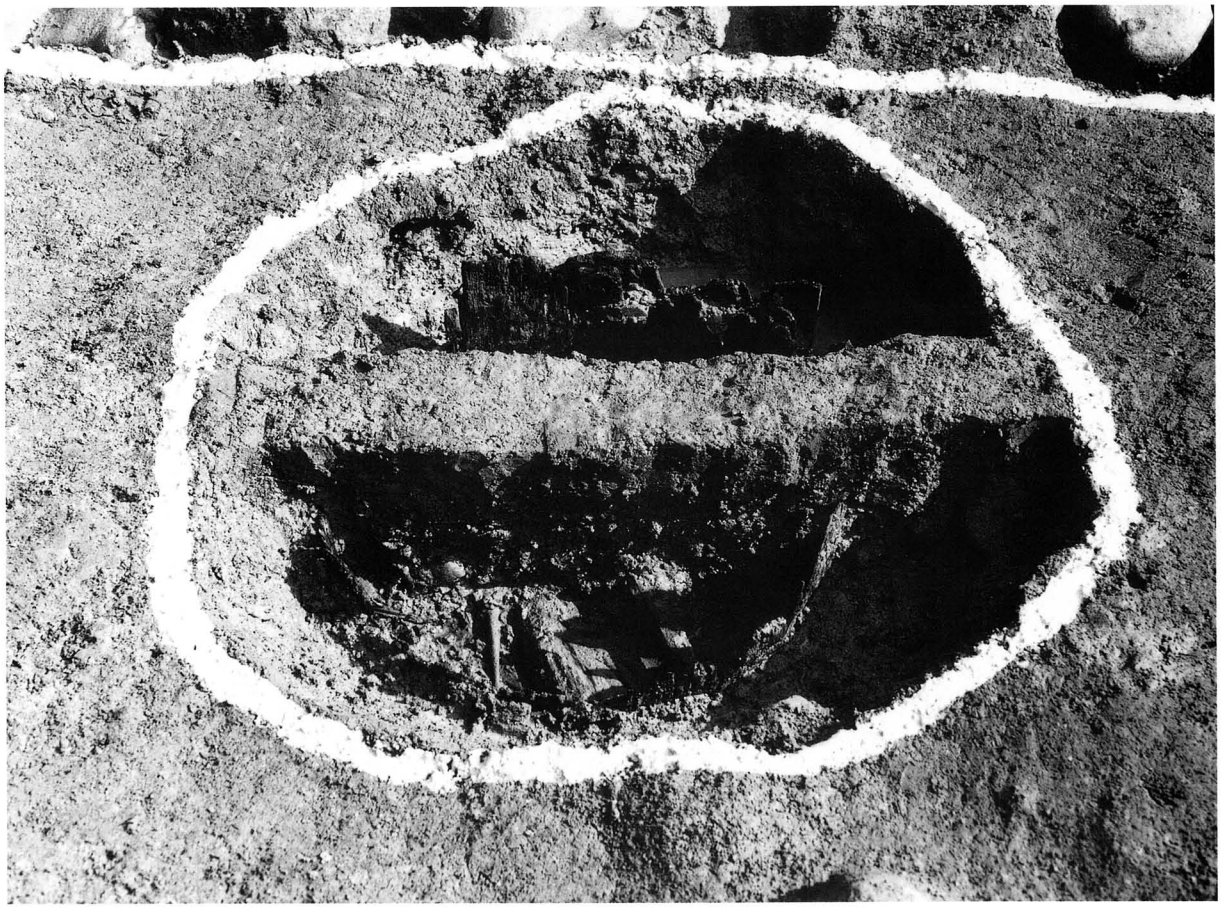
ＳＵ１（西から）

調査区上層遺構検出面全景（南から）



調査区上層遺構検出面全景（北から）

調査区下層遺構検出面南側（東から）



ＳＴ１（西から）

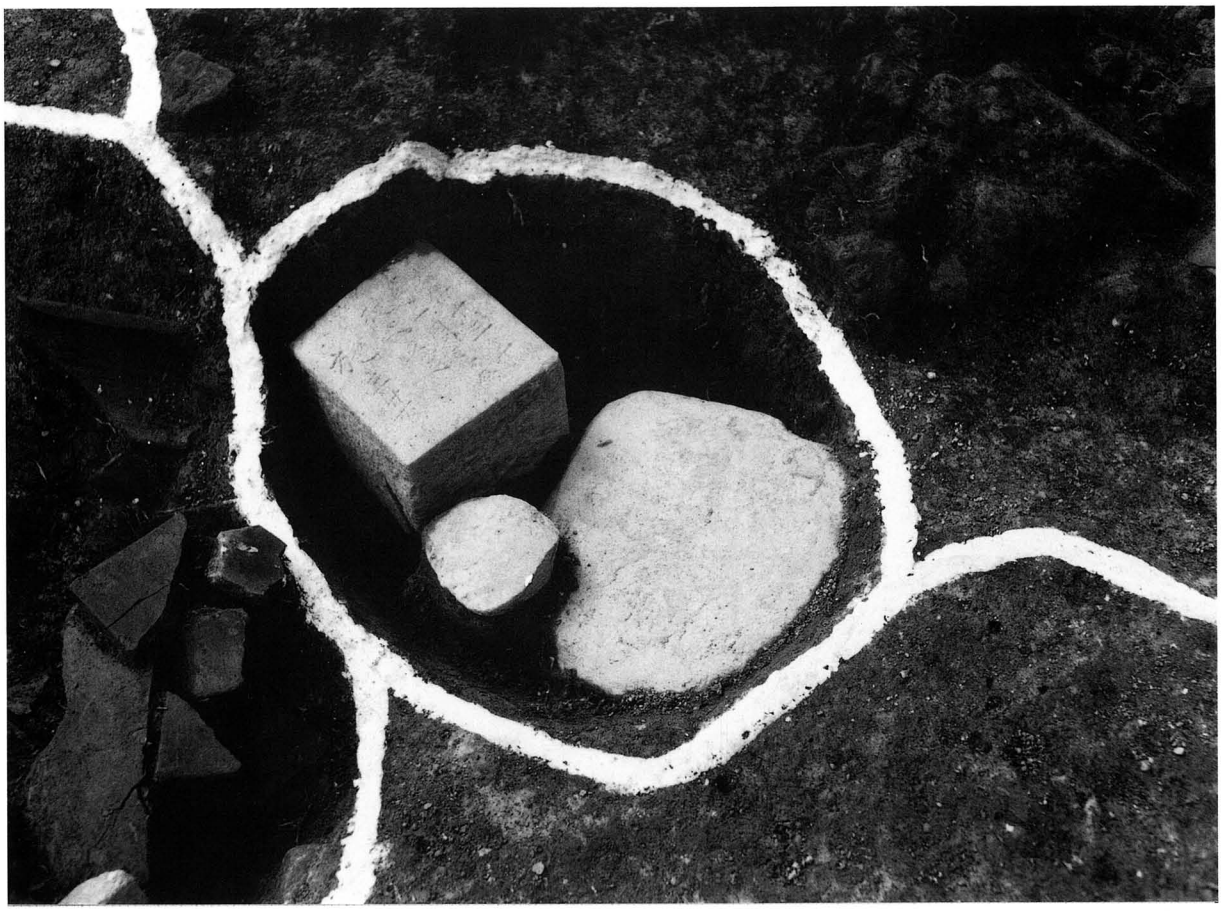
ＳＴ２（東から）

ＳＴ２丸桶内遺物出土状況（西から）

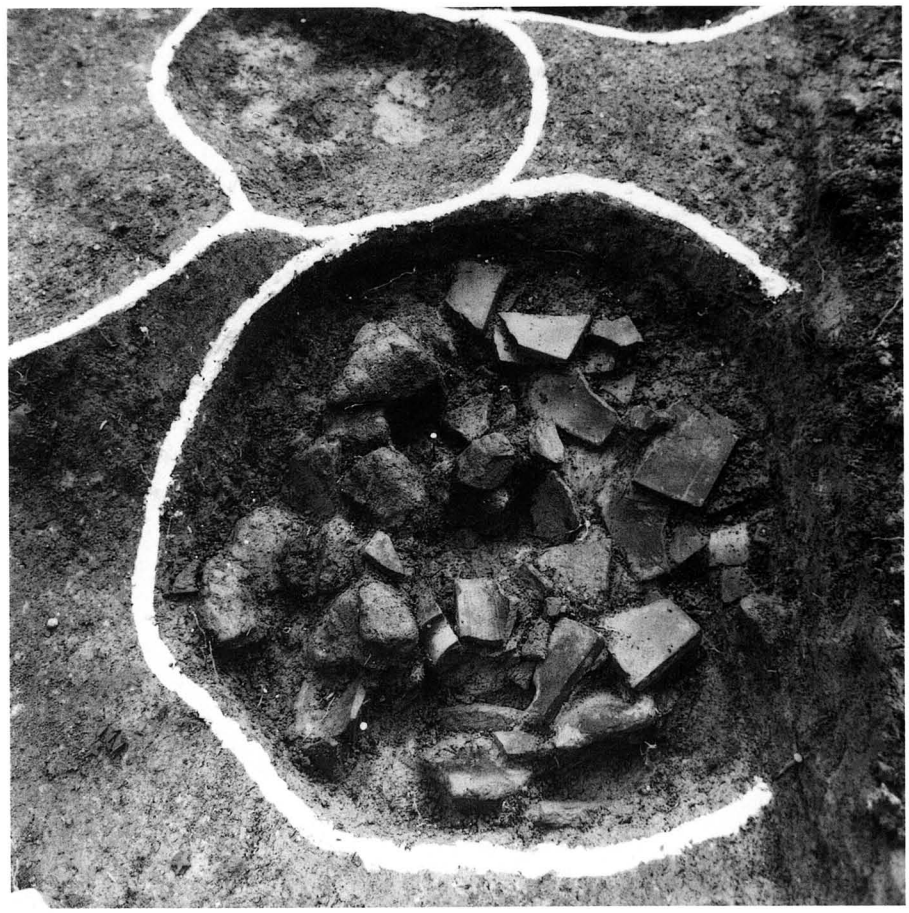
ＳＴ２丸桶内遺物除去後（西から）

ＳＴ２龕出土状況（東から）

図版18　KGT97—3



ＳＴ３（北から）



ＳＮ１（北から）

第１調査区第１遺構検出面全景（北から）

第１調査区第１遺構検出面全景（南から）

図版20　KGT98—1

SD3・SW1（北から）

SD3・SW1（東から）

図版21　KGT98－1

ＳＥ１（北から）

ＳＵ１（西から）

図版22　KGT98—1

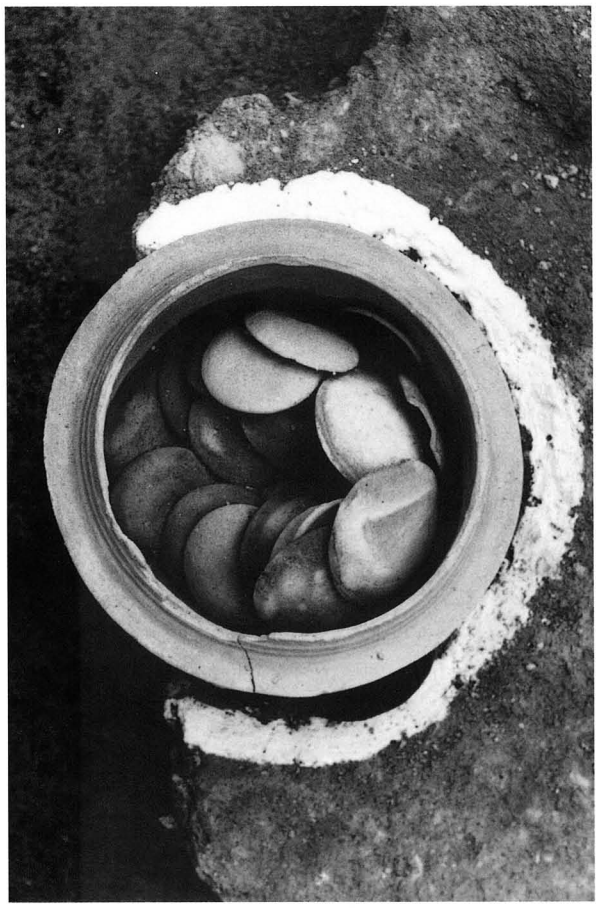
ＳＵ２（北から）

ＳＵ２（南から）

第１調査区第２遺構検出面全景（北から）

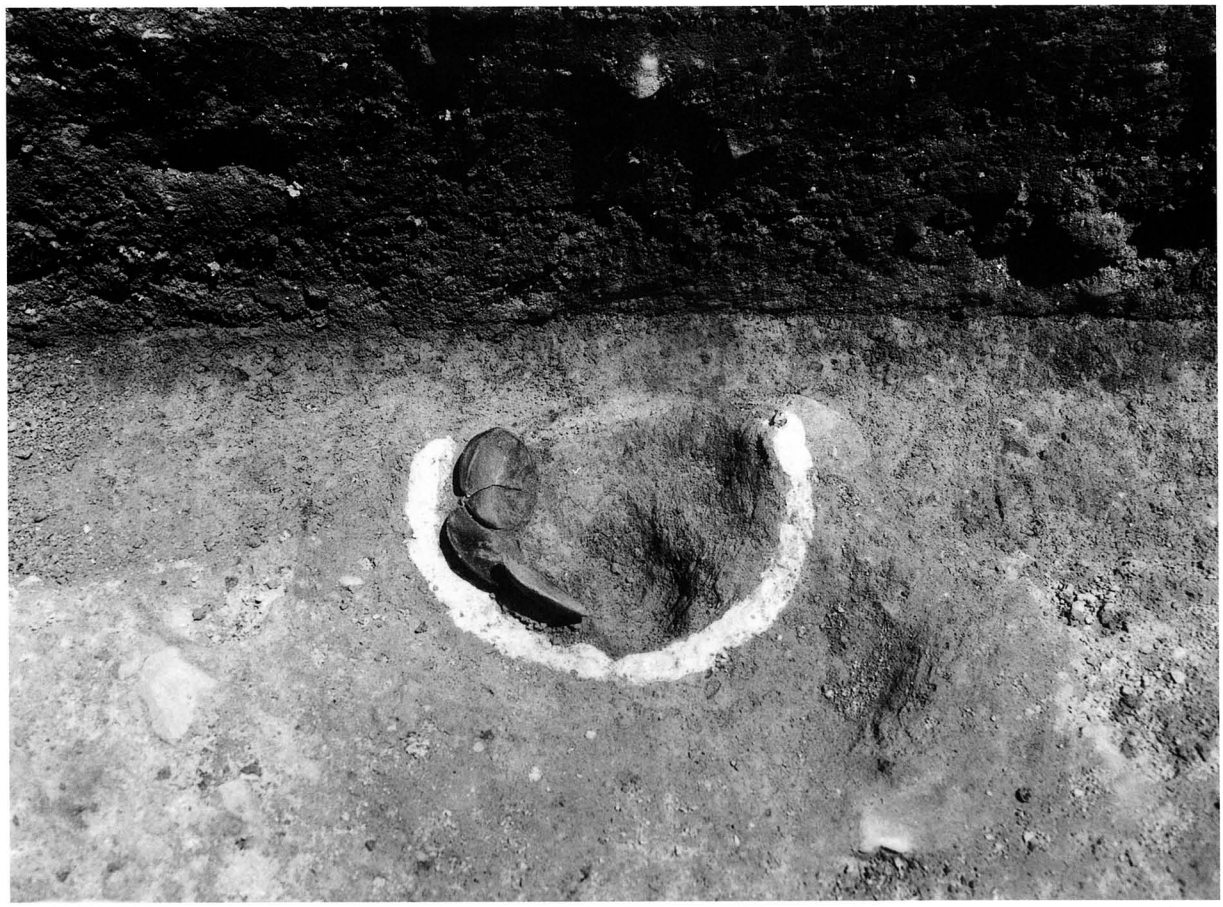
第１調査区第２遺構検出面全景（南から）

ＳＯ１（西から）



ＳＯ１蓋石除去後（北から）

ＳＯ１銅銭出土状況（北から）



ＳＯ１土釜抜き取り後（西から）

ＳＰ６周辺遺物出土状況（東から）

第１調査区第３遺構検出面全景（北から）

第１調査区第３遺構検出面全景（南から）

図版27　KGT98—1

ＳＢ１壁材検出状況（東から）

ＳＢ１壁材検出状況（北から）

第１調査区第４遺構検出面全景（北から）

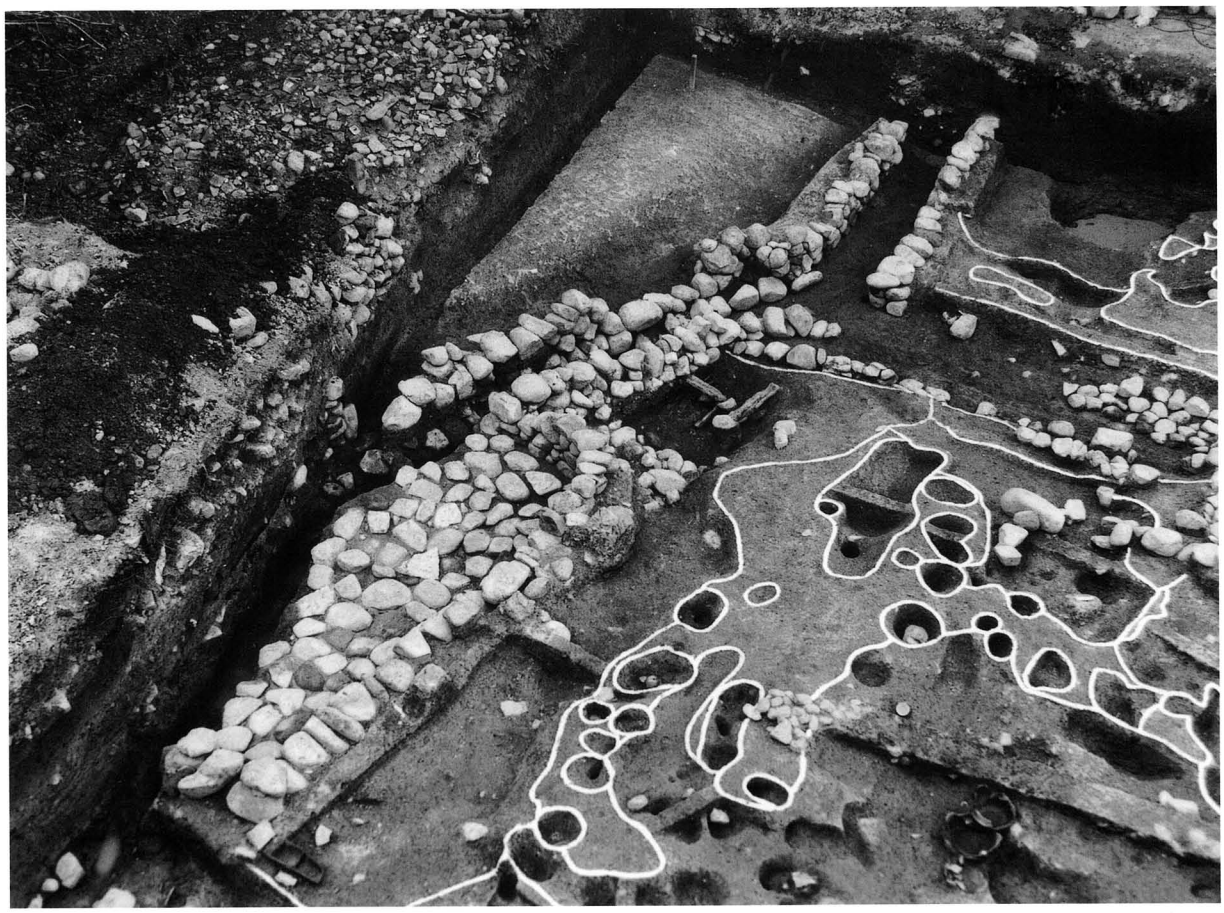
第１調査区第４遺構検出面全景（南から）

第2調査区第4遺構検出面全景（北から）

第2調査区第4遺構検出面全景（南から）

第3調査区第4遺構検出面全景（西から）

図版30　KGT98—1



ＳＤ４西側桝部（南から）

ＳＤ４東側桝部（東から）

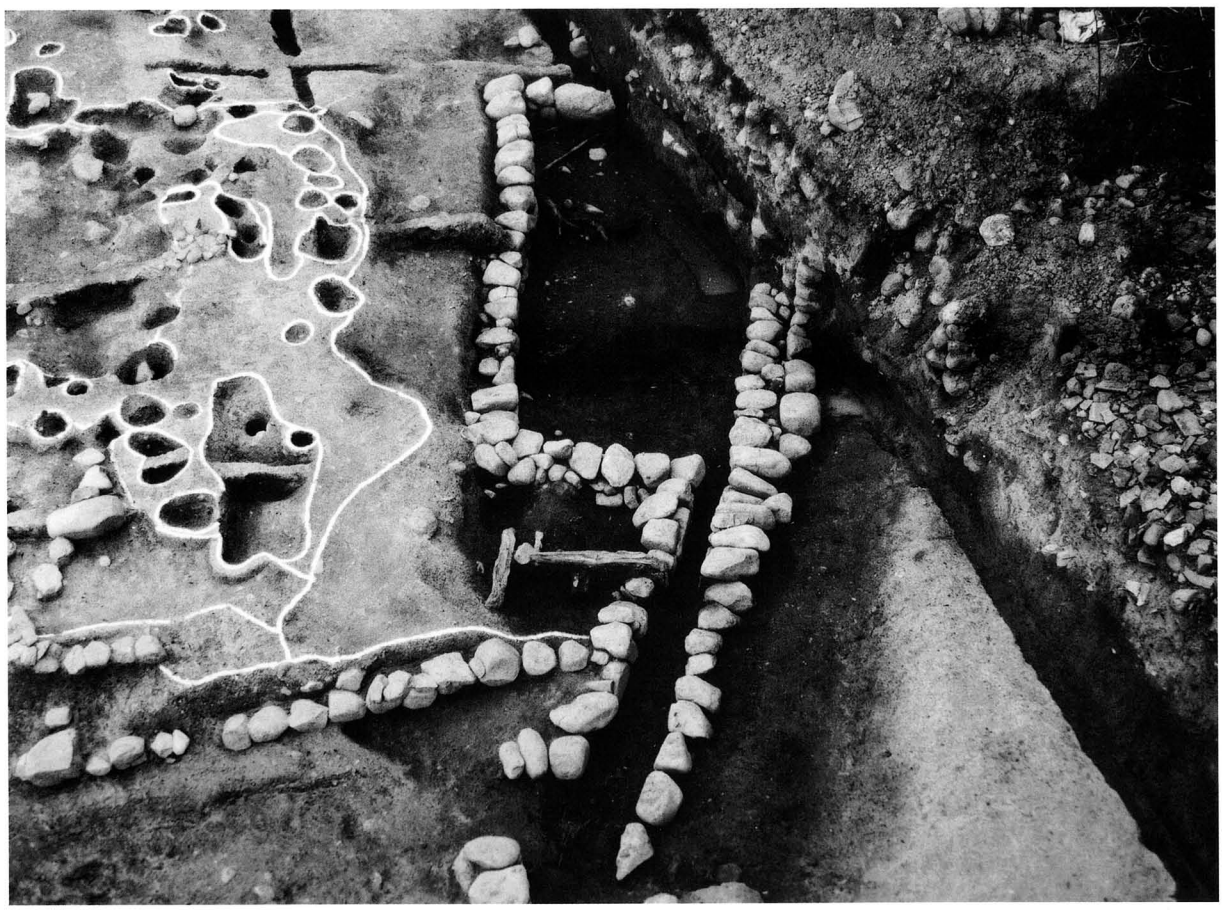
図版31　KGT98—1

ＳＬ１遺物出土状況（東から）

ＳＵ３（南から）

第1調査区第5遺構検出面全景（北から）

第1調査区第5遺構検出面全景（南から）



ＳＤ６・７（北から）

ＳＤ６遺物出土状況（南から）

図版34　KGT98—1

ＳＤ６木材出土状況（南から）

ＳＤ６木杭出土状況（北から）

図版35　KGT98—1

ＳＤ９（東から）

ＳＫ29遺物出土状況（西から）

ＳＫ31（南から）

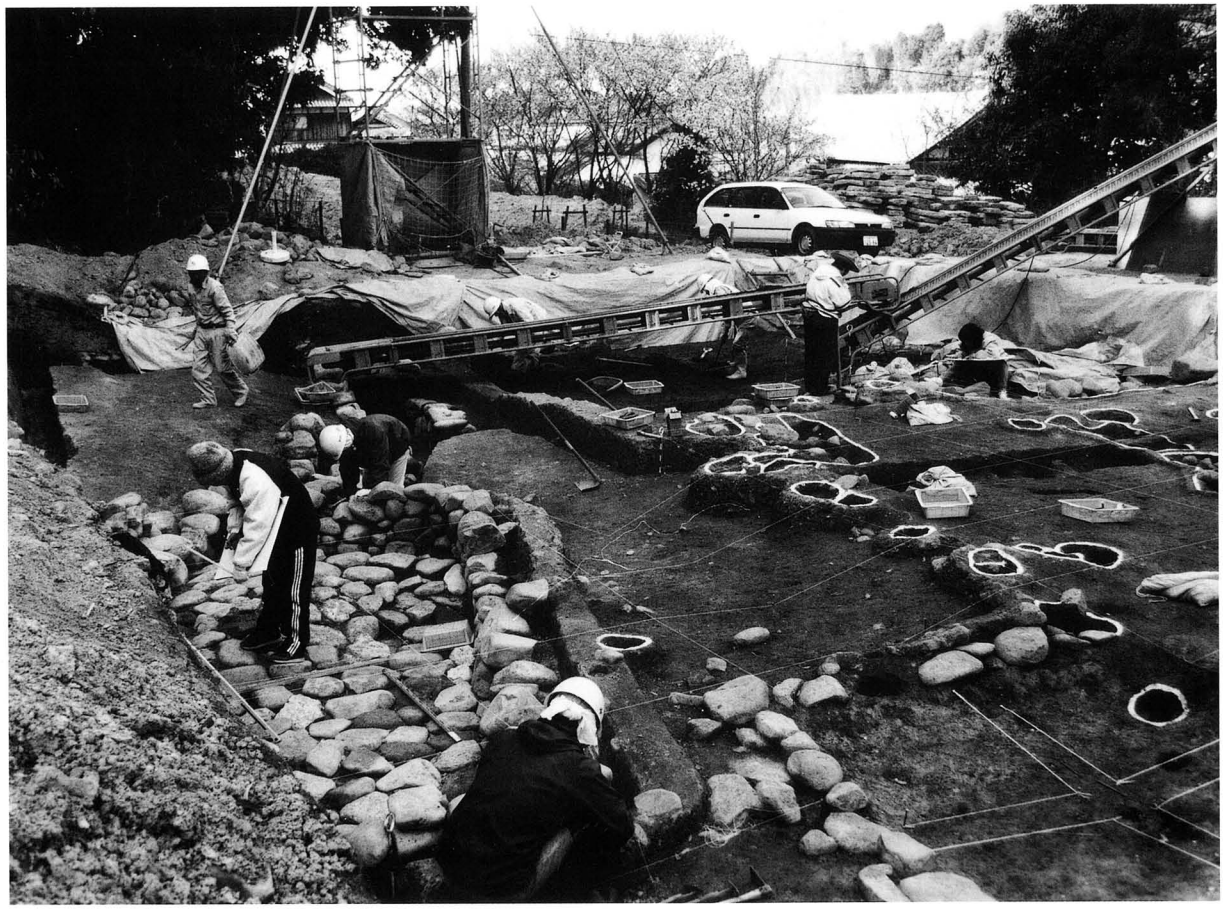
ＳＯ２遺物出土状況（北から）

図版37　KGT98—1

調査区土層断面剥ぎ取り作業風景

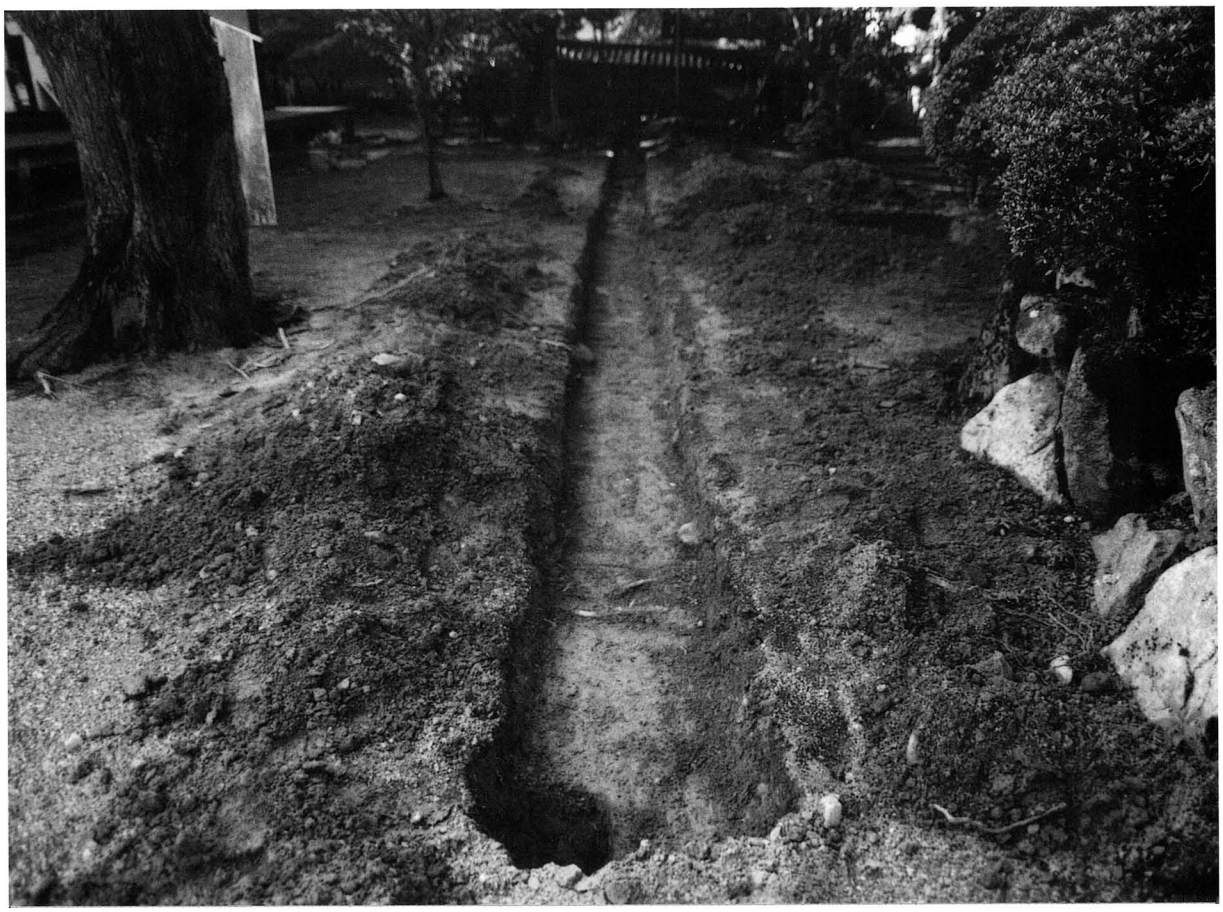
調査区土層断面剥ぎ取り作業風景

図版38　KGT98—1



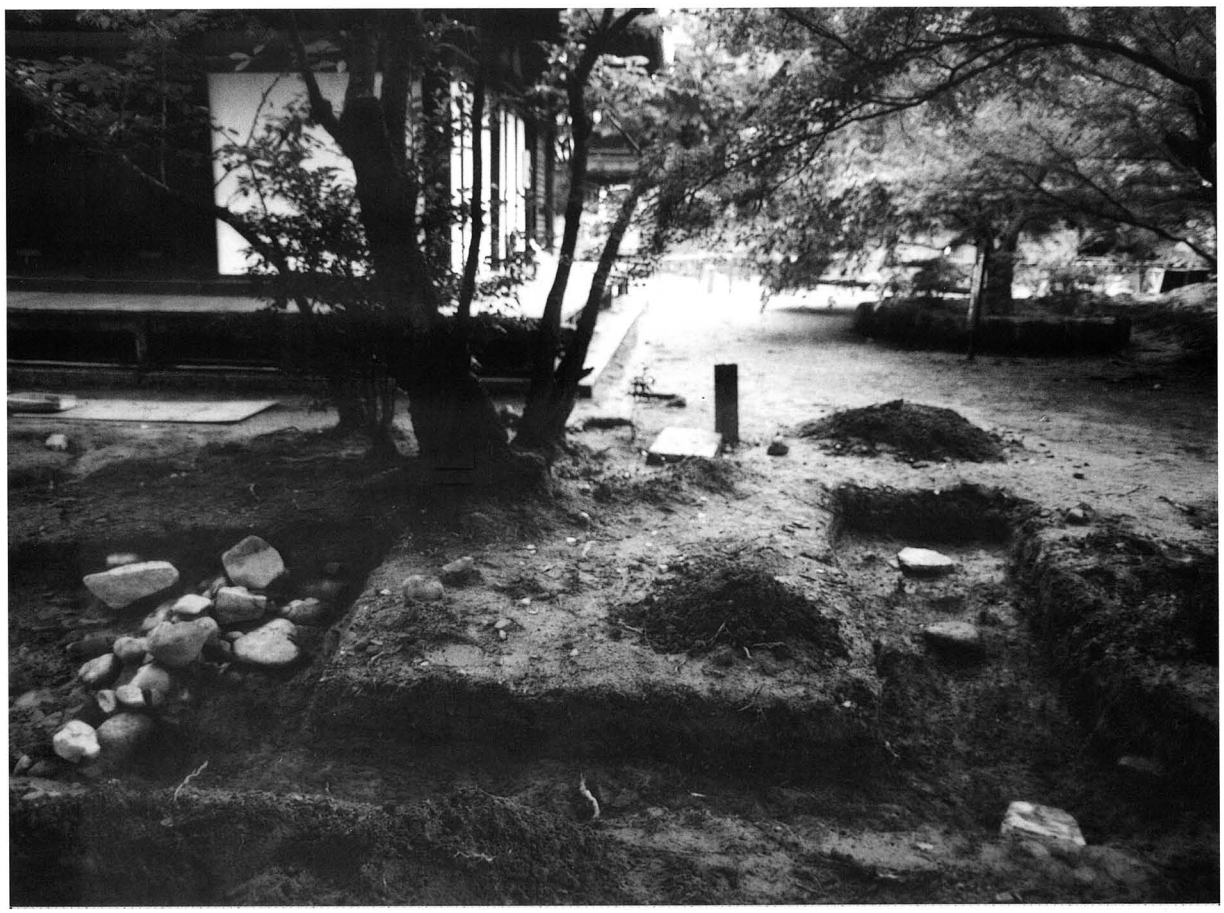
外業実測作業風景

現地説明会風景



第１調査区上層遺構検出面東側（南から）

第１調査区上層遺構検出面東側（東から）



第１調査区上層遺構検出面東側（東から）

第１調査区上層遺構検出面東側（東から）

第１調査区上層遺構検出面東側（北から）

第１調査区上層遺構検出面北側（西から）

図版42　KGT99—1

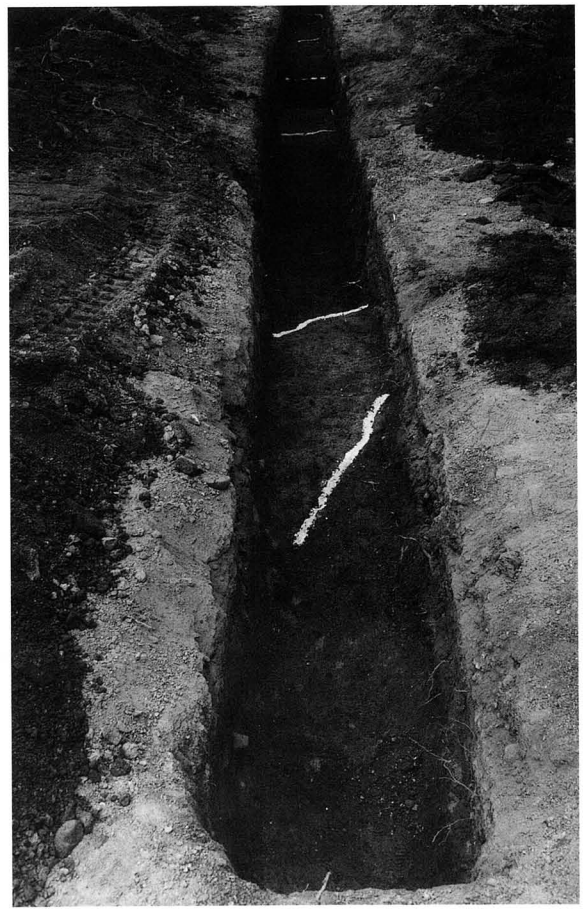
ＳＢ１（西から）

ＳＷ１（東から）

第１調査区下層遺構検出面北側（西から）

第１調査区下層遺構検出面東側（北から）

第１調査区下層遺構検出面東側（南から）



第１調査区下層遺構検出面東側（南から）

第２調査区東側（東から）

第２調査区西側（西から）

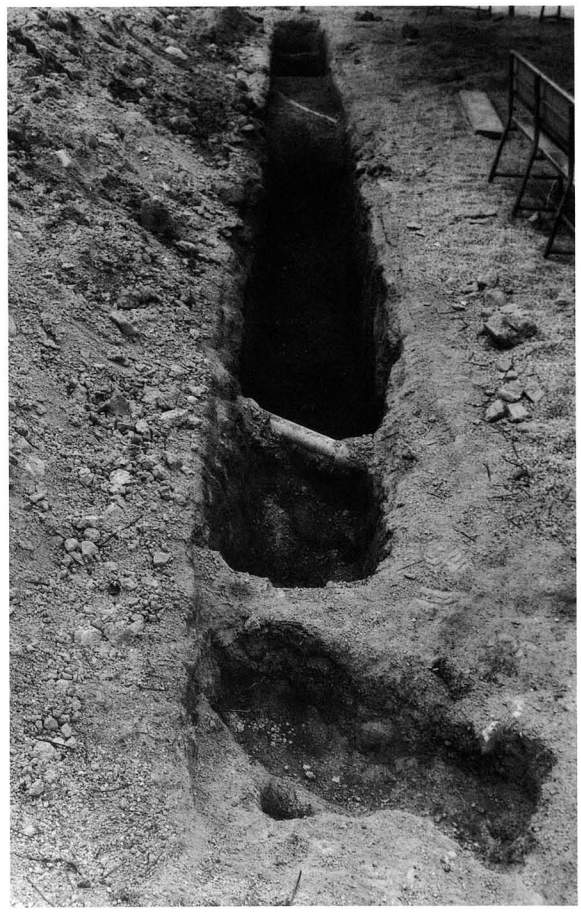
ＳＢ３（西から）

第３－Ａ調査区全景（北から）

第３－Ｂ調査区全景（西から）

第３－Ｃ調査区南側（東から）

第３－Ｃ調査区中央（北から）



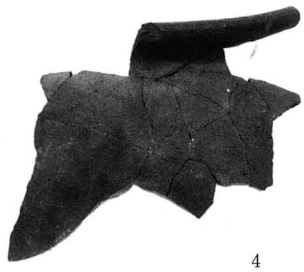
第３－Ｃ調査区北側（東から）

図版47　KGT99—1

ＳＤ３（南から）

ＳＸ４（南から）

5


4

3

8

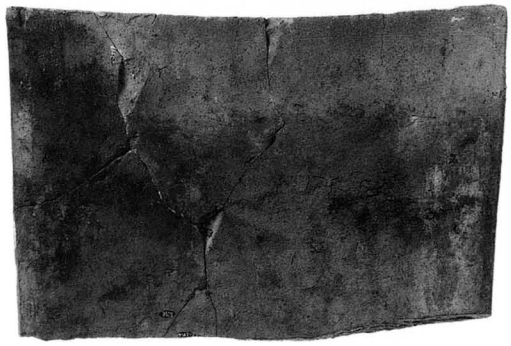
6

7

13

23

12


1

15

SC1（1）、SC2（3～5）、SD1（6～8）、SD2（12・13・15・23）

19

20

27

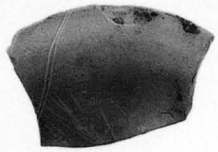
22

26

30

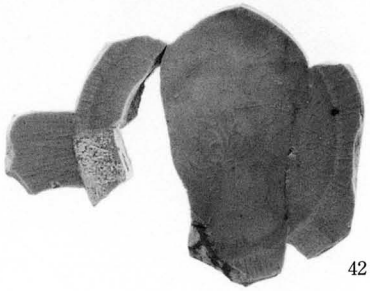
40

31

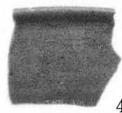

32

33

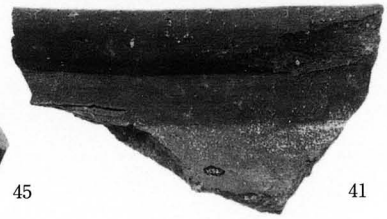
35


42

43


44

45


41

ＳＤ２（19・20・22・26・27・30～33・35・40～45）

36

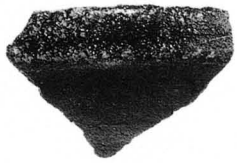
37

38

66

60

68


67

70

71

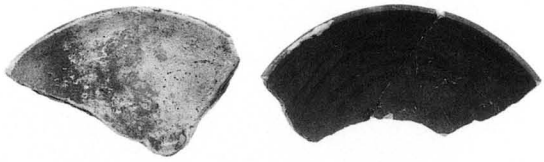
72

75

73

77

ＳＤ２（36～38）、ＳＤ３（60）、ＳＫ１（66・67）、ＳＫ５（68）、ＳＫ７（70・71）、ＳＫ９（72・73・75・77）



79　81

80

83

85

86～117

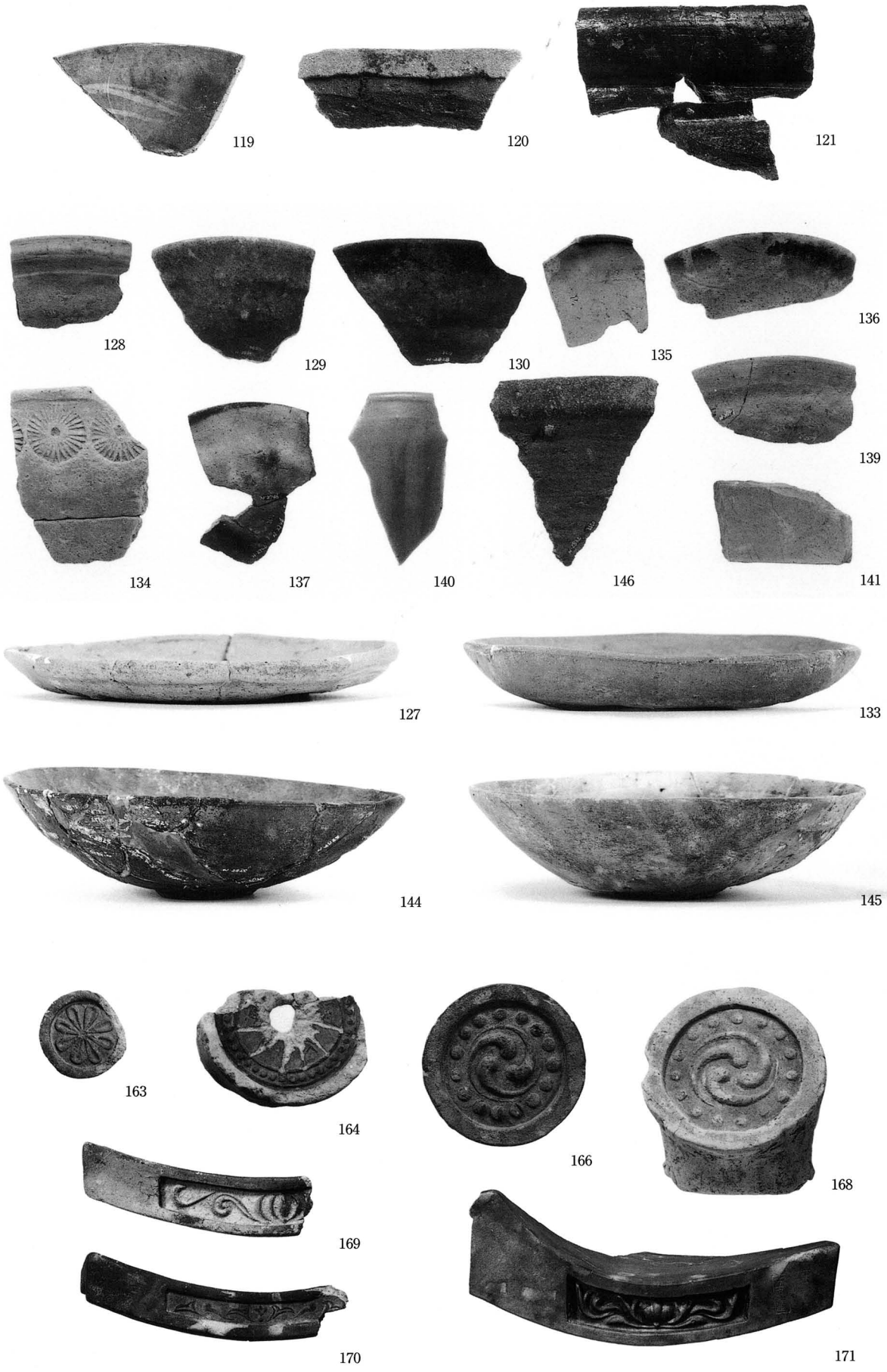
122

126

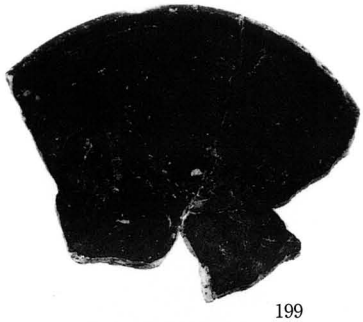
125

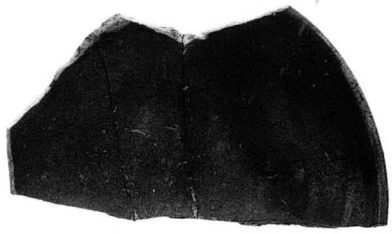
123　124

ＳＫ９（79～81）、ＳＫ11（83・85）、ＳＯ１（86～117）、ＳＷ２（122～126）

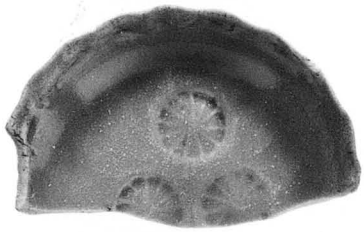


ＳＰ３（119～121）、第１整地層（127～130）、焼土層（133～137・139～141）、第２整地層（144～146）、包含層（163・164・166・168～171）


199



176


181

213

202

205

188

195

190

194

217

221

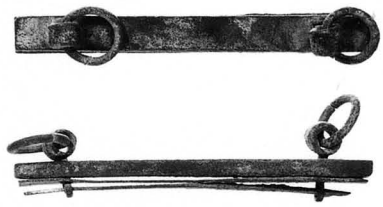
222

223

226

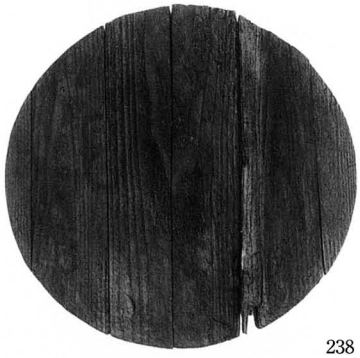
225

ＳＤ２（176）、ＳＵ１（181）、包含層・側溝（188・190・194・195・199・202・205・213・217・221～223・225・226）

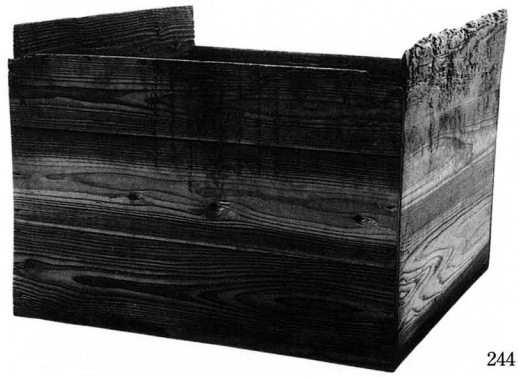


241

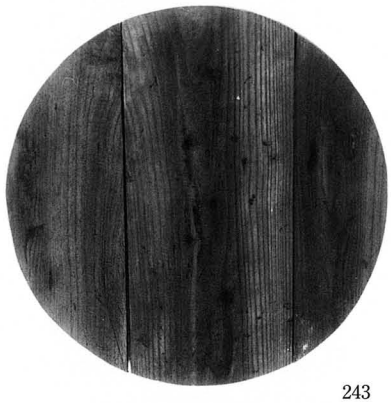
242



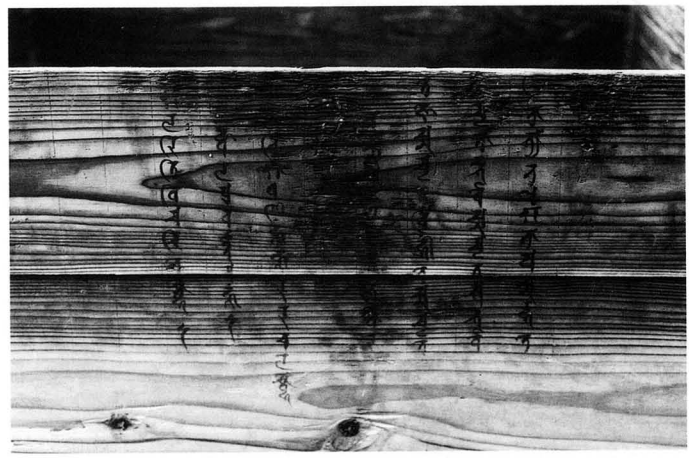
238



244



243



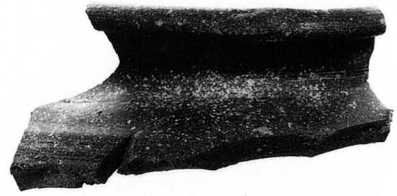
249

ＳＴ１（238・241・242）、ＳＴ２（243・244）、ＳＴ３（249）

257

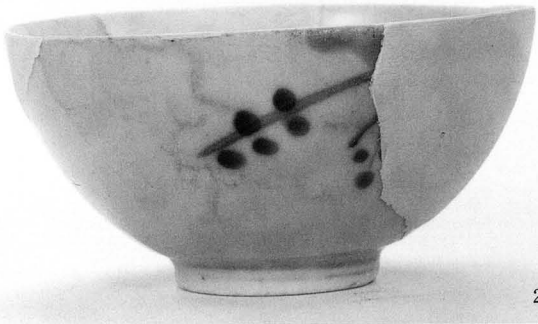
258

259

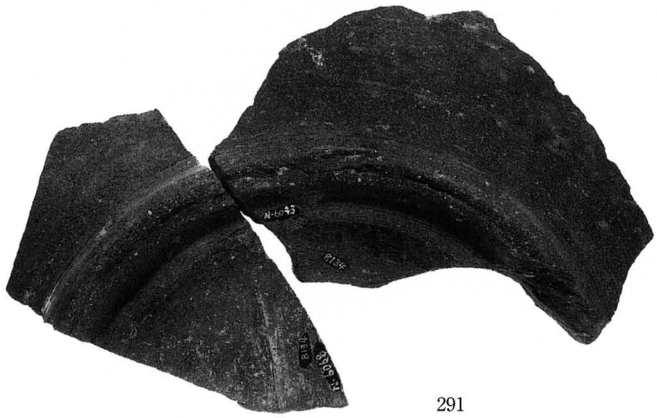

261

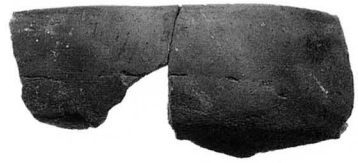
254

292


263

287


291


288

SW1(254・257～259・261・263)、包含層(287・288・291・292)

301

302

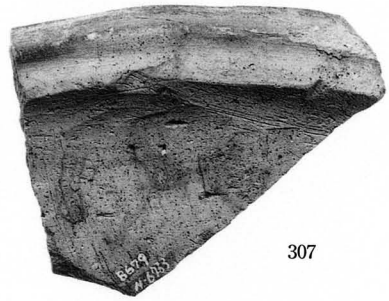
303

305

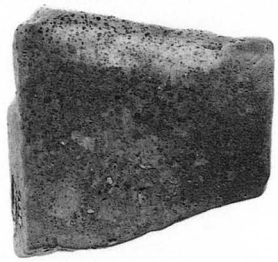
299

304

306


307

308



309

312

313

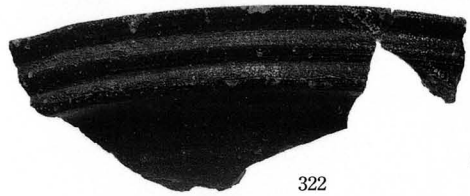
315

314

316

319

324


322

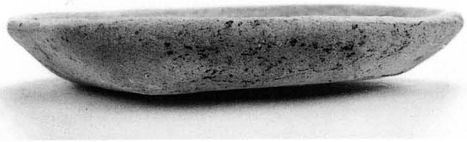
320
321

ＳＤ１(299)、ＳＥ１(301～309)、ＳＫ３(316)、ＳＫ６(315)、ＳＫ９(312～314)、ＳＵ１(319～322)、ＳＵ２(324)

326

330

331


332

339

342

343

344

345

346

348

355

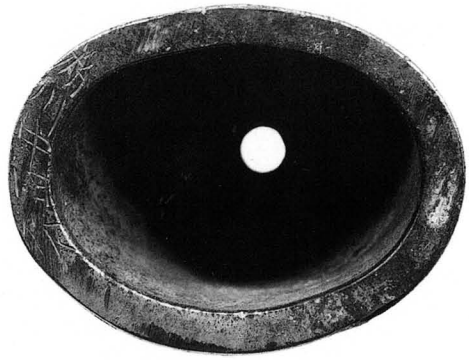
356

354

ＮＶ１（326）、第１調査区第１遺構検出面包含層（330～332・339・342～346・348）、第２調査区第１遺構検出面包含層（354～356）

361

360



第１調査区表採（360・361）、ＳＯ１（363～409）

363

364

365

366

367

368

369

370

371

372

373

374

375

376

377

378

379

380

381

382

ＳＯ１（363～382）

383

384

385

386

387

388

389

390

391

392

393

394

395

396

397

398

399

400

401

402

ＳＯ１（383～402）

403

407

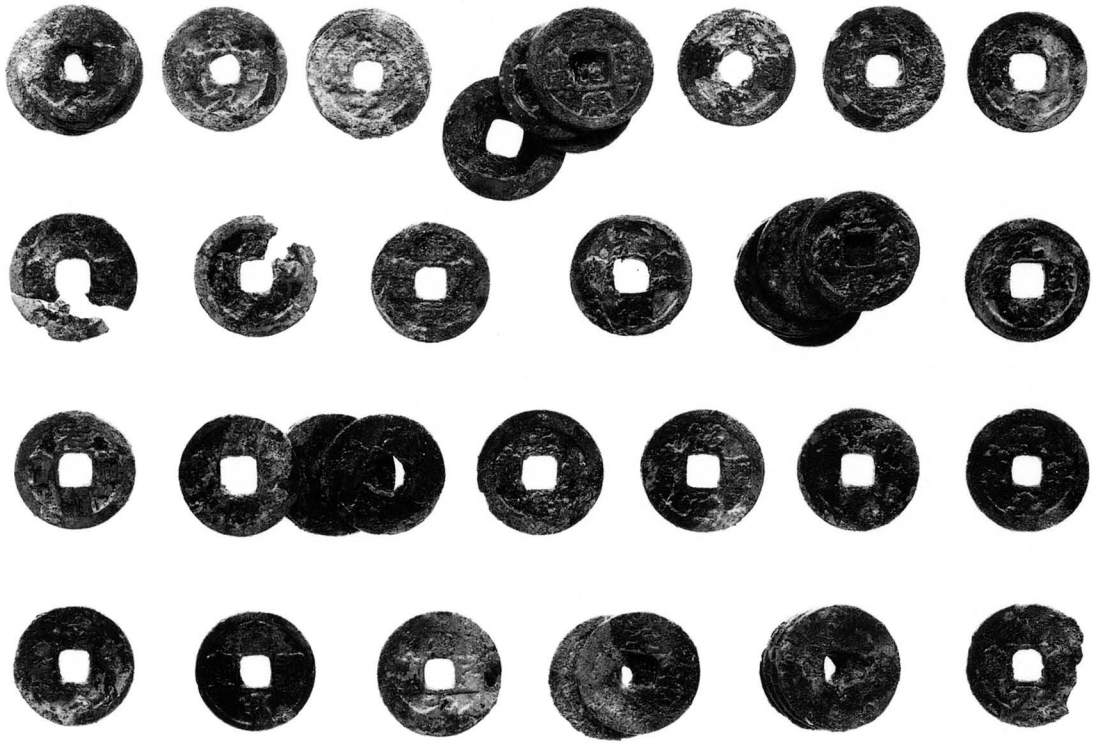
404

408

405

409

406



410～453

ＳＯ１（403～453）

454

474

459

475

460

476

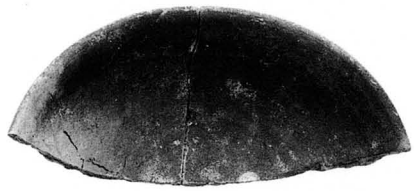
466

477

472

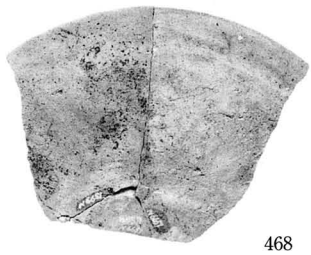
478

483


482

485

473


468

471

ＳＰ６（454・459・460・466・468・471～478・482・483・485）

第1調査区第2遺構検出面包含層（上層整地層）（487～490・496・498・499・503・505～511）

515

516

519

526

527

529

530

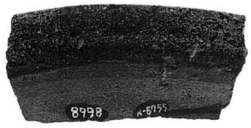
532

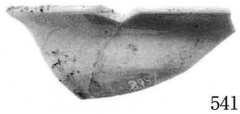
533

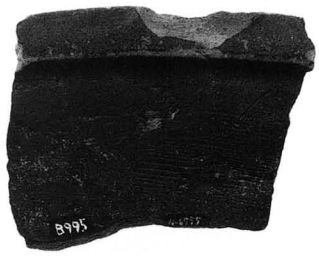
534

537

546




541



539

536

540

545

第1調査区第3遺構検出面包含層（焼土層）（515・516・519・523・526・527・529・530・532～534・536・537・539～541・545・546）

549

555

556

557

558

559

560

561

562

563

565

566

567

568

569

第２調査区第３遺構検出面包含層（549）、ＳＢ１（555）、ＳＤ４（556～563・565～569）

574

591

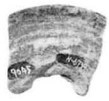
579

581

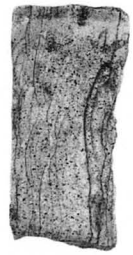
580

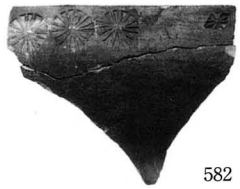
584

578


572

570


592


582

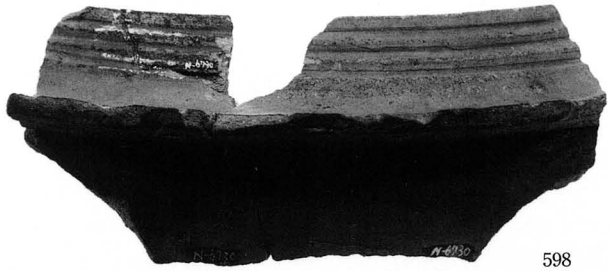
585

583

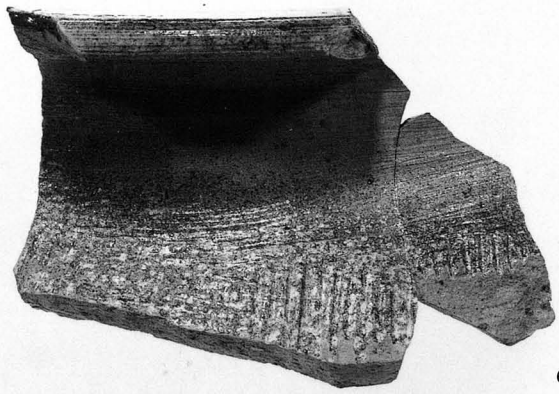
587

ＳＤ４（570・572・574・578～585・587・591・592）

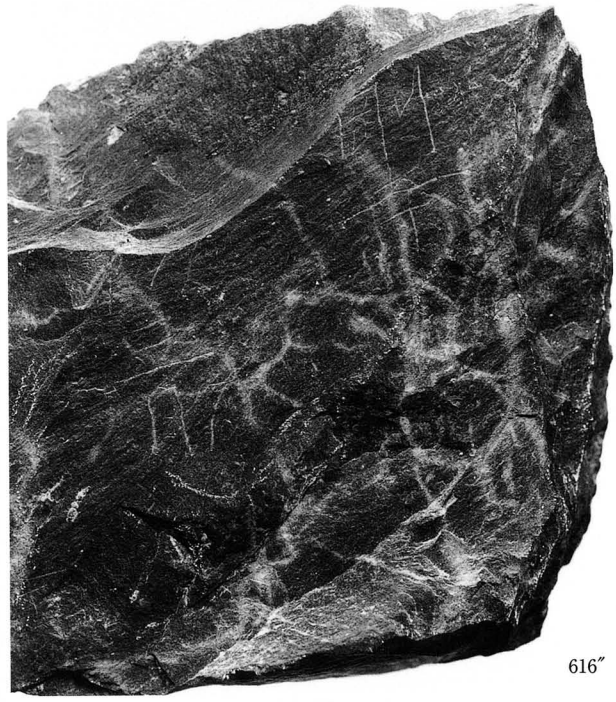
627


598

606


615

616


616″

616′

618

604

619

ＳＫ12（598）、ＳＫ14（604・606）、ＳＫ17（615・616）、ＳＫ18（618・627）、ＳＫ19（619）

634

635

636

640

639

638

637

644

645

646

647

643

632

648′

648

ＳＬ１（632）、ＳＰ９（637）、ＳＰ13（639）、ＳＰ14（634・640）、ＳＰ15（635）、ＳＰ16（638）、ＳＰ18（636）、ＳＰ21（643～647）、第１調査区第４遺構検出面包含層（炭化物層）（648）

650

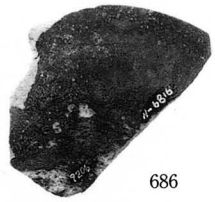
675

665

667

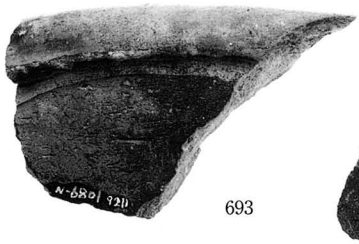
668

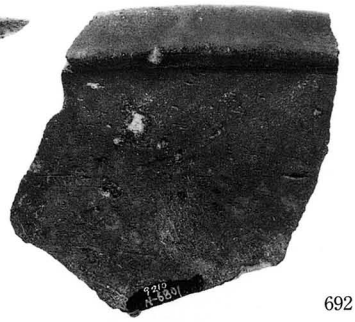
680

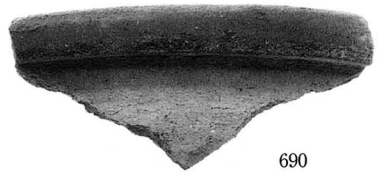

686

674

673


693


692


690

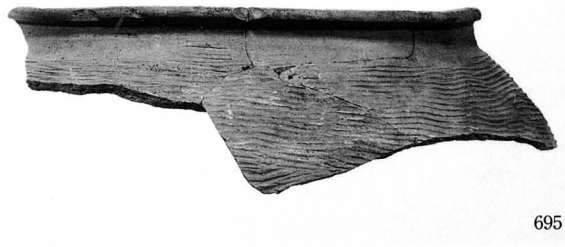
688

689

691

第１調査区第４遺構検出面包含層（炭化物層）(650)、第２調査区第４遺構検出面包含層（665)、ＳＤ６（667・668・673・674)、ＳＤ７（675・680・686・688～693)

694


695

698

699

701

702

704

703

705

706

708

707

717

715

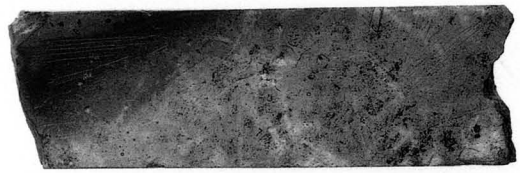
ＳＤ７（694・695）、ＳＫ27（698・699・701～706）、ＳＫ28（707）、ＳＫ29（708・715・717）

723

722

724

727


726

729

731

730

732

733

735

737

736

ＳＫ29（722～724・726・727）、ＳＫ31（729～733・735～737）

738

739

742′

747

742

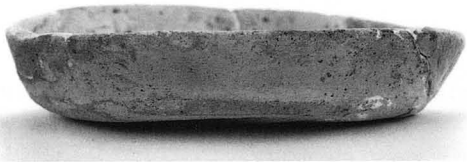
749

743

750

751

766


768

752

769

ＳＫ31（738・739・742・743・747・749～752）、ＳＫ33（766・768・769）

770

792

788

793

789

797

777

806

784

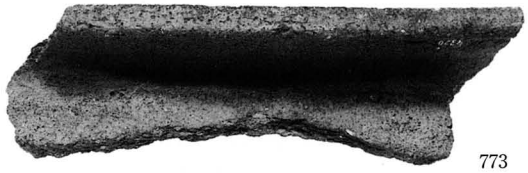
810

783

775

782

786


773

809

816

ＳＫ33（770・773・775・777・782～784・786）、ＳＫ35（788・789・792・793・797・806・809）、ＳＫ38（816）、ＳＫ39（810）

822～853

828

829

830

822

831

823

832

824

833

825

834

826

835

827

836

ＳＯ２（822～853）

837

838

839

840

841

842

843

844

845

846

847

848

849

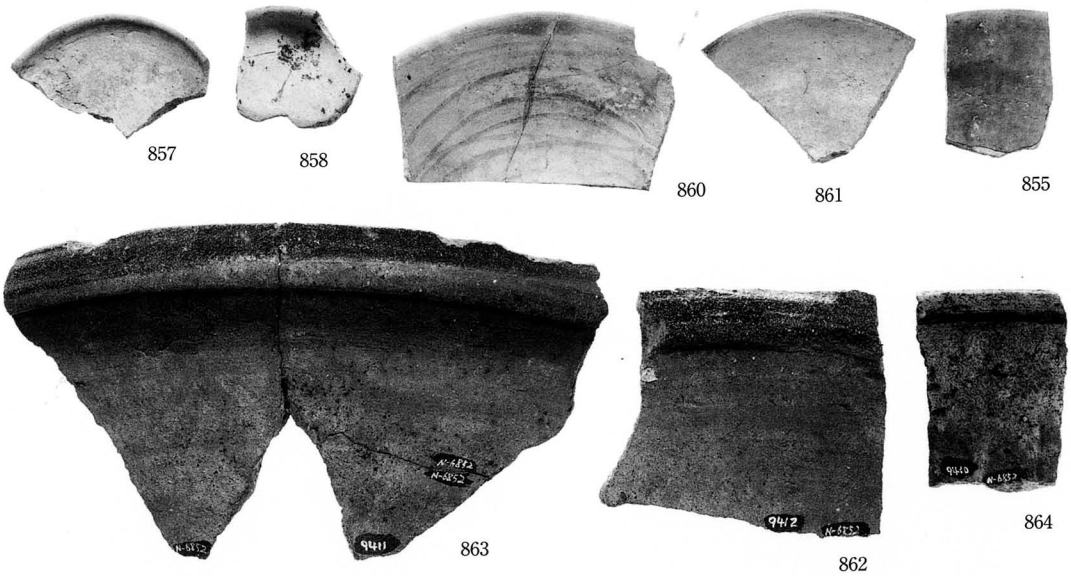
850

852

851

853

ＳＯ２（837～853）



859

870

865

871

866

872

867

873

868

879

869

880

ＳＰ26（855）、ＳＰ27（857～861）、ＳＷ３（862～864）、ＮＶ２北側（865～873・879・880）

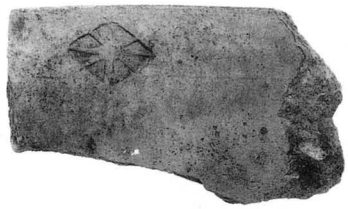
881

882

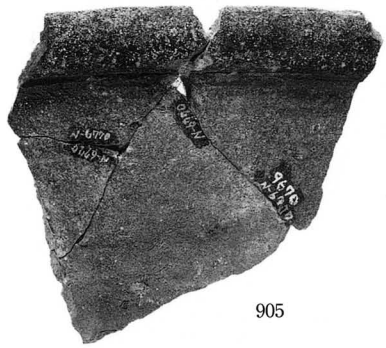
883

898

903


902

907


905

910

885

914

886

915

917

890

920

ＮＶ２北側（881～883・885・886・890・898・902・903・905・907・910）、ＮＶ２南側（914・915・917・920）

923

932

925

934

926

927

938

928

935

937

936

ＮＶ２南側（923・925～928・932・934～938）

941

943

947

942

967

957

971

968

969

951

953

ＮＶ２南側（941～943・947）、第１調査区第５遺構検出面包含層（951・953・957・967～969・971）

954

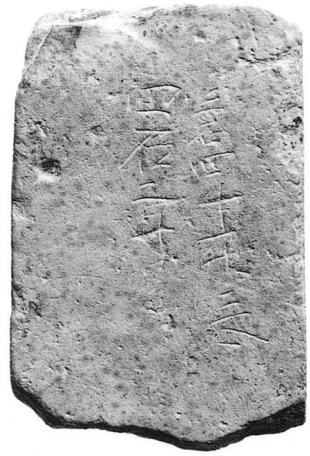
955

960

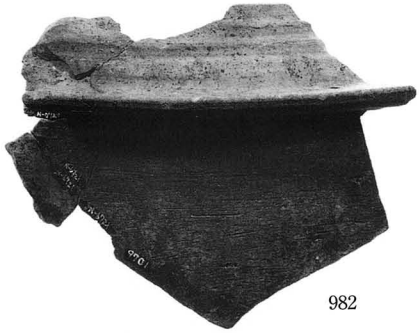
962

973

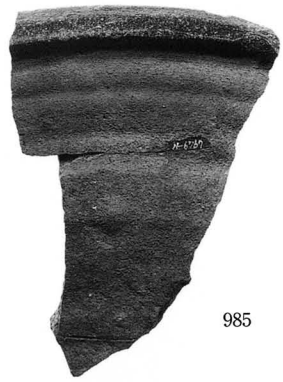
979


991

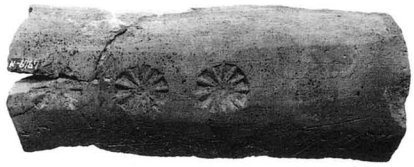
981


982

983


985

986


989

987

第１調査区第５遺構検出面包含層（954・955・960・962）、第１調査区第５遺構検出面包含層（下層整地層）（973・979・981～983・985～987・989・991）

993

1001

995

1002

996

999

998

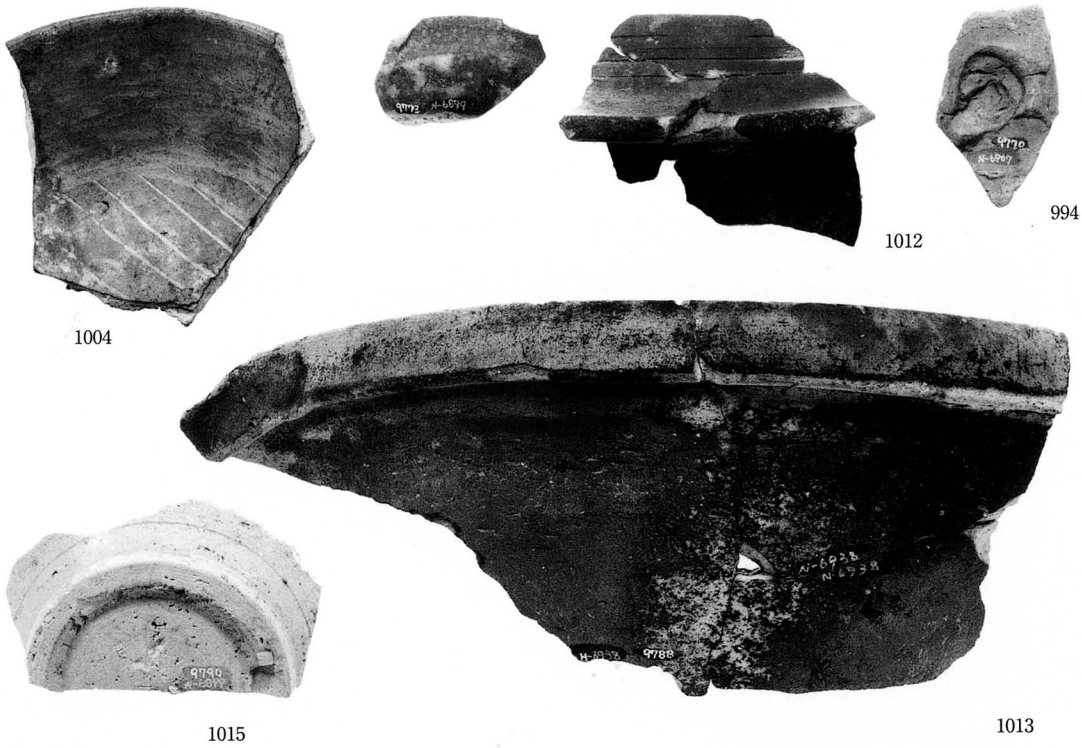
1006

992

1010

1014

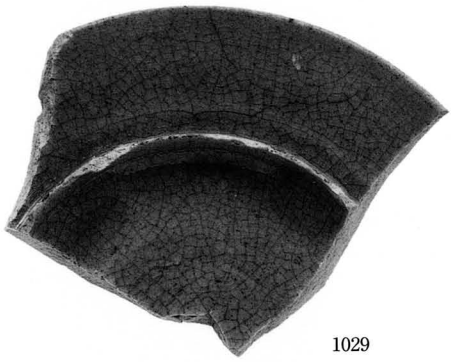
第２調査区第５遺構検出面包含層（992）、第１調査区最下位出土遺物層（土層断面第89・91層）（993・995・996・998・999・1001・1002・1006・1010・1014）



第１調査区最下位出土遺物層（土層断面第89・91層）（994・1004・1012・1013・1015）

1017

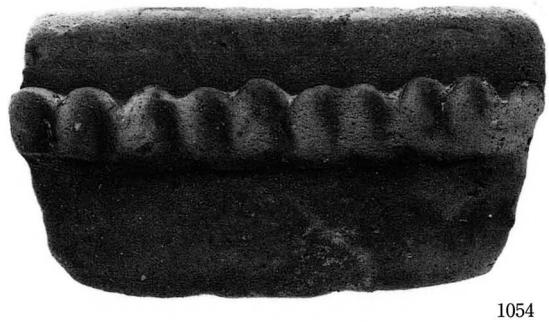
1026


1029

1053

1057

1055


1054

ＳＤ１（1017）、第１調査区包含層（1026・1029）、第３調査区包含層（1053～1055・1057）

報　告　書　抄　録

ふりがな	あまのさんこんごうじいせき（そのに）
書　　名	天野山金剛寺遺跡（その２）
副　書　名	河内長野市遺跡調査報告ＸＸⅧ
シリーズ名	河内長野市遺跡調査報告
シリーズ番号	ＸＸⅧ
編著者名	鳥羽正剛
編集機関	河内長野市教育委員会・河内長野市遺跡調査会
所　在　地	〒586-8501　大阪府河内長野市原町396－３　TEL　0721－53－1111
発行年月日	2001年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
天野山金剛寺遺跡（ＫＧＴ91－１）	大阪府河内長野市天野町	27216	府16河14	34°25′32″	135°31′58″	1991. 9.24～1991.11.19	約145㎡	便所建設
天野山金剛寺遺跡（ＫＧＴ97－２）	大阪府河内長野市天野町	27216	府16河14	34°25′36″	135°31′56″	1997.10. 2～1997.10.23	約110㎡	庫裏新築
天野山金剛寺遺跡（ＫＧＴ97－３）	大阪府河内長野市天野町	27216	府16河14	34°25′40″	135°31′51″	1998. 1.12～1998. 3.13	約95㎡	墓地造成
天野山金剛寺遺跡（ＫＧＴ98－１）	大阪府河内長野市天野町	27216	府16河14	34°25′37″	135°31′54″	1998. 2.10～1998. 3.26	約212㎡	防災施設建設
天野山金剛寺遺跡（ＫＧＴ99－１）	大阪府河内長野市天野町	27216	府16河14	34°25′31″	135°31′56″	1999. 6.11～1999. 7.30	約130㎡	防火水槽の配管及び放水銃設置

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ＫＧＴ91－１	社　寺	中世	炉・石列	調理具・生活雑器	厨房跡検出
ＫＧＴ97－２	社　寺	近世	礎石建物・石敷遺構		子院跡検出
ＫＧＴ97－３	社　寺	近世	墓	棺・龕・数珠	真言宗僧侶の棺が出土
ＫＧＴ98－１	社　寺	中世	土釜埋納遺構・甕埋納遺構	土器製密教法具（六器・二器・花垸）	子院跡検出 土釜埋納遺構検出
ＫＧＴ99－１	社　寺	近世	礎石建物		茶所跡検出

河内長野市遺跡調査報告XXVⅢ

天野山金剛寺遺跡（その２）

2001年３月31日発行

発　行　大阪府河内長野市原町396―３
河内長野市教育委員会
河内長野市遺跡調査会
0721―53―1111

印　刷　㈱中島弘文堂印刷所